明治三十九年八月十五日増刊
(毎月一回一日發行)
明治三十七年十二月十九月
第三種郵便物認可

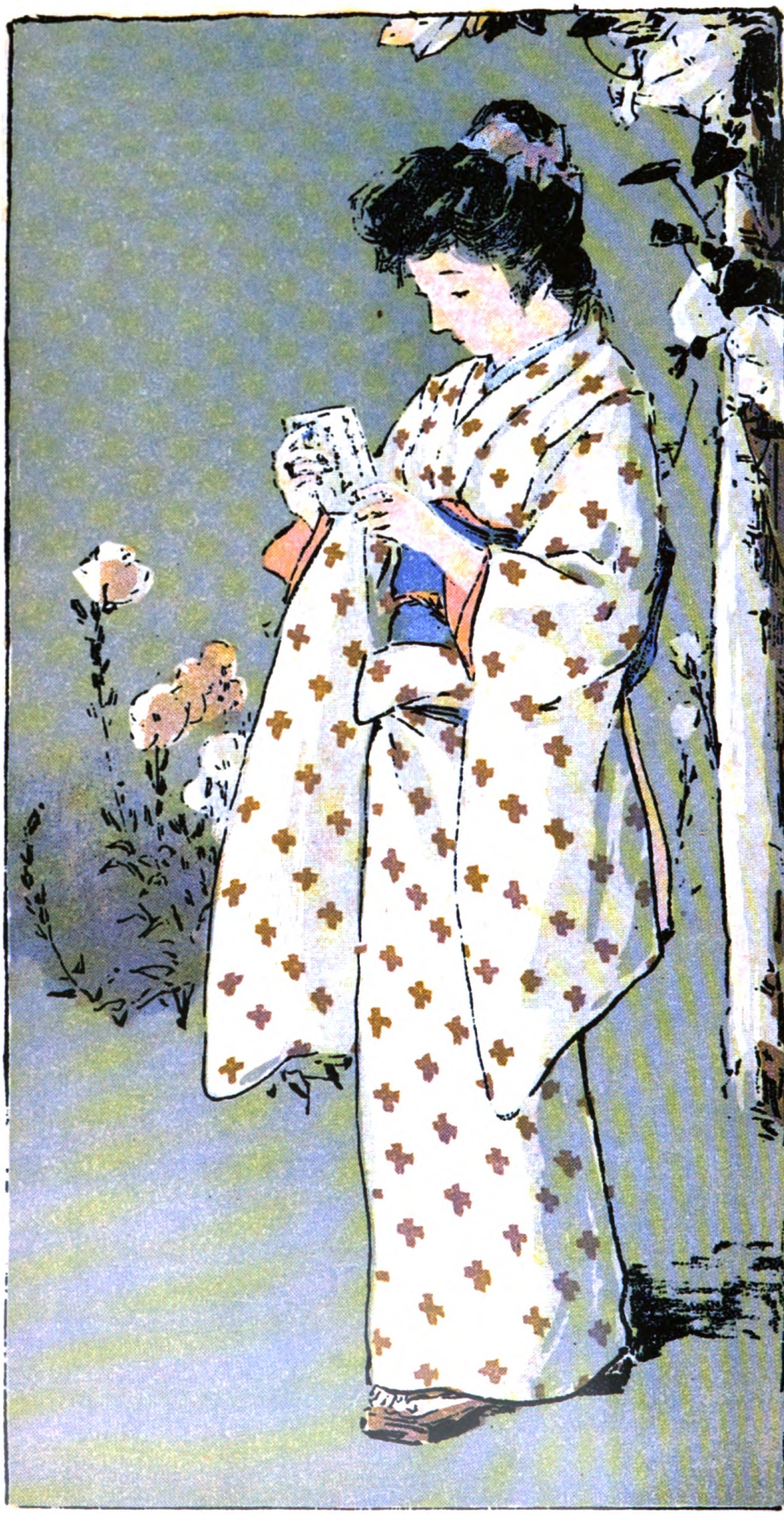
女子文壇

をみなへし月

定期増刊
二巻第十一號



月光



鏑木清方筆

毎號　皇太子妃殿下賜上覽

女子文壇

定期増刊　をみなへし月　二卷拾壹號

本號　石版極彩色口繪＝月光（鏑木清方君筆）　表紙（山中古洞君筆）

○文藝雜感（秋の卷）

○女郎花○秋草○秋の七草○星の美○西洋の女○子規の八月十四日○女郎花の俳句○女の富士山記○月の神話○京女○紅葉の句○『落葉』の詩○短き譯詩


美術造花材料
各女學校御用
附屬品並に造花器械類一式
嶄新夏期用材料
舶來薄絹シホン
ホワイト、リープス
兩品見本御入用の方は郵券四
錢御送附を乞ふ
東京市日本橋區横山町一ノ一六
天野卯兵衛
電話（長）浪花一六四三番

新派歌集發行の事業
新派和歌の寄稿募集

與謝野寛先生 與謝野晶子先生 共選

新派歌集 常世

新派歌人諸君に謹告す

今や新派和歌の實力は一世を風靡す是れ疑も無く青年詩人の勝利なり、賀せざる可けむや。而も未だ**一大新派歌集**の編纂なきが爲め、作家諸君が珠玉の好作を遍く江湖の鑑賞に資するの機會に乏しきは遺憾なり。弊堂乃ち之を斯道の大家**與謝野兩先生**に議り、協贊を得て一大詩集「**常世**」を發行し、聊か詩界革新の盛運を祝せむとす。四方雲の如く花の如き**才人淑女諸君**、此の新歌壇空前の事業を諒とせられ、其新詠と舊詠とを論ぜず、自ら信じて最も**佳作**なりとせらるゝ短歌三十首以下を寄稿せられよ。弊堂は前記兩先生の選拔を乞ひたる上、清楚高雅なる體裁の一大歌集として來る**十月中**に出版すべし。是啻に現下の讀書界を益するのみならず、明治詩壇の好代表として以て後世に傳ふるを得む。

◎寄稿期限來る九月十日迄◎一人三十首◎題随意◎用紙半紙◎字體の鮮明を要す◎住所氏名雅號明記の事◎匿名其他不眞面目なる寄稿及郵税未納は採らず

新派歌集「常世」發行所
寄稿送附所
東京市神田區鍛冶町新詩社東京支部（電話本局九百四十九番）

誠之堂書店

文學士德谷豐之助先生新著

社會心理學

新き學問は新き書物を要す新き知識は新き思想を要す本書は實に新き書物也新き思想也我國未曾有の新著にして著者が多年の研究は斯學の上に一新境を劃せりと謂ふべし個人の心理より一轉して社會の心理を知らむと欲せば今の處日本に於ては唯斯書の外に求むるも得可からず此意味を以てするも如何に學徒を指導する最上最新の書なるかを知るべきに非ずや大方讀書子一切學者請ふ一本を購ふて新學問新知識を得たまむことを

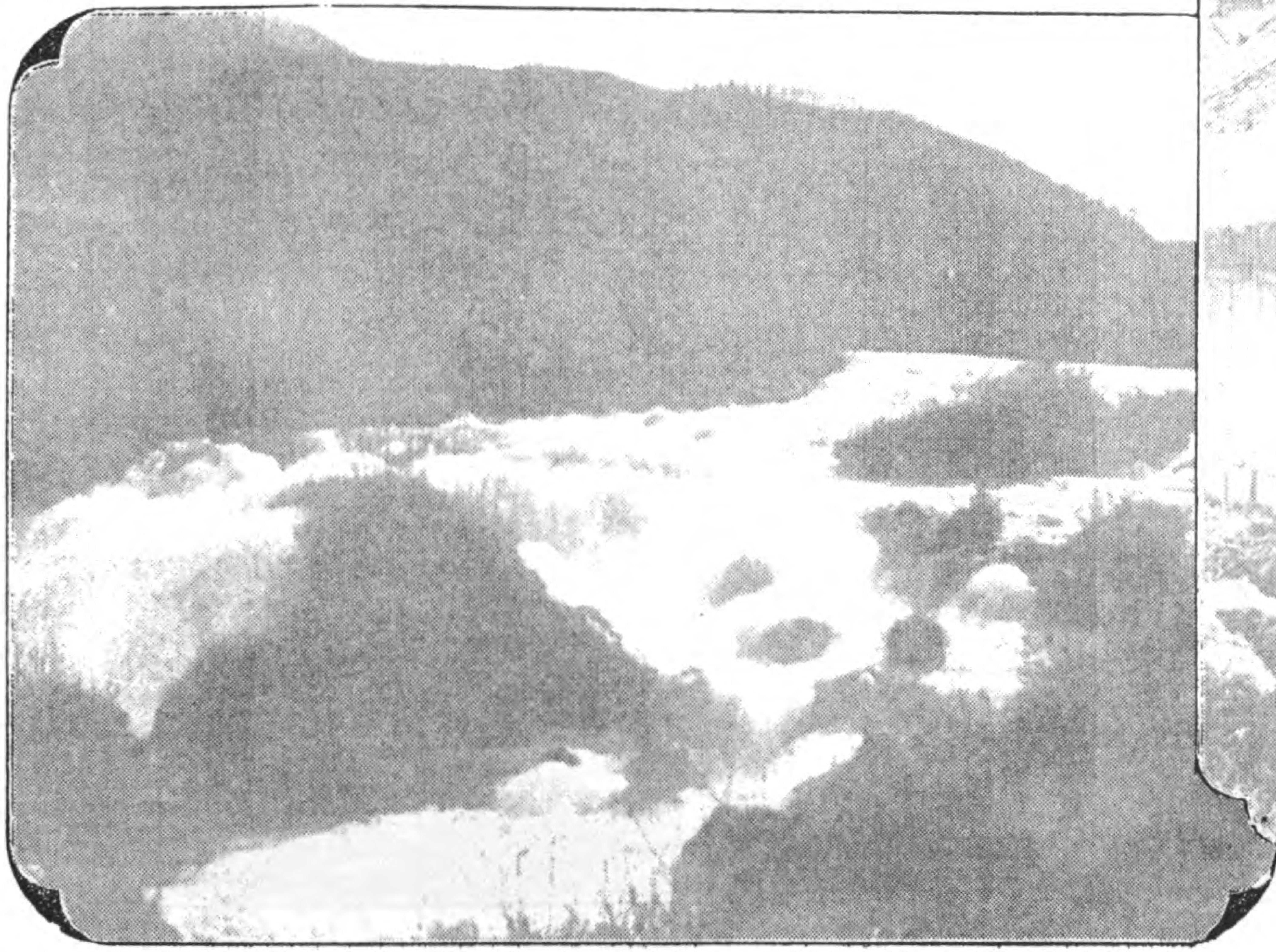
洋裝美本
紙數三百餘頁
正價金八拾錢
郵稅拾錢

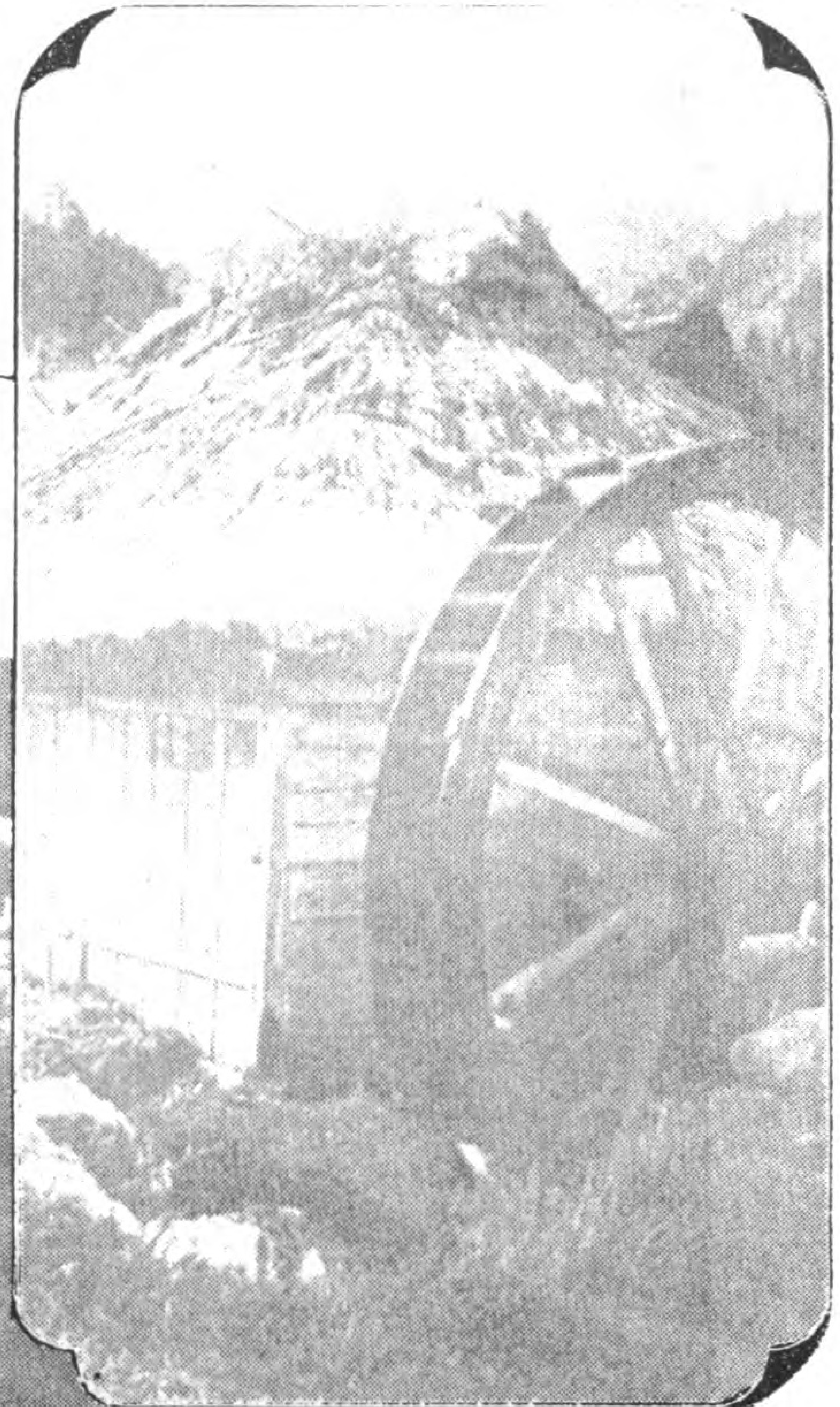
發行所
神田區鍛冶町 電話本九四九 **誠之堂**
大阪南本町四丁目 **積文社**

秋草



富士の溪流





水車

各女學校作文參考用書

女子の文學獨習最良手引

東宮侍講本居豊穎先生題詠
學習院女子部長下田歌子先生題歌
文學博士小杉榲邨先生序
國學院學士小森松風先生著

獨習良師 女子文學全書

全部拾二卷（ふりかな付）
紙數二千七百頁餘
（毎卷讀切洋裝）

低廉無比

卅九年七月より隔月出版全部完結の豫定

改正定價 壹冊金四拾錢◎三冊前金壹圓拾五錢◎六冊前金貳圓貳拾錢凡て郵税不要

◎一冊菊判一百卌頁

全部十二冊前金四圓（郵券代用壹割増）

全部目次

▲第一編 美文作法
▲第二編 言文一致文範
▲第三編 和歌作法
▲第四編 女子消息文範
▲第五編 新體詩作法
▲第六編 女子普通文範
▲第七編 俳句作法
▲第八編 普通國文典
▲第九編 女子口語文典
▲第十編 女子修辭法
▲第十一編 女子文學者列傳
▲第十二編 女子國文學史

編輯の都合により三編以下順序を變更することあり

女子文學全書第壹編

美文作法

文章の作法を懇切に說明指導せられたるものなれば明治の女學生に取りては、實に坐右の寶典なり

附錄 古今名家美文範

新聞雜誌好評

▲全一冊讀切洋裝 大判二百三十頁
▲正價金參拾錢 郵税四錢

本書は小森先生が現今の女子の文學趣味を鼓吹せんの考にて高等女學校、女子師範、其他各種の女學校に於て最も困難を感ずる

發行所 東京市京橋區大鋸町 電話本局六百七番 女子文壇社

◎東京市内特約賣捌 東京堂、東海堂、北隆館、上田屋 前川文榮閣、良明堂、勉強堂

数年難治の慢性胃病を根治し消化機能を強壮健全になす靈藥

胃病根治劑

從來世に胃病藥頗る多しと雖ども皆一時の苦痛を凌ぐ制酸劑(即ち重曹、マグチシヤ、苦味劑の如き一時おさへムチスカシ的藷式賣藥)のみにして未だ嘗て根治的に其病の基因を斷つ良藥あるを見ず、本劑は獨乙國高名大醫ノーデル氏處方に基き本邦胃病患者に適切なる嶄新有効藥を配合し百方實驗其奏効顯著なるを確認發賣せし最も進歩せる完全なる新藥にして數年難治の頑固なる

慢性胃病にても根本より**誓って根治**し胃腸を健全に消化機能を強壯ならしめ食慾を催進し便通を快くし氣力を壯にし精神を爽快活潑にする空前の完全最新藥なれば從來種々雜多の胃病藥を用ひて効なく多年病苦に呻吟せる患者は一日も早く本劑を服し病根を斷絶し無病強健の大幸を得られよ輕症は壹劑重症は貳劑慢性症は參劑にて根治確證す

(藥價) 壹劑四拾貳錢 貳劑八拾錢 參劑壹圓拾錢 郵券代用貳割増し

新輸入 美容料 肉體

色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黑き男女にても特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體**純白色に變化**し艷美の容貌となるを確證す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證分劑價は並製金壹圓貳拾錢 特別製分壹圓七拾錢

以上 專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 日新館藥房
貳藥

月やくおろし

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず忽ち**快通流下**する特効あり 本劑參劑分を用ゆれば二三ヶ月間滯りたる 月經にてもキレーに流下す 又特別製分を用れば半年以上の 月經閉止及び**血塊**にても必ず立處ろに流經す且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及**惡血毒血**を一掃することを確證す但し本劑は其奏効極めて**峻烈顯著**なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分七拾錢 貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢

(注意)本劑の**大盛**を羨み近時續々怪しき無効なる**類似僞藥**顯はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ



根治確證 新發見藥

わきが 根治

醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても**誓て根治**し決して再發或は他病に變ずる憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に試み苦惱を脫せよ價は輕症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢着金即刻送藥す郵券代用必ず二割増の事

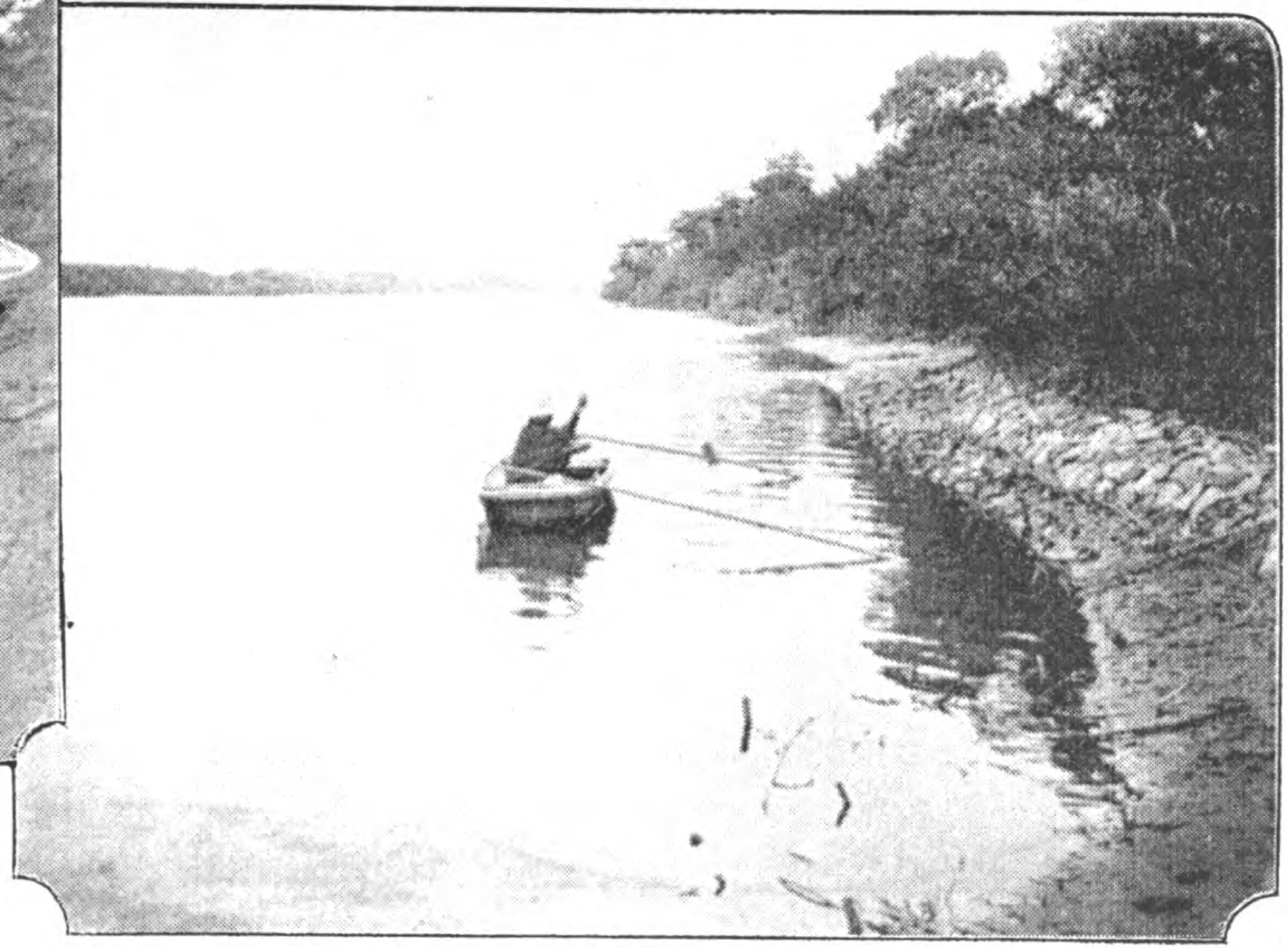
以上 專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 日新館藥房
貳藥
(電話下谷五四一六番)

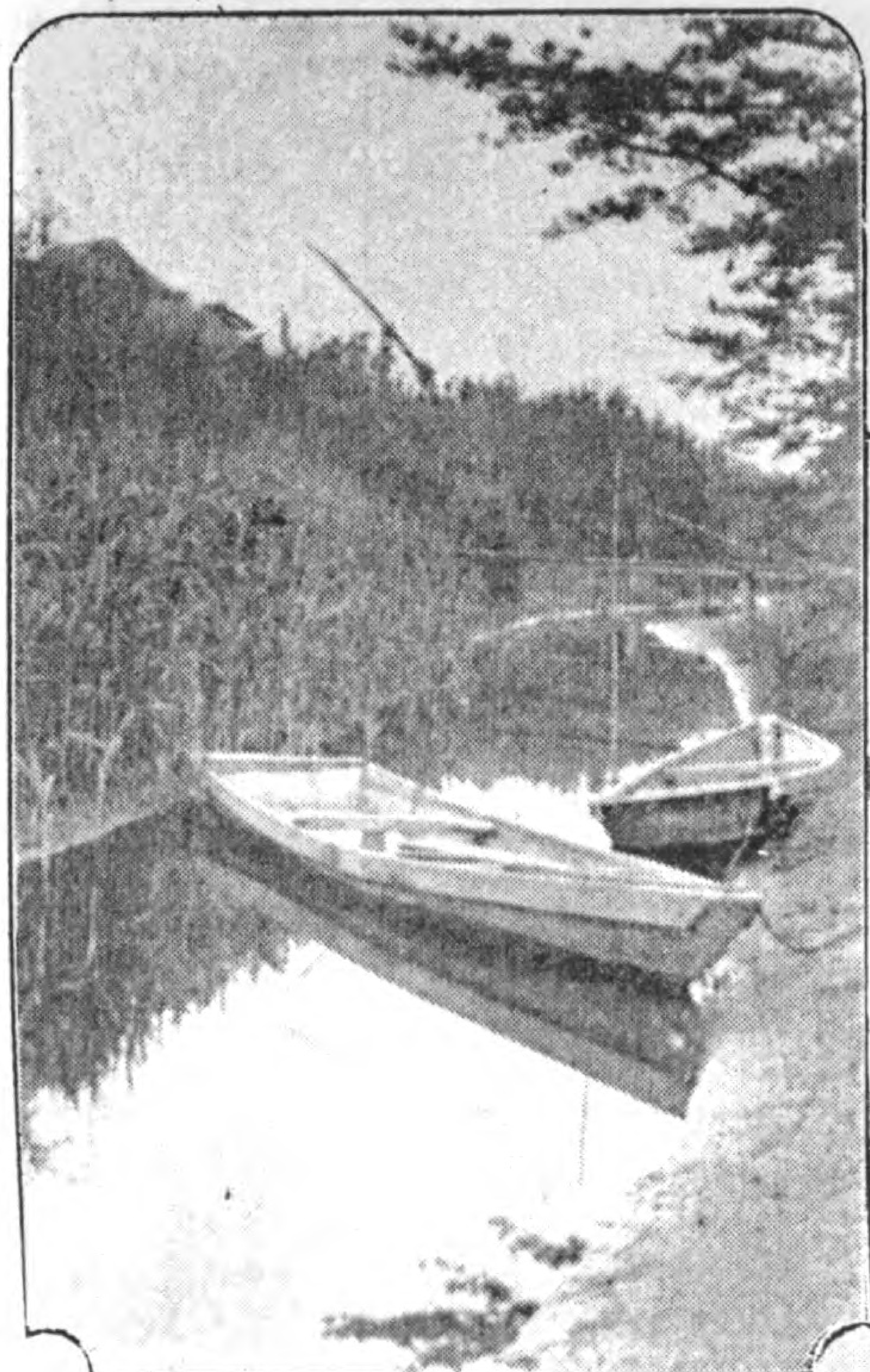
◉少年少女諸君は此廣告を御讀み下さい◉皆さん學校から歸つたら「少年之友」をごらんなさへ◉どなたでも能くできる方には褒美を上げ升◉面白く讀んでる中にえらい人になるのは「少年之友」に限り升



(後付四)

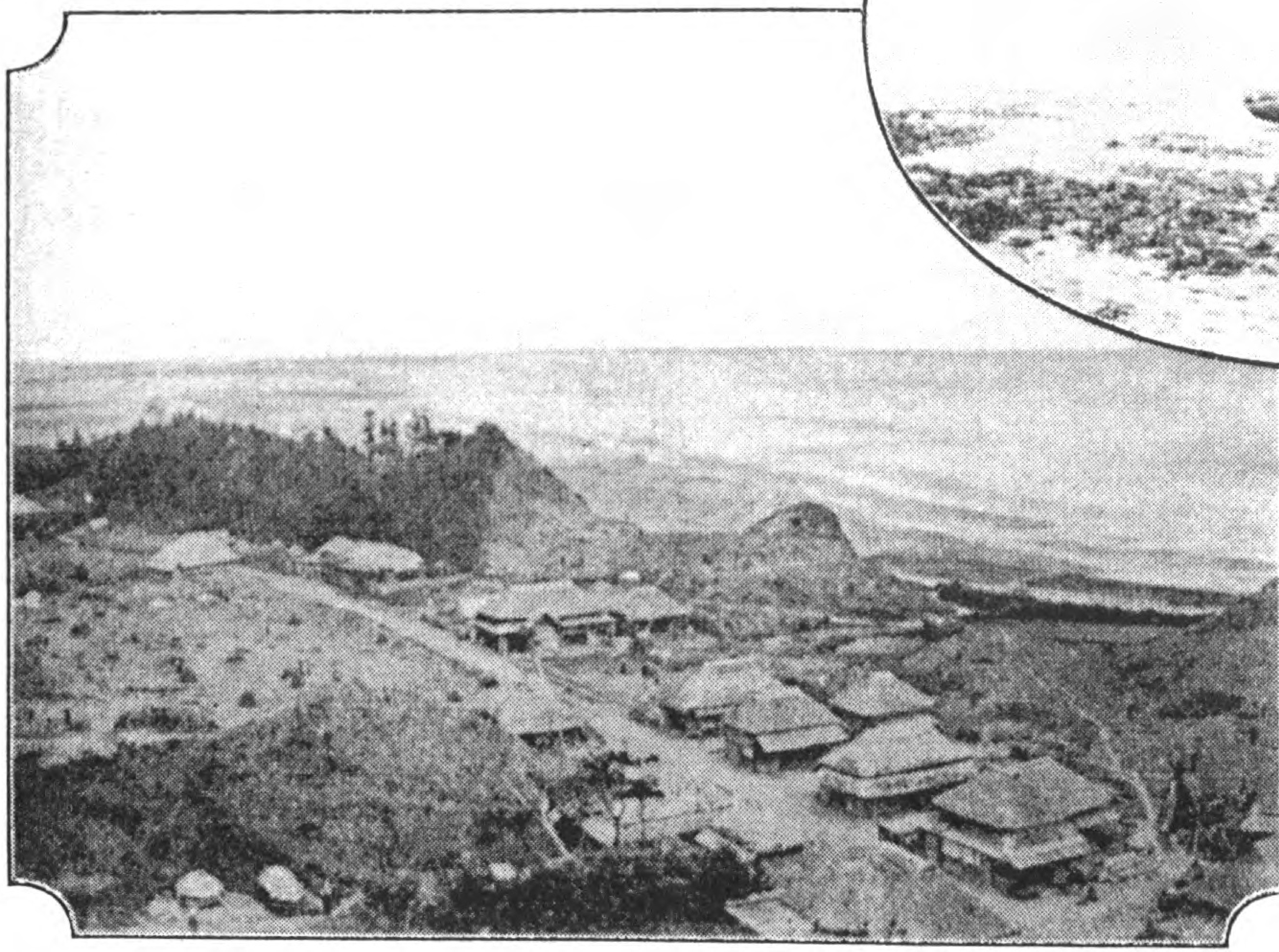
蝦つり

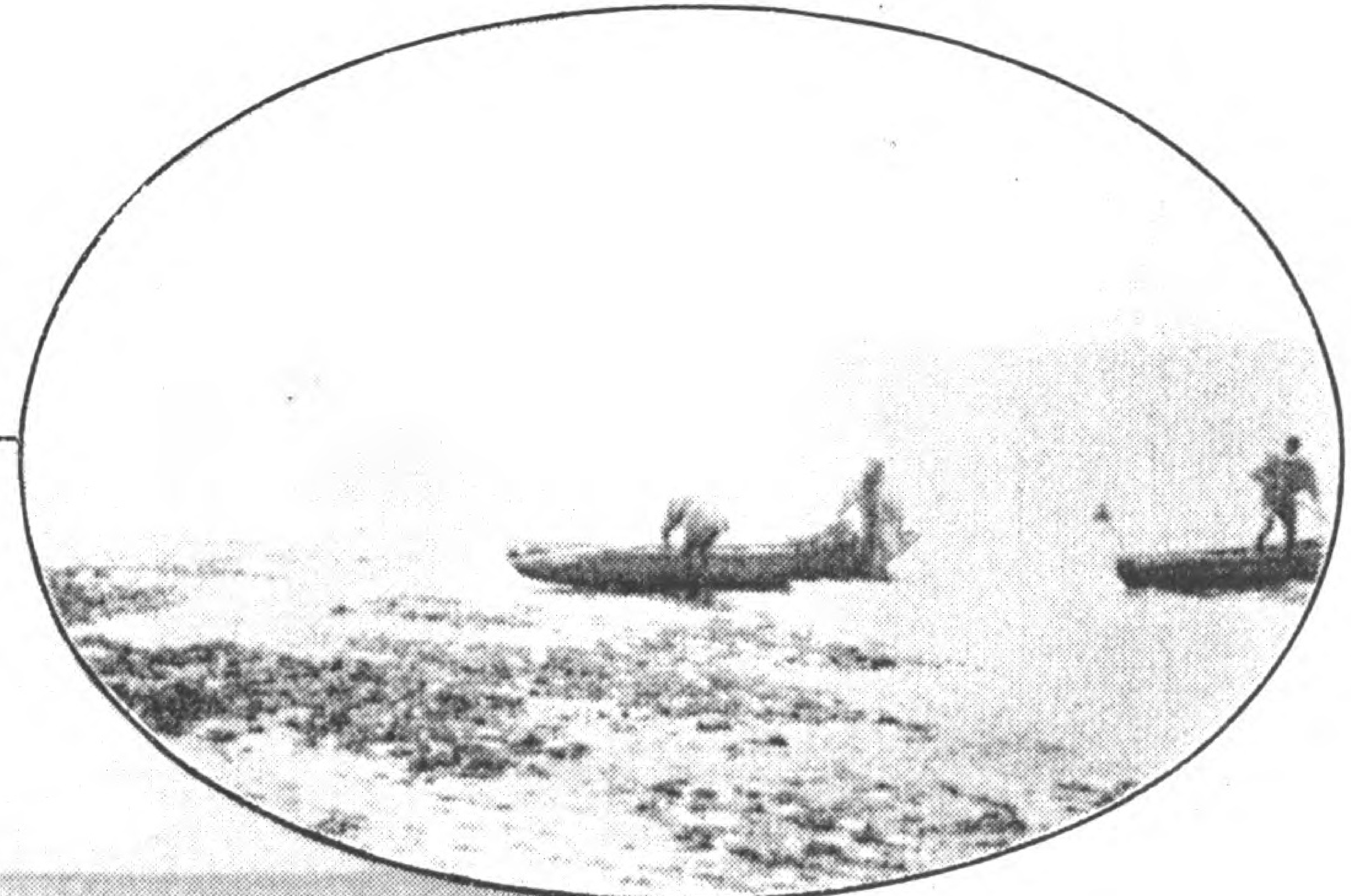




捨小舟

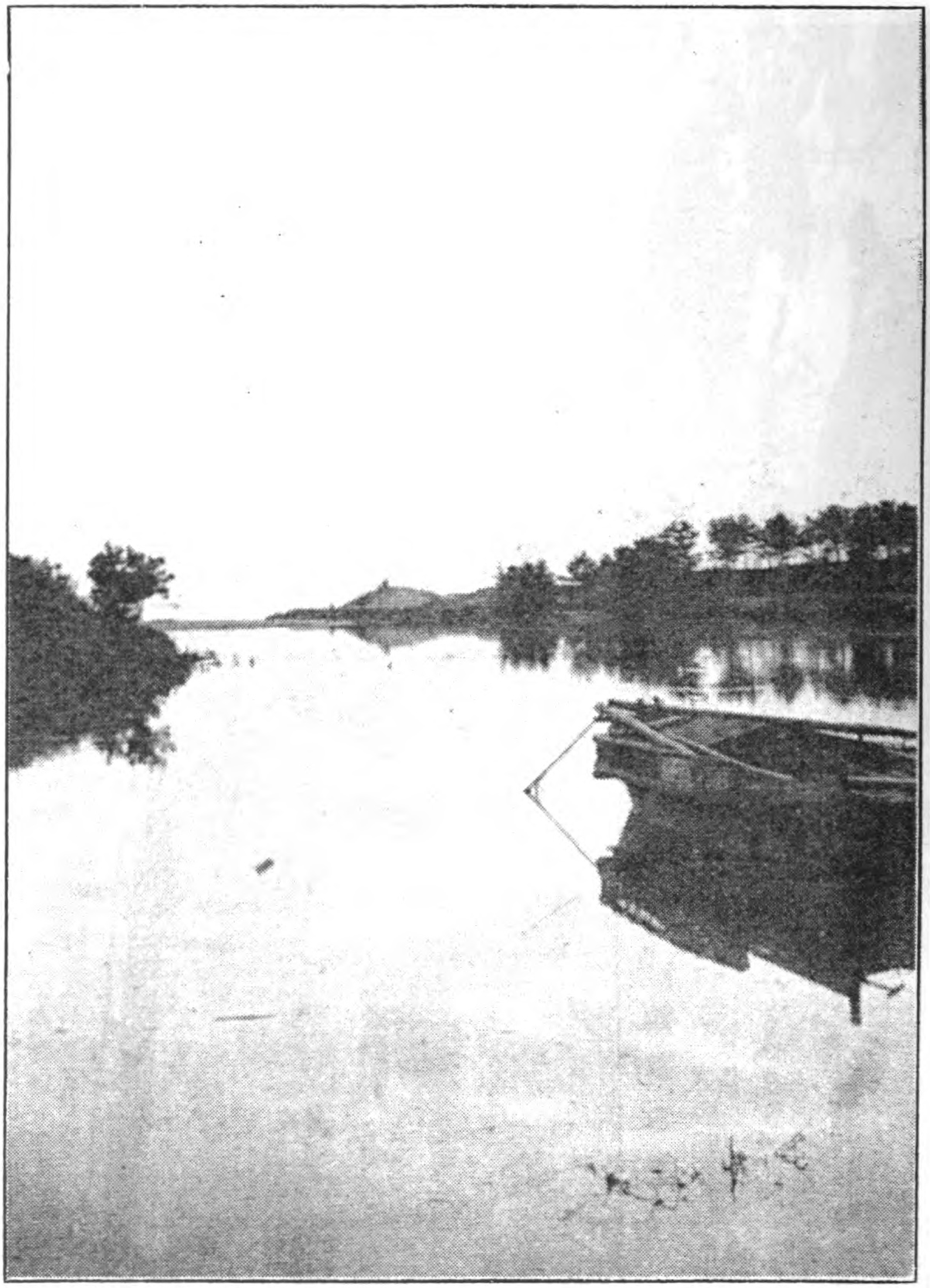
漁村



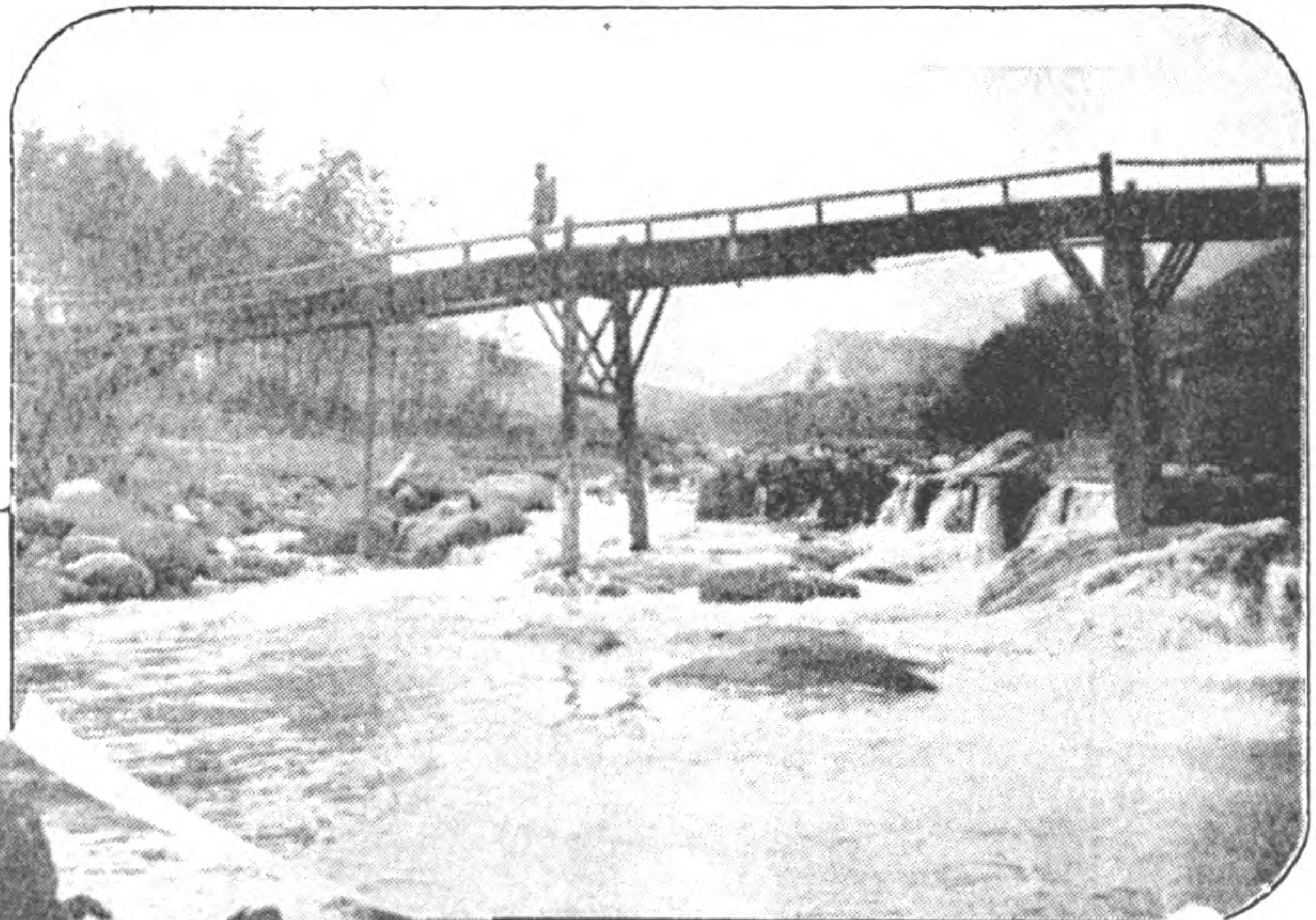


海苔とり舟

安岳濱邊の夕景



（小倉市　敏子君寄贈）



山村の溪流

怒濤



女子文壇　定期増刊

をみなへし月

第貳卷　第拾壹號

男郎花、女郎花

河井醉茗

女郎花「こは何故と解き難の　胸ぐるほしき熱の香に　くねりそめたる風のあや　只すく〳〵と生ひ出し　幼心のかへりみらるゝ

男郎花「實にや何　我血を斯くは湧かしむる　花の郎女、君ならで　對へはあらぬ問ごとの　新しくこそ浮ぶなれ

女郎花「尾花の花も萩の花も　斯る愁ひに咲き出てゝ　みな根に抱く煩悶あらむ

男郎花「秋風、關を越えし日に　夢は遠くも來りけむ　眠るとすればゆらゆらと　物にくるめく我感想　寄添ふらしき花影の　あら幻や、現なや

女郎花「想、姿に表はれて　人はづかしき品さだめ　問はず語りに伏す露の銀臺くだくる冷たさよ

男郎花「言はんとも思ひ、言はじとも　思ひは同じ草の亂れ　秋に驚く紫の桔梗は夢の覺めし花

女郎花「秋の七草七色の　神技のあやの七もつれ　思ひ思ひの粧ひに　胸を流るゝ光刻まむ

諸孃の爲に

詩文を作る心得

◎論　文

縱令若い間だからとて議論や考へもあるでせう、紋切形の物に當嵌つたやうな議論は書かない方がよろしい、成るべく自分の考へと、新しい議論を書くのです。

◎敍　事　文

或る景色の實寫とか、或る事柄を見聞した儘書くとか、所謂寫生文て、自分の考へや、感じが加はらないのを言ふのです、塲合に依り多少自分の思ふ事も加へねばなりませんが、餘り其れの多くないのを指します。

◎抒　情　文

能く敍事文と抒情文の區別を知らせて呉れと仰る方がありますが、名の示す如く、感情を主として書く文章て、其點が敍事文と違ひます、自分の感じを題として作るので例へば母と別れた時の感とか、初めて詩集を讀んだ時の心持とか云ふ事です。

◎消　息　文

勿論達意を主とし、實用的の文字を練習する爲、實際的の用事の間に合やうに書く事を心掛ねばならぬのて、所謂美文とは性質を異にして居ます。

◎短篇小説

何しろ短篇ですから其れに相應した趣向と文章を用意せねばなりません、第一の弊は千篇一律、皆同じやうな趣向で、短いうちにも人情の機微を捕へるとか、何か急所を衝くとか言ふ工夫の乏しい事です。

◎新　體　詩

將來最も有望なる文藝として、諸孃が好んで詩に筆を染められんとを祈ります、詩も始終他の作を讀み、又自らも作つて居らねば味ひが分りません、新しい文藝だけに幾許も開いて行く道があるでせう。

◎和　歌

三千年の歴史を有し、殊に婦人の嗜みとして最も重んぜられた和歌、誌上でも作る方の多いのは當然でせう

◎俳　句

是も我國特有の文藝、字數が少いだけに入り易く、雅俗の文字を自由に使用し得る文藝として、何人も試みるが宜しい。

◎はがき文

一種の短文で、氣の利いたものです、是も初心の方の文章を稽古するには、好い文體です。

◎新體俗謠

存外むづかしい者だと思つて、お作りになれば宜い作が得られるでせう

◎新　笑　話

日は猶ほ淺いが御贔負を願ひます。

◎圖　畫

下手でも何でも、鳥渡繪が書けると嬉しいものです。



短篇小説

廣津柳浪先生選

㊝ 天

○五月闇

防州熊毛郡淺江村 岡部佐保

上

「それあ貴郎、是れも商買の事だから、强ひて損をする譯けには參りません、けれど、受出す見込がないのにつけ込んで、無代價同樣とは、それは、餘りて……」。

今夕食を濟した許りの、茶碗やら皿やらを取り片付けながら、女房は涙ながらに夫の不心得を諭すので。

「今朝來た相川の奥樣だつて、昔は歷然として家のお孃樣であつたのが、今は唯一人の息子樣に先立たれ、中々今日の日も過し兼ねると云ふ事、ほんとに……」。

女房はもうそろ〳〵聲。

「貴郎、妾が一生のお願、もう少しお慈悲にして下さいな、何卒……あゝ何と云ふ情ない商買だらう……」

唯空嘯いて、楊子許り使て居た亭主は、此時其眼の底光のする一瞥を冷やかに女房の頭上に注いて、「うるさい」と許り、口癖の捨臺詞を殘して、ふいと立つて行つて了つた。

女房は脣を嚙みしめて、怨しそうに良人の後姿を見送つたが、はては聲を擧げて、泣き沈むのであつた。

下

「奥樣、奥樣てば……」、と忍びやかに、いと忍びやかに呼ぶ聲が表の方に聞えた。

「あゝ誰樣」、何か一心に帳面を調べて居た女房は、はつとして聞耳を欹てたが、頓て障子をさらりて開けて

「相川の奥樣?」。

「はい」、其聲はいと幽である。

「待つて居ました、さあずつと此方へ、亭主は恰度今出掛けましたので」。

「最前はお手紙を……」。「いえのう、今朝は折角の所を、亭主が彼樣な偏屈者で、何うかお腹は立ちませうが惡うお考へなさらぬ樣にね」。

「何う致しまして、そんな……」。

「私は、あなたが昔の芳川さんと聞いた時には、もう

泣くまいと思つても涙がこぼれましてね、それに亭主が又あんな事をしたんですもの」。
女房はもうしく〳〵と泣き出すので。
「奥様、も何にも仰言らずにね、妾はもう昔の秀では御座いませぬもの……」、僅かに遮り止めて、又も一所にすゝりなくのである。
「は相川さん、餘りさげすむ樣ですけれど、亭主には何卒内々てね、止め度うは御座んすが、今の所何うも致方もありませんで」。
一忝なう御座います、それではお言葉に甘えて、鐵面皮しう頂きます……」
相川と云ふ年増は、何か大きな包を受け取つて、袖で涙をぬぐひ乍ら、出て行つて、質屋と筆太に書いた看板を見た時には、思はず彼は伏し拜んだ。
「御恩は死んでも忘れませぬ!!」。
五月雨もよひの空は、星もなく月もなく、がや〳〵と打ち騒ぐ蛙の聲が、一層喧しい。

質屋のおかみさんを主人公として目新しい趣向、秀も活動して居る、質屋と云ふ事を終に出したので一層餘情も多く面白味は充分
（選者評）

地

星の夜

靜岡縣田方郡北狩野村田原野六番地　西島菊枝

晝のあひだ若樣が、お父さま今朝郭公が啼きますつて云ひますと、さうかそれは珍らしいもうそろ〳〵啼く時分だからなと仰しやつた、宵の十時頃、夕餉の後かたづけをすました妾は、あまりによく晴れた星の夜風の心地よきを身に受けながら裏口づたひ行くとはなしにあるき出すのでした、あゝよくはれた晩だこと數へきれない星樣は大きいのや小さいのや恰も何者か神祕を囁くかのよー、却つてなまじい月夜よりは宜いなどと獨言ちながらふと吾にかへればこゝや裏口から一町ばかりの小川の前、あらもー丸木橋まで來たことゝ見れば青い螢の只一ッすーつすーつと闇を縫て飛んで行く、と星の一つ尾を引いて燒山の彼方へ、……妾はこの景色を眺めて、か弱い女心に何となく胸の中が塞がるような、今の身の上をつれなく思はれるて。

* * * * * * *

あゝ恰度今夜のよーな晩であつた、妾はまだ十一、お隣りの銀ちやんや美ーちやんたちと家の向ふ、大橋あ

たりへ螢狩に……、何が扨て前に後ろに右に左に飛び交ふあまたの螢、と、自分の前に來た螢一ッを、これのがすまいと一切夢中に追つて居たとき、淸ではないかと、突然の、聲の主を誰かと見ればあなうれし、日頃、幼心に寢ても起てもいとしくてなつかしくて忘れられなかッた實の母……。

「おつかさん!!」……と吾を忘れて飛びついて只一言後はうれし淚に咽び入るばかり、物も言はず抱きしめたまゝ、抱きしめられたまゝ、愛の泉の沽るゝ程泣いて泣いて泣きわかれた其夜のこと、今更身にしみ〴〵と思ひ出でられるがあゝ其のとき母上は何と仰つしやりしぞ、妾は何と申上げしぞ、……耳の底、心の奥手繰たぐりて思ひ出すだにあゝ悲しくて堪へられない。

父上樣には、何故あんなやましいお心になられたのであらう、あゝ今更恨めしいお所業、優さしい忠實なお母さんを何の惜しげもなく離緣して、もとは靜岡のあいまい屋の女中とか、今のおつかさん、……を、あゝよくもあのような事を爲させられた事、あゝ我父ながら我が父ながら……、妾だとても先のおつかさんがお出てなら、女學校へも出られて、今頃はどんなにか幸てあつたらう。

それからのお父さまと云ふものは、百姓などには手も染めず毎日々々撰擧とやら運動とやら遊び暮らして借財も少なからずとて妾をまで、あゝ遂に、こんな、……こんな……下女になんて……!!!。



テニス（選外）　下野　入江靜子

* * * *

人の話しにうす〴〵聞けば、妾のおつかさんは、靜岡あたりの豪商にのぞまれて、ともに亞米利加に行つたとやら今宵此の星の夜の景色を眺めておつかさんは遠い〳〵旅の空に、どんな事を考へて居られるだらう?、亞米利加と云へば東の方だと敎はつた、あゝ東の空。戀しい東の空、思はず太息をもらす途端、

「淸や……淸や……」

奧樣がお呼びの聲、はつと自分に返つてあたりを見れば螢は皆、草葉に身を宿して、今は犬の聲もなく寂寥とした田圃道を歸り行く吾が袂に、苗田を渡つて來る

夜風が今更ヒーヤリと感じるのであります。

纖致の女らしいのは勿論、思ひを盡くして自叙體の委曲を盡くして居る（選者評）

人

○誰が罪

上野群馬郡下室田町正木醫院内　正木梅野子

今宵自殺せんとして玆に一筆かき殘し候、人生五十年の上を十餘りを越えし身も、今死なんとしてはさすが名殘の惜まれて。

今日しも貴君は新聞紙上にて水の泡、或は不義の果といへる題の三面記事を讀みしならん、それこそ我が死を決したる原因にて候。その記事中の光子とはわが娘なりしなり。

まことや光は投身して死せしなり。娘が十六の春なりしか、亡き母の望みにより舊藩主なる花形伯の御奥へ行儀見習にと住みこませぬ。花形の殿の好色にてましますは君も知れるならん、されど我は厚く信じたればこはたゞ世の輩が流言とのみ、耳にもかけざりき。

何の變りもなく今年にて二年、娘は十八の春を迎へたり、花ならば蕾ふくよかに咲きも出でなんやさ姿、今更親の口より多くの言葉は並べ候まじ。あゝされど恐ろしや、花は開かざるに惡魔は散らさんとせしなり。殿には娘が容色の目にやつきけん、何がなと言ひ寄るも殿のことなれば無下にも否みかねて、よき程に返し事するにます／＼煩さくてほと／＼堪へがたしなど文して言ひおこせしが、我は殿を信じたれば娘が勤の辛きに僞構ふるらむと叱りてやりぬ。其後も度々悲しきよしなど言ひ來したれど、いつも我は叱りてのみ置きぬ。

あゝ我は過ちぬ。我は過ちぬ。

かくて一昨夜、娘は時ならぬに宿へ下りて、泣きながら語りぬ、殿に汚されたるさへあるに、奥方や朋輩やらになぶられいぢめられ、居たまらずして逃げ歸りぬと。されど我一度叱りて歸さんとせしに、娘は物も言はず泣て去れり、目には涙のきらめきて眉の間に犯すべからざる決心を見せて。

さすがに我もいぢらしう、花形邸へまゐりぬ、されど跡にも先にも娘が姿は見えざりき、我は急ぎ行きて殿に見えぬ、殿は許せとばかり言葉なかりき、吁さては

と我は心も心ならず娘が上の案じられて無言のまゝ歸らんとせり。

さるを夫人は暫時とばかり我を別室へ誘ひて、娘が書生某と通じて百金を盗みて走れりと言葉巧みに語りたり、されどわれは殿が許せと言ひしを聞きたれば、さまで心にとめても聞かず、娘の事のみ案じられて匆匆に邸を出てぬ、出てゝ心當り落なく問合せたれど娘はつひにあらざりき。

娘が行方はつひに知れざりき。

越えて二日の今日の新聞は娘が投身を傳へたり。

吁、より多く我は語る能はず、新聞紙に現はれたる記事は簡單なりき、盗賊と不義の名は娘が上に負せられたるなり。

これ抑も誰が罪ぞ。

わが頑固なに殿を信せし心は遂に可愛の娘を永久の歸らぬ旅に立たせぬ。而も拭ふ可らざる汚名を負はせられて。

吁、これ我が死を決したる所以なり、かくて我は先立ちたる娘が後を追ひて黄泉の國へと旅立たん。

さらば君よ、我が書はこれに盡きたり。然して我を思ふことあらば我れと娘のために一本の線香を手向けたまはゞ幸甚。拜具

舊花形落の老人某書

冒頭の「今日自殺せんとして……」には確かに動かされて其後を讀みつゞかせる、遺書としては或は不自然であるかも知れぬが、能く事の成りゆき、周圍の人物とを描き出し眞摯の情、人に迫る、近頃の『新小説』にあつた秋聲子の『老骨』と何處か似通ふた筋である（選者評）

秀逸

○歸鄕

和泉　竹叟文子

宵の内の涼み客も一人去り二人去り今は全くその影を絶えた。茅渟の浦曲の吹き來る風も冷やかに身に泌みて、夏の夜も大變に更けた北濱公園の小松原を、何か小聲で語りながら海に臨んだベンチに腰かけた二人の男女があつた。これは和三とその妹の壽江である。

「壽江、お前も變つた人間になつたもんだな、何うして其樣な鬼に成つたんだ、私が長い間遠い北海道で辛い思ひをして稼いて居るのを、何の爲だと思つて居るんだ……たとへ僅かの金錢でも貯めて、年寄られたお母樣にも安心をさせ、お前にも安心させて嬉しい顔を見たい斗りに……」和三は悄然と蒼白い顔を月に反向けて、潸々と涙を零した。

「濟みません」消え入る様な聲で、壽江は袖に顏を埋めて始終泣いて居た。

「濟みませんでは濟まんぢやないか……あゝ、私は悔くしてならん、只つた一人のお母様の死目にも遇はれず、樂みにして居つたお前まで恁んな汚れた身になつて、あゝ薩張り精も抜けて了つた」獨言ちて「壽江私はお前に賴みがある聞いてくれるか」

「はい、妾に適ひます事ならば……」

「ぢや、聞いてくれるのか、今迄の不孝の罪は皆免しやるから、何うか香山と縁を切つて呉れ」

「はい」蒼冷めた面を僅かに壽江は擡げた。

「はいぢや解らん、明瞭と答へて呉れ」和三の兩眼は爛いた。

「はい」聲は稍々震へを帶びた、

「こら壽江ッ、明瞭答へんとすると、愈々離縁れんと云ふのぢやな、彼様な奴に未練があるのか、香山を何んな奴だと思つてるんだ、私のお父様の時には充分厄介になつて置き乍ら、何うだ、亡くなられた後は振り向きもせず、お父様が汗水で建てられた家も庫や失くなり恁んな貧しい目を見るのも、皆んな香山の爲業ぢやないか、其様な非人にお前が縁付いて、お父さんの顏が立つと思ふのか、世間へ對して面目が無いぢやないか……だから私が賴んぢや、何うか離縁して呉れ、えッ、返事をしてくれないか、壽江……」情に激した兄の聲もだん／＼と震へを帶びて、止度もなく涙は頰を傳ふのであつた。

「兄さん、何卒お免し遊ばせ……お言葉に叛くやうですけれど是れ丈けは何うしても……」壽江はベンチを辷り落ちて、わつと斗りに泣き伏した。

「切れむと云ふのか、馬鹿ッ、勝手にせよ、私は一時も恁んな所に居たくない、さつさと北海道に歸るわ、爵は眼の前だ、馬鹿ッ」和三は憤然と怒りの色を漲らして、衝と場を蹴つて起つた。

「兄様、些……些とお待ち遊ばせ」袖を振り拂つた兄に追ひ縋らんと壽江はその跡を追ふた。

「もうお前に用はない、お前は今から私の妹ぢやないぞ」

「でも暫らく」辛うじてその袖を捕まへた。

「えゝッ、放さむか」捕まへた袖を無理に放して一散に走つた、壽江は別に追ふともせず倒れたまゝ其處に泣き伏した。

夜は益々更け渡つて月は益々明かに、亂れたる壽江の

姿を照らした。
ピーと一聲汽笛がなつたと思ふと、堺發の終列車が出た響がきこえた、壽江はつと起ち上つてその方を瞶めたが、月に眼を移して又滂沱と涙を流した。（完）

お手本はそこいらにあらうとは思はれるが、構想も單純ながら短篇にふさはしく、なかなか手際のあざやかな作物である（選者評）

農夫（選外）　金澤　森清子

○俳優のむすめ

岩代　服部水仙子

『おぢやあ如何しても退學なけりやならないの？』

『え、中途で退校すのは眞實に殘念てすけど……仕方が無いわ……：』と投げやる樣に言つて凝乎と行手に架ゝつてる石橋の上を低う飛んてゆく燕の行方を見戍りながら、悖と幽かな溜息。年は十八の色白く髮黑く、級中切ての美人の君子。何の俳優の娘がと岡燒連の陰口時に寄つては面と向つての嘲笑に、いつも其活々とした眼に淚を含べるのが常であつたが、其眼の今日はいつになく打沈むでは居ながらも、何事か决心の影が現はれて居る。

『自分ぢやこんなことに成らうとは夢にも思つてやしなかつたのですが父が思ひ掛なく彼麽ことになつてしまつて……え、腦充血てしたの、私眞實に如何しようと思ひましたわ、倒れて室へかつぎ入れられた時、私を枕許に呼んでね父が後を繼いて吳れ、然し品性を高潔になと一言讀みかけた脚本を持つた儘、その儘なんてすの……私泣きましたわ、だつて口惜しくつて切なくつて……どうしても自分は俳優にならなけりやならないのかと思ふとつひ情無くなつて……
……』



『だけど……』と文子は何か言はんとしたがさて適當の言葉が無いらしく其儘默つてしまつて、海老茶の袴を蹴つて出る君子の靴と自分の赤い鼻緒のつま先とが言ひ合さずに揃つてゆくのを見つめて居る。右手の小高き岡なる瓦燒きの煙りが一際むらがり出て向ふの杉から放れた烏三羽、薄煙の中を飛んでゆく。

『だけどねえ文子さん！私決心しましたの、何の俳優

だとて恥づることがありませう、多少世に知られた父の後を繼いで立派に舞臺の上で働いて見せますわ、私、お友達に嘲笑れて蔑視れて、悲しかつたのは未だ藝術の美を認めなかつたんですわね、品性さへ高潔なら、操行さへ確かなら、何の恥づる事がありませう……もとより俳優の娘が……」我と我を勵ますやうに言つて、お召の矢羽根の胸を張らして、青葉の下道を翳さずにきたオリーブ色の洋傘をつと擴げて文子へとさし掛けた。

「それでね一昨日で父の百ヶ日も終へましたし、學校の方も決定つきましたしするからいよ／＼劇界に身を投じる積りですの、まあ暫くは東京に居りません、もと父の門弟でした杉山の一行が明後日、東北地方に參りますのでそれに加はつてね……暫く逢はれないわ」

「えつ、じやあ明後日……？」

「は、それで今日はお暇乞ひかた／＼參りました譯ですの、文子さん！長々貴女にお世話樣になつてねえ、俳優の娘として何誰も合手にして呉れない私を貴女一人は……よく今まで交つて下すつてね、私感謝しますわ、文子さん！此後ともね……」

洋傘の柄の房を結んでは解き結んでは解きして居る文子の手を取つて強う握りしめた。

「え、お互に……でも明後日なんてまあ」

「二年ばかりはお目にかゝらない積り、文子さんお健かにね、他日貴女にお目にかゝるのは、それは舞臺の上でゞすわ、私の初舞臺には是非……は東京でゞす」

「その頃は私も學校が卒業ますから必と故郷に居るやうになるでせうよ」

道の兩脇の麥畑に仕事して居る人達に見送られて二人は松並木に出た。その並木のはづれの茸屋根造りの家の前には人力車が一輛休んで居る。

「文子さん、もう此所までゞよくつてよ、後は車でまゐりますから……如何も有難う、お父樣やお母樣に宜しくね」

「じやあ君子さんあなたの成功するのを私、待つてゝよ、お父樣のお遺言を忘れない樣に……」

「有難う……さよなら御機嫌よう」

「さよなら！」

車夫は梶棒をとり上げた。

「あ、あのお兄樣に……」此時もう車夫は馳せ出したので、君子は口を噤んで凝乎と意味あり氣に文子を見た文子もまた何か言はふと口を動かしたが、たゞやは

り君子の顔を瞶めて居る。君子は目禮した。車はいよいよ遠く〳〵。

此作者の寄稿は讀まない先から、胸の躍るを禁じ得ない、俳優の娘とは一寸眼先が變つて居る、終りが殊に勝れて居るやうだ(選者評)

○雪解

青森 庄司登茂子

（上）

「秋信は歸りませんか」と、姑の問に「ハイ」と、許り二の句は繼げぬ夫人俊子、嫁ぎ參らせた時は、御優しかつた秋信樣、如何被成た事か此の頃の御身持、聞けば昨日も、御役所には御出仕しに成らず、阿嬌な女と合乗りて、濱町の方へ車を飛ばされたとか、お梅がまた聞きの話、偶に御歸宅に成ればとて、あられも無い口三味線の酒機嫌「俊子雨ショボても踊れ、踊らぬかお前は良夫の言附をきかんか」と、まあ何として夫れも肩を揉めとか、琴なりとの仰せ付けなれば、如何樣にも致さりよふなれど、此れはまあと遂、無言て打向けば「泣いて居るのか、亦御母樣との喧嘩か面白ふ無い」とての御出かけ、其御羽織にてはと御召を替れば、チラリと落る紅の筆、そを嚙みしめて空閨に、泣き明かしたも幾度、其折々に姑樣の「又秋信はお出かけか」と、勿躰無事乍ら邪慳御白眼其度毎に小さい胸の、裂けんとしたも數知れず、されど是れも皆、妾の心の足り無い爲めと、實家への便りも、笑つて暮すと許り、偶々實母樣のお便りには、秋信樣の此の頃の御身持はと、惡事千里の世の中とて、惡い事は知れ易く、何時御耳に入りてかお文の節々、仰せ越さるゝ其都度、何のお優しう被遊て、左樣の事は微塵もありませぬ、何かの御聞き違ひに侍べらんと、御返事申上ぐる時の、辛さ苦しさ、是れも元來、御優しい秋信さま、今に迷ひの夢醒めて、眞如の月の影明かに、お成り遊された御睦ら、姑樣の御心も解け、今日の悲哀を昔語りの、言もあらんと、一縷な希望を胸に蟠みて、今も想を其處に運ばせ居るなり、姑は「ハイ」との返辭に物足りぬ面顏にて「女學生卒業の嫁は懲り升た」と獨言いて、合の襖をハタと音させて閉めた、さはれ俊子には聞え無かつた、昨日の花は今日の青葉と替りて、涼しい庭の若緑、葉面に月を宿して心地宜き微風、夫人の居間の床の燕花に戰ひだ、靜かに更ける夏の夜を、茶の間の時計が恰度十二時、

（下）

阿彌陀寺の鐘が陰に響いて、街區の灯も一ッ〳〵に消果ては、瓦斯燈のみ獨り、影あはれに長く、庭の蟲韻

聲細う成ては、筧の水も絶え〴〵に、唯さい淋しき秋の夜の、況て重き病を看護する、深夜の思ひは誰も、想像する所であらう!!!「梅や」と呼んだ俊子は、病人の眼や醒しと、そつと窺ひて「あのお姑様はお寝て入らつしやるから其内お前少しお休み」次の間よりは「ハイ」と返辭微かに聞えた、庭のきり〴〵す、雨戸を打ち木の葉の音にハタと止みて、寂寞の夜はいとゞ深し、姑はこみ上る咳に眼を開き「お、未だ休まぬのか……最大分更けたろふに「ハイ、何未だ早ふム升あのお薬は」姑は無言、己が永き病に心盡しの俊子が看護、面瘦した、其可憐さ「……俊子……許して……」吁々如何なれば優しの嫁を是迄は、何故に……鬼か……蛇かと……不覺の涙を其瘦た頰に……「も、勿躰無い、まあ……」

* * * * * * *

一時は危篤成し老母の病も、俊子が厚き看護と、醫者の丹精て其年も暮、軈ては梅の花、南の枝に二ツ三ツ綻び染むる今日床上げの御祝ひ、……去年迄は聞えた事の無き笑ひ聲……秋信の身持は最既に直りしとか……
……
庭の殘雪は最早や、影も無う消えて、晴たる空には、瑞氣が滿ちて居る。

随分飽きられた程の古い趣向てはあるが、光明小說として、所謂家庭小說として、此種の文字も一部の人には欣んで讀まれるてあらう、作る人は今少し新しい想を搆へればなるまい(選者評)

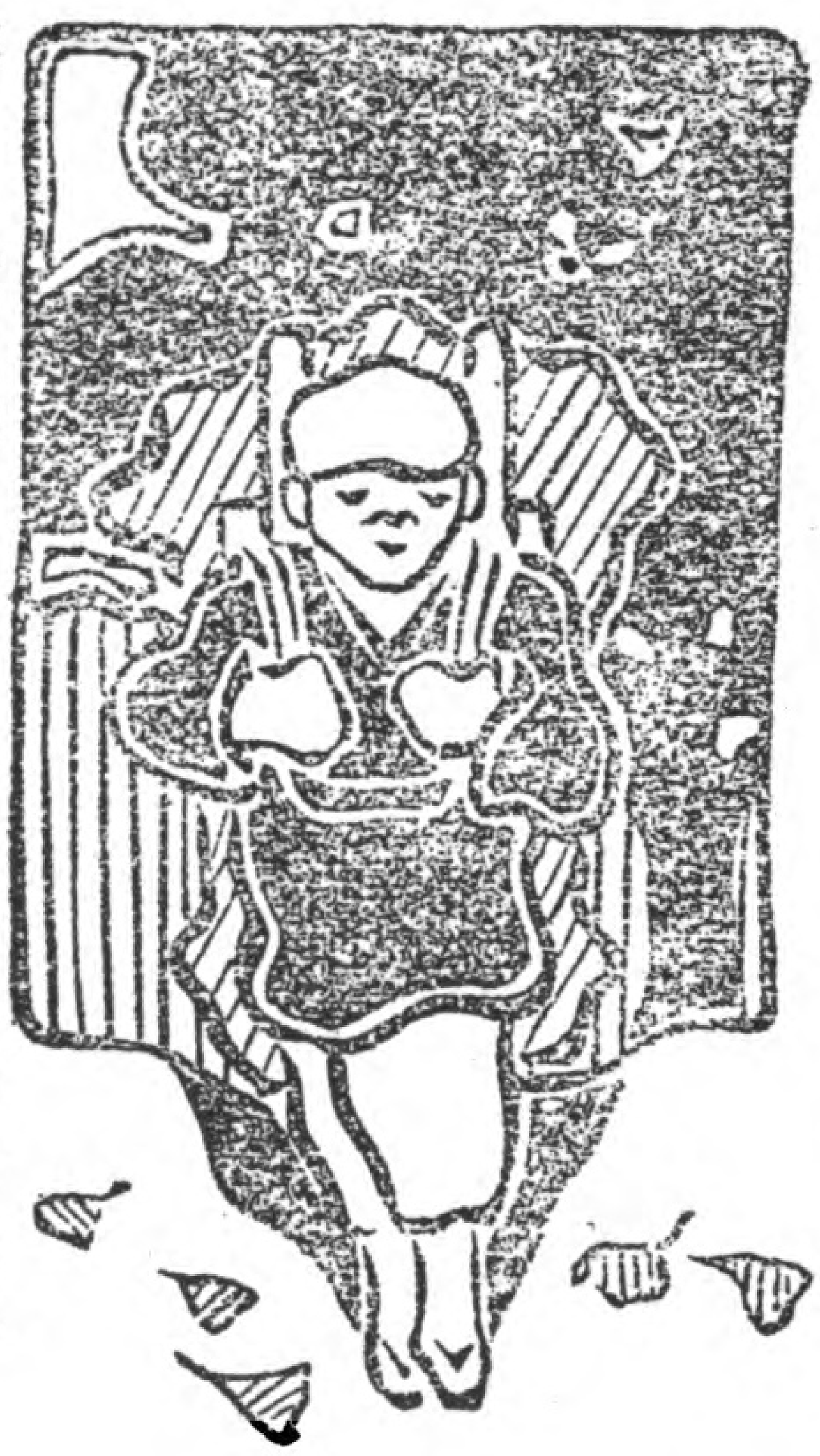
○波の雫

佐賀乃信子

「オヤ姉様泣いてるの、どうかありやしなくつて?エ姉様」妹の君子はさもきづかはしげに姉の顏を窺きぬ、夏の夕まぐれ、廣い海のたゞ中に影矮う浮べる舟を二階の欄干に寄りかゝりて先程より餘念もなく眺め居たし娘、折々漏らす吐息にはそもいかなる思ひをか藏する。

「姉さんどうしたの?」再び問はれて姉は一寸眼を押し拭ひ「どうもありやしないの、だけど何だか氣がうつうつしてネエ」「オヤそう、ぢや床のべませうネエ」と云ふより早く立上りて行かんとす、姉はあはたゞしく呼び止めて「君ちやん休む程でもないからいゝわヤア一寸來てご覽二人て海の景色でも眺めませう」と口にこそ確かに云へど心の苦しさ堪へんとして又も太き吐息、動ありて、姉は何か心に決したる者の如く急に君子を顧み「君ちやんお前覺えて居るの七年前の事?」

意外の問に少し小頸を傾けしが忽ち笑顔を催し「ハイ覺えて居ますの、お父樣が買つて下さつた博多人形と、いつも遊んで居た事を「ホホ……そんな事ぢや無いわ、だけど覺えないのも無理はないのネエ」姉は君子の顔を熟々と打見遣りて一層懷舊の念に堪へざる樣子「姉さんそれはそうとあのお父樣やお母樣はいつお歸りなさるの、もう直ぐ／＼」と早おろ／＼聲「お……つてば」と早おろ／＼聲「お……君ちやん其事ですわいつから話さう／＼と思つて居たのでしたけどもネエ遂折が無くて」張りもさけなんとする胸をやうやう撫でおろしながら「君ちやん泣いちやいけないよ今に話して上げるから」姉は君子の兩手をしつかと握り「君ちやん……あ明日はネエ丁度七年忌……「エ誰の姉樣誰の年忌……？」きつと顔を上げ眼を見開らき問ひ詰むるも道理なれや時しも磯打つ波の涼しさに、いざよふ弦月の一片は一葉の小舟の帆柱に懸かりて、斷雲風に收まり、波濤一聲船舷をたゝきて月光雲に輝く七年前の今宵なりし、



落葉（選外）加賀波佐谷君子

釣りする海士の小舟を借りて村人十四五名餘りの舟遊び、いつしか沖あい遙かに漕ぎ出でつ、月の宴は益々盛なり、折柄いづこいかなる所よりか來たりけん一陣の黒雲忽ちもたらす狂風狂雨、波は逆巻き怒濤はあれ木の葉の如き釣舟は見る／＼波浪に弄ばれ、或は妻を尋ぬる夫もあり、或は親を呼び子と叫びて悲慘限りなけれど助くる舟もなし、折しもよしこなたに來かゝる蒸汽船こも亦非常に難儀なる躰ながら目のあたり九死一生の人々を見るに付け辛くも救ひし姉妹二人……姉は堰き來る涙を止めもあへず、君子の兩手にはら／＼と落しつ、君子は始終の話を聞き只茫然としてありしが忽ち姉の膝に泣き伏しぬ「姉樣ほんとなの……」泣聲にて叫びぬ「お……君ちやん尤ですわもつと早く云ふ筈だつたけれどネエどうぞ許してネエ君ちやんもうそんなに泣いたつて仕方がないぢやありませんか」「エ姉樣ほんとに……」

* * * * * * * * *

あはれ浮き立つ雲に心を砕き、末立つ浪に思ひを悩やます姉妹、あゝかわくひまなき袂には浮き世の涙やかかるらん、折しも月に吹きなす笛の音か、はた同じなぎさに立ちて吹くは世になき人を戀ふるにか、音も絶だへに波間にすみて・・・・

海を見て七年前の悲嘆をくり返す、海を見ながら語るやうにしたのは、作者の大手柄で、其爲に文章の稚い處も補はれて、面白く讀ませた（選者評）

○落葉

神田　長島秋枯女史

麗かな秋の夕日は名殘なく沈み果てゝ、末枯れかゝる樹々の木末には紅の雲高くかゝつてゐる。

折しも薄暗い林の中を拔け出てた女、年頃は二十七八であらう、細かい双子縞の綿入を裾短かに着て、泥塗れの脚胖をはき小倉の男帶を締めた姿の如何にも田舍じみてはいるが、此處等では珍らしい程色白で眉こく目涼しく、口元の締つた、そして何所となく優しみのある顔立、ほつれかゝるびんの毛をそつとなで上げて力なく空を仰ぎ見た彼女はかすかなため息をもらして

「あゝ今時分美坊は何して居るだらう、いくら產の親ても七才にもなるまで此樣片田舍へ手ばなして置て顔さへよくは覺えて居ない子を引取つて、あゝどうして可愛い事があらう、まして强情な美坊だもの、きつとあの人達の氣には入らないだらう、いくら不自由のない立派な家に住んだつて可愛がつてくれる人もなく、只一人で冷い床に起ふしをしてさぞ辛い事だらう、必と今頃はあの大きい門の外に立つて泣いて居るだろうあゝ逢ひたい遇つて慰めてやりたい」、彼の聲は次第にうるんで其目には一ぱい涙がためている。

梢を渡る風一陣、忽ちはら／＼と散りくる落葉肩を掠め、地上へ舞ひ落ちた機彼女は何をきゝつけてか、物にはぢかれたように飛上つてあたりを見廻したが、亦ぐつたりと頭を垂れて吐息をした。

「母ちやあん」と細いかすかな聲、彼女が狂せる如くに、身を起した時再び「母ちやんよう」と、此度はまぎれもない小兒のこゑ、彼女はつと立上つて聲する方をぢつと目を据へて眺めた。

小川の彼方、秋草の茂つた中から少い姿が此方へと、走つてくるのである。

「おゝッ美坊ぢやないか、よ、よくきてくれた、さッは、早く此處へ此處へ」、彼女は嬉しさに言葉も亂れて漸う小川を渡り終つた小兒の傍へまろぶやうにかけよつて突然ひゝと抱しめて、「み、美坊、母ちやんはお

前に會ひたくつて毎日〳〵、泣き、泣き暮していたんだよ、よく來てくれた、お前もさぞ辛かつたらう、美坊もう〳〵どんな事があつたつて、東京などへやりはしないから、安心して母ちやんと一所にお出、さッ脊負してあげるから」、彼女が負脊うとして手をはなすと小兒はよろ〳〵のめつてぱつたりと倒れた。

「母ちやん、水、水を、く苦しい」、小兒の顔ははや、土色となつて、蕾のやうな口びるは紫と變じてゐた、あゝ僅か七ッか八ッの幼い身で六里餘の道を、朝家を拔け出た時から食事もせず、母戀しの一心に、漸う此處までたどりついた彼は、餓とつかれとに、今は息さへ次第に細うなりゆくのである。

彼女におろ〳〵してふるへる手に小川の水をからくも掬取つて口移しに小兒の口へ含まして、「美坊、し、確りしてお呉れ、これ美坊、折角遇つたのにお前はうれ、嬉しくないかえ、さッ確りして、よ、よ、」こぼるゝ熱涙を拭きもあへず小兒の胸へ顔をすりつけて、よゝと泣きむせんだ。

小兒は母にすがりついて僅に目を開いておつとその顔を見つめて、「母ちやん、私、母ちやんに遇つて、う、うれ、嬉しい……」

彼女がひゝと抱きしめた小兒の身ははや氷の如くに冷へ切つているのであつた。

落葉はまた一しきり散つてこぼれて雨のやう、あたりは暗となつた、

無理も甚しいが、書くのは一生懸命に書いてある、更に今後の作た得て作者の技倆を判斷しやう（選者評）

○生別死別

鹿兒島　濱田芳子

一刻千金と云ふなる春の夜もいつしか更けて天地の間物音もなく遠寺の鐘の夜の霧に漂ひて人も草木も眠るてふ眞夜半頃、松ケ谷城下の片邊り柴の眞垣をめぐらせる、些やかなる家の小門に立寄りて、ホト〳〵と叩たく一人の若衆あり。朧の月夜にも、しろき色白の振袖打見る處歲は十七八才なるべくや、やがて内より忍びやかに立ち出てしは、これも歲浦若き優少女それと見るより、笑ましげに、誰れかと思へば菊丸殿にてお在せしが、この夜陰に何事、イヤそは兎もあれ先は内に入り玉へ」と誘ふ少女を暫時と制し「アイヤ待たれよ春代殿今宵は大方ならぬ由ありて、この夜陰に驚かし申したるなれ、さる暇なる我身には侍らむぞ」と云へば、春代は訝し氣に、「大方ならぬ由とは开も何事ぞ

夫れこなたに入り玉へ」といふを再び制し「菊丸」春代殿今宵は御身に對して我終生の頼入れ返々永のお暇乞申さむとて參りたり」ェ、トばかり驚く春代言葉せはしく「菊丸殿そは又何と云ふことぞ聞かせ玉へ」と急ぎ立つる菊丸さらば語り申すべしと一段聲を潛めて、あゝいかに亂世にとは申しながら親子骨肉相鬪ぎ合ふ人の心の無情さよ、我君高國公いかなる惡魔の魅入りしか、御異母兄の義成公を亡きものにせむとの御下心さりながら武勇鋭き義成公尋常の手段にては計られずそれにつけ、義成公の日比この菊丸を愛でさせ玉ふを幸ひ我れに義成公の御首を持ちて來れとの御嚴命こは由々しき一大事と某言葉をつくして、百方に切諫し奉れども我執強き我君は露聞き入れ玉ふようもなく短慮の一徹遂には怒りの聲あらゝげ臣下の分際として主君に抗言、從ふべしと承引いたしてはかへりしが、思へば思へば情けなきわが身の上さりながら一度の承諾は反古にはいたされず、我れはこれより行かねばならぬ身イヤサ重き君命を帶たる菊丸運よくば夫れまで、失策せばやがて亡きわが命それにつけても春代殿御身も知らるゝごとく我には病みたる一人の老母あり我れを杖とも柱ともたのめるに我去りたればさぞや悲しみ嘆くらむ思ひ到れば菊丸も腸を寸裂るゝばかり「いかに春代殿我と御身とは振分け髮の昔より互に隔てなく睦み暮せし無二の友後は母の看護をして玉はずやたのみと云ふはこのことぞ」と打萎れたり、春代は早や涙にうるむ聲振はせ「喃菊丸殿おん母君のおんことは妾及ばずながら、よきに計らひ參らせむ、さりながら情けなきは今宵の仕誼聞えませぬは殿樣の御心、妾男子にもあらば御身にかわりて參らせむに、女の身の夫れも叶はず、あゝ何とせむ御身亡くして何を樂しみに世に永らへむ、花は誰れが爲めに咲く色ぞ……鳥は誰れが爲めに鳴く聲ぞ喃菊丸殿いかにせむ外に思案も侍べらじか」と泣き口說くいぢらしさ露にも堪へぬ風情なり。菊丸はやう〳〵に氣を取りなほし所詮別ねばならぬ御身と我菊丸も早や女々しくは申すまじ、さらばよ春代殿行く末えつゝがなく暮されよ、別けて頼むは母の事……と云ひすてゝ待ちてと縋る春代が手を打拂ひ行衛も知れず消え失せぬ。

後は魂拔けたらむ如き春代、しばし呆然と立てゐしが、一時にせきくる悲しさにヨヽとかばかり我れを忘れて泣き伏しぬ。

* * * * * * *

實にや戰國割據の世とは言へ天道は曲れる者に幸ひせず松ヶ谷城主高國が隱謀早くも敵の知る所となり菊丸は空しく捕はれて囹圄の中に剛勇無比の高國も不意の寄せ手に狼狽し刀折れ矢盡き遂に自刄して果てにける茲に怪しむべきは菊丸松ヶ谷城陷落の報を聞きてさして驚く樣もなく、花の顏ばせ常の如くあでやかに生年十八歲、皷河原の朝の露とは消えにける。

義成殿は敵の片破ながら菊丸が勇氣と膽力とを賞して皷河原の邊りに菊丸がために少さき墓をぞ建てられける。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

其後夜なく〳〵菊丸が墓に詣づる一人の少女あり、恭〳〵し氣に閼迦を供へ香花を手向け、墓前に額づきて生きたる人に對するごとく嘆き、恐しむ有樣は他所の見る目も哀れなりき、やがてしほ〳〵と立去る後姿を見れば無殘!!!綠の黑髮は切られたり。

「露にも堪へぬ風情なり」斯んな文體を用ゆるものは今時に珍しい、想ふに作者は江戸時代にあらはれたる多くの小說を讀み、それに感化されて此一篇は出來たるものか、偶には我文壇紙上に斯る文字を歡迎するも宜しからう、作の可否は別問題としてそも一讀の値あらう(選者評)

○誰が罪

金剛山麓　たちばな女

「堪忍して下さい皆な私しが」

默想の現を破られて愕然として我に返りつ。人なしと思ひの森の奧。しかもいとゞしく戰いを帶びし女の聲す、むら〳〵として、起る好奇の念にかられて步一步。耳をすませば、あな霜にむせべる虫の音とやら。あはれ絕々にすゝり泣き。何とは知らず身内戰きし絕えがたら兩手に乳のほとり確と抱けば、おゝわが手にも覺ゆる胸の轟ろき。

月には雲かくれて四方小暗く、僅かに巽の方夜を守るらむ星の燦として瞬けるもの二つ三つ。

「堪るすも堪るさないも！あゝ僕は今更只お父さんさへ居て下すつたらこんな〳〵：

：：：」

臧迫つてや語は絕えた。

若き男子とは聲音にも知られつ。不偶の戀か。さても。仔細ぞあらむと、私は呼吸をつめて小さくなる空を蹵へる老杉の梢欝蒼たるあたり、物凄さ、呻を立てゝ嵐



首夏（選外）　越後　上野志摩子

過ぐれば綠の香ひし〳〵と肺腑に沈む。

「あゝ忘れもしない三年前爾だ僕が出立の晚だ「ジャア唯次さん達者で働いて來て下さい三年と云へば長いやうだが立てば直きだ、お順は私が慥かに預かつた」とお父さんに云はれたときはどんなに嬉しかつたか」そゞろ當時を追想の感は絕てや。語しばし太息微かにやがて低く。

「三年の長い月日隨分辛らい事も悲しい事もあつたけれど、僕はお順さん、……

情迫つてや覺えずも呼びかけつ、

「一日だつてお前さんの事を」

「唯次さん後生だからもう——みんな私しが」

涙聲の終りは消えつゝ

「何もお前さんの惡いのじやないみんな繼母さんの何だ僕は察しる、よく察しるよ、けども——けども僕は斯うと知つたら、女々しいやうだが何も阿米利加三界へ——」

「みんな〳〵私しが足らはないからですわ」

打ち消すやうに云つた女が聲は涙に埋もれて

「わし私しは何故こんな身になるまでに、死——死んで終はなかつたらう、唯次さんどうぞ堪忍してみんなみんな」

帛を裂くごとき慘らしき音はふつと絕えて「ヨゝ」とばかり暗に長うむせぶ音——

晝なほ凄かるべきこの森、此夜、あゝ何たる悲慘ぞ。

夜は森々と更けて、月はいよ〳〵傾き、四顧寂として死せるがやう、只天地の間落葉をくゞる、湲流の、時に潺緩たるさゝやきを聽くのみ。

やがて「アゝ」と天を仰ぐらむ長大息と共に

「何も運命だ」

投げ捨つらんやうの男が聲音寂びてさびしくも木精返しつ。步み出せしにや漸やく遠し

私はホツト息つきて胸を懷きぬ。些々たる人世の問題を解決す可く、夜更けて入りし、森の奧。圖らず聽きし、人の運命の、實に運命の、悲しくも傷ましきを。世を恐れ人を恐るればこそ此處には來つらむものを。思へば罪ふかきことして。我もまた由なき事に、胸痛むるよ。と立ち上りつ返見れば、今沈まんとして、名殘の一閃パッと明るき月光を後に浴びて、傷ましげなる、二つの影の、相擁して阪を上るを見しが。

＊　＊　＊　＊　＊

翌々日の〇〇新報に、鏡が池に男女の死體てふ標題の

一欄、何心なく讀みもて往きし我は半ならずして、取落さんとせり。あはれ其處には今なほ忘られぬ人の名唯次、順。

文體に癖あり、句を切るにわざと終止言を避けたる、餘り多く用ゆると知つて餘韻を失ふ、筋は際立ちて賞嘆すべきほどのものならねど、叙景を挿める故に自ら懷想の氣人を襲ふものがある（選者評）

○野菊の花

岐阜　和田錦子

其れは、晩秋のある美しい宵の事であつた、上弦の月は、彼方鎮守の森の上に照つて、星かげ淡く、月の光を背面に浴びて、東する十二三の牧童貧しい身裝、跣足のまゝ、右手には優しう、野菊の一枝持つたのが、時々思出したやう、咽び泣くのである。

「富ちやん！何故其んなに泣くの？」

後ろの方から、小走りに牧童の側に、馳け寄つて、斯う言つたのは、鄙には珍らしいまて、色白な面して肉附の豐かな面、漆の黒髪は後ろに、長く垂らして、蝴蝶と白いリボン持て輕う束ねて、年紀十六七の、見るから可愛らしい少女てある。

不意を打たれて、牧童は泣き面隱して、少女を見上げた眼は月に輝く。

「ヤア！貴女村長様所の……自己何泣きやあせんだ……
……」

「何隱さなくても……お前の泣くのは當り前よ、妾はお前が實、氣の毒て……」

少女は、氣の毒相に、ジッと富三の面を見詰めてゐたが、更に哀れを帶びた調子て、

「それに人は、お前を親なしと思うて、馬鹿にして……
……」

牧童は、過去の悲慘な、歷史を繰り返して、一種堪へ難い、厭な感想がして泣出さずには居られなかつた。

「御孃さん……貴女ばつかしだ、自己を可愛がつてくんさるわ……が、御孃さん、最う言はないて置いてくんなさい、自己悲しくなつて來るだ……」

「アヽ、最う言ふまい、富ちやんお前も泣かないてネ……時に富ちやんは大變奇麗な花を持つてる事……」

「フム之れ」と野菊の花を一寸見て、

「之れあ、あの亡母さんに上げるだ……」

「亡母さん」と少女は口の中て吻いて、

「ほんとに富ちやん感心ネ」

「御孃さん、亡母さんが死んて今日て丁度三十五日て……御經さ上げやうと思ふだけんど、金がないんて……叔父も貸してくれず、叔母もえらく叱つたゞ、口惜

しくて……仕方ないんで花でも立てやうかと……」口惜し相に歯を食ひしばつて、眼には憐れ涙が、林檎色の頬を傳うた。

「富ちやん、失禮だがネ、是れて亡母さんに御經ても上げて……餘つたらお前美味いものでも御買い……」帶の財布から幾干取り出して、強ひて、月の光にチラと光つたと同時に優しい白い手から牧童の手に落ちた。

可憐な一場の物語てあるが、無取つて哲うとして却つて邪氣あらしめたのは惜むべきてある、斯う云ふおはなしは成るべく無取らないて、さつばりと書いた方が哀れに感ずる（選者評）

○美人草

赤坂　八重垣

垣根の美人草は緋の色が燃えるやうに咲いて居る、咲いて居るかと思へば、いつの間にか散つてゐる花て、美人草は花の中ても最も脆い花てあらう。

脆いと言へば私の學友てあつた山田糸子さんほど世の中に脆い運命の下に生れた方はなからう、若し糸子さんが男てあつたら決して、斯様な脆い運命には服しなかつたてあらう。

糸子さんは眼覺める程の美人てあつた、美人てあつた爲に、多くの男子から眼を着けられた、其中の一人梁川文夫は遂に糸子さんに言寄つた、糸子さんは一言の下に刎ねつけた、其翌夜。

月無く、星多く降るやうな夏の終、秋の初めてあつた、都と云へども淋しい小石川の奥、茗荷谷の邸へ日暮れて車が迎いに來た、糸子さんに只今直ぐ來て下さいと、而かもそれが赤坂に住んて居る無二の友、私の名を騙り、私が急病だと言つて。

友情篤き糸子さんは驚いて、私の上を案じながら車に乘つたてあらう、車夫はあらぬ方に曳いて行き、口實を設けて糸子さんを、木下蔭へ捨て去つた、おとなしい糸子さんは此時既に只ならぬ樣子を覺つたてあらう。現はれた梁川と糸子さんの問答は聞く事も知る事も出來ないけれども、糸子さんは其れ切り歸らぬ人となつた、傷もない、血も見えない、只冷たくなつて倒れて居たのを暫く後に發見されたので。

人は糸子さんが餘り美くしかつたから、惡魔が祟つて其美くしい命を奪ひ去つたと言ふ、私も然う云ふ事にして置きたいと思ふ、あゝ脆きものよ、汝の名は美人草なり。



消息文

文學士沼波瓊音先生選

人

後の母様へ

豊橋町　房枝

軒端を遶る五月雨の音悲しき夜半を、乳母も看護婦も打疲れてうまいせるを幸ひ、此文認め置き候、わが亡からむ後に見そなはし給ひて、罪の百分一なりとも許すとの一言仰せ給はゞ、死せし身も如何許りか心安うはべらむ。はじめて母様と呼びまゐらせしより、早一とせ餘り、其長き間、いまはしき病に打伏せる身を、生の親も及ばぬ御介抱、御禮申上げむにも言葉なく、たゞ涙に咽び入るのみにて候、其厚き御情を蒙りながら、さてもわが心は鬼なりしか、御顔見るたびに怨めしとのみ思ひ、或る時は母様さへおはさずば、生の母は離縁にもなるまじなど、淺間しくも狹き心より考へ、また或る時は、優しう慰められ、御手づから御藥賜りてさへ、御顔見れば先の母の事思ひ出でられて、御心の程よく知りながら、いらへさへ得爲で、衾打被ぎし事も候ひし。さらでも、なさぬ仲としいへば、猜疑の眼もて見るが世の常なるに、況して妾が恁る振舞の、其のたび／＼に母様如何許りか御心を惱ましたまひけむ、推しまゐらするさへ、今は胸つぶるゝばかりに候。病勢愈々募り、一期の月影山の端に入らむとして、浮世の様、人の心の程など思ふにつけて、はじめて越し方の顧られ、御恩を仇にて返せし罪のまざ／＼と殘れるに空恐ろしく、如何にして償ひはべらむと、日夜心を苦しめ居れど、起つ事さへもまゝならぬ身の、霜に傷める蟀ならねど何わざせむ事も慊はねば、只悔の涙の罪を洗へと、人知れず袂を絞るばかり、日毎血を吐く苦しみも、此心の切なさに比ぶればものならず候。唯嬉しきは、最期の近き事にて、此苦しみとても長き事にてはあらじと思ひ候へども、さりとて、恁る身の未來は八寒地獄にや落ちはべらむ、よしそれも犯せし罪の報とし思へば、如何になるとも厭はじな、もしまた積りに積りし罪業の消ゆる期あらば、魂すゞしく母様のほとりに侍りて、雨にも風にも楯となり、乾とおん守り申すべく、改めて御詫して、心のまゝに

泣かむが今生の願ひなれども、人目の關のあまりにうるさければ、慭くは認め置き候、今こそかくてあれ、夜晝人目繁ければ、ひそかに御手渡申さむ事も恊はず、枕の下に秘め置き候まゝ、何れは亡き後御目に觸るゝ事と存じ候、御一讀の上は、直ちに御火中下されたく御願申上候、書置きたき事澤なれど、病苦激しく心に任せず、且つは人や來むと心急ぎ候まゝ、これにて筆とめ申候、いはむやうなき胸の中、唯幾重にも御推察の程、偏に願ひ上げまゐらせ候。

罪ある娘より

母上様

（評）事まことに自然にて作りしものとは思はれず、讀者をして涙の落つるを覺えざらしむ。

秀逸

○同窓會を催さんとて友の許に

佐賀　渚小舟

同じ梢に集ひたりし小鳥の、漸々にさへづる春を得て彼方此方に飛びかひしより、いつしか夢の間に一年を經過致して候、嗚呼懐しの君には、其後如何渡らせ給ふにか、何時ぞや天津子の君よりの御玉章に、君には、御地の小學に敎への鞭取らせますとか承り候ひしが、扨ては罪なき幼兒等を友として暮します君の生活や實に如何計りか樂しからんと、すゞろ羨しさに堪へず候、私事は相變らず瀧の音繁き此の山里に、籠り居て、毎朝とくより父が手づから燒きし炭荷ひて、里へ三里賣りに行くを業として、平和なる月日を過して候、昨日は雪降り敷きて、例の物商ひにも出で難きまゝ、家に垂れ籠めて、一人別れし師の君や友の上等思ひ沈みて候ひしに、ふと郵便の聲するに驚きて走り出づれは、あな嬉し、昔彼の學び屋にて、受持の師の君なりし園田先生よりの御音づれにぞ候らひし、急ぎ封押切りて讀み行き候へば、昔ながらの慈愛の色深う、殊に、吾等の未だ校に在りし日より準備とり〲なりし共進會場の、早や殘りなう落成して愈ゝ來ん三月中旬より開會の由、されば此の好時機に乘じて、我等卒業生一同集ひて、舊情を溫めんは、如何にと、進めさせ候が、君にはいかゞおぼしたまふ、妾はげに良き師の君の思出哉と嬉しう、ぜひ〲左樣に致さまほしう存じ候、されば君にも必ずよ出席し給ひて、君が得手なりし筑紫琵琶の變らぬ音をば、奏でさせ給はり度、昔のまゝに無藝の妾も、炭燒歌の一際可笑しきをば、御耳に入れ皆樣笑はせ申すべく候、何も〲學び屋に在りし頃相談役なりし君へ先づ第一に語りまつるぞかし、何卒同じ心に決め給ひて、友の誰彼御誘ひ下され度伏して願上候。

（評）聞きたきは浮世の外の炭燒うたの一節。

○新茶を送られし返し

久留米　露子

先頃は、御許樣みづから摘ませられ、みづから製せさせたまひたる新茶、例の年にかはりなう、いと澤山にも御惠みたまひしみ心づくしの程を汲みかはしはべり、日長のたのしみにとて、老いたる母はこよなううれしうおぼえて、客などさふらふには、先づ、御許のたまものをたゝへいだし、くさ〴〵語りきけ侍りつるを、とく厚う御禮申せよとのことに、はやもまうのぼりてこのよろこびきこえまほしう侍れど、けふは御なめげながら後にゆづりて、御返しまてに、かくなん。

とりいてゝ君のなさけを汲むごとに
深きかをりの身にぞしみぬる

(評) 穩健、歌も亦よし。

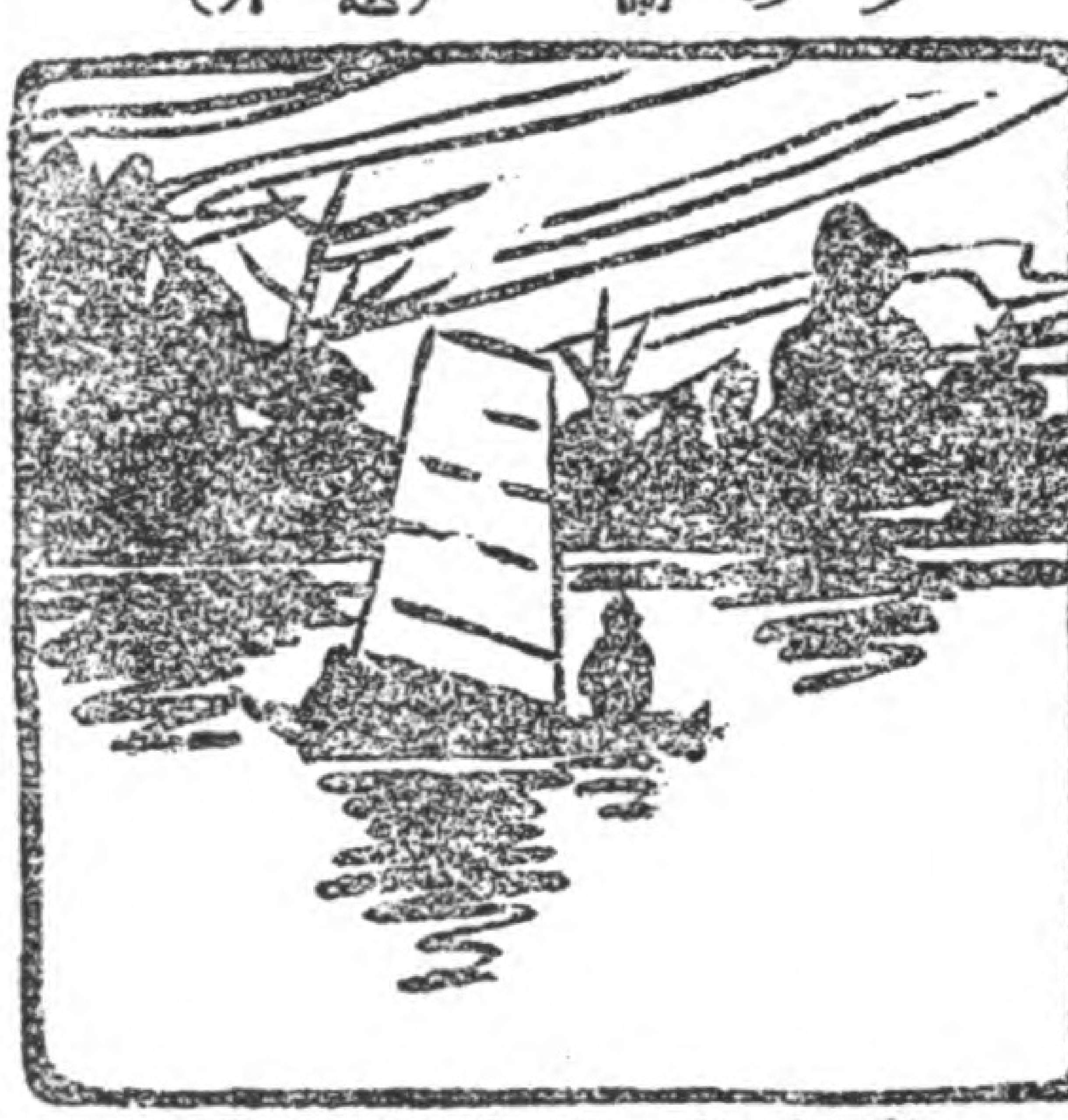
○隣家の友へ

鳥取　ばら子

呼べば聞え候はんも餘りにはしたなく候へばジョンを使として、もたせ上候。只今私の兄兩人にて、ジョンを連れ寫生に出でんとの事、物蔭より聞き候て、私もと願ひ候ひしも、女は厭と只一言、餘りに口惜しうて如何せんとまだふ內、ふと、あのをそろいのバイオリンの事思ひ出で候、君よ小蝶まひ、雲雀さへづる、野べにて共に得意の須磨の曲、野遊び等、かなで候はんは、如何に樂しからずや、然して其歸へるさに、寫生ならで寫眞取り候ては、如何にや、私事母に、すみれの花たばを家づとにとて、早く歸らば兇しこひ候ところ、君さまと御同道にて、斯く申す間もいと〳〵との事に候、君は如何に候や、心せき申候、嬉しき、御返事を待ち上候。但し御返事はとりいそぎ候へば、良、否、とのみ、御しるし下され度、先づは取いそぎ、御誘ひまでかして。

(評) 返事はたゞ「良」とのみ。

夕の湖　(選外)



南多摩　中島ぬい子

○山里より

上野　曉奈美子

足引の山の端に、美しき霞の流れ初め候ひしより、訪ふ人もなき山里も、何となう春めきわたりて、こゝ彼處の梅花も、懷かしき香にかほり初め、名もなき小鳥の囀りも、いと樂しげに面白きを、鶯の聲さへ、今朝よりぞ、いと嬉しくなり申候。されば にや、此の頃は三尺の書窓に文讀まんも、本意なく存ぜられ候まゝ、心隔てぬ友垣とつれだちて、或る時は柳瀨に、ある時は太郎四郎山に、梅花を探り候て、風韻あるそが彩り、幽玄なるそが香ひ、淸洒なるそが姿なんど、賞しあひ評しあひつゝ、日々の徒然をはらひ居り候。又ある時は、麥靑き野面に彷徨うて、心地よき風に素

裕の袂かるく吹かせ、乙女らの小唄聞きつゝ若草摘むも興多く候、畦に佇みて四方八方の景情に憧れて、恍惚なる袖の下より、かまびすしき聲たてゝ、舞ひ上る揚雲雀の歌の趣ふかく、自らも日頃の唱歌口ずさまるるなど、誠に／＼春のみは鄙も都も變りなき樂みあるやう存ぜられ候。

（評）野趣、都人の塵懐を拂ふに足る。

○寫眞に添へて友の許に

四谷　しらぎく

よにむらさきの色うすく、野末に咲きし一本すみれ、とても／＼ゑんなる櫻の色香には、及ぶべくも候はねどさりとて、梅さかぬ頃よりの、御かぬ言はもだしがたく、つみとりて御目にかけまゐらせ候。いなゝく駒の、ひづめにもふまれて、君がその生にうつし植らるゝ花の心、あはれ君ならで誰かはとこそ。

（評）簡潔。

○別れし友へ

筑前　よね子

そよ／＼と吹き來る風もなにとなう溫かに春めきて候今日此頃懷かしき御許樣には如何御渡り遊ばされ候か、私事も相變らず寂しく學び屋に通ひ居り候、げにひま行く駒の足早み、彼の小草もゆる里川のほとり御共々に袖つらねていとも樂しき御物語り致し參らせしはまだ昨日の如く思はれ候を、はや二年の昔語りと相成申候。

あゝ思へばはかなき浮世に候かな、かくかれ／＼に相成り申さんとは神ならぬ身の如何で知り申すべき、日影のどけき春の日や、月さえ渡る秋の夕、かたみに笑ひつ泣きつ、いつまでも別れじとちかひしものを。

あはれ春はまためぐり來ぬ、されど／＼君ゐまさねば如何で樂しく候べき、日頃好みし花も鳥も、今はなかなかに身を苦しむるものとこそは相成り候ひしか。

あゝ今夜も又‥‥‥月影朧に、梅香る窓の下、君のうつしゑ取り出でゝそゞろに昔を忍ぶ袖の露とゞめかね候まゝ、落つる雫を硯にそゝぎて又々かひなきくり事に御心さわがし申し候。

巻きこめし菫の花は去にし年君が御ぐしに手づから摘みてさし參らせし彼の筑紫野の末に香ひしそれに候よ、何卒／＼御書の栞にも遊ばされて、時々は昔の友の上思しいで下さるべく願ひ上げ申候。

（評）すら／＼と達者に書き流されたり。

○友の嫁するを否むとて

石川　山岸靜江

達摩大師にも、足の立ちそうな、此の長閑けき春の日を、君には如何で沈ませ給ふぞ、何故瞼を櫻色ならで

涙の色には染めさせ給ふぞ、妾を悲觀的と、笑ひ給ひしは君にて候はずや、菫を髪に挿し、星を歌ひ給ひしは君にて在せざりしか、實に中垣の隔もなく樂しき事も、憂き事も、語りあひつゝ、同胞の無き我身には、血を分けし姉妹も如何で斯くはと信じ居り候ものを、此の頃の御他所〳〵しき御振舞は如何に候ぞ、話し給はぬ御心苦さを、あらぬ方より洩れ承り、如何なれば、日頃より御孝心深き、御前樣にも似させ給はで、此の度の御良縁を否み給ふか、今一二年が程は、御勉學との、御心算の由、夫れも御尤の事に候へども、此の時を、過し給うて此れに勝れる御良縁の、果して後に、御座候や否や計り難く候へば、御兩親樣の、急ぎ給ふも、御理に御座候、何卒仰に從ひ給ひて、御子樣少なき御兩親樣に、一と日もとく、初孫の御顔、見せさせ給はんこそ、御孝養の一つには候はめ、世には清淨の、手弱女も、親の爲には、浮き川竹に身を沈むる、輩も候を、君よ忍びて、何卒速に御父母君に、慰安の御言葉を聞かせ給へや。

(評) 後半、雖到らざる所あるを惜む。

○離縁せむとするを聞いて

越前 佐野よしを

寒からぬ風に梅花飄々として散り、宛ら雪の如く、野邊の若葉將に綠せんとして、蝶未だ舞はず、金柳の糸もて亂髮結ひ野遊びせばやと心浮き立つ今日、御許樣初め皆々樣御機嫌よく入らせられ候か。

扨て御許樣の緣づかれ候てより早や八月餘りにも相成申し候、四海波靜かにと舞ひ納めたる高砂の尾上の松の相生の緣いや深く御暮しの事とのみ存じ居り候ものを、ほのかに承り侍れば御家內何となく圓からで角立つ事の少なからざる由驚き入り申し候、されど內輪の縺合など申すものは池の面の微波に御座候、成程姑御樣には萬づ人に勝れさせられ候事故未だ世馴れ給はざる(御無禮には候へ共)御身の總て御氣に入る由も無く只思を凝らして御仕へなさる可く今若し圓からぬ事共仰せ出でられては波いとゞ荒れ行き相生の松は有名無實と成り鴛鴦の契りも離れては又合ふ由もなく後に至りて悔ゆることあるべく候へば何分ならぬ堪忍せられて元よりも一入柔順になさるべく候、御立腹の廉も御座候半なれど騷ぎ立つ胸を打ち鎭められ御汲み取り下され度、何も心隔てぬ友垣の間とてかくは申上候まゝ何卒御心障りの所は幾重にも御ゆるし御願申上候。

かしこ

(評) 友をおもふの苦言。

○或る人より妻たるべき資格を問はれし返し

下總 初海棠女史

御手紙に意見認めよとのことなれば遠慮なく認め候。

第一、常識ある人。第二、美貌なる人。第三、教育ある人。第四、慈悲心ある人。第五、節制なる人。第六、勤勉なる人。第七、清潔なる人。

右七ヶ條のこと最要素に候。その中第一とすべきは常識にて、こは教へて學ぶべからず、學んで得べからず、自然に自得し、經驗によりて發明する外なく候。常識なきものは以下の六ヶ條有すとも妻たる資格なきものに候。事の過不及の患ひなかしむるは此の常識にて、官吏の妻、文士の妻、牧師の妻等、それ〳〵心得の相違あり、上流にありては上流に従ひ、下流に落ちては下流に和す、これ常識に富みたる良妻に候。美貌の人、――柳の姿雪の膚――美人――貌の美より寧ろ心の美まさるべく、されど醜悪なるは一考を要すべきことに候。たとひ夫は之に耐ふとも、醜婦自ら羞ぢ衆人稠坐の間に出づる事を好まず、交際上に一大不都合を來すやも知れず、恐るべきことに候。教育ある人、今日の如き文明の世の中には教育なくてはかなはざることに候。以下は拙筆にて説明の要なく讀んで字の如くに候。年齢は己れより四五才若きを要することに候。又體軀は丈夫なるを撰ぶべく、妻の弱きは一生の禍なるべく候。門閥地位富貴の人元より厭ふ所にはあらねど、妻たる資格上より曰はゞ其は少しも關係なく候。何も本尊様が大切に候。以上の資格には元より程度のある事にて勝れたる人には勝れたる人ならでは、ふさはしからず候。斯く申す妾は妻たるの資格なく、さらぬだに、勝れたる兄が妻として迎ふべき心配もなく候へども、撰擇する人の心配はいかに!!

先達御便に君江様を迎へらるべき由ほのめかされ候ひしが、彼の君は妾と共に高等女學校に在りし秀才の方にて、妻たる資格には一つも缺けず候間、御安心候て御迎へなさるべく、蛇足ながら申添へ候。

（評）常識の必要を説けるところ、やゝ新し。

○友の死を知らする文

下野　新井琴子

かゝる事告げ參らするは、餘りに罪深き業にて、涙にもろき君がみ胸に絶えせぬ傷を印する痛しさ、永久に知らせ參らせでやと思ひしも、いつかは知らる可き事と、勇氣を振ひ起してかくは――泣き給ひそと書きつくる妾も涙の中の人――君よ情なき事の起りて候ぞや――そは君にも妾にも親しき同窓の友多嘉子の君が身の上にて、彼の君のいたづきは兼て知り給ひけんも、今日此文を見給はんとは思ひかけざりし事に候はん、妾も書くべしとは思ひ掛けぬ事に候ひき――君よ多嘉子の君は敢果なくなり候ひ候、日影冷たき夕暮の窓の方を枕に、鮮紅の花の顔は石膏の女神のごと蒼白く、神々しくなり給ひて、常に妾が羨みし其黒髪に半面を

埋めしまい、君のみうつし繪を抱き、御兩親を左右に、妾の手を取り、花子樣に逢はて死ぬる口惜しさよと咽び入り給ひ、人々皆涙に暮れ候——多嘉子樣は死するまで君の御事をのたまひて居給ひぬ、夕月斜に、春風に誘れし幾片の櫻花散りしきて物さびしき夕暮を人々と別れて只一人遠き境に——妾はこの先書き續くるに忍びず、只み推察にまかすのみ、筆取るにもあまりに悲しく頭重く候へば、これにて筆擱き參せ候草々不一、

（評）哀悼の情、言外に溢る。

○都の友に

津市　元子

春の海!、そは餘りに美しう候ひき、まして、まして阿漕ヶ浦のそれは……。風もなく長閑なるきのふの日暖は、兄を促がして程近きこの浦へと、あくがれしにて候。はてもなう廣く〳〵續くこのうつくしき春の海のうちに、たゝへらるゝ詩の領!!!あゝ美なりしよ春の海!、平和なりしよこの海!、ま白き帆あげたる小さき舟は遠く、近く……暖かき春風をゆたかに孕ませつ、靜かに濃き藍色の水の面に浮び居り申候。その間を何鳥にや、白き〳〵鳥の、樂しげに飛び交ふ樣、唯々、畫のやうと申し候はんか。

川蒸滊（選外）鹿兒島　田上ちか子



サラ〳〵と、しづかに音して小波のよせ來ては、私の赤き緒すげたる厚き草履の先きを、そとぬらしゆく時唯何となく、ホヽと打ち笑まれて候。その小さき波の音は、さながら私の幽かに唱ふシルヴアー、ウエーヴスの唱にあはすやうにも、思はれて候。

あゝ、來ませり!來ませり!春の女神!!!かく、ひとり波ぎはに立ちて、限り無き想ひにあくがれ居る間に、いつか兄は小高き砂山の上にのぼりて、私のをかしげなるスタイル寫生せしとて、二三枚の紙きれ持ち來て、一寸見せては、直ちにかくすなど、相變らずの人惡には、困り切り申候。かくて二人、薄れ行く夕日の名殘、惜しみつゝ、家路をたどり申て候、今にも吸ひ込まれんとしつゝある榮ある夕日の光は、睦じき吾等二人の祝福を祈るかの如く、惜氣もなく、浴びせかけ居候。折柄、向ふの山のふもと、黄金色にほゝゑむ菜の花の間を、進み行く上りの列車は、戀しき君が住み居給へる地さしてかと、思へば何やらことづけたき心地のいたされて候。

その夜、例の私の覺束なき弓のはこびに、スウヰートホームの一曲を、やう〳〵に奏で申て候、兄のベースに私のソプラノにて……、父樣も私もいたく好みし

例のThere's no place like home ——の一節は、文様のお耳まできこえよとばかり、高く〳〵唱ひ申候、その夜、その時、君は何して居給ひしや、承り度候。何れ又々その中、田舍住ひの自慢話申上べく、都の賑やかなるお話も、いと面白く存じ候まゝ、折々はものしてたまへ。さらば君!!!

（評）少し厭味あらずや。

○都の友への返し　茨城　綿引はや子

（二巻四號佐久間芳子様の文を見て古郷の友に代り）

晩鐘淋しく花野を渡つて靜にくるゝ夕暮、あるは、有明月のおぼつかなくも花の梢に殘る曉に、獨りおばしまに立て東天にまたゝく星を懷かしむ日頃、雲井遙におくり給ひし玉章、うち開くからにたゞ嬉しくもまた泪ぐまれて候。

さて近頃旅の衣に寒むき都の風に、古郷を戀ひ給ふ御心の程思ひやられて候、はや一歳のむかし○○橋畔にたもとを別ちし時君が見返り勝に行きませし御姿……今もまた御父を拜しまゐらせては、そゞろ胸に浮ばれて覺えずも奇しき露の玉はこの窶れし頬を傳ひて候よ、さてもまたそれと共に妾が野心熱情のいや燃えに燃えて、今の境遇……はとてそは思ひはべれと思ひやみなんこと難く、たゞ理想希望てふものを妾が心に宿らしめ給ひし神をのみ恨み居り候。片田舍に諸大家の詩文よむ折も無之、たゞ都の友の音訪れと世に發刊せらるゝ文學雜誌が何によりの慰藉の友にて侍る、かねて御惠み給ひし「心の花」今は遂に竹柏會々員と迄なりてし、誌上に度々麗はしき玉作に接しては、なんとなく嬉しく月桂冠とやらを妾が頭上に頂く思ひせられて、はては古山の花月君の爲に香らむことゝ微笑れて候。

それともなく開けば都の空を望むなる、やれし窓押せばどんよりとしたる空、寂として死したるが如き大塊、たゞ微かに糢糊たる夜霧に傳ひ來る笛の音、耳をきゝたる妾が心よ、何時しかふはり〳〵と其の音に乘りて、はる〳〵都の君のあたりに飛ぶらむ心地せられて候よ。まづは取り止めもなき愚痴をのみ、さらばあゝさらば……。

（評）愚痴を聞いてくれるが親友なり。

○新婚旅行先より　山城　雪子

御心を籠められし數々の御祝の品々たまはり、笑ひますな、やがて御身も斯る事のある可きに……。式は一通り障りなく相すみ、其夜の終列車にて近江の客となり候。其夜高砂の島臺にかゝりし霞は笠置山の薄雲となり、翌る朝遲う起きて彥根の宿より見たる天主閣に春雨細う糸の如く、五位鷺は杉の梢に尾をしだれ申候。

晝過ぎの小止みに、比良の雲脚と湖の面ばかり眺めて大津に入り候に果して又雨垂れの音、京に入るまては晴れ得ぬかと思はれ候。明日は石山膳所瀬多唐崎も見て、三井の朝風に送られて疎水の船にて明後日あたりは、嵐山の花も見る可く、御住居も驚す可くと、先は。

（評）いやらしき節は削りたり。

○はがきだよりの返し（二卷二號上山千種子樣の作）

岩代　若草子

日毎に參り候てポチと大仲好のジョン事、朝の程よりチラとも影を見せ不申候故、ポチもいつになく淋しがり居り候まゝ、此方より御伺にもと存ぜし折柄…………お恨は時にてそよれ……さりとは御心の程同情に堪へず候。

＊　＊　＊　＊　＊

未だに歸らず候とか、お痛はしく候。ポチも昨日より頓に元氣消沈の態に候。今日は幸の日曜、俊雄は唯今ポチをつれて捜索に出掛け申候。夕刻迄には必ず吉左右齎らすべくと、これのみ心待に候。

＊　＊　＊　＊　＊

あはれ悲しき御知せに接し候もの哉、ポチも今すごすご歸り申候。言うて分る可きにはあらねど、事の大略語りきかせ候處、唯何となく打萎れて碌々食事も致さず候。痛はしく候。せめてもの慰藉にもと、白梅一枝ポチにもたせて、俊雄もてお悔みに遣はし申候。心あらばジョンにポチの心根知らせ度ものに御座候。

（評）ポチも定めてさびしいでせう。

○故鄕より都の兄を戒むる文

芝區　川島芳子

やゝ春めき候て、こち吹く風も長閑やかに、谷の戸出づる鶯の聲も、いと心地よく覺え候折柄、御兄上樣には彌ゝみ氣色麗しう渡らせられ候や、御伺ひ申上候。次に當地御母樣御始め私事も丈夫にて御兄上の御卒業を指折數へて樂しみ御待ち申居候御安心下され度候。

扨此度風の便りに面白からぬ兄上の御身の上、聞き及び候てより、なかなか心配にて夜の目も眠らず、ちゞに心を痛め居候。果して、事實や否やは存じ申さず候へども、近頃兄上には學校も折々御缺席遊ばし聞くも忌はしき女學生とやらの手を取りて彼方此方と、さまよひ御大切なる學業を疎かになし給ふ由驚き入申候。

のう兄上、夢なれば早く御覺し下され度まことならば即座に御改心下され度、手に手を合せて遙に御願ひ申上候。

かゝる事若し母上の御耳に達し候はゞ、如何ばかり、御心を煩はせ給ふや計り難く猶父君にも草葉の蔭にてさぞや御案じ遊ばす御事と存ぜられ候。亡き父上を冥途の、みちに迷はし年老い給へる母上に、御心配かけさせ給ふは子としての親不孝これに過ぎず候よ。

兄上樣御出京の際「我上京せし後は只管螢雪の苦をつみ、やがて月桂冠を頂きて歸鄕すべし」と仰せられしには、あらざるか。其の御言葉未だに妾は忘れ申さず候に、いかに迷の道とは申ながら、我が兄上の淺ましき御行、返す〴〵も恨めしく存じ候。

靑年老い安く學成り難し一寸の光陰かろんずべからずと申す事之れ有り候へば、いたづらに時を移し給はで一日も早く素志を御果し遊ばされ度、呉々も御願申上候、右の如きは申上候も生意氣らしく候へども、妾の狹き胸の苦しみ何卒御察しの上御免し下され度願ひ上候。

御兄上の御身の上承り候てより、常々面白き事も、そゞろ悲しく思はれ

候。小學校の躑躅桜の花に蝶の舞ひ狂ふさまを眺めても一入物案ぜられ、兄上在ます東都のみ空を打仰ぎ、淋しく〳〵暮し居候。妹、可愛と思召し給はらば、呉々も御政心の程祈りに祈り上候、

かしこ。

○舊師のもとへ

駿河　高野榮子

さても思へば先生とお別れ申しゝは早や二とせの昔となり終りぬ、先生の此地に在せし頃は、日々篤き教をうけ、情の露に浴せしかど、今は慈愛の御顔さへ拜する事も叶はず、只々御うつし系を手に取りて、つく〴〵と眺め入り、お玉章を繰り返し〳〵讀み居るのみに御座候。

別れは逢ふの初めとぞ昔の人は云ひ置けり……—と先生をお送り申す時に歌ひしかど、如何なりけん、我身には先生と逢ふ瀬の未だ廻り來らず、さあれ都にさへ上らばお目もじ致し、つく〴〵とお話し出來申すべきを、今は我身の我身ならで思ふに任せず、日々なつかしさ懿はしさ、思はぬ日とて無之候、思ひ出せば三年前、先生のお宅へ伺ひし折、待ちに待ちたる鶯の木傳ふ聲の梅が枝に鳴く音を聞きて筆染め候事も、又我家にて花見の宴の折に共にひきにし箏の音の耳に殘りて、昨日のやう思はれ申候、物事見るにつけ聞くにつけ思ひ出さぬ時はなく、昨夜も庭に出て山の端に霞に包まれ出てしおぼろ月、先生は今頃文讀み給ひてか、此月を何と思すらん、思ふ事影ともなりてさすなれば月に心をうつしてほしやなど妹と語り申候、風のふく日も、雨ふる夜半も、先生は今頃如何に在すらんと片時も忘るゝ時はこれなく、御無事との御玉章篋く毎に、うれし涙にくれ申候、殊に忘れ兼ぬる愛子樣如何に御暮し遊ばし候や、嘸々御成長の御事と陰乍ら喜び居り候、未だやう〳〵笑ひ初めさせ給ふ頃お別れ致せしかども、はや三ッにならせられ候、廻らぬ舌にて嘸や可愛く御話遊ばす事と思へば、塒へ返る夕烏、連り來る雁の聲を聞く毎に、我も飛行きお目にかゝり、抱き上げて、愛子樣私を知つてゝと申上げ度く、事にふれては思ひ出し、都の空のなつかしく、矢も楯もたまり不申候、申上たき事は濱の眞砂の數々つき申さず候へ共、餘りくど〳〵しう候へば、是にて筆とゞめ申候、春は時候の變り目、何卒御身お大切に遊ばさるやうくれ〴〵も祈り居り候、

かしこ。

○都の姉上に

美作　巴　子

大分暖くなりましたこと、姉樣は大層御機嫌でいらつしやつて？私も嬉しいこと。此頃は父さま、母樣、私も兄樣も、毎日機嫌よく學校に、通つてゝよ。玉雄は太田の芳ちやん處から頂いた兄樣と私の外に玉雄とで暮してゐます、玉雄は太田の芳ちやん處から頂いた、可愛い〳〵、小猫ですのよ、私學校から歸りますと、いつも玉雄と鬼ごつこして遊びますのよ、さうしますと文雄兄樣がいらつしやつて色色と御いぢめなさるのよ、玉雄に袋かぶせなどさせて、私其度毎に懲しくつて、母樣に申上ても一向御取上が有りませんし、私は口惜しくつてつて、「兄樣之から玉雄を、御いぢめなすつたら、きつと姉樣に云付ますよ」と申上ますとほんとに、御人が悪いては有りませんか「何姉さまに云付ると、そりや怖い子、榮ーちやんどーぞ、御汐るしよ」つて、……今しも御手紙書いて居りますと、何處からか、玉雄が參りまして、あの可愛い手で又しても、筆をたゝきますの、姉さま此處に付きました墨は、いゝいゝいゝいゝ即ち玉雄の紀念ですのよ、きつと此次の御便には、玉雄とわたしの寫し給を、御覧に入れます、さらば、御身を御大切に。

さよーなら。

○遠方なる友の病を訪ふ文

德島　多田秋月

久しく訪はざれば、いぬる日曜御宅の門をたゝき、御母上樣を驚かしてまつりしに、君にはさきつ頃より御心地すぐれさせ給はて、其地の病院へ入らせ給ひぬるよし承り、いみじう驚き入り侍りぬ、其後はいかに、少しは怠らせ給ひつるか、存ぜぬ事とて伺ひ奉らず、怠りの罪ゆるし給ひてよ、さても氣候の變り目にて病もおこりやすう侍り、殊に御身は旅の空におはせば、いかばかり御心細うおぼし給ふらんと推しはかりまつりてなん、妾も御枕邊ちかうまう上り、親しくみけしき伺ひまゐらせたう侍れども、はろかに隔りたる身の、いかさまにも心にまかせず、たゞ〳〵そなたの空のみ打ながめては案じわずらひ侍りぬ、さりながら御地は都の事とて、くすし看護婦なども、なか〳〵手練のもの侍るべければ、それを賴みとせさせ給ひて、御心强う持たれ、一日も早く、御病のおこたらせ給はん事を陰ながら祈り侍りぬ、別に御送り申しゝ紀行文集は、さる頃叔父より送られし物なれど、なか〳〵に面白ければ、御慰にもと御目にかけ侍れば、御目通り給らん事ひとへにねんじあげまつりてなん、先は御伺ひまで。

かしこ。

○友へ菊見にとて

栞しぐれ

朝の霜のおきまどはせる白菊、しのぎては操の高く、香りては姿け高く、さきごろより咲き出て申して候、庭は御承知の通り、さして廣しとは申されず候へども黄菊白菊とりまぜて、妾が丹精のものも、一わたり、香り居り候、花さきてより、君な御𥶡かし申さばやと今まで妾の園藝趣味、おしかくして居り候ひき。

一枝なりとも、よく咲きしものを、たをりて、君が文机にかをらさばやと、思ひ候ひぬれど、此朝霜を、おきし風情、一目なりとも、御目にかけたく、折るを惜しみて、君をのみまちはべり候。

いかに次の日、朝霜のとけざるまに、みくるまをまげたまはらずや。

まつものは妾のみには候はざるものを。

先は君がお賞め言葉のたまはりたくて、

かしこ。

○妹の及第せしを祝ふ

長野　島垣永子

此頃は追々春めきて、日一日と暖さ相加はり、誠に喜しよき時節と相成り候處、其許には恙なく日々勉學なし居られ候由、妾の身に取り何より喜ばしき事と存じ候。當方は父上初め皆健かにて、取り分け幼妹等は、丈夫過ぎる位なれば先づ〳〵安心成さる可く候、次に其許には此度の試驗には、目出度く及第なされ候由、妾初め皆々喜び居り候、されど此上共に、益々怠らず勉め勵み、來春は名譽ある卒業證書を攝り、故鄕に錦着て歸られん事を今より待ち居り候間、何卒其心算にて勉强なさるゝ樣偏ひに願ひ上げ候。未だ〳〵云ひたき事は濱の眞砂の數あれど、時節折柄の仕立にて忙しければ、これにて筆とめ申し候、先は及第祝ひかた〴〵思ふまゝをかくなん。

○友の許へ

兵庫　ふじ子

かれてより花咲かばおどろかし給はんよしのたまひしを、一すぢに待ち

わびまゐらせしに、先つ頃の書面にて野山のけしき一きは美しう、花も見頃となり侍りしに、そよとの風の御便りだにほの見せたまはぬはいかなる、御さはりの在してか、はた御心勝れさせ給はぬにあらずやと、日日御案じ申上候、君きまされば花も本意なかるべし、ましてあるじのわびしさかへす〴〵も御察したまはりて、させる事もおはせずば花のうつろはぬうちにいかで御思しめしたゝせ給ひてよ、折しも櫻花のひら〳〵と窓のうちにまひ入りしをせめてもの心やりに、一ひら二ひら、封じこめ候まゝ、妾が心汲ませ給ひてぜひ〳〵御車を、向けさせ給はん事一重にねんじあげ候。

かしこ。

明石（選外）



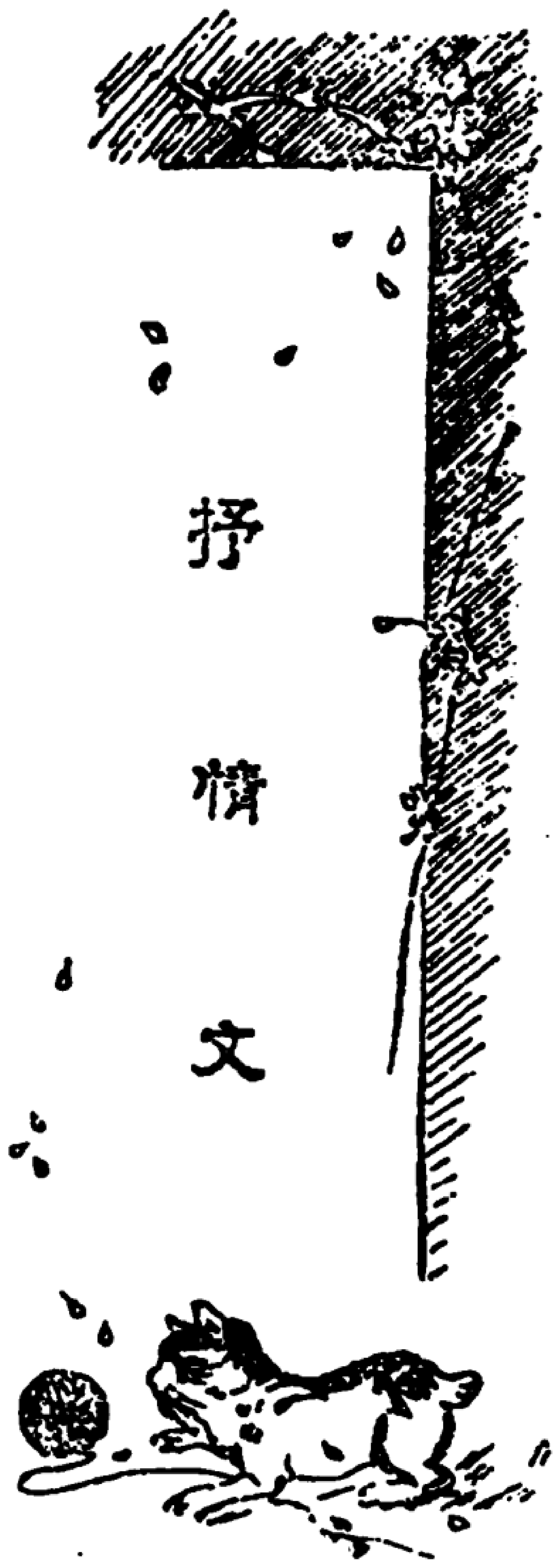
下總　川奈部孝子

○都の友へ返事

鳥取　ろーず

懐しき御手紙くり返し拜見いたし候。御許樣には、日々御健全に、御惠み深き神樣の、御翼の許に、御勉學の由、何より嬉しく存上候。御地は春の如く暖かなる由、何より御目出度存候、嘸かし土筆、菫も笑みそめしならんと御察し上候。當地は御存じの通り、日々雪に降りこめられ、心底よりうるさく相成候、さ候へども、學生、兵士は兎狩、雪合戰にて、面白き由に候、弟は相變らずの惡戯に候、目の黒き、だるまの製造に、一生懸命にて候、黒は（犬）友達の出來るをよろこび、頻に、高く吠え居候。

扨御寫眞たまはり、有難く嬉しく納候。花の顔月の眉とや申すべき、只々、濵山しうて。直に寫眞掛け編み、机上に、眺め居候。御返へしをとの事、如何してよろしきや、とまどひ候へども、先づは御笑ひ草迄に、何も〳〵之にて、御はん斷下され度、御校にて、自ら兎しゝハイカラ式部も今はあへなく、山陰の、百姓娘と相成候。爲念？には候へども、運命とあきらめ居候。何卒校友へ、秘め置き下され度願上候。明日野戰隊、凱旋に付、人夫やとひ、雪道あけに、掛かり居候て、非常に、いそがしき故、他は後便にて。



抒情文

文學士沼波瓊音先生選

秀逸

○夢日記　田中落椿

明治三十八年十一月六日

長き秋の夜も半ば過ぎて、寝られぬまゝにくさ／＼の思ひの種は胸に亂れつ、またしても熱き涙のあはれ色あらば紅深く袖や染めなん。病ある身の慰にと、姉が情けに活けられしコスモス一輪、あはれ悩みをもたぬ胸ならば、枕も夢も薫らんを、有明の淡き光を心なくゆらめくも魂かと見えてをのゝかれつ、堪へかねて眼閉づればまたしてもせまり來る君が俤……身はいつか寄るに馴れたる君が垣根に。驚きて見上ぐる彼方、高殿の欄干を脊にうつむきて文など見給ふ御後姿の、オゝ君、君、我今こゝにかくして君が垣根に煩悶に泣くと知ろしめさぬか。如何にせん柴の折戸の堅くして優しの御顔ばせ拜しまつらんよすがも無きを、只一目、あゝたゞ一目を延び上りつ、叫ばんに聲も出でず、力はつきて白萩の垣に倒れし家、刻一刻に露の命の絶えなんとしつ、アゝ君、君、と湧き迫る胸かき抱きて、我と苦しき身もだへにふと目醒めしはああ思ひ寝の夢なりし。今生にてはと思ひあきらめし御面影の、さりとはしみ／＼見上げ參らせざりしぞ口惜しき。

燈火消えて眞夜中の闇の臥戸、とぼそを洩れて忍び入る月の光は、只ひとつ枕邊の白き是を一としほ青白う照らしつゝ、あゝ此夜半、君は如何なる夢路辿らせ給ふ。今さらに、今更に戀しの君！

（評）物足らぬ心地す。

○池の夕　岐阜　川村つま子

いかにも心地よい夕暮でした、妾はお庭下駄のまゝ小池の岸のベンチに倚つて、夢心に美はしい夕雲を眺めてゐますと、何かチラとしましたので、よく見ると、あゝそれはあはれな蝶でした、いたでを負んだ蝶でした。思ふやうにもよう飛ばないで、次第／＼に下がつてきて、あゝあはれ、池に落ちてしまつた。

あゝ蝶！

そも何に害せられたのでせう、日毎／＼にあの美はし

い翅もて樂しく花訪れて遊んだものを、そして又この樂しい春を飾つてくれたものを。
あゝ今宵汝の母はどんなに待つてるだらう、汝の姉妹はいかにさがすであらう、明日を約してわかれた花野の菫もてよひはどんな夢を見るでせう……ふと氣付くと、いつかむかうの槇の木の間に涼しいお星が一ッ！
あゝあの蝶は最早あそこへ行つたのでせうか？（了）

（評）蝶の魂のみ住む星は、いかにやさしき世界なるらむ。

○お留守番　麻布　高島八重子

お座敷の時計が今十一時を打つた。ミシリミシリ階子段が鳴つた、と、天井のねずみが彼方へかけづり此方へかけづり大騷動、とたん屋根の上を猫が歩く音、惡戯者は是で漸やく靜まつたが今度は今の猫だらう呪つて居る樣な聲がする、厭だ！ぶる〳〵つと身體をふるはし、火鉢へかぢり付いて眼をつぶると小說で見た狂女の小指が生々しい血潮の着いた儘眼の前へぶら下る、天井から毛むくぢやらの大きな足が出る、噓、噓だ！いくら叫んでも出る、すると今度は赤十字社病院で見た手足の酒精づけ、赤坊が眞二ッにわれて松茸の樣な、骸骨、博物館のみいら、ぐる〳〵まはり燈籠の樣に次から次へと、噓だ！ぱつと眼を開くとお佛壇のお燈明がぼんやり、青白い、髮をおどろに、白衣の、足の無い女がスーと襖の陰へかくれた、キャッと言つて耳をふさいで俯向くとたん、八重ちやん今歸つたよ！ふら〳〵と立つて障子を明けたのも戶を開いたのも無我夢中、遠足に勞れた、ほてりだらけの身體に月を一ぱいあびた兄樣の首玉へいきなりかぢりついて……暫時して氣がつけば私は兄さまの胸へ顏を押しつけて泣いてたので有つた。
お可笑ければ笑つて頂戴、私はもう夜のお留守番ならいくら好い奇麗なリボンや簪を呉れても眞平御免！。

（評）あまり出る物が多すぎて却つて興味の減ずる心地す。

二見浦（選外）伊勢　間宮雅子



○風　香川　紫菫女史

風こそあやしきものにはありけれ。團扇にまねかるゝかと思へは柳の糸に姿をかくし、散る花にいとはるゝかと思へば尾花が袖にまねかるゝ。九重の雲深く通ひし

も、賤が軒端に吹きすさみ、藻鹽汲む海人が廂の袂になれしも、高殿の伊豫簾のひまより綾の袖に通ふ。うなゐ子のもて遊ぶ紙鳶のおもしろきも、みどり子のよろこぶ風車のをかしきもみなげに風の力なり。静かなる姿は一ひらの花にもたはむれ、おそろしき姿は天の八衢より吹き下して木をも、家をもたふさんばかりにすさびにすさびくるひにくるふ。夏の夕、軒端の風鈴に通ふ涼しき風は、冬の朝、雪にまじはるふゞきを司る風の神の同じ仕業とも見えず、春の朝、花の匂ひを送るやさしき風は、秋の暮、瑞穂をあらす野分を司る風の神の同じたしなみとも思はれじ。日の御旗を翻して、外國々の民草をなびきふせなむ東の風は面白く、旭に匂ふ山櫻花を吹きちらさなん西の風はおそろし、あはれ風の神よ、汝は何處より吹き來りて、いづちをさして去るらん。あはれ風の力よ、なれはいかにやさしく、いかにおそろしきか。まことや風ほどあやしきものはあらじかし。

（評）文とゝのひたり。

○袖が濱の一夜　　能登　新保雪枝

今宵うらぶれの妾は日頃の憂さを洗はゞやと、てゝ砂白き袖が濱に、清き波の音に心行く松吹く風を友として孤影を曳けるなり。

遠く海原眺むれば遙か水煙罩むところ、眠れる如き七つ島の形も朧に、かへり見れば、をちこちの山又山皆夜の幕深く包まれて、ひとり汀を洗ふ白波の音高く風微かなり、今し楫の歌面白く汀を出でし海士の漁火の影一ッ二ッ夢の如く、けぶる波路にぞ落ち行く。あゝ清光の袖が濱や見上れば雲散り瑠璃なす大空に三五の月静かに笑みて、そが清き光の八重の潮路に映じひとゝころ海波の、蜿蜒として銀蛇走り瀬々に砕け行く波の、いかに清きことよ、空には只月あり、地には只妾あり、妾は今此の神の御光の如く白銀とばかり輝く月の光を、身にあびて沖邊遙かに送り來る玉藻の香袂に止めとある磯馴松の陰をさ迷へば、誰がすさびにやあなた漁村のかたより、一韻の笛の音糸よりも細くいと微かに、とすれば岸打つ波にまぎるれど、調はいつか整ひつ、高く張上ては松の梢にむせぶ松風の音よりも高く、急ぐ時は石にせかるゝ流れの如く、忽ち低う流れては淺瀬を渡る水のごと吹きこむる笛の主やたれ曲は羽衣のそれかあらぬか、あまりやさしき笛の音に妾は眼をとぢ静かに耳かたむけば、美音ひとり天になり靈韻ひとり地にひゞき、妾が耳茫とし魂はしばし夢現の中にさまよふ、あゝ床しくもやさしき笛の主やたれ、自然を慕む神の子か、はた限りあらぬ自然の美

に憧るゝ詩の子か、あゝやさしくもなつかしき笛の音、月の宮居に通じてか月は冴えに冴えたり。
あまりやさしき笛の音に妾は歩を音するかれに進めしに、あなうたて曲は今、夕野にさまよふ鐘の音の如く絶えつ續きつ、細き〳〵餘音を名殘りに汀にむせぶ波の音に、いつか絶えたり。
妾は夢より醒たる心地して、耳そばだつれど音なく夜や更けぬらし、闇のとばり深くたれて風全く死して、ひとり千古に絶えぬ袖が濱の、汀にむせぶ潮の音高かりき。
（評）いかなる人のすさびなりけむ。

○故國と別るゝ記　丹波　大石塘郎子

紫匂ふ林の麓、我は故國を旅立ん身の、せめては昔の思ひを追想して、涙の極り泣かばやと瓢乎としてそこゝと逍遙ひつ。
思ひ出て多き地や。
谷山深き里なればあはれ年頃の友とてなく、只自然を友に月の夕花の晨を訪れ拾有八年の今倘かくの如きことをくりかへし卷き返して居るなりき。
忘れはせじよ！
先月の月末天地に二人となき父上ふとせし病なりとて油斷の結果、惡魔は遂に千代かけて健かに居ませと願ふ子あるを思はで其命を奪ひぬ、あはれ儚きは人の運命なるかな。
いまはの際、何卒學をおさめて家名を擧げよとの一言、細り行く息の元に苦るしげなる聲にての給ひしが……。我胸はきつく感じぬ、さらぬだに燃えしきる青春の血潮は燃え〳〵て、今よし逆境の巷に立つも蛟龍いつ迄も池中に住まんやとさてこそ旅立すべく東都の道につかむとはす也。
夕嵐はやゝ荒れて、去年の落葉を拂ひぬ。
いつしかに林の一角に來りて、そこよりは目路はるかに殘照の白亜に映れるを見ぬ。
さらば我や我が家に歸らむかな。小丘や松原や夕照の色や、今がわかれぞおゝさらば、やがて又我が錦をきて故山の影をふむの時、老いず朽ちず今の姿にて我を迎へよかし、まづ其迄は父母の奥津城をまもり、倘し我が在所をたづぬるなれば、たゞ松風の音に聞け、血に啼くてふ蜀魂にことづけよ、あゝ我は行く！
（評）なほ練熟を要す。

○滿ちくる潮　備後　まつ子

晴るれば手にとる如き鶴ヶ羽岬より翠松戴く沖の小島神島あたりまで、遠く霞の裡に眠れるがごと、碧瑠璃の如き漫々たる海づら吹きくる風もいとうらゝかにて

流石に春の盃よと眺めたりしは昔のうち。萬づ、在天の神の御手にのみありて、さゝやかなる身には解くべからずと聞きし世なれば、かこたじと己れにも人にも誓ひて重ねし春も五つ、さながら百年の心地して胸今はりさけむばかり。臆今扶ぐらるゝやうにて……！

噫、兄様、今はいづこに御座しますぞや……

哀、兄様よ！　あの、丁度妾が十三の年の此の頃にて候ひけむ、こゝの櫻のかくなほ咲き揃はざりける折り「大瀛の水饒かる南岸を洗ふ其の鏗鏘澎湃の音は是れぞ眞に我が帝國の勃興を祝し海帝國の偉大を讃美するの聲なり、予はしばし心秘めて企つる所あれば四年の間は音絶ゆるともいたくな咎めぞ常に願ひしが如くに只御身自らを清く磨きて待たれよかし」と、厳かに和けき御言の葉を給はりし時は、さまでも深うは感ぜざりしかど、今は既に、五年を經ぬる其の間には、吁、御免しあそばせよ。己が力の足らざりしか己が手の届かざりしにも候はむ、頼みに頼みしォー……あの御母上様には妾をのみ殘してあへなくも……逝かせまし候ぞや！　思ひ出づるも、あたらしく口惜しきに、この妹この孤獨、わびしう迷ひのうちには一年にもあまりぬるものを。

今はいづこの濱に勤めさせ候にや、いづちの海に勤ませ給ふにや、北にと歸る雁がねは幾度となく翅うち交して過ぎ行きつれど、未だに一端の御たよりもあらばこそ、せめて戀うてこの切なる思ひの御夢にだも通ひ得るものならば、かばかりも歎かざらめど。御聲も洩れぬこのをゝしき御寫繪朝な〳〵に拜しまゐらするにつけては皇國の爲とは知りつゝも、いづちいづこに何事を盡し給ふらむ永き〳〵年月の間。忘れてゐまさずば、健かにのみ御座しまさば心強くにまみえむその日、榮えあるその日を希望に充ちて待ちはべらむかな懐しい唯一人の兄様よ、わが思の御胸に映りもせば憐れとも思し召せ……　こと問はむすべさへわかず淋しくも、春をばよそに、やつれゆくか弱き腕には、世の大海にさして行へも白浪のよせてはかへす荒磯に吹く潮風いかばかり荒みくることあるともたゞ一すぢに、常盤に堅磐に立たむもの一もとの松を。

更くるにつれて滿ちくる潮の巖かみ白砂なむらむ浦々に、打ちよせ引き退く響きの絶えず聞こゆる其の刹那刹那に、眞やこの小さき胸はかきむしらるゝが如く！

（評）今少し文に強味欲し。

○噫丸

秋田　庄司錦子

過ぐる年外より移し植ゑし紅梅の、色香たゞならず床しう咲き笑みし頃、何處よりともなく哀れげなる幼き小犬の痛くやつれたる態して、妾が庭先へと來れるを、

可憐想なればとて食物など與ふるに、嬉しげに尾を振りつゝ瞬く暇に食ひ盡し、旋て樂しげに咲き匂ふ紅梅の邊りを驅廻り居たりき、彼は懷しき父戀しき母を失ひて寄邊なき身の、是よりたよるべき宿求めんと遠近に彷徨ひて、遂に玆に來つるなるべし。若し戀ひ慕ふ父母のありもせば、生れて間もなき彼の必らずや其許に行くべかりしを、十日二十日一月二月彼は遂に我家を去らでありき。夫よりは我家の飼犬として朝夕慈しみ、物の本に見えし翁丸とも言はて、ただ丸とこそ呼びしが。其後庭の紅梅は五年の春を迎へて咲きぬ、此間に於ける彼は唯さへ懷きて可愛く、學び舍への行くさ歸へるさの送迎一日として怠りし事もなく、今は彼界隈切つての寵犬とはなりぬ。

然るを東風吹く今宵、脊戸の物置小舍にて苦しげにうめく聲すれば、如何にせしと胸先づ轟き、まーるまーると呼び立つれど、更に姿を見せず、母上の話によれば晝の間小牛の如き白犬黒犬三四斗りにて、既に胎める彼を散々に苛めしとか、偖こそと燈火かゝげて行き見るに、悲しみを訴ふるが如き其顏……おゝ丸や妾の居ぬ間に苛酷の憂目に逢ひしとや、傷手にても負ひしか、さぞ口惜しき事なりしならんに、夫れ是なりと敷いて今宵は玆に疲勞を休めて安き寐に就きね、と莚厚く敷き與へ、明朝を約してさらばをすれば、謝する意か、腸を搾れる如き彼の一聲長く、ぞつと斗り身に泌みて覺えき。

よべは安き寐りも得せず、朝夙く起き出でゝ、心せくまゝに外より丸！丸!! 丸つ!!! 内は寂としてなほ音だになし。道理なり、彼は昨宵の儘にて、庭の紅梅散り敷くけさを、あゝ永久に永久にさめてありき。

あれあれ何も知りまさぬお隣りの勇ちやんが、しきりにお呼びなさること……噫丸は已に既に逝きて再とかへらぬものを……

（評）うつくしき人の情なるかな。



欧本賓（選外）下総　藤崎美奈子

○思ひ出の半日　因幡　みどり子

さらでだに乾く間もなき我が袖をぬらし添へんとや、かきくらし降る春雨の景色わびしく、奥庭に淋しく笑める海棠は、妹が優しき俤にも似て一しほ思ひ出の種ぞかし。かねて好みし花なれば、せめて亡き魂に手向けましと、枝ぶりよきを折り取りつ。小雨やまねど程

遠からぬ奥津城さして出て行く。あはれ、彼處の野邊は去年の夏、可愛らしき妹と手を携へて女郎花摘みつゝ、入相の鐘に驚かされて歸りし事もありつるに、山は緑に水清く、やがて來ん夏は女郎花も咲くべく、櫟は昔に變らぬを、今は我れたゞ一人、はかなく此處を過るなり。思ひまはしつゝ行く程に、何時しか身は奥つきの前に在り。若葉しげりて小暗く物凄き心地すれど、永久に眠れる妹を護るにかと思へば、なか／＼に懐かしくて、持ち來し花をば挿しそへぬ。

あはれ優しの妹、懐かしの房子、汝は我が唯一の慰藉者にぞありし。四年の間淋しき寄宿舎の夜半の思ひは、先づ汝が許にのみ通ひて、愛らしの俤を偲ばぬ時とては更になく、春夏冬の休みには、遠き前より待ちわびて、土産とゝのへ歸るにも、汝が可愛き笑顔を見るをこよなき樂しみとはなしつるに、今や莟の枝折り得て嬉しく歸りし故郷に、汝が可愛き姿はあらで、冷けき一片の石と化したるこそ、返す／＼も恨みなれ。

心清く美はしかりし妹は、必ずや愛深き神の御膝下に召されて、樂しき日を送るならむ。さはれ／＼我にこの温き血ある間はいかで／＼忘れ得べき。

思ひ出ていは思ひ入り、胸は迫りて張り裂けんばかり、春雨ならぬ熱き雫のはら／＼と手向けの水に滴りつ。何時までも名殘りはつきじ。されど／＼日は傾きて闇の迫れば、さらば、また來ん休みには……と、別れを惜みて立ちあがり、見返りがちにとぼ／＼と歸れば、山の端近うかゝりたる四月六日の朧ろの月は、淡き淡き影を地に印しつゝ我を送りぬ。

（評）盡きぬうらみは香の烟と長かるべし。

○花の夜

筑前　花田翠波子

蘭燈

春雨しと／＼と櫻に注ぎ、微かなる呼き、花神の祕言の其れなるか、花の氣漫にゆれて夜はいたく更けぬ。今し、姫君のかなづる琴の音は止みぬ、きらびやかにして見るも眩き金屛の、吉野の山の花盛り、溢れんばかりに畫かれたるが、引きめくらされて、其れにうつらふ白銀の蘭燈、影鮮かに一間を照しぬ。美くしき姫は纖手にさら／＼と、床しうも歌筆細く染められたる短冊、文箱の奥深く祕め、寵愛の侍女を招きて、何事をか暫し呼かれぬ。玉水の音、樓をめぐりて、寂たる夜はいよ／＼更け行きぬ。

笛の音

月おぼろに空に匂ふ一夜、漫ろ興湧き、吾れは其處とも無く彷徨ひ出でぬ。夜目にも白く見ゆる彼方の山より、微かに洩れくる笛の音、其の調べのいかに妙なる。いつとなく森に近けば笛の音は礑と止みぬ。

落花の吹雪浴びながら、たゞ一人木の間をけ別入れば雪の様な白き衣着たる美くしの女、櫻の古木に腰打ち掛けてゐつ。

吾れの姿を見るより彼れは、彼方の山の奥深くわけ入りぬ

あゝ平和なる此の春の夜に、花の精の出でしならむか……？

（評）艷麗。

○不幸なる妾　岡山　松浦千里子

あゝ妾ほど不幸なるものは世にあるまじ、三とせの秋父に逝かれ、五とせの春母に旅立たれ、泣く〳〵祖母の慈愛深きみ手一つに育てられぬ。されど年經るに從ひ、亡きたらちねの戀しく、如何にせば懷かしき父母のみ膝に侍るを得んかなど思ひ偲ばれて、花笑ひ鳥歌ふ春もよそにきゝてすごし、龍田の姫が織りなせる紅葉の錦も心樂しからず、玲瓏たる月も憂鬱を慰むるに足らず、空しく悲嘆を增すのみ。如何なる悲痛懊惱も語るに友なき妾は、獨り小さき胸に收めて、天を仰ぎ、己が不幸をかこち、世の無情を訴ふるのみなりき。

過ぐる日岡山山陽女學校の生徒松岡千代子の君が悲慘なる最後は傳へられぬ、程へて二月三日惱める少女と題して己が境遇を表はしたる作を見たり。

あゝ妾の彼の君の如く世のつれなさを知りては、いとど世を厭ふなり、徒らに生き長らへて憂きことと見んよりは彼の女の如く世を去りなんか、……されど如何せん十年の長き月日を撫で育ち給ひける白髮の祖母の在ませるを……妾もし死せんか、祖母をば養ふ人のありや？

あゝ天はなどて妾をばかくも苦しむるよ、思へば彼の君の羨ましくもあるよ、最早や彼の君は浮世の苦痛を免かれたり……

＊　＊　＊　＊

あゝ妾は年月を經るほど運命の神に弄ばれ厭世の思ひは募るのみ、果ては如何になり行くならん？

あゝ妾は此の憂愁の境を脫して淸らかなる暖かき光に接する事の出來得ざるか、……あゝ妾は遂に煩悶の中に死せんとするか。

（評）さりとては餘りに意志の弱きに過ぎずや。

○可愛い子　神田　尾加みち子

可愛い事たとへ樣もない天使とも云ふべき子を見て夢の樣な思ひをしたのは去る二月四日の日曜日であつた此の日天氣晴朗一つの雲も見えず散歩乍ら足を向けたは湯島天神でありました。

石段の上よりはるか下を見下せば如何にも可愛らしく如何にも美しき一人の子は四五歳ならんか、又一人の方は一歲も年上ならんかと思ふ女の子、二人共紫色の被布を着、如何にも無邪氣なる有樣にて話し居たるを聞くに。

年下の子が年上の子に向ひ
「チードツテ、オンマハヨッチ（四ツの事）アンヨガ、アユノ
年上「オンマダカヤ、ヨッチ　アンヨガ　アユンダワ
年下「チヨウ：：
スルト年上ノ子ガ石段の石ヲイヂリ乍ラ
「チーイチ（石の事）ハドッテ　カタインダローチ
年下「イチ　ダカラカタインダワ
年上「チヨウ……
と楓の様な手をしやぶり乍ら舌の廻らぬ口で話して居る其の可愛らしさいぢらしさ、たとえ様も無い程嗚呼此れらが實に天使とでも云ふのかと思はず見つめて居ましたが拾貳時のドンに氣が付いて歸宅せんとして再び下を見ますと今迄居た貳人の子供は何時の間にか見えなく、なつて終ひました。アヽ實に可愛い子だつた、まるで夢の様だとおもひました。

（評）無邪氣なる問答、人をして思はず微笑をもらさしむ。

○秋の雫

越後　文子

わらは、物學びする爲め、慈愛深き、父母の膝下を、離れ、此地にうつりてより、一年、四方の眺め、季候など、心にかなはぬとにはあらねど、一日として、思ひの夢路、故郷を忍ばぬ日はない。

此間父君より、慰みにと送つて下された、葉蘭、窓下に、綠の廣い葉が、幾つも重なり合つて、濃い陰翳を作つてゐる、中から名も知らないが、薄紅色の、極めて、詩的な花が、一つぬけ出て、愛らしく咲いて居る、窓外の砂丘には、小羊のなき聲が聞える、其小山には、風の吹く日も、雨の降る日も、朝起き出て、窓をおせば、眼に映る楓一本、今は眞紅に、染めなされて、故郷の庭を忍ばするのである、見渡す限り、秋の大空は、心ゆくばかり、鳶の鳴く聲が、うらゝに耳に澄んで聞える、そよ〳〵と、袂をはらう風は、謂ふばかりなうすが〳〵しい。

間もなく、少し隔りた、小學校からは、風琴の音が聞えた、あゝ音樂か、一つ聞かうと、耳をすまして居ると、風琴の音につれて、節悲しく。

夕空はれて、秋風吹き、月影おちて、鈴虫なく、思へば遠し、故郷の空、噫吾父母如何に、おはす、聲は、たしか、一二學年生らしい、心弱くてはなど、思へる吾れも、今まのあたり、十二三の、情にもろい少女等が、歌を聞いては、どうして、無心になつて居られう、續いて起る、風琴の音につれて。

落ち行く水に秋萩たれ、玉なす露は、すゝきにみつ思へば似たり故郷の野邊、噫吾同胞如何に遊ぶ。

節は一層悲しうさえた、吾は此つぎを、聞くに堪へなかつたので、窓をとざして、そこ一雫、袖にうけた、

塀越の木立には、ばさ〳〵と、音がして、村雀が、ハット、立つて行つた。

（評）故郷を偲ぶあたり、今一息ありたし。

○行く水　周防　楓子

さゝやかなる銀の鈴振る如く、せゝらぎ優しきいさゝ川の夕ぐれ、そがせゝらぎのしばし玉と化せしとばかり、水底には影淡き新星二つ三つ瞬き初めぬ。

かつて幼かりし折、小石を拾ひては投げ、投げては拾ひ、その水煙り立てゝの音を、面白しともはた、怪しとも、小さき耳を傾けていぶかりしもこの小川なりき。そゞろ歩きの母が背に、涼しげの月影額に浴びて、わが罪なき小さき夢路に通ひしは、それよ、床しき青葉の香りを載せて流るゝ、この水の咡きなりけらし。

あゝ今、限りなき悲しみ迫る胸を抱いて、此の河畔に立つ時、熱き涙はわが双頬を傳はりて溢れぬ。美しきは水の心よ、小さき微笑みに頷きつゝ、わが涙をのせてさゝやきゆるう流れてぞ行く。



汐干狩（選外）石見　中限濱江

思へば幸薄きわが運命、慈しみ深き母がふところに、乳房含みて安らけき夢結びしも、僅かに三とせ、漸うに「母様よ」と呼ぶ頃ほひを、魔の手ははや母と子とが間を割きて、悲しき〳〵別れをこそ强ひしか。かくて十あまり二とせ、冷たき運命に苦しみ悶えつゝも、なほあくまで世にすねたるわれ、小さき胸に疊んで人にも漏らさず、唯この河畔に立つて、水に訴へ、涙を漏らしては、せめてもの慰藉となせるのみ。

あゝこの流れ、あゝこのせゝらぎ、十とせの昔、朝に夕に、この河畔に立ちて母が唯一の友たりしならむ、水よ、心あらばこの水底に今母が面影を映せ、幼きよりのわが友なるを、そがさゝやきに母が消息を漏らして、せめてはわれを慰めよかし。

あゝなつかしのわが母よ、聲を限りに泣き叫べばとて如何せむ、白雲隔つる三百里の地を……あゝ、水の色、水のさゝやき、十とせ昔のおもかげそのまゝに、月影寒く秋深き夜の野中をせゝらぎて、落葉のせてぞ流れゆく末はいづこ。

（評）母をおもふの情、寫し得て、感深し。

○水仙

石川手取かわ子

冬の日の花とふ花も數多あれど水仙、山茶花、梅の花などはその主もなるものなるべし、山茶花のあてやかに色こき、梅のけだかくかをりたかきともにめづべきものから、水仙の花こそまたことにめでたけれ、そのたをやかなる姿もて氷の中に匂ひ出づるさまは、烈女にもたとへつべくや、なほ葵水仙とかいへるがはげしき暑さにたへて、うるはしく咲きいづるは勇士のすがたとやいはまし、花は實なくばとて山吹はいにしへ人にしりぞけられ、花と實の兩つながら、いみじとて梅は多くもてはやさるれど、いたづらに實ありとも用なくば詮なかるべし、花あれば必ずみあるはさるべきことわりなれば、水仙とて實なきにはあらず、ただ世の人のいへる實の用なきのみにこそ、されど、雪霜にたへてこそこのめでたき色香は得たるなれ、いかでかつゆになやむ、山吹の色などとくらぶべき、わが、男しき軍人があるは骨をもさくもろこしの、雪風を冒し、あるは身を煎る臺灣の暑さにさらされつ、奇しき光りとたかきほまれを世にあげて、ゞ皇御國のためにつくしたるいさをのたかくりりしき、ことにこの花に似たりとやいはんか、げにもとふときつはものよ、げにもめでたきこの花よ、瓶にさしたる花のかをりゆかしきに心にうかぶまゝをそかくはしるしつ。

○一壯士

石川白峯ゆき子

殘月の影淡く、かすかに長白山の頂に懸かつて居る、北韓境土の寒さは又一層で、馬のたてがみにつく息の白く凍れるを見てもわかる、見渡すかぎり只杳として一つの眼をさへぎるものなく、たゞこゝかしこに點々列なれる夜營の天幕のみである、こゝに一人の壯士幕外に出て悵然天を仰ひて長大息して居る、そもそも今彼れは如何なる瞑想に耽つて居るのであらうか彼れは幼にして父を失ひ母に別れて、今年八十の祖父の手一つて育てられたので、鞠育慈養の大恩は、父母ならぬ父母に報ゆべき戀運を撈うて居つた。

彼れが出征の時は、かねてなき身と覺悟して、最後の別れは勇ましく告げたが、さて雨のあした風の夕、いつも女々しき涙にくれるのは、祖父の身の上を思ひ出すからで、兵士の本分は一時とても忘れた事のない彼れながら、かく祖父を思ひだしては時々泣くのである嗚呼なつかしき母國の天よ、そこに最愛なる老祖父の身の上を守らせ給へと誠心をこめた彼れの祈願は、風が吹いても雨が降りても、一日もやまなかつた。

味方の心配したる、九連城も難なく陷つて、異域の天に凱旋の宴は開かれた。

豪飲堂々牛飲馬食將士意氣壯なる折しもこゝに一悲報は傳へられた。こは、この一壯士が祖父を托して置いた母國の友人よりの凶報であつた！

○みどり野

[illegible]松原清子

○

滋露罩めたる廣野、朝風ゆるく香を送りて、涼しき調べの韻もらせる小川の沿路、芳紀は二八にやあらむ清き流れの水鏡に姿寫しつゝ、辿り行くなる乙女子、樂しき業を草苅の通ひか、雨になやめる海棠のそれならなくに、いとも優しき美くしき鄙振りの、赤き裳裾に風の孕みては、歴もあらはと臙へるを、纖手に輕くいなみて、滴たるばかりの麗しき花のかんばせや、笑靨を、深く手拭に包みしも床しくこそ見ゆれ、背に草籠負ひたるぞ、一とふしのやさしき趣きを添へて實にや浮世の塵にしまぬ、春の女神のかたみとばかり。

山と山との峽てさへも
住めば都よ花が咲く……

鶯の初音のそれか、さるにても此の清き唄の主やいづこ。

おゝそれよ、彼の優しき美しき乙女とや

それと知りては、今更に消えし唄の聲惜しまれて、今一とたびと耳傾むくれどかたむくれど、遠く響く鳩吹く聲のいと心なく聞ゆるのみ。

見送る乙女の影は痩せて〳〵。
日は麗かに、風凪りぬ。

○

天津女神が、名殘りの粧ひに、黄や、白や、紅や、紫やの彩り麗はしう染めたまひし裳裾も、やがて殘りなく褪せては、沸き夜の粧は靜かに靜

かに、野にも山にもたれなんとして、遠きひんがしの空には、早や夕星の生れて、幽かに輝きつゝあるを……さらば歸らむとてや、草刈鎌をおさめて、呼ぶにつれ來る小牛の背に、まぐさに滿ちたる目籠を負はせて、細き徑をそのまゝに戻るみやび男の眉まだ若く、姿優し。楡の樹蔭をめぐりて、ほのかに匂ふ姫百合の床しき薫りに誘はれて、あゆみや止めけむ、手綱弛みし小牛のそこゝに首さしよりつ。懐て腰より取り出だせし篠笛、もゆる想を唇に籠めて、一節高く……低く……。

暮色に包まれし中を深う流れて、野山はさゆらぐばかり。

あゝいかに平和なるよ、艸野のゆふべ。

○五月雨

丹波なみ子

青梅は、若葉蔭に肥えて、鶯の聲は夢の如くに消え、可愛げな童の二人三人、樹下に拾ふも見え初めぬ。昨日まで、十か十五よと數へし緋牡丹も宵よりの雨に散りぬ。芍藥も散りぬ。薔薇のみは、鏈にも庭の片隅に榮えて、池の汀には、菖蒲の花の時得顏に咲き出てぬ。おゝ五月雨は來れるなり。私が最愛の五月雨はそが齎める詩趣をもたらして來りぬ。されどあゝされど、いとしの母上は、いつも此の頃病みますなり、雨に濡ひし牡丹を枕元に生けまゐせらて、ひれもす夜もすがら、枕邊に侍しても猶ほ、母上の顏の日々に脊ざめ行くに、思ひに痛む此の頃、五月雨ときのならひを、まいてや、故郷遠くはなれて、獨り旅居にさすらふ身の、さらでだに、袖はしめりがちなるを、あゝ今宵の如き雨の夜は、一きは堪へ難き思ひぞする。

それよ、今宵のごと、細雨の蕭々と降る夜なりき。家の者は皆寢室に行きて、六疊の部屋には、病みて臥します母君と看守る私との二人、さびしき夜なりき。持病なればとは知れど、苦しみ給ふ樣みては胸をもゑぐらるゝ如、わけて其の夜は醫師の遲さ心堪せられき。今も得忘れじ、其の夜母上は、我が手をつと、とり給ひて『今度は快方覺束なからむ、もし我れのなくなりせば、父上と祖母君とによくつかへくれよ』と宣ひ給ふに、私は答ふる言葉もなくて唯聲たてゝ泣きぬ。私が泣き聲に驚きて、次の間の祖母君ゐざり來給ひ、いたく母上を叱り給へり。其の内に醫師の來りてみまゐらせぬ。樣子いかにとまたゝきもせで、見守り居し私は、醫師の『障りなしよき方なり』との言葉に、まづ胸なで下ろしぬ。やがて醫師も歸り、母上も間もなく寢入り給ひき。

蕭々たる雨の音と、蛙の音と、曉近くなりけん園城寺の鐘の音とをうつつ心に聞きたるなりき。

○雨の一日

京都　植木きく子

「さらば安樂壽院の方へ御車を向けて、かけはづすべしと仰せければ即ち牛をはづし西の方へおし向け奉ればたゞ御涙にむせばせ給ふよそほひのみぞ聞えけるこれを承る警固の武士共も皆鎧の袖をぞぬらしける」

今日はあまりつれづれなりし妾の又も幸なき身の行末なぞ打按じつゝ父上母上今なほいまざばやなど思ひつゝ用なきまゝの薄ぐらき臺所の片隅によりて保元物語りをよみつ申すも恐れ多けれど新院の一とたび保元の亂をさまりし後はこやの山玉の林にしろしめさせ玉ふ御身の世のみだれ惡臣雲の如くに起るとは云へ一天萬乘の君のもの淋しさ讃岐の國への御近流いともいたましうぞ覺ゆなるあゝ妾が身!!妾が身の上に悲しき夢の打つゞく其時にも此の新院の保元近流の條をよみて夫れとなく慰めつ父逝きぬ母逝きぬはらからとてはなく語るに友垣なき果敢き妾が身下婢になりて見しらぬ此家に來りて早やくも數日餘妾とても父ありし者の子母ありし者の人の子なり悲しき時は悲しかりされどつとめの身ぞ忍べぞとは父上御在世の砌りのたまひし御言なり早くも忘れたりしか、賤やしき女の甲斐なさぞ悲しきあゝ胸さしつまりて知らずしらず膝の上なる保元の卷にあつき涙のしたゝるを如何にせむハッと思ひて拭はむとする時誰ならむ奧の方より來たまふ音微かにしければいそぎて泪をぬぐひぬ。

○悲みの友へ

周防　寺内つき子

友よ泣くなかれ、涙を出すなかれ、

君の御涙やなげきは何處より來るや、又その不平や悲觀は何處より出づるものにや。

君の凡ては只々愛するものを失いし以來君は涙の人、悲しみの人となりしも、妾はそを信ずる能はず、されど事實は事實なりし、君にあらず古

今幾十年と東西とを論ぜずこの宇宙の眼より見たる一片の女の愛、男の愛の爲めに死せしもの、己れや人を害せしもの例少からず、彼の哲學云云と云ひて死せし人等もこの動機によれるのみ、畢竟君の如く愛を失ひしに過ぎざる也。

愛を失ひて泣き悲むは人間の至情也、本性也、されど君のその涙や悲みは僅少のものにて決して大なるものにあらざる也、彼の宗五郎やルーテルが如き涙にはあらざる也。

かくて君はこの樂園を暗より暗に入り終に何等のなす所なくして終らんとす、あゝ君よ眼を覺ませよ、眼を覺せよ!!自覺せよ。

宇宙は愛の活動にして天地の凡てのもの、又愛の活動也、妾か僻見もてすれば彼の山や水やら又妾を愛し且つ至大の教訓をふくめると信じて疑はず。

君よ眼より覺めて小さき愛を棄てゝ大なる愛に入れよ、君が愛せし者より尙よく君を愛し且つ大教訓を與へる事は宇宙凡ての物が愛の活動にあるにあらずや。

君が愛を失ふて泣くは神の恩愛にして如來の恩寵也、君はその涙より更に大なる淸き高遠なる愛の御國に入るゝとけ。

君よ泣くを止めよ悲觀するを止めよ、然して先づ天地や宇宙の凡ての物に感謝しつゝ心を樂天に持して行き給へ、人間の腐れし敗れし醜の愛より君はそれ以上の愛を抱合して行けよ。

かくて君は無我の大眞理に達し初めて君は神の如く如來の如くなる也、その敎衣の涙や悲觀やは君を笑ひつゝあり、君よ永き眠より覺めて自覺一番神や如來に達せよ。

○小川の邊

上野　佐藤靜江

靜けき春の夜、美しく輝く月を浮べさら／＼として、ゆるう／＼流るゝ小川のいかに平和なるよ、岸の柳は萌ゆる若芽に春の色を含み、流るゝ水にさからはぬもやさし。

一寸二寸萌え初めたる若草の綠の中にたんぽゝの月の光を浴びて黃金の色の白う見ゆるも奥床し、霞こめたる遠山は、ほんのりとして畫繪の其れにも似て、麓の梅林花既に散りて、高き香の匂ふ由もなし、近う人家の窓洩る燈火長うひきて井戸車の綱かすかに見ゆ。

おゝ思ひ起す去年の春、兄と共にこの小川の邊に彷徨ひつゝ昔話を聞き、あるは蝶を追ひ花をつみ若菜の籠にあふるゝも知らで遊びしことを、柳の枝を手折らんとて、かざせしリボンを流れに落し、行く水と共に流れ去りしこともありき、手折し柳を床に活けて病める母に見せまゐらせしに、そを賞め給ふ、嬉しげなるその面、思ふもいと懷し、活けし柳の芽もあはれしほれ果てしに春もくれの六月、櫻散る夕べ、母は遂に亡き人の數に入り給ひぬ、あゝ、悲しき限りの其の折、思ふも涙しかも夕べの露未だ乾かぬに、なつかしき兄は征露の軍に召されやがて滿洲の野に出て立ち給ひぬ其れより妾もかなしき思ひを忍び、雄々しき心をもて戰の庭の兄の心を慰め、只管兄の無事を祈りし甲斐もなう、二〇三高地とやらの戰ひに、あはれ、譽れの花と散りしてふ知らせは來りぬ、悲しさ、口惜しさ、妾は神を怨みぬ、佛を怒りぬ、あゝ人生の無情なる、浮世の情なさ世を恨み、人を恨み、我が身を恨み、朝に夕べに涙の種のつきせぬかなしさ。

春は再び來りぬ、今宵この小川の邊にさまよう妾の心リボン流しゝ小川はさら／＼として永久に流れ、手折し柳は今年も匂へり、綠の草、霞む遠山、香る梅林、一つとして春はかはりなきに、妾のみ今年の春のいかてかなしき事よ。

○亡き靜江孃を想ふ

加賀　魚住ゆき子

隙行く駒の足はやみ、今年の冬もいつしかすぎて、春風徐ろに櫻の花薰ろの頃とはなりぬ、親しき友、靜江孃のみまかり給ひしは、昨日の如く覺ゆるに、早や百日あまりになりぬ。つく／＼とありし昔を偲べば、孃がやさしき姿は、さながらまのあたりに見えて、いよゝなつかしさのまさるになむ、あゝ孃の靈は既に空にかへり、孃のかばねは地に入れども、孃を思ふ妾の心は、雨につけ風につけ、とこしなへに消へざるなり。

思へば三とせの昔なりき、靜江孃は女子大學に入學のため、東都に上らるゝこととはなりぬ。

東都に上られてより後も、二人の間は文の行きかひ絶ゆることなく、花の晨、雨の夕、思ふことしあれば、書きしるしてなむ送りける、中にも白山の櫻、天狗橋の月、孃を待つこと久しとは、常に妾の文の始めの句

にして、願くば其花に戯れ、其月に醉はなんとは、孃が玉章の終りの言葉なりき、あわれ花は年々咲くものを、月はよな〱照るものを、思ひきや契りし人のつれなくも、歸らぬ旅に出で給はんとは。

あゝ、かくとだに知りもせば、告ぐべきことの多かりしものを、聞くべきこともありしならんに、孃が臨終の際にあらざりしこそ、姿がつきぬ憾みなれ。

山川遠く隔たりて、柩を送ることだにかなはねば、たゞ、弔ひの言葉のみ送りぬ、あはれ、其言葉こそつたなけれ、一字一句、皆、涙の雫なりしことを、孃は知れりや、いかに。

孃の心はまことに、氣高く、優しく、其姿はまた美しかりき、かく優しく美しき孃は、今、何處にかある。

月惜の峰や、手取河畔の、あかねながめは昔にかはらぬものを、嗚呼、思へば〱、げにあぢきなきは、浮世なるかな。

○孤兒　熊本　永野あや子

世に哀れなるもの實に少からずと雖も、孤兒程哀れなるものは又多しとせず、未來の良妻賢母或は敎育家政治家となり、社會に出てゝ進むべき人の、あたら不幸にして、父母を失ひ離れたよるべき者もなく、浮世の荒浪は白泡を吐いて一目渺茫たる海洋に漂へる破れ舟の、それにも似て、一場の夢だに快く過すことなく、語らんとしても語る友なく、一日の勞苦も慰むる者なし、噫々悲慘なるは孤兒の身なるよ。世には貧民救助の名義にて幾多の孤兒院あり或は慈善家ありて、是等の子等を救ひつゝあるも、眞の慈善家眞の孤兒院、そも幾何ぞ。空朗かに晴れ渡りける春の日に數多の子等の晴れ衣を連れ遊べるさまの睦じげきを見ては如何に憂ひの、增すやらむ、深き望みは抱けるも、よるべなき身の如何にせむ、草間にすだく虫の音も、淸き涼しき滿月も、孤子の身には一しを哀れに見ゆるぞかし。

聖なる孤子よ、憐なる孤兒よ、神聖なる神は何故彼等をして苦悶の中にあらしむるのであらうか。



野良歸（選外）　北總　須藤武子

○あゝ四年　新潟　山井きよ子

日に月に進み行く大御代の惠の露に潤ひて數ならぬ我身の此學び屋に草つみ初めしは昨日とのみ思ひしを隙行く駒の足早くはやこゝに四年となり幾ばくもなくして發ある月の桂を手折らむとす豈愉快ならずや思ひかへせば其かみは人遠き片山里に日を送り何事もおぼつかなかりしを今は密に昔の我ならざる事を知るに至れるよそも此四年の月日師の君の御辛勞いかばかりなりしか、あはれ仰げどいや高き富士の根も棹させど底ゐも知らぬわだつみもいかてか此御恩の高く深きに及ぶべきあはれ何に譬へてか謝し奉らむいかにしてか報い奉らむあゝ嬉しさ滿つる我が胸に又哀愁ぞ浮ぶなるあゝ愛すべき此庭をあとに見て此年月朝な夕なに手をとりて樂しき時には共に樂しみうき時には共にうれひたりし情あふるゝ友だちと盡きせぬ名殘惜まむとする我等が身人こそ知らぬ白露の日毎におきまさる雙の袖あゝ我身の今の境遇よ嬉しとや云はむ悲しとや云はむあゝ我が友よ愚にしある己なれば互に睦びし其間にも互に思ひ容れずして跡なし事の爭ひに無念の涙に袖潤せし事もありしよゆるしてよ〱あゝ我友よ別れの涙を共に流し去りてよあはれ過ぎにし月日忍ぶれば東風吹く春は野べに出てゝあるは低く舞ひ遊ぶ蝴蝶を追ひて日の入るも知らず夏はローンテンスやフートボールに雌雄を爭ひ或は千鳥の聲を耳にしドードーとよせては返す白浪に足を洗はせ夕風に心の塵を拂はせながら貝拾ひ月に送られて歸途に就きし事もありき。秋は血をはくが如き紅葉をながめては龍田川の錦を思ひ或は團々鏡の如く玲瓏玉の如き月下に於て千草に集く虫の聲かすかによする白波の音を聞き望郷の念にえたへて思はず落淚せし事もありき冬は時ならぬ花の景色をめではやし或は埋火かきおこしありし昔を語りあひし事もありきち

あ其折よ〳〵今なほ我目前をはなれんともせず永くもがなと思ひつる寄宿舍生活も昨日の夢と消えぬるぞ悲しきや學びの庭に四年をば送りつれども思へば何事もおくれがちなる我身のふがひなさよあゝ師の君よゆるし給ひてよ師の君よ此後は只一すぢに心の駒に鞭ちて學びの海の沖へ沖へとこぎ出てんあゝ悲しきかな踰がれまがれも只ならぬ大船の豐けき御かげによれる我にをりむ我身には狂瀾怒濤のよせ來なむ悲雲胸中にたな引き陰雨煩を傷ふ時なきにしもあらじあゝ其折を朝に夕にさとし給ひし御敎へを棹ともたのみて松の操を守らんかしあはれかなたの岸につかむはいつなるか待ち給ひてよ師の君よ其折をあゝ西哲云へり艱難汝を玉にすと我れ又思ふ梅花もし氷霜の難をおかさずばいかでか百花の魁とめてらるゝを得むや人生の事又この如きのみたゆまずうまず勉めなむ然り然りと自ら問ひ自ら答ふれば萬感胸間に湧くされどもとより我れ文章の才ならずれば思ふ事の萬分の一だにしるし得ず口惜しやあゝ……。

○殘りし人

名古屋　宮脇倹子

『死んだり川へ入たりしたら、ぢき判るとて御座いませうか。』とさも、心元無の沈んだ色。

傍の妹は種々と、何うして那樣、然らおからだがお弱いたつて、聞けばまだお年と云ひ、何うした所で假令石に噛り付ても自身一人の口なすゝぐに困るのなどと、それは餘りな御心配、あなたの一人息子といふからに、何が何ても那樣無分別なとは、などゝ頻りに慰めて居る。

うちに葉書――返書の文も出來たので、『お婆さんお待せを、誠に無いゑ恥かしい……これて判れば可いんですが……。』云へばさも〳〵周章氣味の、勿體ない、と難有ふの百萬遍。

讀で聞かせて、と云ふからに、意味だけを、と『不束者の幾造儀、今度御厄介を願ふ事になつたと云つて寄越したものから、過る日豈と御近所を通つたので、たづねてみると其日は何かてお店御一同お留主とか、て直ぐお歸りへ、もしも今まだ幾造といふが御厄介になつて居るとしたら、葉書一本、私の奉公先へ寄越せと頼んて置たが傳へてくれたか未だに何の消息もなし、何うしましたやら心元なく、居るか居らぬか、お手數恐れ乍ら御一報願したく……。』

の主人宛への往復葉書に、婆さんべこ〳〵〳〵詫を述べた、昨夜の今朝。

あゝ、何としたはかなき命運ぞ。今年十九の春まだ淺きに、森田幾造――あゝその人の、職のはげしきにえ堪へぬわが身のかよわさ果敢なみ、堀川筋に身を投じて……

と而も其新紙は、名のみは長き遺書のうちに知るを得たるも、何れいかなる人の子ぞや、老たる母に罪を詫びて……。かたのごと假埋葬せり――といふに至るや思はず、他人事ならぬ堰き來る涙の、はら〳〵〳〵新紙の上は……。

○あはれ亡き友

茨城　今泉桂花子

妾は今亡き友の御露跡に立てるなり。

手にせるは其人の紀念の御文、かくぞ記されたる、

妾が友よ。妾が病は日に増し重り行くなり、最早永く此世にあらむも覺束なし、思ふ事の一も仕得せて世を去る妾をせめてはあはれとも見そなはし給へ、望みも絶えたり思おく事もなし

さらばよ友、別れまゐらせむ……

處々涙のあとさへにじみて、水莖のあともしどろに、あはれ此文。

妾が京に上りしは忘れもやらぬ十五の春、初めて其人と相見てしより何となう其面ざしの、故郷に殘りし姉君に似通ひ給ひたるに、他人とも思へず慕ひよれば、かの君も亦へだてなく打解け給ひて、春の旦の漫歩には忍が岡の花にあこがれ、秋は秋とて月につきせぬ語り草、よしや海原の水かれて不二の嶺一夜にくづるゝ時は來るとも、妾等二人はかくてありなむ、身を終ふる迄二人が交ひに變りはあらせじと、かたみに誓ひし言の葉もあだ。

痾はなどて逝き給へる。

見渡せば野末、山の端とりこめて、花の粧ひ鳥の囀りさなり、世は春なりけり。

おゝ、御墓にそひし櫻も散るよ、あはれやさしの花、汝もあはれは知りけるか。

敍事文



文學士沼波瓊音先生選

秀逸

○清夜　尾張　逍華女

今宵三五の月を慕ひて、いぶせき宿を立ち出でつ。朧に匂ふ花影をたよりつゝ、吹くとしもなき夜の風に誘はれて、そことしもなく憧れ行けば、わが足の歩みは、知らず〳〵村はづれなる小川の岸に止れるなりき。岸邊に咲きつゞく花影白う、うす絹に似たる霞まとひたる月は朧ろに匂ひて、夜の平和をさゝやく江の水に、ほろ〳〵と滾れ散る花片いくつ、微かに……雪の如く……その淸き眺め、さながらうす繪の具もて彩りたる繪絹にも似たり。下を流るゝ水も、秋ならばこがねの綾を水に描きて、一しほうるはしからんに、それさへうつらで、やゝましろくサラ〳〵と低き音たてゝ流れ行くのみ。

折しも誰が子にや稚な兒すかす子守歌の一ふし、森のあなたに聞えぬ。あはれ聲うるませてうたふいぢらしさ、絕えては續き續きては止み、靜かなる夜の空氣に波紋を傳へつ。脊負はるゝ人そは頑是なき稚兒ならむ、脊負ふ人そはいたいけなき罪知らぬうなゐ子ならむ。塵の浮世の荒波を露ほども知らぬいとしの子よ汝れの心裡はいかに淸からむ。汝れの行はいかに美しからむ。かの天上にかゝれる月の影、この小川にむせぶ水の畔のそれの如く、淸くはた美しからむ。脊負はれたる稚兒、そは無心に眠りて、その罪なき顏には尊き、月の光や照すらむ。

仰げば蒼空はいや高くして水の如く、朧に霞みし月も、み空に輝き渡りていよゝ冴えたり。眺めやる彼方、一面の麥は打ち寄する風に靡き、小川の流れは月の光に輝きて白く、農家の灯火の畑の間を飾れるも面白や。げに靜なるよこの夕、妾は歸らんとも覺えず、皎々たる光を仰ぎ見ては、心魂飄然として、いつしか月姬の御座近くさまよひつ。

姉さまと呼ぶ聲におどろきてふりかへれば、妹の妾を迎ひにとて來れるなりき。妾はいたくも夜の更けしに驚きて家路にと向ひぬ。道の邊の草の上には露一面におきて、そが上を蹈み行けば、惜しや、月影ほろ〳〵と滴り落ちぬ。

やがて家に入らんと、椽に上りて庭の方見やれば、樹影の黒きと月光の白きと、鹿の子まだらに地に滿ちて、月より流るゝ風の梢をわたれば、月光と樹影と相抱きて動き、白ゆらぎ、黒さゞめきて、われにもそゞろ人なつかしき思ぞ動くを、あはれ、葉蘭のさや／＼と、月に何をかさゝやける。

（評）筆つき望あり。

○寄宿舎の夜　大阪　杉田孤泉

消燈のベルがなつたので、ランプの火をブッと吹き消して冷めたい寢床の中にもぐり込むと、青白い月の光が寄宿舎の窓を通して室内は全て晝の樣、どこの室からか十時の時計が靜にボン／＼／＼となつた。

あゝ、今頃うちでは皆な何んなにして居られよう、お父樣やお母樣や兄樣や姉樣や妹などは必ず何時の樣に一緒にテーブルを圍んで話をなすつて居られるだらうが、きつと今頃は妾の噂もして居られよう。いや、けさ出した手紙が今頃着いて皆が讀んで居られるかも知れない、あゝ、あの事を聞いて下さるか知ら？

あゝ殆ど一年も見ないのだから、お父さまも大分變つて居られよう、お母樣も歩くのには杖がなくては、もういけないだらう、兄樣は何うだらう、姉樣は何うだらう、矢張り毎日御勉强なすつて居なさるのか知ら妹も隨分大きくなつたらうな。

こんなに、それからそれへと、おもひを運せて居ると、いつの間にやら目には涙が一ぱいにたまつて居る。

今や月は益冴えて寄宿舎ではあちらでも、こちらでも、鼾のこゑ。私は悲しいおもひが胸に迫つて、あはや聲を出して、お母さん、兄さんと叫ばうとした時、あちらから、舍監の靴の音、ガタリ／＼……。

（評）平凡の嫌なきにあらず。

○親燕　秋田　伊藤幻

——火事ッ、火事だ——ッ!!——

一日の業を終へつ、鳥は塒に、人は家に、獸類はその洞穴に歸りて、己がじゝ溫かき夢結ばんの折りに、生憎くやこの叫び聲!!!。

あゝ平和なる春の夜は、こゝに一の修羅場と變ぜんとするにや。

火事は、町はづれの一軒家なり、類燒のおそれなきはせめてもの幸とやいはむ。

生溫かき行春の晩風は、そよ／＼と吹き出てゝ、何の燃ゆる音ぞ？、バチリバチッ！、パチ／＼／＼ッ！。

毒蛇の舌にもたとへつべき紅かき炎焔は、ペロリ／＼天をも呑まんずる樣にて、凄まじなんどいふばかりなくて、家屋は、早や半ば燒けたり。

忽ち眼にとまりしは、軒端を、内に外に忙はしく飛び

歩く黒き物なり。そも何？、さきには、蝙蝠ならむと思ひしが、後に、燕なるをたしかめつ。されどあゝ、此の燕は狂せるなり。

さきに彼れは、此の屋の軒に巣つくりぬ。——塵も積もれば山となるとか、日毎〳〵、小量の泥をその嘴にして、運ぶこと幾何ぞ、そも——。

かくて巣はなりぬ。巣の中には、間もなく五羽の雛を見たり。姦ましけれど、また可愛らしき雛よ。

親鳥となりぬる燕のよろこびや如何なりけむ、寝食を忘るゝまでも雛の養育につくしぬる親燕の喜びや……さるをあゝ、はかなき鳥の運命や、今宵此の家に、この火事はおこりぬ。

親燕は、其の巣を運び去るべく、翼も嘴もあまりに力弱く、一羽づゝ運び去らんには、其の雛等、あまりに幼し。死にもやせんのおそれあり。

さらば如何すべき、——とやせん？かくやせん？。あはれ、かくて彼れは遂に狂せるなり。

あれ、いぢらしの親燕は、いづちへ行きけん姿さへ見えて、家屋は、もろくも倒れたり。

顧れば、亭々たる松の梢に笑ふが如き一痕の朧月！。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

翌朝となりぬ。親燕のことの、なんとなう心にかゝりつ、焼け後に急ぎ行きて見れば、無殘や、親燕は、小さき翼に、五羽のわが愛雛を包み、あはれ煙にむせび炎焰に焼けたゞれて、愛兒もろとも、冷たき土に眠る客とはなりてありき。

折りしもしと〳〵と音もなく降り出でし行春の雨は、糸よりも細く、あゝ、花散ることと頻りなり。

（評）リーダーの趣あり。



春景色（選外）　埼玉　伊草りい子

○夏の夕まぐれ

和泉　辻林みどり子

夕陽は西にうつりぬ。こゝはいづこ、岸和田の海邊、汀に飛び交ふ鷗、翼ををさめて影もなく、たゞ聲幽かなり、遙かに春木村のほとりに、舟のぼすやらむ曳々の聲寂寞をやぶりて聞ゆ。夕ばえうつす茅汀の浦の、沖には漁の海人小舟が櫓聲遠く、夏の夕の涼風我裾に戯むれ、入日映ろふ淡

路島煙の如くにて、漸く涼しき此夕、われは此日一日の暑さ忘ればやとて玆に立ちぬ。汀に寄する波の音は戰敗のひゞくと聞え、さては自然を語かとも聞ゆるに、落暉西に沈んで、輕靄一帶海上をおほひぬと思ふまもなく、玉兎團々として東天に昇り、藍に染めたる海は、金波跳り銀浪碎け冷風徐にふきて爽快云ふばかりなし。やがて海上の船は一様に燈を點じて、海原に星の世界を作りぬ。羽倉崎の靑き松白き砂は、淸き月に照らされて影を水上にうつす所畵の如し。既に漁家に蚊遣火の煙繁く、入相の鐘の音は浦曲の波に響きわたりぬ。あゝ此景何ぞ詩趣の多きや。われは常に此景を訪はん。

（評）畵のやうなり。

〇生駒山遠足

大阪　はる子

明日はエドワード先生と生駒へ遠足するのである、聞けば山は今一面に白雪を以て蔽はれ、靑いものはたゞ小松の綠ばかり、地平線をぬく事五十八丁の頂上より望遠鏡で見おろすと、なつかしい浪華の都は、眞黑な、惡魔のやうな煤烟がうづまき上つて、丁度倫敦のそれのやうなとの事、あゝはやく其雄大な天地の新空氣を呼吸して見たいものである、それにしても、日本語つたらたつた左樣ならしか御存じない異人さんと、旅行する、定めしまだ生れてから毛色の變つた人を見たこともない田舍の人の、羨やましさうな顏をして妾を見つめることであらうなぞと樂しい中にもまたプライドに富んだ空想にふけり出すと、目はパッチリとさえかへるばかり、こんなのなら何も九時頃から床につく必要もなし、またいつも寢坊だからつて保子さんが貸して下さつた枕時計も何の功をも奏せんであらう、なぞと考へるうち、どうした拍子かついうと〳〵として、目が明いた時は、早や東目的地の生駒山上から太陽が燃ゆるやうな光をはなち、時計が七時をボンと打つた時であつた、ハッと驚いて、保子さんはと二階の室をのぞいて見ると、御自分は人に時計なぞお貸しなつたくせに、まだすや〳〵と樂しい夢を見ていらつしやるので、恨めしくもまた可笑しく、直にお起し申し上げて、辨當よ、朝飯よと賄の婆やをせき立てゝ居るうちにはや三十分經過してしまつた、八時の汽車と言ふに定めて待兼て居らつしやる事であらう、否時間を守ることに嚴い西洋人の前で、物笑ひになるやうな事をしては：と考へると氣も氣でなく、風俗や體裁をかへり見る場合でないので、仕度もそこ〳〵寄宿舍から十五町もある梅田のステーションまで、やゝもすれば後れ勝ちの保子さんをはげましながら一目散に驅けこむと、嬉しや列車は今ついたばかりまだ五分間あるとのこと、切符買ふ間もおど〳〵と、プラットホームを見渡すと、

いつも愛嬌のよいエドワード先生の相變らずニコ〳〵と笑つて居らつしやる、耻かしくもあり嬉しくもあり、あいさつもそこ〳〵列車の中へ驅けこむと直に汽笛がピー、

安心して自分を見かへると顔も身體も汗びつしより、あゝ一時間の後はどんな所で自然の大景に接し寛なる神に感謝の祈禱をさゝげて居る事であらうか。

(評) 少し厭味のあるを惜む。

○春の夢

靜岡 福井美智子

夜なべもすみて一日の稼業に疲れし妾、褥に就きて熟眠し、忽ち奇事を夢みたりき、只其始めを判然と覺えざるなり、偖、妾はいつしか立派なる婦人となりて高等小學の女教員となり、毎日掛川小學校に通へるなり時は三月上旬、もはや學校は定期試驗にて、數多の生徒は苦心し、教員は後に殘りてかにかくの用事あり、此頃妾等の歸るはいつも夕暮なり、妾は今日しも、いつもの如く一日の職務ををえて、家路さして急ぎぬ、生徒は皆先に歸りて、往來に絶間なき街道も、もはや夕暮となりいと寂しかりき、字上張より板澤の堺、ここには長さ二百間のトンチルあり、人家なく日は全く暮れ、邊りしんとして物寂しき此トンチルの入口迄來りし時、ぞつとする程冷たき風吹き來りぬ、駭きて傍を見れば、こは何事、天人の如き乙女佇み居れり、烏羽玉の髮、三日月形の眉、貌は桃花の如く、薔薇色の唇、鼻筋通りし人品賤しからざる貴女なりけり、されど其眼は異樣に輝き居れり、身には大縞の打掛やうの物を着、水晶の玉を首かけたり、妾は之を見て仰天せしが、彼女は一向無頓着なる微笑をたゝへ、妾に向ひて言ふやう「貴女、どうぞ妾の家へお寄り下さい妾の家は此山の上ですよ、家では御馳走して待つて居ります、サ妾と一緒にお出て下さい」妾は前後の事は打忘れ、それなら參りませうと言へば、彼女はいそ〳〵と先に立ちて歩む、凡そ二三丁も行きしと思ふ頃、あな不思議や、忽ち大なる御館のある所へ來りぬ、娘と共に内に入ればアラ美しや、家の柱や建物は皆黄金にて白晝よりも輝き居れり、やがて官女とも思しき數多の乙女等今迄見し事もなき立派なる珍膳持ち來れり妾に馳走するなり、妾は前後の事も打忘れ、件の馳走を矢鱈闇雲喰ひ始めたり、其美味なる事譬ふるに物なく、充分喰ひてもはや滿腹したりと思ふ頃、フト四方を見れば先の娘共は一人も居らず、四方を見しが燈火一點も無くして殿中は輝き居れり、妾は益々不思議に堪へず、燈火もなくて斯く輝くは何故ならむと、フト床の間を見れば其處には大なる金の寶玉ありて奇妙に光りを發し居れり、アヽ之が光りて輝くのかと妾は始めて思ひつき其玉をソツト持ち見れば、ブヨ〳〵として不思議に重き玉なり、時に忽ち横合より先の乙女走り來り仰天したる面もちにて妾に言ふやう「もし貴女、其

寶玉をお持ちなさると狐になりますよ、なぜお持ちなすつた」と言ふ故妾は大きに驚き、玉を床に置きしかど時既に遲かりき「御覽、あなた尾が出ましたよ。」と云ふ、妾は驚き後に手をやれば一尺も長き尾が生えたりき、彼の女は「ごらん、あなたの口は尖つて了つたに」妾は慌てゝ口に手をやれば、成程尖りて狐の如き髯生じたり、彼は重ねて「ごらん、あなたの體は毛だらけになりました。」成程妾の體には毛生じてはや四つん這ひならでは步む事叶はずなりぬ、妾はとんだ危相したりと大きに悲しみ泣きながら「一躰どうしたらよからう」と問へば、彼は得意氣に答へて「如何に泣くとも仕方がありませぬから、貴孃、豊川へお嫁入なさいませ、私が世話をして上るから。」妾は遂に詮すべなく、豊川稻荷へ嫁入する事となした。

話變りて妾家の父母は、日暮れて妾の歸らざるを大きに心配し、其處へ兼ねて母君は妾を尋ねに來て、丁度をりよく爰へ尋ね當りぬ、母君見給へば妾は茫々たる野山の穴ある所に、身は土にまぶれて倒れ伏し居りぬ母君いたく驚きて「まアみいちやん、何をしたの、狐に魅されたのかい」妾は此聲を聞き、むつくと起き直り、ぢつと母を尻目に睨みつけ「やあ母樣か、此所は立派な御殿ですよ、妾は狐になりましたから人間と交際は出來ませぬ、豊川樣へ參りますから父樣へ宜敷傳へて下され、さらばでござんす母樣、くはい〳〵〳〵、かいん〳〵」と言ひつゝ件の穴へ遮二無二這入りかゝるなり母樣悲しく妾を抱へて大聲はりあげ「豊川稻荷へ行くよりも、家にいなりにして下さい。」此聲の大なるに妾は駭きを、眼開き見れば、今迄ありし御殿は消え失せ、四方只闇黒なる寢所にて、身は汗に濡れ半身床の外に轉け出て、傍には父母の鼾高く聞ゆるのみ。

（評）宛然落語をきくが如し。

○可愛い弟　　神戸　櫻井眞佐子

「姉さん〳〵」とかけて來たのは尋常二年の今年八才になつた弟である、「アノネ姉さん僕組長になつたんだよそして頭の大い正雄さん副長になつたのよ」とさも嬉しげである、「ソウえらい事ネ」と云ふと「失敬なつ知れた事だ姉さん知らなかつたのかい」と不平を云ひながら「姉さん組長は組の者を、監督するのだネ」と心配そう「豊さん出來るの監督が」と云ふと豊一は決心したらしく愛らしい目をクル〳〵させて「ソリヤア出來るとも、先生だつて出來ると思ふから組長にしたのに決まつてるよ」と大變鼻が高い、私はあまりまじめで自慢を云ふものだから、可笑しくて〳〵仕方がないが笑ふと怒るから、無理に辛抱して居ると、突然「今日ネ先生が顏や容はどうでもいゝ心さへ正しくて賢かつたらいゝと云つて修身の時間に皆に云ひ聞かされたの」と何故か大變力を入れて話すのである、云ひ終ると思ひ出した樣に、草紙の代りに用ひたのであろう、黑い

黑い手を出して暖めて居る、暫すると外面の方で「ダーモンヂャお這入り、頭が大きいて這入られん、裏から廻つてお這入り、裏からまはつたらしかられる」と妙な節で歌ふのが聞える、何だらうと思ふて窓を開けると、弟が「オャッ」とさけんで走り出た、「コラッ皆そんな事を云ふと先生に云ふぞ、今日の修身のお話を忘れたのですか」と組長顔をして、戒しめながらしく／＼泣いて居る正雄を慰めて居る、私は正雄や其の父母の心中は何うだらう、あゝ可愛そうは氣の毒なと同情をよせると與に弟が可愛くて／＼仕方がない。

（評）　ませたる男の兒の口吻、かなりに寫し出されたれど、正雄の衆に嘲らるゝ所以、やゝ不自然。

丸やき屋　（選外）



静　戸　岡名部こま子

○或るひと夜

北海道　ひ　さ　子

妾が十三の年逐ひ昨年の事です或る町家にお奉公にでましたのよそこの家には妾しと同じ年の御嬢さんと十七になるお姉さんとたつた二人のお姉妹でそれはそれは仲のよいこと羨ましいくらゐでした。

御主人は極く温順しいお方で良くお世話をしておくれてしたそうしてお姉さんは妾しの上つてから間もなく東京へ御勉學においてになりましてあとはお嬢さんお一人毎日學校にお供をして歸つてからは毎晩のように先生からきいていらしつた修身のお話などきくのを一ばんの樂しみてくらしてをりました。

或るさむい晩のことでしたお仲よしのお嬢さんといつしよにお使て山の上丁のご親類の宅までまゐりまする

道すがら雪はちら／＼とふりはじめ風さへ加へて木枯物凄く都と違うて田舍道の電燈とやらもなく近所の家はみな戸を締めて道さへ知れず。にくらしい犬めがまた不意にワンワン。

お嬢さんは泣き出してほんとに妾し悲しくつてどうしようかしらと思ひましたよ。

漸くまあお使を果して急いで歸りましたがたいへんひまどりましたのでどんなお目玉を項戴するだらうかとぶる／＼恐れながら御主人の前に。

ただいまと挨拶も口の中。

あゝご苦勞／＼寒かつたてあらうとは優しい御主人のお言葉てあつた。

その時の嬉しかつたこと。

さむいもなんにも忘れて仕舞つた。

（評）眞情の現れるをとる。

○夢　　常陸　ゆき子

夢をうきものと云ふ人あらば否と答へん。進んゆく代の年月を昔にかへさむ爭夢ならていかにもとむべき。うつしゑ見れば亡き人のかたちありのまゝなれど相語らはむすべなく。汽車はやすく故里に通へども幼き昔にかへらむこと難し。然るに夢に。昔うせぬる人と相見つゝ互に今の事ども語らへどもうたがふ事もなく。故里の昔をさながらいとけなき友とすみれつみ胡蝶おひて遊べともあやしむ心なくて、世のうさも悲しさも暫し身をばはなれしむこそ現に知られぬ樂しさなりけれ。此の罪なくうきなき夢よ、冷き石の下の永き眠りにも見えてさめざるものならば、遊の臺も天つ御空の國も後の世の幸も願はざらまし、と思へど、行きにし人の夢物がたり聞きしことなければいかなるものにや、ず。

（評）叙事文としては、ふさはしからず。末段理窟に陷りて面白からず。

○日記の一節（八月廿五日）　岐阜　田中悦子

枕頭の燈火何時しか消え失せて窓もる月は西の端山に落ちんとして、星の影一つ二つ、折から簾をもてあそぶそよ風に誘はれて、風鈴の手に取る如く聞ゆるなんいとうれしき、久しく都の方に旅せし父君の、今日しも歸り來たまふべき報ありしかば、朝の程より座敷掃き清めて、床の花などさしかへつ、弟の玩弄物取り散らすに、箒とりしも二三度なりしよ、外面に車の音する度毎に走り出づれば、思はぬ方にすぎ行くもいと口惜し、やがて午后三時過ぐる頃、父君は御きげん美はしく歸り來ましぬ、弟には日頃好める軍艦の玩弄物、妾には色美はしきリボンのお土産賜はりぬ。あまりの暑さに日の西山に入らんとする頃、水打ちまかんと下女共の襷綾なし、勢よげに立ち振まふもいとをかし、やがて水まき終れば、庭の面は空に知られぬ夕立の名殘覺えて、萎みし草木は綠の色いやまして、時を得顔なるも嬉し、折りしも十五夜の月は綠の梢に高うかゝりて、庭の草木の葉毎に輝く露は、其光を宿して瑠璃の世界となりけるを、そよ吹く風の輕く梢を掃へば、ハラ〳〵と散りて玉とこぼる、折りしも泉水の鯉潑溂とはねれば銀鱗閃めきて映りし水の月は千々に碎けつ、父君は何時になく笑ましげに、月いと淸ければ月の宴開かばやとのたまひしかば、兄君姉君誘ひまつり、共に〳〵樂しき宴を開きぬ、軒端の伊豫簾高うかゝぐれば、庭の小立は一葉ごと露をおべるが、さやけき月の光にキラ〳〵とかゞやき、綠の色のとけて流れもやせん、折りしも聞ゆる妻琴の音は、如何なる人のすさびなるらん、月はイョ〳〵さえにさえて、節いと

床しく、曲はまがふ方なき小督の曲、嵯峨野の奥の古事ども思ひ出られていと床しければ、我もと古琴とり出てゝ奏づれは、あなにくや、月は雲間にかくれぬ、我が拙きふしをきくもうしとや。
かくてたのしく宴を終りしは亥の刻はがりになんありける。

（評）都の物語に時のうつるを知らず。

○是ぎり　　つ た な 子

お雪早く來て呉れ門が落かゝつて動かれぬと苦しげに仰るので、今熱心に縫うて居る花子（人形の名）の晴着も針もうち捨てゝ飛んで來て見ると、まあ呆れる程馬鹿らしい、兄様は小さな木切を背に載せて屈て居らしやる。ひどひわ兄様よい加減になさい、と怒て其あとは二人高笑。
夏休の或日お父様は近處の友人の圍碁のお相手、母様は坊を連てお醫者様、兄様と私はお留守番、一時間が例の勉强、兄様が例の惡口で高等一年女子部のヘボクチャと云はれしに憤り、三年男子部の惡戯小僧の集會と云ひ返したが始で、終には私の手は墨の傷だらけ覺て居らしやいと洗に出たはよけれど、池の金魚に見とれて居る内つひ思ひだしたは門の敵打、其とをかしさ忍て、足首計の淺い處へ片足入れて、兄様早く〳〵池へ落入ました、との大聲に裏に出て居れた隣の老母様、息急飛て來て、マア雪様云に事を欠て、と青いお顔、一足後て兄様は飛でお出なされ、狀見ろとお笑ひになる、母様もお歸になる今の次第を此々とお隣のお母様より母様に。
母様にお老母様にお詫を仰て、一寸お出と私をお座敷に、羊の番人と狼とのお話せられた、私は此後決してと心から不都合をお詫し、忘れぬ様にと日記帖に明かに今日の始末を。

（評）いたづらもよい加減になさいよ。

○日曜の一日　　彦根　藤田ふく子

朝起きし時は、雪かと思はれた今日の日曜も、午前になつてから空青々と澄み渡り、何處に一點の雲もない、うらゝかな日和となつた。
久々にて隣村の友を訪ふべく家を出た自分は、村外れの鎮守の社の廣前に來た時、恰度其處に毬つける少女の一群や、腕白盛りの男の子が五六人凧揚げして遊んでゐるのを見た。
「止さないか、よう道ちやん、己れのは破れてしまうよ」と見る、今年漸と九つの秋雄といふ大人しい小供の凧が高く大空に揚つてゐると、それよりも年長の道助といふ腕白者が秋雄の弱いのに乘じて、それが凧を破らうと企てゝ己が糸を秋雄のにからみ掛けるので。
「堪忍よ、どうぞだから道ちやん、あれ〳〵道ちやんてば、よう」

秋雄の嘆願を道助は何とも思はず。
「だつて、風の吹きやうで引つかゝるのだから、仕様が無いやい」
秋雄は最う泣出し相になつた、空には雀や何かゞ面白げに囀つて飛んでゐる、少女等が何かさゝやくやうに聞える。風は嫋々として眞綿のやうに頰に當り、日もぽか／＼として暖かい午下り頃、希望の光がみち／＼たる綠の野には、あゝ、一つの罪ない悲しみが起つた。
秋雄は泣いて願ひ、愁ひて願ひ、心の程をつくして願つたが、非道なる道助は馬耳東風て、我に平生親切をつくしてくれ——我に何一つ悪口を叩いたことのない——無垢なる少年——秋雄を、わが卑しき喜びの犧牲に供したのである。
秋雄が凧は、正しくかの憎むべき少年のために、糸を切られて鎭守の森の大銀杏樹の頂に掛けられた、そして秋雄を慰めるかのやうにゆらめいてゐる。
神前に並みゐた少女等は、手毬を止めて不審氣に秋雄に注目した、道助は功績でもしたやうに嘲笑つて、他の二三の少年と共にその邊を騒ぎまはつた、秋雄は名殘惜しげに凧を顧みつゝ歸つた、風はぬるく彼の頭上を拂ふ、その度毎に凧を見上げるのであつた。
廣前に遊べる女の子は、得意げに走る道助を見ても笑ひ、失意落膽、心細げに歩く秋雄を見ても笑つたあゝ神前に居る數多の少女等の眼には、只一滴の涙も無いのであらうか。
此時自分は非常な嫌厭の感に打たれて、そのまゝ友人の家をも訪れず歸つてしまつた、そして一日不愉快であつた。

(評) 筆者のやさしさを想ふ

○里の黄昏　　四谷　山中芳子

夕炊の烟ゆるやかに立上りて、あたりほの暗う、夕靄の靉びけば、森も野も家も畑も一面に白き綾の衣もて蔽はれたらんやうにて、霞を洩るゝ山寺の鐘の音、暮れゆく春の小川に、馬洗ひ終へて家路につく若き馬子の鄙唄も、刻一刻霞に消えゆきて、畑より歸る里人等は、何事をか笑ひさゞめきつゝ行き過ぎぬ。
青々せし麥畑の中央に、ぬつと現はれし六十路餘りの質朴らしき農夫は、後ろに體を少し反しつゝ、勞れしといふ風に、腰の邊りを叩きゐたりしが、後ろの方を振り返りて『ばあさんや、もうそろ／＼歸らうかな』傍目も振らずに、草取りゐたりし老婆は、溫和なる顔に樂しげなる笑を湛へて『今日は隨分骨を折つたから思つたよりも取れましたよ。おやだいぶ暗くなつて來た：：それではそろ／＼歸りましようか』二人は、腰に鎌をさして、畦へと出でぬ。
麥浪に連る、一面の菜畑に沿ひし細道を、樂しげに歸り行く老夫婦の影は、いつしか夕靄に包まれて、見え

ずなりぬ、友に遅れし一羽の鴉、バタ／＼羽搏しつゝ杉森の方に飛び行きぬ。夜の幕は早や、あたりを込めて木の間を洩るゝ灯の影そこには、今家に歸れる農夫等の、無邪氣の愛孫膝にして、嫁が心づくしの晩酌に、一日の勞苦を忘るゝなるべし。折しも、土橋の方にあたりて、馬の嘶く聲霞の中より聞えしかば、ふと見やるに駄賃取の作兵衛が町よりの歸るさなるべし、手綱鞍にあづけて、馬背にあり馬はなれし道とて自ら歩みつゝそもいつしか藪影に見えずなりぬ。夜の幕は早や、全く孤村を包みて、み空には、今さめ出でし星の二つ三つ、きら／＼として清く輝けるなり。嗚呼静なる春の夜や。

（評） 平和なる哉。

○朝の逍遥　千葉　田村瀧子

騒々しく鳴つて餘韻のない鐘の音に曉の夢を破られ。起出て雨戸を繰ると。昨日掃いたばかりの庭一面に常盤木の落葉を敷きつめて。筧の水は堰きとめられて。わざとならぬ遣水を作つて居る中に。また尾のとれぬ蛙の子が二つ三つ。亂れ散つた蘇芳の花は苔の褥の模樣其儘。霧島躑躅はやゝ色あせて。皐月躑躅の眞つ盛り。燃え出る樣な紅の中に。白いのが後れ咲きに一つ二つゆかしくほゝ笑んで居る。庭に下りたつて。築山の小高い處から田圃を見下すと。うす霞に裹まれた遠山はさながら墨繪の樣。綠色濃い麥畑の向の藁家から朝餉の煙が昇つて靉靆いて居る。多くの田は耕されて漫々と湛へられた水に朝日の影がさら／＼と輝いて。所々に青疊を敷いた樣に鮮かな綠色は苗代田であらう田の畦の小道を牛追ひながら來る草刈童の鄙唄が田に引く水の音に和して面白く聞こえて來る。



魚釣（選外）　讃岐　香川節子

（評） 密畫。

○朝のそゞろあり記　下野　新井琴子

燈火薄暗き閨を出てゝ、雨戸明くれば優しき音して時計は四つを打ちぬ。寢卷姿にしどけなき細帯しめ直して、後れ毛搔き上げつゝ、庭の面を眺むれば、宵の雨に朝の氣迫りて、萬有の呼吸聖座に向ふごといと清し。空に逞しき腕を延ばして、軒を蔽はむ狀したる老松の、

薄霧にとぢられて朧に墨繪のごとほの見えて、春日燈籠は人の彳むに似たり。

濕めりし庭の面に駒下駄輕う折り立てば、殘月淡く西空に懸りて薄絹に蔽はれし珠の如し、雞鳴高う聞えて、東の空や、黄ばみそめぬ。

褄先を露に濡らしつゝ、脊戸の枝折戸開きて、畑道に出づ。一本の姥櫻淋しう散り殘りて行く手に白く、花瓣點々と。あはれさに踏まじと除けて過ぎぬ。

人さわがしき市ならば寢巻姿はづかしけれど、片田舍の人なき野路とて、鎮守の森を訪はゞやとそゞろありきしつゝ行けば、雨の名殘の雲切れて、空一面に鼠色こく、朝霧いたう籠めたれば、鎮守の森はさらなり、人家も畑も見え分かて、燈火薄き幻燈の繪見たらむが如し。眼近き周圍五尺の所のみ、やゝ鮮かに見えて、小麥の伏したる、大森の仰ぎたるが、露の瓔珞を葉末にかけて、尊き朝の日を迎ふるにやあらむ。

朝は殊に森嚴なるみ社や、廣前の石彫の唐獅子眼を怒らして、何となう襟を正さる。小暗き拜殿には神鏡閃閃と銀の光鋭く、自づと首のうなだるゝ。神の御座に拜をなして、懸りし鈴振れば、戞々として氣も澄む。拜殿と小祠の間を過りて裏手の森に進みぬ。靜寂なる森の中よ！三抱もあらむ榎に抱き合ふ欅の根に凭りて幽玄の氣にうたれ、瞑想の境に思を走する時、ボタリと落ちし水滴、冷う頬を打ちぬ。

尖端の折れたる樅の大木は森の王者と四邊を睥睨して梢天を摩せば、巨人の如き公孫樹の若葉茂りて從者の如く樅の半身を蔽へり。

神樂殿に太鼓の音す。彌宜も目や醒しつらむ、寢巻姿の耻しう覺えて聖き地を見捨てざる可らず。懷しの森よ。社を一周して廣前に行けば、彌宜が家の緋桃雨になやみて、殘んの花あはれに羞しう見ゆ。

鴉の聲に驚かされて、家路急げば空の千切れ雲は今し、紫に紫金に朱に、天の幕の色榮えて、眞紅の圓を包み、金光颯つと散りぬ。

美しの朝や。！

（評）練磨を要す。

○あさがほ

伊勢　金子伊登子

よべ、ふくよかなりし蕾の、五つ六つと、かぞへ置きつれば、常にもあらで、一番雞の聲と共に起き出てつ、ほのぐらき燈火の光に、見返れば、傍に臥したる妹の夜具さへふみぬきて、思ふことなげの其寢顔、何夢むらん笑みかたむけて、我さへ思はずほゝゑみつゝ、そと枕なほしやりて蚊帳を出づ。

人々の夢驚ろかさじとためらひつゝ雨戸くりあくれば、今しも明けやらんとする空の、明星は已に落ちて、ほそき下弦の月は松ヶ枝にかゝれり、あな靜けく心地よき朝なるかな、花や如何ならんと庭下駄かるう栞戸を出づ

カアとなく烏の聲に仰げば東の空はやう〳〵白みゆき、やがて空は五彩にかゞやきぬ、露のひぬ間と聞きつるものを、日出てゝは心もとなし、

いてやと急ぎ我が手ずさみの名のみなる花園を尋ぬるに、あはれ嬉しうも咲き出てしに、五つ六つ、思はぬ葉がくれに倚一つ、これぞ命と置きあまる白玉は、つらぬきとめれば、そよとの風にもハラ〳〵とこぼるゝなどいと興あり、打ち見れば、たゞ何となう心とききて、我にもあらでいと深き紅の一輪にそと口づけても見つ、あゝげにも美はし紅色なるよ、釣瓶とられては、心なき姿とて、必ずや千代女を學びなん、等心も空に、今しも花かげより舞ひ出てし蝴蝶の後を見送るに、いつの程にか、のぼりけん旭の光りまばゆし、天かけりゆく群鳥の聲いとゞかまびすし。

○寫眞

深川　松永かつみ

國から久し振て従妹が來たので、紀念に寫眞撮らうと思つて、程近き深川公園へ來た、そこゝに咲いた梅は清香を吐き、春の日和長閑に、雛の聲が響く、此處も東京かと思はれる程靜で、參詣の人の拍手が折々寂寞を破るのみである。

寫眞屋へ這入ると右が應接門て左が寫し場。見本見せてもらつて、順次に繰つて行くと、男もあり女もあり、二三人で撮つたのもある、これが好いてせう、あれが好いわと繰返して見ながら目うつりがして了つた。

こんもりと繁つた森、其傍には清い美しい小川が流れ翼のやうにひろがつた雲が、森の上に懸つて、天津乙女が天降でもするかのやう、里の土橋を白い手拭を姉さん被りにした野の少女が、黒影を地に投げて行く、小川の岸に紅や紫に咲いた花の香を尋ねて居た蝶が、その手拭に戯れるやうに、少女の周圍を舞ひ狂つて居る長閑な春の背景。

妾逹は春の景色に醉はされて、恍惚と眺めて居るやうな姿て立つた。寫眞師は黑い布を被つて、暫時調子を取つて居たが、やがて出て來て。

「もう少し這ぅ云ふ工合に襟をお向き遊ばして」

又黑い布を被る。

何だか可笑くなつて。

「ほゝゝゝゝゝ」と笑つて了ふ。

「笑つちや不可ませんです、さあ是を御覽なすつて」

と目標の枠に花の付いたのを指し示した。

ごむの玉を握つて呼吸を計づて居た寫眞師は、

「寫りますよ」レンズがぱちり〳〵と音を立てた。

此寫眞まあ甚麽にうつつたてせう。

○雨の蝶

大分　百留むら子

雨しめやかに降り暮らして、窓前の海棠涙をふくめり。永き日を、獨り一室に垂れこめて、おとづるゝ人もなきさびしさに、をとめは心まぎらはさむとて、手馴れの妻琴かきならしぬ。

風一陣、庭前の植込みをわたりて、はら〳〵と散るは雫か、雨のやどりを失ひし蝶一つ、濡れそぼちたる翼も重げに、名香のかをりを慕うて、窓の内に飛び入りつゝをとめが髮のかざしの花に、身をぞやすめける。をとめは心絃に通ひて、今しも佳興に入りぬと覺しく、妙なるしらべの、またなく面白きに、蝶も心やとまりけむ、靜にかざしの花をはなれて、ひらり〳〵と少女が手もとを飛びめぐりしが、やがて琴柱にそととまりぬ。あなやとばかり、をとめは其絃をかゝむとせし爪をかろくも留めて、しばしは胡蝶をうちまもりぬ。

○所見

岩手　森子

うしろには、清い小川が流れてゐて、その緩いところには、笹舟が一つ、漂つてゐる。

流れに沿うて、所々破れかゝりし竹垣のうちに、今眞盛りの緋桃一本、木下には、皺こそ寄れ、色白に肥つた、六十路の坂を越えたらんと覺しき老媼の、煤ぼけた車て、切りと糸を繰てゐる。

車の向ふには、四つか！五つかの幼子、紅葉に似た手に弄べる美しき花束を、千切りては捨てつ、投げつ、無心に餌あさる雛の、驚き逃ぐる樣を見て、老媼を顧みては、愛らしき、神の如き微笑を洩らすのである。

もう、お正午に近いであらうか！雄雞、けたたましき羽音をたてゝ、桃の枝に高く、時をつくつた。

眞紅の花瓣は、風なきにヒラ〳〵……と。

論文

士沼波瓊音先生選



番外

○蒙古王新家庭教師

徳島 小川なみ子

河原操子女史の後任として、這たび東京音樂學校出身の鳥居きみ子女史が行かれることになりました、蒙古王も滿足てせう、實際わたしの生國から女史のやうな活潑な意志の強い人が顯はれたのは、本統に喜ばしい現象て、随つて徳島女學生の肩身も擴がるやうに思はれます。

これは、何事にも頭を傾けて研究せねば利かぬ女史の良人、鳥居龍藏氏の感化もありませうが、女史は未だ我徳島師範學校に居られた時から、總ての行爲が男性的て、柔弱な所がなく、凛とした、寔にハキ／＼した、僅かに我女子界に一異彩を放たれた方てした。

内助の義務、蓋し是れは女史平生の心がけてあつて、今はサイエンスを研鑽されて居る良人の前途の爲めに且つは國家的献身義務の爲に巾幗の身を以て、遙々蒙古王の新家庭教師に赴かるゝこととなつた、女史は平素の希望を達し、嘸今日は愉快の事と思はれます。

惡しき教師の後を承くるは困難なれども、善良なる教師の後任は易しと云ふ過去の管理法は、今日に適しませぬ、私も多少經驗がありますが、どうも良教師の後任が甚だ困難のやうに思はれます、箇樣な事は素より女史の夙に御察しなされて居らるゝ所てせうが、嘗て蒙古の人民は河原女史の女生徒を敎へて居たのを見て『アレは蒙古の女子を日本に連れて踊つて、其骨を取つてシャボンの原料とし、眼球はこれを抉り取りて寫眞といふものに點眼するために來て居るのだ』と云つた程な未開の地に足を止めて、家庭女敎師として好果を收められた同女史の後任てすから、賢明なる女子も多少に苦心を要せらるゝ事と思はれます。

事小なれども國と國との關係を親密にし、我日本の信用を博するは今や女史の双肩に懸つて居ます、何分に風土人情も異つて居ますから、自愛專一に國の爲めに良家庭敎師として、蒙古王の信用を得、何卒女流敎育者の面目を發揮してください！。

○夏を迎ふ

播磨 土井一子

春は逝きぬ。花の色は褪せぬ。野は緑いよゝ增して、小川の水のなつかしさも加はりぬ。世は暑き夏とはな

りぬ。
夏よ樂しき春は逝きて汝はその後に來りしなり。さあれ、汝は苦しきか、そも樂しきか。妾は春の花よりも汝が綠のしたゝるをめづるにぞ。

戀に泣き、詩に煩悶を重ぬる人は、あてやかなる花をめでゝ、胸のさゝやきうたふ雲雀の聲に笑めるならんも、妾終日口すぎの業に、いそがはしき身却りて汝がしたゝる綠を愛するにこそ。

汗ふいて椅子とる窓や風薫る。

甍をわたる炎、目もまばゆきばかり、熱天鑠地といはん、こしきに座する思するに、南風凉しう軒端の風鈴拂ひなば、胸のもだえも忘れはてゝ、いひしらぬ快感に觸るゝにこそ。

花も蓮の清きが開き、鳥も血に啼く時鳥あれど、わが樂しみは綠したゝると風薫ゆるとのみなるにこそ。

春の花、秋の月、虫、冬の雪、これみな夏のおよび難きなれど、この草葉、この凉風、また春冬の得及ばざる所ならん。

花は青春肉躍る子にもたとへつべく、月は物思ふ不運の人の眺めて美はしく、雪は黄金藏に滿ちて、綾錦、身にあまる人の、酒を置きて語るに適せるならんも風よ、綠よ、夏草よ、妾等の趣味に適せるは汝なりあゝ夏、汝今來らんとす、妾はもろ手をあげて汝を待たん。



父は？（選外）　神戸　松井花子

○衣食住

新潟　上野志摩子

衣は寒暑を凌げば足り、食は口腹を滿たせば足り、家屋は風雨を凌げば足ると申しますのは、奢侈を戒むる言葉でありまして、未だ衛生と云ふ事を云はないのであります、如何となれば、衣は寒暑を凌げば足ると申しますけれど、常に垢染みたるものを着用して居りましては、必ず不測の病氣を惹起します、食は口腹を滿たせば足ると申しますれど、不良なものや腐敗したものを食するときは、必ず身體の強壯を失ふ樣になります、家屋は風雨を防げば足ると云ひますけれど、不潔にして空氣の流通悪きときは、衛生に大なる災害を與ふる種となります、故に人は常に清潔なる衣服を着、純良にして滋養多き食物を喰ひ、清潔にして新鮮なる空氣の流通する家に住まん事を欲しなければなりません、然れ共衛生を梱にし、綾羅錦繡、膏梁八珍結構壯麗の外觀を装ひ、自然浮華文弱に流るゝもの、決して無しと言はれないです、之れ等は大々的に間違つて居るのでありまして、却て身を亡ぼす兆となるの

てあります、故に吾人は品質の善惡を問はず、常に清潔法に怠たらぬことに、努めなければならぬのであります、先哲曰節儉を崇び奢盈を禁じ滌濯の衣を服し蔬糲の食を甘むと、眞なる哉眞哉、之れ則ち往古の美を稱したものでありまして、明治の規模として可なりてす、返す返すも衛生法を重んじ奢侈に流れぬ樣注意しなければ人道に缺くること無きにしもあらずですから深思熟考して努めなければならぬ事と思ひます。

○女とふみ　長野　飯塚ぎを子

今の世あまりに文かくみちに達したるをみなすくなきはなげかはしきことなり。きく、彼の奈良平安朝のみよには此道のひぢりとあふがれしもの多くいでたりとかや、げにふみかくもひとつのわざなればあなづるべきことにあらず。をみなの文はおとこめきたるはをかし、いとものやはらかに女文學もてすらすらと、つくらずかざらずありのまゝをしるせるいと心ゆかし。さるをいたづらにかたくるしき文字ならべたるつたなし女のふみはおみならしくかゝむと心がくるこそよけれあまりにけわしきはよみがたくあしし。ふみはすべて何にまれ己が思をのべるものにしあれば、簡にして意を得たるこそふみかく道の上手とやいはまし。ながくおなじことくりかへしたる、くだ〳〵しくて讀むものをあかしむ。あまり興味ふかくて「いますこしあらましかば」など人に思はしむることよなくかしこし。されど、如何ほど文かくみちにたくみなりとも文字かくことにつたなくてはみぐるし。ふみかくわざにつれて文字かくことにすぐれたる、いとしたはし。とにもかくにも、女はすべてやさしきうちにも情をこめてかかんことこそつとむべきなれ。

○思ひのまゝ　三重　山田ひさ子

一、人ありてそなたのお友達なる東山樣は學の課業好く出來るにやと問はんには如何にか答へつべき、必ずや其の方は學の舍にてあまり評判よくあらず或は問ひもせぬ事をお轉婆なりなど云ふ人の多くぞありなむ。さる事は女子の性癖ともいふべき嫉妬の心をあからさまに妾は持てりと人に敎ふるが如けん。人を譽め稱へてこそ己が品性も高まるなれ、いかて人をさげしみて己が身のけ高くやなるべき。さるをともすれば世の小女等がかく思ひてかあらずか、友どちの惡しき事のみあげんとするぞ淺ましき極みになん。

二、妾の友の中世の事どもに暗き人あり、げに片田舍より出てし許りの人なれば、和歌とは何、新體詩とはいかに、さる文學の事ども知り玉ふべくもあらじ。さるを或日友どち六人ばかり打語へる內ふと文學の話し出てけるに、其友俳句と發句と如何に違ふぞと問ひければ座の友腹をよりて笑ひにき。あはれ氣の毒なるは其友なりけり、只顏紅らめてぞ穴にも入りたき心地せられし樣見受けられぬ。友垣とは互に知らぬ事どもを

敎へあうてこそ誠なるに、かくては如何に、さる事はかくと只一言敎へなばいかばかり滿足を與へけんものを、げにいたましの限りとやいふべき。

○愛

金澤　嘉野

忠孝悌信仁。一として愛より導かれざるはなし。されば人生箇人にとりても、形成する社會にとりても。愛より必須なるものはなかるべし。又道德倫理も愛あつて始めて其基礎を固くす。而して愛は天日のかゞやくが如く永久に變る事なく、人知退き河は山となり、桑田變じて、蒼海となるとも、愛は遂に墜る事なきなり。偉なるかな愛。此の廣大無邊なる愛や、そも男女兩性中いづれにかやとる、いづれか愛にとむ。誰か女性なり、と答ふるに、躊躇すべき。愛の實行たるや實にかよわき婦人の兩肩にかゝれり。而も是、婦人の務なり、天職なり。あゝ愛よ、赫灼として蒼天にかゝる天日の如き愛よ。愛は則ち婦人なり、婦人は則ち愛の化身なり、愛は婦人に依つて、炳然たる光を放つを得、婦人は愛に依つて其長所天職を授けられ愛の爲に活き愛のためにたふる。されば淑女となる、其機動たるや、蓋し愛に外ならず。愛は美德中の美なり、愛は最も神に近しと云はん。我等婦女子の其應用より出づる。同情平和慈愛其輝ける光もて、其職務を盡す。之最も神に近づくの軌道ならんか。

○女子の本分

石川　濟田芳子

女は身躰のつくりをはじめ、よろづにかよわきものなれば、すべてものいひ、たちゐ、ふるまひしづかに、ことばすくなく何事もひかへめなるこそよけれ。さるを今の世の女子はやゝもすれば、たゞわづかにてもならひ得たることをば人にほこり、ひかへめにせばものしらぬものよとわらひ、道を行くにも所せまげに歩むを、よきことゝこころえ居るぞ口惜しき、そも學校の物學びは人にほこらむためか、あらず、行末人の妻となり母となるは、女子たるものゝ本分なれば、其の子を敎ふるに何事もしらでいかがすべき、殊にいとけなき小兒のうちの善惡賢愚は、ひたすらに家庭敎育の、如何によるとこそ聞け、夫は日々外に出てゝ務めを爲すものなれば、かゝる世話のなし得べきやうも非ず。されば家にある母の役目こそいと〳〵重きものなれ、夫にかしづき、人に交り、あるは事にあたりて物のよしあしをわかちさだむるにも、學問なくてはかなはざるなり、されば年若き時よりよく心にかけて師の敎へにしたがひ、おのが智をみがき德を修め、家にありてはよく父母につかへ、兄弟の中むつまじく、又人に嫁しての後はよく夫を助け、子をはぐくみ育て、家ををさめんことこそ女子第一のつとめなるべけれ。

○たけのこ

因幡　芳子女史

ひと朝、いづこともなくさまよひしに、ゆくりなく、藪の垣ほに筍のやう〳〵出てたるが、頭に土をかうぶ

りしを見出しぬ。われ思へらく、このもの生ひ長けぬれば、まがらず空にそびえ、霜ふくも雪ふるも色かへず、節義を守る忠臣、操正しき貞女にも似たるかな。さるを世の人は、こを一箸の味ひにして、節操を全うせしめざるぞいとうたてき。あはれ、天之を作り、人之をそこなふ。されど、むかしは孝子之を雪中に得て親を養ひしとかや、あゝ天もまことの道には感じて、時ならぬに與へやしけむ、しかも今の世はいかなる故か、たえて雪の中に、こを得しものを聞かざるは。

○婦人の勇氣

徳島 坂野芳乃

凡そ人として志を立て家を興し國を富まし國家に義務を盡さんとすれば之れに對してそれ〴〵希望なかるべからず此希望ありて世は進歩發達すべきものなり、志を立て之れに向ひて前進するも一度困難に遭へば忽にして其業を棄て他に志を變じて行き又之れにても失敗に出遭へば又忽ちに變じ終に一生成すことなく五十路の果敢なきに苦しむ者其例少なからず、失敗に遭ふとも失敗の爲めに志を變ずるが如きことあらば何時の代にか成功すべき此れにて理想とすべき所に達するを得んや、學校生徒にして不勉强の結果競爭に負けを取り落第の運命に接しなば忽ちにして學校を退き日頃積みにし教へは何處にか投げうち他に志を變ふるも成功することなく、悲むべき最後を遂ぐるもの往々あり此れ皆始めの志を貫くべき勇氣なきが爲めなり、殊に女子は此勇氣なくんば愛の爲め情の爲め身を亡ぼし挽回する能はざる死地に陷り易ければなり、學校にある時より卒へて良妻賢母となり圓滿なる家庭を作るに至るも此間に起るべき困難幾何ばかりぞや此困難に勝つべき勇氣なくして一生を無事に亘る事を得んや到底期すべきことに非ず常に波瀾の内に陽炎の最後を遂ぐるものなり、婦人の貴ぶべき而かも生命とも崇拜すべき愛も心に勇氣あり後神聖なる愛となるものにして花の如く麗はしく清く崇かき天女の如き乙女子の心も一度魔風に誘はれなば底ひも知らぬ淵瀬の中に身を沈むが如き此れ己れに克つの勇氣なきが爲めなり。此れ等は既に愛の爲めに生命は奪はれしなり、嗚呼女子たるもの愛の神聖を貴ぶと共に常に己れに克つの勇氣を養ひ二十世紀の活舞臺に天職を全うすべきなり。

○筆

備前 小山松枝

さゝやかなる竹とわづかばかりなる毛とによりてなれる筆よ、如何なればかく人々に愛せられて、大事を托され秘密をもしめされ、汝ならずはとしたはるゝぞ。しかも貴賤の差別なく採るに任す、世に汝ばかりたのもしきものはあらじかし。

海山をへだつる人の音信はもとより、見ぬ世のことも汝の恵によりて知り、現今のことを後世に傳へしむるにも汝の力によらずばあらず、はたまのあたり謂ひ難きことも汝によりてはよくいはしむ、げに輕くも重くも人の思ふまゝに從ふ床しさ。

嬉しきことは筆にそめて後の思出となし、悲しきことも筆につくればいさゝか心慰むるにあらずや。其思想の確固たるものは、一本の筆にても複雑なる社會と戰ひ、懦夫をしてよく起たしめ、勇者は益奮ふ、うべなりや世に重寶せらるゝも。

あゝ筆なるかな筆なるかな、國體の精華も之によりて傳へられ、文明の光も輝く、下賤のものも之を使用して、よく王侯をしも感服せしむ、其德やたかく其力や大なり。

あはれなつかしき筆よ、うれしき友となり、悲しき友となり、わが心をあらはす指導者となり、しかも親み易くして之を愛せば心のまゝに從ふ柔順なる、蓋之に勝るものあらんや。

◎筆のしづく　錦川　啟子女史

一、失戀あるを知らずして、戀愛するは愚にして、失戀を豫期して、戀愛を說くは薄情者なり。

二、家の赤貧を嘆くも愚にして、富貴を誇るものはより多くの愚者なり。

三、身の不幸をかこつは愚にして、又かこたざるも愚なり。

四、落第して泣くものは、己れの日頃の遊樂に耽りしを、表示するものなり。

五、目的なくして未來を夢みるは愚にして、目的計り大きく胸にゑがきつゝ遊ぶ者も亦愚者の仲間なり。

◎藻鹽草　香川　松永あやめ子

一、志望宜しく宏大なるべし、されど空想的なるべからず、實行的なるべし亦大志を立てたる以上は中途にて如何なる障碍に逢はんも、よく之を排して直行するの勇氣と堅忍不抜の精神なかるべからず。

二、辛苦てふ山を越ゆれば直ちに快樂の樂園に達すべし、此樂園に到らんと欲せば必ずや百難に打勝つの覺悟なかるべからず、故に薄志弱行の徒は此の山を越ゆること能はずして中途にて志を變ずべし。



河岸（選外）　本所　江原とり子

三、人誰か欲望なからん、即ちこの欲望ありて初めて社會百般の業成る、然れどもこれに高尚なるものと陋劣なるものとあり、故に宜しく陋劣なる欲望を捨てゝ高尚なる方面に向ふべし。

四、世の開くるに從ひて航海術ます〳〵進歩してかの雲濤洋茫たる大洋をも自由に航行するを得るに至れり世の人たるもの誰かは喜ばざるべき、今や人道頽廢して世潮は狂瀾怒濤をあげつゝあり、しかるに世の人之に航すべき舟楫を失へり。

◎樂天地

本郷　山崎磯子

何をか樂天地と云ふ、玉樓に起臥してあらゆる榮華歡樂を盡すの謂か、名隆々一世に冠し世の逆境を知らざるの謂か否々我が所謂樂天地は是の如きものに非らざるなり、然らば何をか樂天地と云ふ。自己が爲すべきの業務を怠らず、財寶庫に溢れずと雖債鬼門を窺はず、而て一家團欒共に談し共に笑ひ、和氣洋々たるの間にあるもの是れ樂天地の生活に非らずや、胸中に萬卷の書を藏め、識見凡俗を超え功成り名遂げて、而て後ち徐ろに淸風明月に淸吟するものこれ亦樂天地の生活に非らずや。是れを要するに樂を知らむと欲せば、足ることを知りて爲す可きことを爲せ、然らば天は汝に樂天地を與へむ。

◎新聞紙

本郷　松島文子

世に靈妙なるもの少なからずと雖も、躰軀僅に二尺に滿たずして汽船、鐵道、電信、電話の配下を有し、其言ふ所廣く宇宙の全體に渉り、西英吉利より東亞米利加に至り、人種國家の異同を問はず、上は九重の雲深き所より、下は非人乞食の狀況に至る迄、物として論ぜざるなく、事として報ぜざるなし、其論說は世論を左右し、時に政治家の膽を挫ぐ、其小話は子女をして喜悲感動せしめ、其雜報に至りては往々紳士淑女の讀むべかざるもの少なからずと雖も、亦人情風俗を寫して遺憾なく、常に暗夜の燈臺となりて能く世路の方向を示し、又能く惡魔の頭上に巨大なる鐵槌を下し、世道人心に一大威力を有する、新聞紙の如き靈妙不可思議なるものなし。

嗚呼汝新聞紙。汝は此世を照す大なる鏡なり、惡を憎み醜を排するに於て汝に及ぶものなく、善を賞し美を揚ぐるも亦汝に如くものなし。是を以て世人は汝を喜び、又汝を恐る、恐るゝ者は汝を謗り、喜ぶ者は汝を譽む、而も汝は謗も恐れず譽も喜ばず、毀譽褒貶の外に卓絕して專心一意己の本分を盡さんとす。噫、氣高きかな汝新聞紙。

◎樂しきかな自然

陸中　秋子

朝三暮四あくなき慾を逞しうし、終身營々遑々として醉生夢死する人々よ、乞ふ歩を轉じて山野に遊べ、すみれ、蒲公英など可憐なる草花の綠の裝しとやかに、花のかんばせ麗しく、靜かに春の惠を樂しむ樣のいかに純潔にして天眞なるよ、彼等は九重のゆかしきほとりに咲くも榮とせす、賤がふせやに咲くも物うしとせず、頑童の手にもてあそばるゝも悲まず、はた人跡たえたる荒野に咲くも其の美を改めず、春光に浴して開き、秋霜に逢うて凋落す、これ眞に天命を樂しむものなり、あゝ樂しき哉自然。乞ふ仰いで明月を見よ、彼は春風のどけき春の夜も、炎熱燒くが如き夏の夜も、枯葉蟲聲ものさびしき秋の

夜も、四方皚々滿山皆花たる冬の夜も、皎々としてとこしへに平和なる光を放つ。嗚呼實に夜の世界に於て自然は特に神秘を帶びて來る、四邊靜まりて寂寞無量、天地は清澄平和の氣に滿ち、藍色の天空星光の囁きを仰ぐのとき、悲み、悶え、惱み、全く絶えて、身は崇高と神秘との中に裹まれ、無限に觸れ、永刧を睹る、茲に至て人は始めて紛々たる世間の我れを脱け出てゝ眞の我に入り、吾か靈性は茲に無始終の世界に入り、髣髴として宇宙の大靈と融合するを覺ゆる也。嗚呼樂しきかな自然。

○月の美を論ず　　志摩　清水波子

世に月雪花を美中の美として並べて賞めて居るが、雪も花もどうして月の美に及びませう。

露も垂るかと思はれるあの限なき光、まあ何と賞めて宜いのでせう、あの天地を繋ぐ微妙の糸、夢を調べる無聲の音色には、嘸ぞや鬼神も感じるであらうかと思はれます、又此の美しい月の描き出す景色も何と例へて宜いか、實に美の源でせう、そう丁度日が欄干に昇つた頃、椽側に出て、玉簾を高くかゝげ、折しも空を飛び行く雁を見上げて居る美人の姿或は渺々たる蒼海に大船を泛べ、端然と舷頭に坐して月に嘯き、横笛を弄んで居る鎧武者の樣など想像すれば、何と一種美妙の感に打たれるではないか。

又それ爛漫と咲きみだれた櫻の花も、月がかゝつてこそ愈美て、風にみだれる柳の糸も三日月がさしてこそ益々やさしい、小笹の露が玉を散らし、小川の水があやを織るも、皆月故ではありませんか。

あゝ美なる月、艶なる月、月雪花中の最美なるものは眞に之れ月である。

○凱旋兵士を迎ふ　　大阪　杉田孤泉

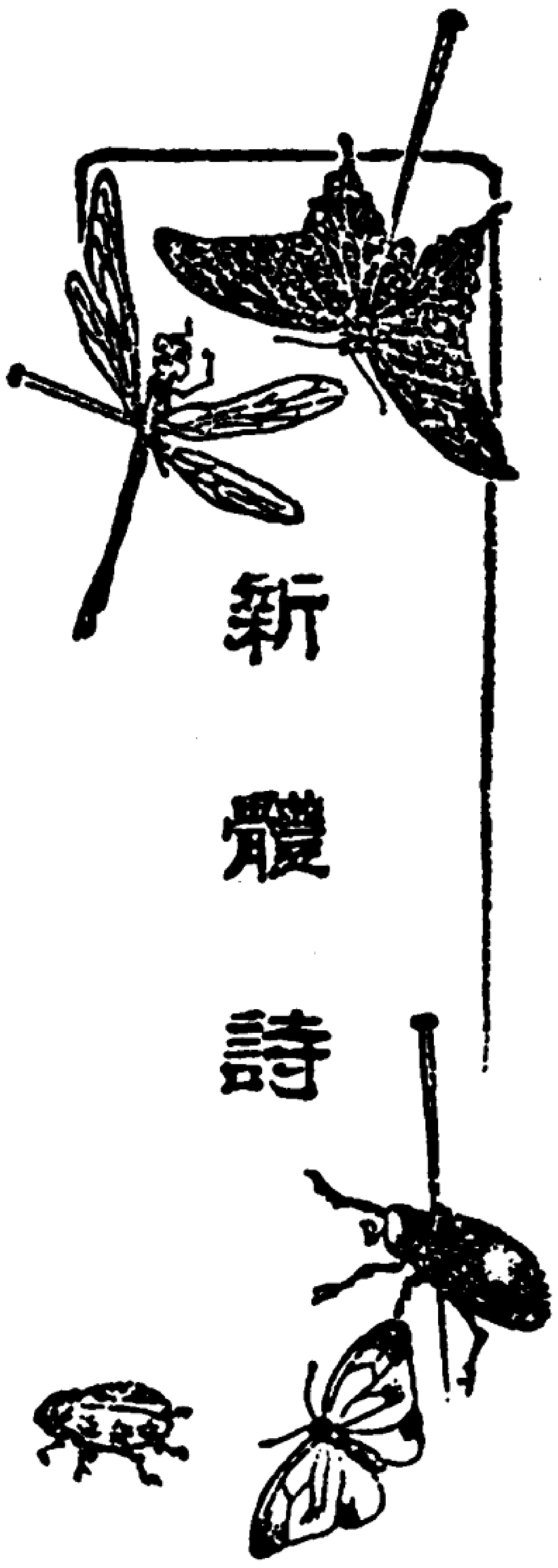
冬去つて春は來らんとす。平和と歡喜とに滿されたる春は今や來らんとす。

一年有半、滿洲の原頭に强敵と戰ひ嚴寒と戰ひ、悲しみと苦しみとの裡に一年有半を過したる卿等は、今や自己の職務を了りて、樂しき故郷にかへり、親しき懷しき父母妻子と互に相語らむとす。卿等が先づ第一に父母の君にあうて發する言葉はお父さんと云ふ語、お母さんと云ふ語ならむ、而して涙は知らずして眼中にみつべし。知らず、卿等の心裡果して如何。

卿等は最早國家に對する第一の務を了りし也、務を完くせし也。我國は卿等のために一段高められたるなり。感謝すべきかな。國民は卿等を如何にして迎へ、如何にして樂しますべきやを知らず。

あゝ、卿等は卿等の務を了りし也、務を完うしたる也、ゆけ、君よ、恵深き老いたる卿等が父母の君はふる里に卿等のかへり來るを待ち給ふ。

あゝ、今や冬去つて春來らんとす。而して、み國の春には平和あり、歡喜あり。



新體詩

河井醉茗先生選

天

○桑摘む畑にて

岩代國伊達郡立子山村　三浦たい子

彌生をけぶる雨にして、　よみがへりたる桑の芽の
畠にあまる繁枝に、　延てしたゞる新緑や。
尊き富をもたらせる、　やさしき蠶に與ふべく
朝な夕なにいそしみて、　日毎畠に桑摘みぬ。
養ふ蠶幸ありて、　やがて玉繭巣らん日
我家富みて榮えなば、　錦飾らむ村祭。
深くも繁る此畑に、　富の光朋ありと見ば
うたふ謡にも興多く、　桑摘む手元早きかな。

偽らず、飾らず、正直に自分の境地と感情をうたふ、是でこそ詩は人を動かすのです（醉茗）

地

○夏……神……

長野市　美子

夕べ嵐の神使が　運命よ散れのみ訓に
あゝ執着のをぞましと　笑まひて花は地に落ちぬ。
彩もなき野に細雨の　ひゞきなくふるさびしみや
こゝに生れし夏神の　悲しとのみの御愁ひ。
蓮歩遅々たる行幸に　輕羅の裳地に引けば
なよらにふれし若草の　色こと／＼く緑濃き。
濃い／＼緑つと裂きて　見よほとばしる妙香の
女執念き血と熱の　もゆる炎の烈しさを。
我が世にこもる戀と名に　敗れし胸よ夏の日を
濃染の一葉かい抱き　またも血汐に生きむ哉。

烈しい語を使ふ事が必ずしも烈しい情を表はして居るとは言へませんが、兎に角あなたは何ものかを捉え、且悶えて居る處があるので、詩も一家の風があります（醉茗）

人

○朝虹

長野縣諏訪郡下諏訪町　山田くに子

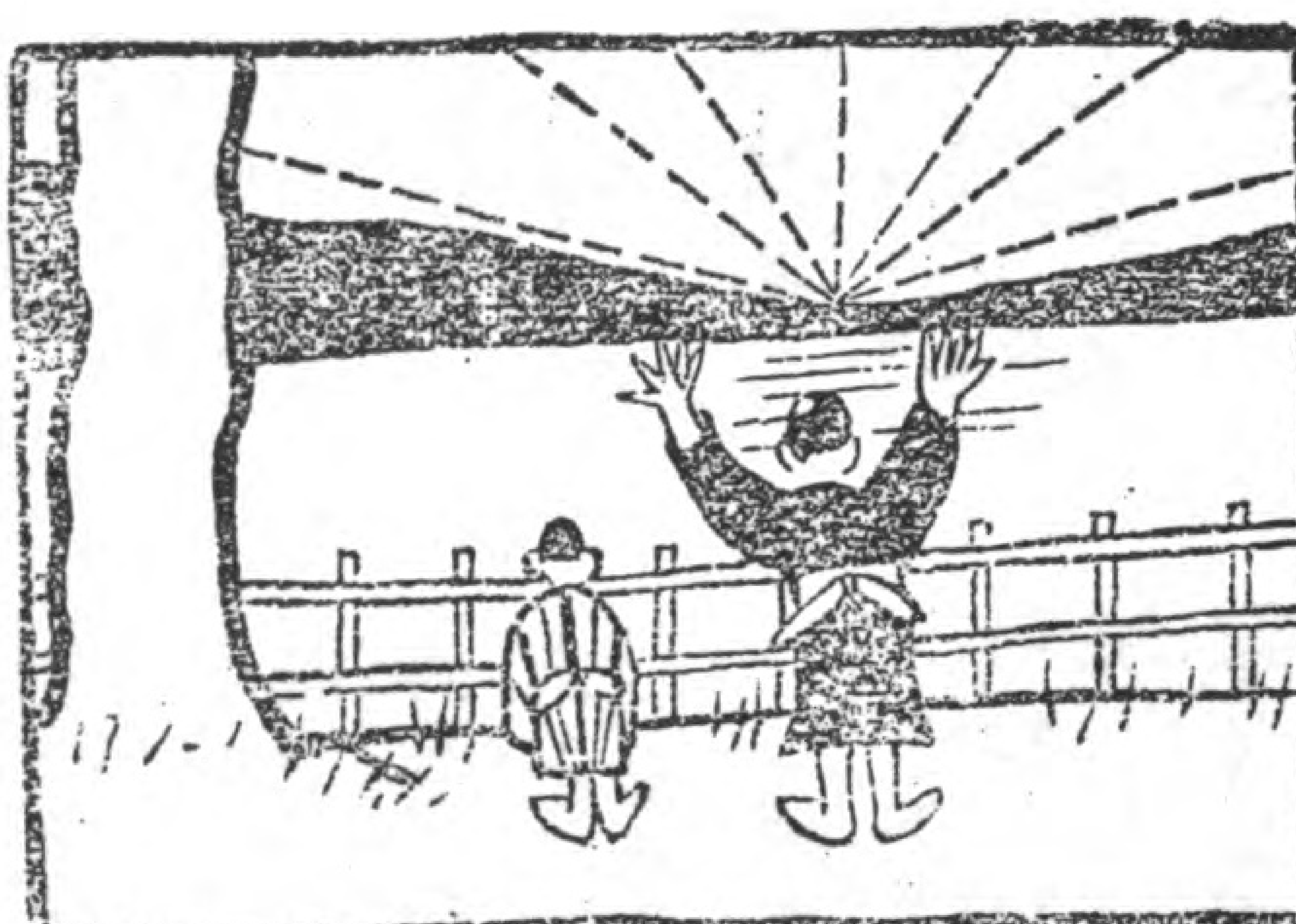
誰があこがれの戀の魂、　まかれて行きし花環とも
半ばの影よ朝の虹。
小鳥讃美のなつかしさ、　美花薫風の野に立てば
彩織風のさゆらぎに、　ふと目にうつる君が影。
虹は七彩七榮えて、　しばし見せたる愛の復活。

短いだけに引しまつて神彩奕々（評者）

秀逸

○歡樂　能登　秋花女史

夢かの如き松原や、
　鶴舞ふらしき嬌艶に、
そゞろ入興の眼をあげて、
　懷かしき樣に眺むれば、
貝美くしき磯づたひ、
　漣白ろうよするかな。
琴の音ひゞく龍宮の扉を、
　あしたいでこしけはひして、
二ッ並べる海士小舟、
　さながら溶けし白銀と、
きらめく水豚にうすれては、あゝ歡樂や限りなう――。
春水底の暖かく、
　自からなる臥床の、
眞砂よあまり清ければ、
　宵寢の姿其まゝに、



日の出　（選外）　山口　長松麗子

小貝さゞめく磯のへに、　鰭の狹物は朝寢してけり。

海は想像すればするほど、美くしいものになります（評者）

○もしほき　横濱　敷島小藤

あゝ此もしほき、　汝れそも波にゆられて
そも幾月か。
悲しきよ昨年は、　綠りの海にうるはしく
咲きけるものを。
汝れはそも、
生ひ出しふるき渚の
あかつき母にわかれて、
よるべなき大わだつみに
白き花たゞよふそも幾月。
あけ紫の星皆うるみ、
汝れの香やいかならん
よせてはかへす白波は、
何をか秋にさゝやくか
そこはてもなき大海洋に、
魚のひれなき此の浮も草
流れ〳〵てそも幾月
たゞくる波のまに〳〵。
汝れはそも、
もとの渚をこひつゝも、　しづかなる闇の間に
ふからねむらん、

もしほ木とは少い題です、少いばかりでなく、作者が寄せた感興も、

珍しく私の心をひきました（酔茗）

○星と草

奈良　増野とも子

我が世は死せし暗の夜に
眞黑き森の東に
何をたよりに星一つ
寂しき光放ちけん
人は知らねど土に伏す
愛のしづくの喜びに
緑の小草面あげて
情や凝りてをのゝきぬ、
さはれ靜けき夜の影に
星と草とをとらへきて
清き思ひをたゝえたる
さびれ行く世にうえてまし

詩想は進んで居ます（酔茗）

○蛇苺

三河　澤田つま子

皐月を溝の腐り水
穢れて臭き醜草は
泡吹き立ちてかぐろひや
うなだれ勝ちに水添ひぬ
ひばら鋭き緑葉の
埃に染みし黃金の
青銹色に片焦げて
花は垂れたり優頸
かゝる境の葉隱れは
土にこぼれて宿りしか
魔女が飾りの麗し玉
緋瑠璃と映ゆる蛇いちご

有明君の「どくだみ」より來る（酔茗）

○最後の祈願

茨城　石塚靜江

榮光ありや、罪とがの
人の世に何をかも
あこがれて永らへむ。
夢に見し神の國
平和の美しき國
吾が行かむすべありや。
あゝおぞや。うつゝなの
二十年よ。罪とがの
その緣打ち斷たむ
あはれ吾が力なや。
汚れたる血よ肉よ。
永劫にこゝ水沫ちる
瀧つぼにさらしつゝ
うまいせむ、いざやとく。
神聖く偉大なる
神力もて淸めませ。
あゝみ神よ、うけませ。
最後のこの祈願。

熱氣と誠實と、洵に最後の祈りの聲とも聞かれます（酔茗）

○去にし胡蝶の夢

小石川　海野都里子

かぞへ見る二十の夢路
幼きをかへり見すれば
花に知る春のよはひは
行く春の青葉と化しぬ
あくがれし花のよそほひ
いつかまためぐりて來たる
春姬の艶なる姿
夢に見て夢に消え行く
心なの東風吹きすさび
花の床ふりこぼたれて
さすらひの此の世の墓に
息を吐くむくろはあれど
緋桃咲く南の窓に
友禪の袖ほにあてゝ
うまゐをる少女の頰に
世は冷酷の刃をあげて

思ひ出づる四年の昔　吾が肉を生かすは誰か手
此の恨永久に秘めむか　行く春は青葉と化しぬ。
されど思へ花のよはひを　いつかまためぐりて來たる

外は優しく、内は熱ず、女の情、意外に力の籠った作でせう（醉茗）

○梅の實の落つるをいたみて

高知　野中　すみれ子

窓にそぼふるさつき雨　青葉みだるゝ朝にして
文机近ふかほりくる　べにの色よき梅が香や。
さてもあざにし白葩の　たふとき精の凝りてしか。
雨のみだれにえたへずて　青葉が宿を迷ひ出で
ありし花輪の影おひて　苔やはらかうふす庭に
わびしく落つるひびきかな
あゝさだめかもうつし世は、　まめにほこりし若人も
さきて、香ひし花人も　おきてにもれぬ運命かな
永劫の闇にしづみゆく、

「わびしく落つる響かな」て切ってしまへば却って餘情が多かつたてせう（醉茗）

○誓ひ

四谷　しらぎく

うつくしき、　君がなさけの、　しらつゆに、
おひいてし、　むねのこひ草、　そが花の色、
花のにほひ、　とはにたやさず、　我つちかはむ、

優しくも誓ひたまひしよ（醉茗）

○山火事

金澤　大地波子

樵夫がすてし煙草火の　落葉の下にひそみゐて
例へば若き武士が　血を見て勇む夫のごと
颯とふきくる南風に　時を得たりと燃え出しぬ。
いかなる神の御怒か　天も焦げなんとばかりに
猛りて燃ゆる小木大木　巣を失ないし怯鳥や
獸のさけび恐ろしく　村人さわぐ夜の山火事。

詩化する伎倆が足りない爲に、可惜材料を平板にしました（醉茗）

○雲となりて

上野　須美女

たそがれ鐘はうぶすなの、　森の木たちへ沈むとき、
われらうす雲と身をかへて、　紅のゆかりのよそほひに、
夕の平和歌ひつゝ　快樂深かる人の子が、
夕餉の席をてらしつゝ　靜かに空を行かんかな。

終の二句に動かされました（醉茗）

○小山田

水戸市　福田　松風女子

都にいでゝふみをよむ、　息子の爲に山をうり、
畑を賣りにし李兵衛は、　殘り少の小やまだに、
姑と二人さびしげに、　歌もうたはで早苗とる、

此通りでせう（醉茗）

○野の虹

久留米　白峯女史

鳴神やみて雨晴れぬ、
樂しからずや人のよは。
自然のたくみ神のわざ、
そこに神秘のかげあらむ。
さはれひそめる其かげを、
夕のぞみの色あらば、
人ははかなき虹の輪の、
悟らねばこそなかく\に、
たゞ仰ぎ見よ空のはて、

見よ夕空に霓匂ふ、
うつすにかたき彩色の、
いたくな追ひぞ詩人よ、
朝の愁のかげあらむ。
しばしを神のたはふれと、
吾世のあやはうつくしき。
高く妙なる霓の色。

少し理窟な数へやうとしましたが、先づ此位なら無難でせう(醉茗)

○このうた

茨城 中西菊江子

人なき折をうかゞひて
くり返しつゝ唯ひとり
わが戀人にきかせんと
心づくしていとの音に

同じ歌をばいくたびも
謳ふことこそ樂しけれ
わかれの夕このうたを
うたひしこととの忍ばれて

近世短歌の想(醉茗)

○たくみ

周防 あらゝぎ

わきて流るゝ浮雲の、
たくみも深しもゝちゞの、
とき行くまゝにしづく\と

そこにいざよう天の色
よろづの神のみ手のあや
雨に輝やくあかね色して

戀の歌、詩の情、一致してゐます(醉茗)

○初戀

大阪市 横山春子

月影淡き夏の日の、
そゞろ歩きの其時に、
隣家なる某の、
雪さながらの肌の色、
中空高く輝ける、
誰か血潮の燃へざらむ、
頃は葉月の八日過、
み空あふぎて過越し、
伽羅の薫か高うして、
俯首がちの羞らひや、
後美はしき懸想文を、
「君受け給へ」の一言の、
思悶ゆる乙女子に、
伽羅の薫の後追へば、
双のたもとを顏に當て、

涼しき夕べ我が庭を
まがき一つをへだてたる
一人娘を吾は見し
優さ口元にほゝ笑つ
星を數ふる優さぶりに
娘十八、名はお芳
樹蔭に來り暮て行
思ひ廻らす折柄に
其所に女神の立てるなり
おのゝく手先に水茎の
吾が膝の上にそとをきて
聲もそゞろに亂る哉
希望の言葉あたへんと
くれなゐ燃ゆる緋鹿の子の
もと來し道へひた走る

上手は上手ですが、少し小説じみて、詩としては婉曲を缺きました(醉茗)

○蛇いちご

小石川 斐子

過世いかなる罪ありて、
人にいまるゝ身となりし

野には姫たち來給へど、かへり見さへも稀にして。
人のなさけの戀しさに、我れとわが身を憂へては
いさゝ小川に影うつし、さびしほゝえむ蛇いちご。

本郷 坂本たか子

○病後

夕ぐれの夏白雲に ふるさとの波もや聞ゆと
病みあがり覺束なくも 頰に手して辿る夕野路。
鮮やかの夕榮え雲に 梅雨晴れの青葉の光り
瓜畑ははてなくつゞき 番小屋に蚊遣するなり。
路傍の石に腰して つげ櫛にほつれ毛つくり
額に手を眼つむれば 追懷の胸のみさわぎ。
行方しれぬ母を尋ねて 三とせ市にまよひて遂に
病得し我にもあれば 痩せし頰に涙のみ多し。

福岡 星花女史

○夕立

地軸も裂くる雷に ふと針とめて眺むれば
映七彩の日輪を包む 闇の帷の擴ごりて
細かとまがふ大雨は 銀の如くにかけ來り
翠滴る樹々の葉を 叩く音こそすさまじけれ

安藝 高柳文子

○悲戀歌

夕風わたる高殿の、玉の小すだれゆら〳〵と、
ゆらぐすきまの面影に、月も光やはぢぬらむ。
日毎〳〵の憧憬に、空しき夢と思へども、
岩間の水のむせがへり、むせぶ思をいかにせむ。

千葉 花實姫の女

○雲

ほの〴〵しらむ曉の、明星のかげ殘る時、
色どる雲の麗しき、五彩の雲を眺むれば、
心は空に舞入りて、雲井をたどる我思。
紫金の色にわきたてる、かの夕映を眺むれば、
とほくゆかしき青空に、たふとき光りつきせざる、
み國やあると思ほへば、何かえ堪へむ我思。

靜岡 伊の藤 比夏子

○春雨

柿の若芽のうすみどり、南にひらく天龍の
はるかにけぶる朝風を、肌につめたく覺えしが
雛流す日を雨となりけり。
雛のかたみと堤なる、葉がちの柳たなり來て
瓶にあはれの歌もやと、灯にふしておもほへば
ゆめとなりける雨の音。

仙臺 高木いち子

○姉上さらば

東五千里波越えて、興ある形容大陸の
山と河との濃綠に、秀才の綸繇染めんとて
姉上さらば行きますか。
病の床に痩する身の、熱涙かぶれる此頃や
今此處にして握る手の、吁握る手のなのゝくを
姉上さらば行きますか。
もろき涙を問ひますな、日々にやせてはすがれゆく
はかなき身なり放つ手の、永久の別離となりもせば
姉上さらば行きますか。

近江 菊香靜枝子

○芍藥

花は樂しき芍藥の、朝は裏山花やしろ

月（選外） 京都 大澤幸子



花より花に吹き渡る、やさしき春の胡風が
そよ／＼吹けばゆら／＼と、美々しき範地に敷きぬ
蝶は怨めし姿にて、面を背けて落ちて行く

○ほとゝぎす

無名女

くれなゐのうつし心の、現世の人の心の
情なきよにしも汝は、橘の香をなつかしみ
ほとゝぎす花ちる里を、尋ねてぞなくか八千聲
吾はしも其一聲の、ひゞきにも思ひみだれて
百すぢの千縷の糸の、むすぼれて胸もうやむや
みかきもり衛士のたく火の、夜はもえひるはきえつゝ
物思ふ思ひのあまり、一滴身をしる雨か
吾なみだ袖うるほすも、はしきやし君を思ひの
なきのなみだが。

○吾が一家

佐渡　小野まつ子

父は五十路の坂こえ給へど、けふよあすよと鍬をば肩に、
蛙相手のつちほぢり、
母は笑たつ目に桑の葉つみて、玉なす汗を額ににじませ、
靈をだてゝ思ひなし、
兄はお國のかためとて、氷に閉づる鴨緑江、
予を秋の夢や冷たき、
姉のお稲はことして十六、お化粧きらひて勉强すき、
花かご背負つてはなうりに、

○友の死を悼みて

上野　新井かよふ子

たてまはしたろ金屏の、綸を側にながめては
香の烟のたゞよふを、夢とこそみれおぼろげに
希望のひかり永劫に、笑ひたりし若き身の
臨終のうらみ思ひなば、何の話ぞ宵よ名よ
眠れる如きまなざしを、そとながめてはなきがらを
新おくつきにはふむりて、冥府におくるに忍びんや
松吹く風の音はしも、稀に來てさへさびしきに
常にや苔の下に居て、聞きなばいかにあゝいかに
通夜に集へる人々は、默して何も語られば
只燈し火のかげ淡く、いよゝ靜けき今宵哉

○雲

大阪　武藤てふ子

雲のゆくへに身をなさば、いかに心の安からん
わが世ばなれし奥山の、谷ふどころに此ゆふべ
うきをば知らで眠るべく

○麗はしき月夜

廣島　壽々奇女史

霞に香ふ月影の、いつしか花の森に入り
花はさながら百千の、球もて作れる如くなり。
山の彼方も花やらむ、霞より出て雲に入る
月影清く香ふ樣、しくものもなきけしきなり。
朧に霞む月影は、もろ／＼の花咲き香ふ
山の小川の瀬の邊に、清く涼しく浮ぶなり。
誰が吹きすさぶ横笛の、音や彼處に響あり
ほがらかにある月の夜の、笛聞く花も香ふめり

○白菊

備中　佐藤郁子

籬（まがき）に匂ふ白菊の、今朝新しう微笑（ほゝえ）みぬ。
嗚呼美（うつくし）き白菊よ、汝を愛（め）でし吾が姉の、
逝かれし靈（みたま）を慰めよ、この白菊と一枝を
手折りて瓶にさしはさみ。
あゝ姉君よ浮びませ、花なる上に宿りませ。

○夕暮

紅ひ匂ふ西の空、
反身(そりみ)ゆたかの富士の嶺、
神の啓示とまたゝける、
殿に逝く今日一日、

麹町　赤城蕗笑江

濃き紫の衣にして、
崇高ふへし御姿や、
星きらめきの強うして、
我世の思ひ消き哉。

○漁村の夕

翌日の日和を夕映に
海は濃青に波もなく
富士と筑波の果遥く
磯辺にあさる海士の子が
家路に踊る姿見ゆ
一節低う渡り来て

上総　田村濃子

黄金漂る空の色
眠る姿の小松原
雲の棧敷鎖さぬ
豁たれ衣裾綴う
水夫が帆を捲く欸乃の
夕淋しき磯の村

○少女

小女ごゝろを人間はゞ、
春の女神のはぐゝみに、
あゝ美しき少女子よ、
林檎の頬はふくよかに、
若葉にひゞく汝が歌は、
石にさゝやく音にも似て、
みどりの髪は眉上に、
白魚の如きやさ指に、
あゝ美しの天使(エンゼル)よ、
入口少女の笑(ゑみ)ありて、

羽後　阿部花子

みぎはに萌ゆる若草の
光慕ふと答へませ
清き瞳は夕づゝか
蝶も舞ひ來む紅の口唇(くち)
ひばりの聲か行く水の
永遠(とことは)若し玉の樂
波打ち袖や春の風
つまれて笑まむ花もあれ
天には星よ地には花
この世は若し永遠(とこは)に美し

○劒太刀

鬼神の霊魂、うちこめて
焼刃に秋の霜さえて、

下総　大崎範子

百度鍛ひ、千度鍛り、
叉なほさむき劒太刀。
遥まく海に、大蛇斬り、
菜花ひとたびひらめけば、
蛮棲す山に、虎を断つ、
悪鬼はのがれ、夜叉ひそむ。

○花たば

鍬とりて土をおこせば
こゝ春の里の細道
星眸のまたゝき消う
さかしげに動くを見れば
行く人の足を停めて
花寶の花籠おきて
折々を鍬の手やめて
蝶々の遊を舞ふて
夕陽の花野を染めて
鍬を肩幼な子抱げば

佐世保　きわ子

よゝと泣く幼な子愛し
愛し見は花御坐の上
紅潮せる林檎の両頬
初花のつぼみの唇(くち)よ
撫てゝし三歳(みっつ)の頭(つむり)
美しを握(と)るに任せし
摘みやりし菫蒲公英
終日を夢の守神
一日の耕しをへぬ
花束の赤黄むらさき

○春雨

彩(あや)はしき七色の、
化粧(けはひ)のためととり出る、
美(うる)し雫のしたゝりか、
銀糸とそゝぐ春の雨、

福岡　植田文江

霞の御座(をまし)に佐保姫が
黄金のつぼのそとゆれし
花の香深き下界(ち)に落て

○野の花

消えのこりたる明星と、
戀にあびつ朝風に、
あはれ床しき白き野の花。
廣き野中の此の花よ、

愛知　小島品子

さゝやく如き白露の、
清き香高くゆらぐ葉の、
名もなき花と生いたてど、

飾らぬ姿氣高き香、
たのもしきかな白き野の花。

○うぐひす

ふみ讀む窓の梅が枝に
あまりに清く覺ゆれば
靜かに窓な開くとき
かなたの藪になく聲の

○行　春

さゝ川春の色褪せて
土手の木陰に咒りそへば
梢にのこる花びらに
堅く鎖せる庵の戸や
色香うせつる花片の
唯何となくわが心
別れを惜む佐世姫の
芭蕉の葉かげ淋しくて
迷ひ心の夢さめて
嗟幻よ希望とは
胡蝶の夢は長からで
うしや人の子老いやすく
蛙のこゑの地に溺きて
亂れ心のほつれ髮を
解かん術なき小川の

○暮れ行く春

かすみか雪か白雲の、
今日もあすもと皆人の、
いつの程にか色も香も、
峰にもをにもはた野にも、

これぞ少女の友として、

岩代　丹治はるみ子

啼くや鶯其こゑの
われ其姿見てましと
おどろき起ちし歌の主
さりとは妬き思ひあり

兵庫　菅林定子

胸かなしき夕間暮
若葉の色まだ淺くして
散りし昔のあともなし
蜘蛛の巣よもふさがりて
哀れをながく止むるに
深きうれひに堪へぬ哉
涙か袖にかゝるとき
襲れし蝶の羽をもく
偲ぶや昔花の頃
消えて跡なき虹のごと
花春錦に若けれど
果敢なくめぐる人の世や
山根足もとかすむとき
ふかれて長きもの思ひ
いゝいゝいゝいゝ
悶へは闇にながれゆく

熊本　すみれ

かゝると見えし八重櫻、
日毎尋れし若ざくら、
あせて土にはかへりけむ。
黄金のむしろしきつられ、

錦のもすそ綾のそて、
いかに思ひてかたちにけむ、

みどりがくれの花つゝじ、
おぼつかなげに咲き出てゝ、
やがて散りなん花なれや、

○春の興

春雨名殘なう晴れて、
そと吹く風に糸繰りて、

深山の雪のとけ初めて、
水は春の譜歌ひつゝ、

花摘む籠に少女子が、
長閑けき歌を殘しつゝ、

○花賣翁

花をうる　老人ひとり、
八重櫻　眞白き櫻、
膝にせる　小さきはな束、
蓮花草　すみれ蒲公英、
前に行き　後にかへり、

○麗しの虹

春雨も小やみて、
夕陽の空の麗しや、
天津女神の手に成し、
天にたか〳〵、
御神は、
そが上通り給ふらむ、

○花野の蝶

よそほひたりし佐世姫の、
のこすかたみの夏衣。

みぎはに匂ふかきつばた、
春の名殘をとどむれど、
やがて暮れなん春なれや。

能登　千田星龍

川邊に立てる青柳の、
織るや女神の袖衣。

清き流れの里川や、
菫咲く野を流れ行く。

蝶の小さき夢のせて、
かげは彩霞に消ゆる哉。

靜岡　たか子

負ひたるは　一重山吹
右の手に　持つは桜の花
孫の手に　作られにしか
老人の　一足ごとに
面白く　動きうごくよ。

東京　よれ子

若葉綠深く、

二色の御橋は、
氣高き姿の、
曙引きまして靜々と、

筑後　黒田滞江

花野めぐりてさゝ川の
神に通へる胡蝶子の
女神の輕くたわぶれに
蝶の翼のさと揺れて
蝶よ眠れの守唄に
夢あたゝかき陽炎かな。
花の小枝をゆすりては
もつれ舞ひ行く二羽の蝶。

○綠の影

靜岡　松下華仙子

若葉背葉の一葉ごと、
さら／＼雫こぼれては、
朝に淸爽此こに得て、
薫風さつと音づれば、
歌に興ある綠かげ。
身も輕ふ覺ゆるを、
夕に慰藉をもたらして、
　人の子皆を數ふなり。
夏の初めのみ光を、
　綾に美々しく照り返す。
濃綠淡綠とりん／＼に、
　繁りあへるも面白や。
詩集を持ちて只一人、
　濃綠の中にさまよへば、
神靈かあらぬか白鳩の、
　飛ぶも可愛いや木々の間を。
靜かに手をば胸にして、
　瞑想すれば百千々の、
靈玄美妙は更も／＼に、
　小さき胸を衝く、しきり哉。

○暮れゆく春

越中　久世ひで子

暮れゆく春の、　名殘りとて、
紙につゝみて、　わぎも子の、
過ぎゆく春を、　とゞめんと、
葉の綠世は、　今こゝに、
散りにし花の、　一ひらを、
贈り來しけり、　此の夕べ。
櫻花の下にて、　袖ひけど、
來し夏の山、　蟬ぞなく。

○雲

四谷　山中芳子


山寺（選外）　安藤君子

諸なくもだえの夕暮や
高き御空にたゞよへる
黄金薔薇色五彩の
小窓の日覆引きよせて
紫柑色紅や
奇しき彩雲見えたるなり

○火事の夜

播磨　土井一子

餓におこる鐘の音、
月いま失せし桃の頃、
おゝ火の神は怒りしか、
吹く山風につのりきて、
南の空は赤うして、
かけゆく人のいと多き。
塵の世いかで救はめと。
炎は天を焦すまで。

○青葉が下

京都　權木きく子

青葉涼しきみどり樹の、
木蔭の下にわれ一人、
采あみつゝ佇みぬ、
さしも永き春の日も、
四金色にそめなして、
漂う蝶の色のかず、
都におはす懸し君、
さても戀しの其の君へ、
摘き采送らんか、

○鐘樓守

岡山　林[illegible]野

夕日に榮ゆる山寺に、
散り行く時を願くば、
春霞めきてさく花の、
我鐘守とならむかな。

○若　草

福島　三浦きち子

思ひもいつか、　萌え出づる、
口に言はれど、　心には、
身は若草の、　はづかしく、
戀しき人の、　摘めよかしと。

○うたの主

羽後　鈴木しゆん子

春の日長く日は暮れて、
節面白き二人づれ、
行きかふ人の音もなく、
松原遠く人の影、
夜道を馬子の歸るらむ
馬ひきうたの聞ゆなり
しづかに春の夜は更けて
うたの主やそれならむ

常陸　榊原　ゆき子

○いづみ

樹蔭の清き泉べに
旅人の荷をば下に置き
日影しづかに薄れ行き
はや夜の雌におほはむに
聖き泉の水の面は
心徐かに弱き身の
遊に倦じ子はせどに
還きかへりを待つならめ
夏の山路に疲れたる
渇ける咽喉を濕ほしぬ。
赤、紫の彩雲は
なれ何思ふ、うなだれて。
羽ある神をみとめつゝ
犯しゝ科罪を悔ゆるにや。
優しの笑は夕げして
なれ急がずや家路にと。

志摩　立神　誉子

○暮春の歌

はら／＼と散る花片を
追ひ行けど止らぬ花は
かなへ舞ひ踊るてふ
惜みてや追ひゆく胡蝶
あれ見よや泥にまみれぬ
其羽根や花にふれけむ
吹く風や花を誘ひし
一ひらは里の小川に
蝶のため止らずして
又もちる三ひら二片
情なき小川のみづは
何處までも遊び去るらん

岩代　丹治　はるみ子

○虹

夕立霽れて夕まぐれ
緑や、赤や、むらさきや
橋ぞかゝりてやう／＼に
東の空に美麗はしく
幾つの色に彩なせる
消ゆく様ぞ貴とかる、

滋賀　辰井　雰子

○乘魔殿賦

此處暗黑の乘魔殿、
邪も懊悩も憎悪の、
邪欒深かき人の子は、
幻影追ひて深か入るよ、
《浅間しい説や文明は、
盲いて狂ふ人の子を、
身の毛もよだつ汚穢をば、
冷扉開きて待つ夜半や。
叫び悲び狂ひつゝ、
呪咀嫉妬等扉を閉鎖ぬ。
果敢なき榮華餌にして、
大魔王の犠牲となさしむ。》

陸中　森　森子

○春のながめ

優しきエンゼルの佐保姫が、
雲井はるかに雲雀子が、
胡蝶は羽衣かろやかに、
織るや自然の花むしろ、
美妙の樂をかなづれば、
舞ひの手振のをかしきよ、

麹町　山下　宮子

○眠る胡蝶

毒ある花の香に酔ひて、
うつくし戀のさゝめ言、
花瓣ゆりて過ぎにけり
眠れる雌雄の蝶々の
新たしと見けむ微風の

大分　吉富　とめ子

○乳母車

菫花咲く丘の上に、
天父の瞳静かなる、
夢天國に遊ぶ如、
棄捨てられし乳母車、
春の光りを身に浴びて、
睡れる稚兒の愛らしさ。

駿河　あ　き子

○朧月

水を渉りてつま琴の、
この朧夜をもてあそぶ、
小簾捲き上げ見渡せば、
花に光りをゆづりてや、
調べも妙にきこえ來ぬ
主はいづこの誰ならむ
軒端のくもと咲き匂ふ
かすむもゆかし春の月



和歌

佐々木信綱先生選

白菊

月ふけぬいまはとてざす柴の戸に夜霧ぞ香る白菊の花　安房　代　信子

○筏士が雨にぬれつゝ下りゆく川添ひ一里山吹の花　弘前　佐野みどり

○亡き人の棺送りて歸るさに驚きゝぬ藪かげの道　豐前　紫女史

○家問へば里の翁は手なぞこに煙草はたきて桃の門さす　千葉　鈴木文子

雨後鶯

雨はれて朝日こぼるゝ春の山のぞけさうたふ鶯のこゑ　深川　前田紅梅

○春野十里夕日匂ひて花はえて馬子も行くなり蝶も舞ふなり　越後　桑野ふじ子

○これやげに天つ御神の靈ならむ朝日に高き雪の大富士　新潟　桑野なか子

○實朝のうらみの段に我れ立てば風そよと吹きいちよの葉こぼる　深川　水谷湖子

○みやしろに詣づる人の影たえて石階の邊に白鳩遊ぶ　紀伊　保子

春の隅田川

春風に片帆の船のなみゆるく下る隅田の水清きかな　深川　勝邊三千代

○七彩の虹に光榮ある夕べ野を綺羅の天國にきみとゆかなむ　下總　大崎範子

山里の春

なか／＼に眺まさりぬ山里もかすみたなびく春の日の來て　姫路　松下露子

○戀に泣きし若き尼君桶取りてあかや汲むらん梅の下陰　陸中　中澤まつ子

○さらぬだに一人旅路は悲しきにやみ居る身の如何にかはせん　羽前　豐子

若葉

尋ねきて見ればゆかしや君が家は青葉若葉のその奥にして　日本橋　秋水女史

○やさ桶に赤裳の乙女鹽汲むと小走しる濱ののどかなり　仙臺　櫻木かつ子

折にふれて

病む母をみとりの窓に妹のいかに見るらん春の夜の月　秋田　智惠子

手紙を受けて

淺からぬ君が御文の身にしみて袂をぞぬらす燈火の下　西多摩　坂本貞子

○簑笠の一つ吹雪に消えゆきて蛇の目のかさのまた一つゆく　本郷　靜子

○とりて見つまた取りて見つうつし繪の戀しき人の笑顏なつかし　芝　芝野水江女

○やる瀬なき思ひを君がうつしゑに語れど影はほゝゑみもせず　熊本　中村さわ子

遠山霞

越中　中居綾子

見わたせばをちのむら山高峯よりふもとをこめて霞たなびく

○　三河　しな子

うつくしき花に心の色みえてまことうれしき君の繪葉がき

○　備中　稲本千惠子

鶯の鳴く音たよりに消えのこる雪ふみわけて君を訪ふかな

○　信濃　美子

母います門の別れのたゆたひにさらばの聲のあゝ低かりし

冬月

陸中　清野あき子

心あらばたづねても見よ山ざとのかきねにかゝる冬の夜の月

○　豊後　紫せん子

姫君のそゞろ思ひにあこがれて小さきかひなに小さき筆持つ

○　新潟　ゆき子

君のたびししをりの紅のふりもせでうたにねたみのかずおほきかな

梅

府下　森田志満子

鶯の宿りとなりし梅が枝にいつの程にか月はかゝれり

○　長門　長井文子

美しき兒の夢にも似たる春の宵琴のひゞきに桃のはな散る

○　紫蝶女史

夏川の岸の月花松の影涼みの船をいづれによせむ

○　京橋　藻の花子

赤に白に色美しき桃村にゆるう流るゝ獅子舞の笛

○　好月子

いつはりの多き此世に君のみと頼みし我はおろかなりけり

○　長門　三浦直子

物の怪の襲ふと見てし夢さめて丸行燈の光さびしき

○　小石川　佐川貞子

小雨やみて月おぼろなりたらちねのおくつきどころ白椿落ちぬ

○　上総　永野あき子

たれこめてかみは亂る枕べの花散る音に夢をやぶらる

○　京都　花雪子

庭の面はけどもく時ならぬゆきは積りてとくる間もなし

○　日本橋　栗山紫柳子

詩の興や春の光の野にみちて君ます方へ雲流れ行く

○　鹿児島　霞舟女史

牛追ひてかへる山田の賤の男もしばしやすらふはなの下路

○　大阪　後藤ふく子

雄々しくも馬引きかへせし幼武士が桃絲威の鎧ふりたり

○　播磨　濱本綾子

白酒の醉をさますと椽に立つ妹の頬に桃ちりかゝる

○　三重　片山よしゑ子

菜の花のあなた五重の塔見えて雌蝶雄蝶の西に飛び行く

○　愛知　成田いし子

なんとなくたゞ嬉くて悲くてさて語らはんこともなかりけり

○　京都　角井琴子

春の野の月の鏡は曇りけり笑へる山の息やかゝりて

○　福岡　筑紫峰子

はき清め人手になさぬ我庭も春にはかさむ心まかせに

○　[illegible]子

○秋草の招くまに〳〵ひろひ來て見れば思はぬ宮人の園　府下　森田喜代子

○梅かをるおぼろ夜毎にたらちねの母の臨終ぞ思ひ出さるゝ　吉野　中四久子

○暖かき春の日影を脊にあびて南縁の端に黒髪ぞとく　越中　彩桂子

○家内九人圍居の中に稚子一人ちどり歩みに笑ひさゞめく　伊勢　冷子

○馬子唄に戀しき友の夢さめて何れなるらん見る影もなき　津市　和山たけ子

○みいくさに貢ひしいたてはいえはてゝ殘るは得たる春なりけり　下關　山本花子

○晴れ渡るみ空にかゝる宿もなしいづこか月の住家なるらん　尾張　とよ子

古寺梅

○荒はてゝ幾年月を古寺の軒端淋しく咲く梅の花　伊勢　松枝たけ子

○うす月夜馬子のひな歌聲ひくゝ堤のほとり櫻散るなり　備後　木村靜子

○舞姫が紅梅のれる小傘さして鼓の師とふ雨の下京　鳥取　田子貞代子

○朧月木立のもとにそめば花の香送る風そよぐなり　大分　百留むら子

○舞ふ胡蝶うたふ雲雀の影消えて片野しづけき夕ぐれの月　熊本　本山緑子

○雨細きうらの柳のうなだれて若葉けぶれるうす月のかげ　滋賀　脊山文子

○世のちりをよそにはらひし山住の心の奥も涼しかりける

○打ち拂ふ涙の袖に浮くばかり花ちる窓を脊にしつゝ　福岡　上原かめ子

○かきつばたゝが世の春のゆかりにや昔み忍ぶ色に咲けるは　富山　金森かの子

○村はづれ霞みて見ゆる萱ぶきの軒の緋桃の春日にもゆる　羽前　むらさき子

○雲雀鳴く薹が岡にうなゐせる小猫の耳に花散り亂る　備後　白露子

○おかむろの遊べる子等のふりわけに眞靈しづかに花散りかゝる　信濃　光子

○きみ逝きていまだ十日もたゝざるに形見の指輪ゆるくなりけり　岡山　すみれ子

○故ありてつれなく言ひしわれとても血あり涙あり許しませ君　常陸　戸田翠馨

○白鳩の人戀しげに寄添ふを胸に抱きてそと接吻けぬ　越後　中村淑子

○莊厳の伊勢の宮居や朝明けて神靈覺ゆる神主のうた　土佐　春姫

○天地のわかき旬につゝまれて歌へば霞む野雲雀の聲　神田　秋星

○森蔭に友と別れし心地してひとり雨聞く春の宵かな　越後　玉野刈萱子

○上は衣春の花見に誘はれしつけし糸をぬくぞ媚しき　上総　永野秋子

○　紀伊　きく子



讀書（選外）備後　白流

山寺の鐘の音遠く日は落ちて夕べ淋しく雪ふりしきる　羽後　阿部花子

○

さげ髪を扇に結ひし梅の朝鶯なきぬ給菜夜寄きぬ　福岡　淺川枝子

○

鶯に今朝も春の諧聽かされてまたあたゝかう夢に入りにし　紀伊　泣月女史

○

杜鵑一聲もらせ忍び音にわれもうき世の月に泣く身ぞ　羽前　こま子

時鳥

夜もすがらまちにし甲斐も有明の月に鳴くなる山ほとゝぎす　博多　六つの花

立春

梓弓は來にけりとうぐひすの軒ばの梅になくぞのぞけき　備中　稲本千惠子

○

昔我住みにかやどの紅梅の人待ち顔に今ぞ咲きける　宇都宮　金澤保子

庭新竹

おもしろく月さしのぼる丸窓に影をうつせる庭の若竹　横濱　豊岡末子

○

車井の水くむ音の遠ひゞき太田の山家靜しづかなり　岡山　日置高子

○

駒いくつ公達すぎし玉川に山吹黄なる夕月夜かな　伊豆　勝又つかさ子

○

久方の月のかつらの匂ふまではなの雲の掛りてしかな　岐阜　木村あさ子

○

諸共に眺むる嬉しもろともに雲かとまがふ櫻花哉　名古屋　大塚すみれ子

糸櫻

方すみ引くてこな姿の糸櫻匂ひは峯に亂れ咲きけり　駿河　櫻井富佐子

野遊

都より訪ひ來し友と打つれて今日も樂しく菫つむなり　青山峰子

○

おぼろ夜につくばへかたへ友と我灯の方にひなのもれみゆ　長野　飯塚ぎを子

○

人の身のあすさへしらぬうつせみの浮世かなしもをみなはゆきぬ

梅

空はれて風も靜かに梅の花ほころぶ枝に鶯のなく　滋賀　たまを子

○

昔誰人の住みけん跡か破れ垣の古木梅鳥なき渡る　千葉　星野きぬ子

○

寺の鐘おぼろ〳〵と聞ゆなり小羊眠る若草の丘　東京　しげ子

○

こぞ行きし燕は軒の巣につけどうせにし友はいつ歸るらん　岩代　紫苑子

○

明け方の月は瀞れて紫の江に添ひ眠る柳の小村　尾張　惠子

餘寒

若菜つむ野邊まださむし遠かたの高嶺の雪を風や吹くらむ　四備　文華子

○

今日は野路あすは山邊と花摘みし妹れむりて春暮れにけり　新潟　本間みよ子

○

老ひませし母をたすけて故里に梅をながめし時もありしを　美作　性全紫史

○

つめる花を手にして眠る小女子のかざすリボンに小蝶たはむる　上野　佐藤靜江子

○

おばしまに立ちて彼方を眺むれば梅ヶ枝近く鶯の聲　三河　岡野みつ子

柳風

春風のさそふまに〳〵あらそはてすがたやさしくなびく青柳　越中　中居綾子

○

衣うつ入江の村に日は落ちて暗をながるゝ水の音かな　石川　八幡むら子

○

供伴れて片町過ぐる美き人の絹張傘にはるの雨ふる　山形　高梨とく子

月下花

月ばかりさすと思ひし窓戸より庭のさくらのかをるよは哉　駿河　古山秋子

庭梅

池の面に梅の笑顔はうつれども鶯おそし新春の風　秋田　篠舟子

○

羽後　菅原花枝

春の日や若き徒のうたゝ殿にそと着せまつる紫の袱布
○　兵庫　百合子
語らんに寂し友なきこのわれを慰めがほにうぐひすの啼く
小島高徳　岩代　松山　薔薇
君がため赤き心をさくら木にかきし言の葉いまもかはれり
○　秋田　黒丸ＢＮ子
野分して山路野路なる女郎花撫子ちりて世はいまつくろ
月　大阪　武藤てふ子
塵の世をよそにのがれて天つそらこゝろもたかくすめる月かな
○　攝津　金谷　たかゑ子
なつかしき父母ゐます故郷の妹がめでにし梅も咲くらん
○　茨城　天谷　雅子
はけば散り散れば亦はく庭小僧箒はなさず日は暮れにけり
孤島北風　北見　だんすゐ
雲はやき夕べの空の風寒むし枯野の里の秋の夕ぐれ
○　北海道　水野　蝶子
懐かしき君の寫し繪見る毎に思ひ出して昔し戀しき
○　石見　三明　糸子
冷虫の聲もとだえて萩の葉に秋雨しきる夕暮の窓
○　靜岡　望月　秀子
取る手火と思ひしものをやみの夜にやみ／＼すつる君ぞうらめし
○　三重　高山　多花子
霜の朝雨の夕もいそしみて龍のあぎとの玉とらまし
○　平子　蝶子
とく出てゝ來なけうぐひす我が宿の軒端の梅も汝をまつらんに
○　攝津　和久　蕗子
草の戸に鼓の遠き朧月夜京にうまれて尼と成りにし
○　徳島　桂　清子
はる／＼と海原遠く漕いてゝ月のみやゐに小舟すゝむか
○　徳島　山本　夏子
今日すぎてまたとかへらぬ春の日ぞこゑを限りになけや鶯

○　靜岡　みどり子
絲遊き春の野徑を辿り行けば胡蝶眠れる花の宿かな
春月　秋田　小笹千代子
高どのゝ謠の聲もとだえして花にふけゆく春の夜の月
○　神奈川　ゆたか子
佐保姫の霞の帽子も今朝解けてしら葉を染むる春のなかだち
○　岩代　丹治　はるみ子
菫さく山田のあぜをとぶ蝶の羽袖重げに春雨ぞふる
○　高尾　仙女
短册に今歌かきて梅が枝につるす彼方に鶯の鳴く
○　伊勢　守岡　みちを子
撞きをへて鐘樓下る若僧の袖に花散る夕間暮かな
○　宮崎　花田　春江
いや深き文の林をわけ入りて月の桂をいつか手折らむ
杜鵑　備中　四田　紫陽
ほとゝぎすすき橘の香をとめてなくぞむかしの人や戀しき
○　上野　佐藤　露子
菜の花にとり殘されし小川づたひ右は桃咲く古里の道
○　播磨　哲子
初日かげ大路行かふ西東しらぬ中にもほゝ笑まれつゝ
○　長門　益田　式子
菫咲く野辺の霞のたもとよりけふもほろ／＼春さめのふる
○　伊賀　木津　きみ子
野がへりのお花與作のむつびごと桃の花ちる川添の村
○　牧野　隆野　たか子
夕暮に母の御墓に香たけば手向けし椿風なきに散る
○　常陸　石崎　霞洲子
ほの／＼とあづまの空の白らみ行きて花野にゆらぐ明陸奥の鐘
○　伊勢　乙部　野菊子
妻こふる鹿の遠音の絶えてより月は冴えたり山かつの唄
○　奈良　藤田　そめ子

いかばかりいろはよくとも姫百合の仰ぎてさくはすさまじきかな
○ 栃木 安藤ゆり子

梅かほる月もさし入るおばしまに歌やよむらむ君は今ごろ
○ 無名

祝つゝ米てふ文字を書そむる喜美は千年の初なりけり
○ 伊豆 渡邊仁輪子

何となう哀れさくらの咲くもがなむかしはべりし主はいかにと
○ 群馬 飯塚美起子

緋桃さく岸の小家に雛なきてゆめさながらに白帆かすみぬ
○ 仙臺 宮森かる子

朝ぐもり櫻花ちる山寺の鐘は霞する里より里へ
○ 愛知 小島品子

樓に閨燈の影淡くして小琴奏づる人愁あり
○ 佐賀 奈木佐小舟

我父は歸らずなりぬ雪の夜をあさりせんとて出て行きしまゝ
○ 岐阜 梅村いく子

霜をいて深山の紅葉色さみて野邊の草木も錦とぞなる
○ 飛驒 和田てい子

花も咲かず鳥もき啼かずみちのくは野もせ山もせ木枯すさぶ
○ 熊本 八並喜美子

何事も劣りがちなる身なれ共過ぐる月日は人並にして
○ 名古屋 水谷芳子

菫咲く野邊の景色はうらゝにて雲井に高く揚雲雀鳴く
○ 筑後 宮原みや子

鶯のおもしろき歌はたとやみて文よむ窓に梅の花ちる
○ 鹿兒島 福留たつ子

結ばれし心もいつか春風に解けて流るゝ峯の白雪
○ 飛驒 十六夜女史

何となく君なつかしき夕べかな庭の紅梅風なきに散る
○ 岐阜 田中悦子

朧がすむ埴生の宿の破垣にほの〴〵見ゆる夕顔の花
○ 米澤 樋口季春

高どのゝうたげのさやげしづまりておぼろ月夜の雨となりぬる
○ 豊前 中村直子

天に星人には戀の花さきて世はうつくしう春の風ふく
○ 筑前 涌志 志げる子

砂白き小松が原を一筋の小川流れてかきつばた咲く
○ 岐阜 野村輝子

春風に鶯なきて深山路は雪ところ〴〵花ところ〴〵
神戸 脇屋とみ子

菫
春の野に咲ける菫は女の神の愛のしづくの凝りしとも見き
○ 廣島 すゝき

月朧ろ里の社に忘れたる桃よ今宵は神と眠らむ
○ 石川 山岸靜江

うめ林平みなもと咲きまじる花やむかしのすがたなるらむ
○ 京都 中村治子

國のことのはばかり多くしてまことすくなき此世なりける
○ 茨城 大和田きよ子

花の野を見下して謡ふ雲雀の高さ争ふ人うらわかき
○ 山城 重松敏子

幸あれと孫をいだきて翁嫗桃の白酒くみつ祝ひつ
○ 福岡 近藤桃枝

春風
山里や百彩りし春の野を終日醉ふて童牛追ふ
越前 佐野よし雄

春夕
花かげに圓居し遊ぶ少女子のかざしにかほる野邊の春風
津市 六田猶な

歸雁
春雨はあられになりて紅の入日に沙む夕暮れの空
京都 花守

春霞たちてぞ歸るかりが音を花の雲井にとゞめてしがな
○ 奈良 坂上きぬえ子

人知れぬ深山がくれのいさゝ川清き心は神ぞ知るらむ
○ 廣島 楮女史

里の子が軍事するあけぼのに國旗ひら／＼朝日かゞやく

○　大和　まさみ子

姫ゆりの谷に花咲き谷に散り人に知られず朽ちんはなしき

○　上毛　いさゝ川

吹く風もいやくるひます世のなみも心ためすてふ神のすさびか

觀梅　神戸　谷山輝月女

なつかしき友うちつれて岡本の梅の園生に今日をくらしつ

海邊　香川　梅田靜香

沖遊くつりする舟のかずみえて濱の蜑屋に烟みちみつ

○　麹町　八代みよ子

身の爲めとやさしき父母を離れ來て世の味を今日ぞ覺ろ

○　伊豆　上原紅花子

いそばたに貝ひろはんと思へども畑打ち田打ちいそがはしき身は

紅梅　尾張　梅原浦子

高樓の箏のしらべの音たえて庭の紅梅ひとりちるなり

浦春月　大阪　佐藤しづ子

よる波の音もかすみて磯山の松かげくらし春の夜の月

○　三重　大里とし子

あし曳の山べは早も春立ちてわが庵ちかくうぐひすの鳴く

○　竹數夕暮子

今は只むかしを忍ぶ六波羅のそれならぬ身に花ぞ散りくる

○　信濃　小林れん子

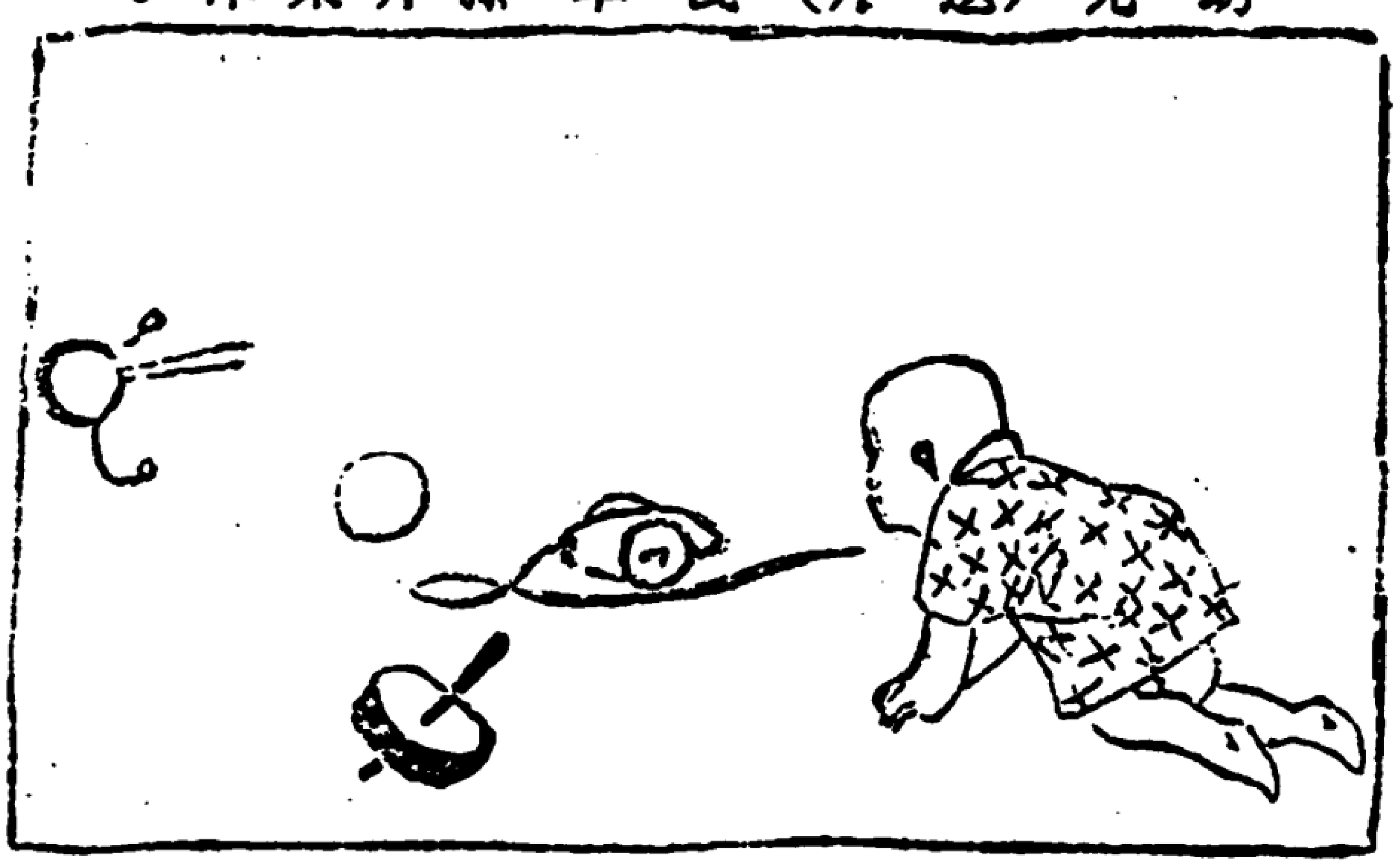
長しへに君がれむれる奥都城に手むけし花のよゝと散り行く

○　新田無名女

現身を包むにつらき藤衣拂ふも愛しや袖の涙な

○　大和　和田芳子

幼兒（選外）　淺草　藤井葉津子



夕日さす彩雲淋しよしの道旅僧の肩にさくら花散る

○　紀伊　佐藤作子

たちこむる霞の色も何となくにほひみちたる山櫻花

○　安藝　花澤とり子

降まで香ゆかしき白菊の垣に夕日の影斜めなり

○　下野　入江みさを

あさまだきまだあけやらぬ木の間より讀經の鐘の音のかすけき

花　下野　波多野まさご子

波の花碎けて去にし朝和に荒磯の濱に櫻貝散る

○　下總　嶺月子

初孫の生ひ先ごとか翁媼笑聲高し桃咲ける宿

○　茨城　小松崎つき子

駒ないて春雨寒き九段坂魂とふ尼に花ちりみだる

○　芝　岡田草園子

梅落ちて便とだえし山里に月かたぶきて時鳥なく

○　失名

短か夜のあくるもまたず朝顔の露の色こそ香にゝほひぬれ

○　秋田　大越靜子

うぐひすに夜は明けそめて朝戸くる音のよきかな梅の山里

春雨　鹿兒島　松永菊子

文窓に母の玉章讀む夕べしずかに雨の音をきく哉

山家梅　千葉　秋葉ふみ子

さかぬ間はとふ人もなき山里の梅こそ宿のあるじなりけれ

○　大和　翠溪子

なき母のみ魂や闇にまよふらしかたみ愛子の夜毎泣きては

○　大阪　嶋田ひろ子

幾とせか秘めに秘めたる君がふみとり出てゝ今宵またも泣かむか

神武天皇祭　大阪　金森よしえ

永遠に國のまづめの畝傍山たかき御稜威を仰ぐけふかな
○　赤阪　倉本やす子

花咲きて諸人遊ぶ春彌生孤影淋しく賤が家に泣く
○　京都　百合子

學びやに通ふわらべを見るにつけ文なき弟いかにかよはむ
○　呉市　木原梅子

亡き夫の奥津城訪へば草むらに鳴くすゞ虫の音もあはれなり
○　大阪　永田かすみ子

けふ十年乳母が家訪ひてうれしくもまた悲しくもたもと時雨れぬ
○　小川千里

時雨して芙蓉亂るゝ其夕小川の里の鐘低う鳴る
○　廣島　すみれ子

春雨の輕くはれてそ日は照りぬ霞は去りて花は亂れて
○　本所　林富士子

ほの〴〵と隅田の川の朝霞漕ぐ艫の音もゆるらかにして
○　埼玉　大木幸子

ほの〴〵と明けゆく空を見渡せばとほき野山に朝日かゞやく
○　伊勢　濵土きみ子

朧夜に館の襖開かれて姫君ひとり箏ひき給ふ
○　上野　伏島富天子

如何にせんたのみ〳〵し友垣に別れて後は誰をたのまん
○　埼玉　内田八重子

かすみきて眠れる富士の山つゞき君ます里の花ぞ戀しき
○　上毛　柳舍

にごり江のにごりにしまぬはちすばの消き心の花も咲くものを
○　丹波　奥村まさゑ

うぐひすののどけき聲は神代より春をなしふるならひなりけり
○　讃岐　片山ます子

坊ねよと歌ふ子守はいづこゆく小鳥さへづる桃の細道
○　福井　山田ふみ雄

もろこしの花の王なるふかみ草我がまがきにも紅こぼる
○　能登　千田星舗女

荒れはてし淺茅ヶ原は花なくて蛩猶ほ草に虫ぞ啼くなる
春　茨城　原田文子

最夜中に小池の蛙うきたつは小雨ふり出すしるしなりけり
○　淡路　伊藤綾子

島にすむ我や望のきざし得て京に出てけり梨月の夜を
平人　本郷　居波文子

君のため國のためにと散りはてしきよきほまれは千代もくちせじ
○　愛知　宮田久子

何となく心さみしきふる里の久しく逢はぬ人の戀しき
○　常陸　秋山蓮子

おぼろ夜を利根の川瀬に舟うけて笛の音流す風雅男やたれ
○　甲斐　矢崎玄泉女

ひめ百合の花にやどれる白露のちらまくをしも風な吹きそれ
○　遠江　中村まさ子

山寺の讀經の聲のふとやみて風なきにちる紅梅の花
鏡浦夜雨　安房　堀江貞子

夜の雨に音をゆづりて夕風をよそに名だつる鷹島の松
櫻　靜岡　紅百合子

夕風に散りにし櫻春のせて歸らぬ水に流れてぞ行く
○　紀伊　宗きぬ子

學終へて鄕に歸ればその昨夜果敢なく兄は我れを見ずして
○　長門　長井治子

戀もなく血もなき人の子なりせば君戀ふ事もなからむものを
尼に代りて　茨城　中西芳子

春に舞ふ蝶にかさむは花衣香あるこそよき苔のたもとは
消防夫　越後　たき子

春なからうすはだ寒むの霧の夜を火元めさしていさみ男の行く
○　備後　紫杜美子

登り來て赤き鳥居の見えそめて聞えそめたり太鼓打つ音
初雁　京橋　消泉子

村雨の晴れ行く後をおとづれて哀れ傳ふる初雁の聲

小石川　みさを

春

花に明け雲雀にくるゝ夕野みち星のえまひに夜のけとざして

○　大阪　田中落椿

もとよりよ人の情は知らぬ身の何今更に泣く事やある

○　徳島　住友時子

里川にたが流しけむ筏舟にあはれこてふのむくろのせたる

○　石見　千代延芳子

はゝ君のいたづきおもき枕邊に琴の音かなしあゝ小夜しぐれ

○　京都　山下なお子

植うるとき思はざりけりゆめだにも君に手向ん花となるとは

○　佐藤清花

春の日に笑ひし山も夏來れば啼きてうれしき杜鵑かな

○　伊勢　葉津惠子

また散りぬ二八の人の舞ひがてに衣にふれたる白桃の花

○　豊橋　鈴木かれ子

足引の山より山と分け行けば彼方に清しき川の水

○　四備　紫明子

君と共にまなびし庭のしのばれて櫻花ちる夕を泣きぬ

○　大阪　辻野よし子

春こずば泣かざらましを鶯の音にぞしのばる逝きし我が友

○　麹町　野中すみれ

露ふみて折りし撫子一本を君が詩集にそと入れ置かん

○　澁谷　一少女

母君は如何におはすらん此頃はたよりなき身に春雨かゝる

○　下總　野々宮せい子

よし叫ぶ我等の聲は低とゞ　ゝ眞心くみませほまれある君

○　茨城　板橋愛子

疲れては草にぬる子が魂子けて花野に舞ふか白き蝶々

○　鳥取　上山千重子

おぼろ夜や花とを琴に興湧きて立て舞ひぬと君わらはまし

石川　山岸靜江

短歌競爭

ひとつらにいつれおとらぬ舟見れば心ののらぬ人なかるらむ

○　山梨　鶴田美津子

なつかしき東風のまに〳〵賤が家の軒端に香る河ぞひの梅

○　失名

よべ下げし照手の姫は其のまゝに朝日に匂ふ今朝がうれしき

○　米澤　鈴木紅葉

細りゆく笛の音いとゞ偲ばれて霞に迷ふ朧夜の月

神戸　足立あさ子

水邊螢

花ならばいざせきとめて明日も見む水に流るゝほたる火のかげ

○　兵庫　柳田白百合子

かきならす小琴みだれて思出にたえぬ夕べを牡丹くづるゝ

○　越前　松原清子

清水結ぶ岩のほとりをさみどりの帷かゝげて姫百合笑ふ

○　秋田　光子

若菜摘む村の少女の花に浮きて空に雲雀の何歌ふらむ

○　安藝　箕岡壽々奇

虫の音に五年の跡の我となりて亡き妹思ふ春の夕暮

○　周防　小澤ちゑ子

なき跡も疑ひ故にをこるべし人の心を唯神と見よ

○　豊橋　富田つる子

草原にねむる野中のまへ後なにに追はれつ舞ふ胡蝶かな

○　鳥取　やま子

君やむと知らせの文とうつしゑを片手にもちて只一人なく

旅路

陸中　菊池はせ子

なつかしき花の故郷ふりすてゝ旅路の今宵君を夢みる

○　陸前　秀月子

緋桃咲く川添堤過ぎ行けば桑の花かほる乳母が家里

○　下總　武田つれ子

涙の上に光り匂ひし望月の霞み消えけり松原の里

○　大分　工藤たまき

日は暮れて人影絶えて風やみて菜の花三里月おぼろなり
○　茨城　星の舎渓舟
水馴竿とる手に桃のはな散りて船ははなれぬ湖添の村
春山　岩代　萱女子
咲く花の一木も見えず徒づらに尋ね入にし春の山ぶみ
○　伊勢　きみ子
まさきくて在せと愁につとよれば君も泣くなり吾もなくなり
○　大阪　ひろ子
世を捨てつ世に捨てられつ捨てし身のなど捨てかぬるおもひなるらむ
花月袨　岩手　綾子
月ふけし並木が岡に犬吠えて櫻の影を踏むひともなし
○　弘前　崎野松江子
秋冬の七歳の月を駒として今ぞ別れの汽笛一聲
○　深川　伊藤芳子
なしめどもなごりはつきじ行春の蝶の夢路も今朝やさむらむ
○　京都　鈴木しゆん子
やるせなき君と別れの島はづれ岸うつなみや秋風のこゑ
○　京都　大橋志な女
屋ひとつせまきみ空にあらわれて梅が香高き谷あいの道
○　河内　美奈志子
夕靄のかげ定まらぬ湖に立ちておもひは遠し故郷の空
○　名古屋　原田こと子
おくつきに花をたむけて行く人の切りさげ髪のうら若きかな
○　岩代　大内民惠
年頃ののぞみをとげてなき父のはかにまうづる時のうれしさ
○　紀州　阪本春子
打つゞく菜の花道は霧はれて菅笠一つ見えつかくれつ
○　芝　須田えい子
夜寒さにふと目さむれば母君は傾く椽に衣うちます
○　呉　いち子
湯の氣湧く谷の細道こゝに絶えて深山がくれに時鳥なく
○　高崎　春野ゆき子
すみれ野や齋の宮はあとなくてふりし碑の上に櫻花ちる
○　京橋　あふき
見渡せばつりする人も影絶えて波も音なき春の夕ぐれ
○　常陸　酒葉つれ子
ほのぼのと霞にあけし山寺の眞晝靜かに櫻花散る
○　埼玉　大野こと子
遠く近く尺八の音や琴の音や土橋の柳月招くなり
○　高槻　赤松奉牛子
野遊や乙女が友と手をひきて花摘む里も戀しかりける
○　岩代　佐瀬不二子
何氣なく裝ひはすれど色に出てそれと知らるゝ面羞かしき
○　越後　砂井正子
しめやかに亡き母語る夕間暮おもひて多き春雨の降る
○　德島　坂野ふみ子
淡霞む奈良の大野は鐘ひくう夕日靜かに朱の色して
○　南總　關よし女
胡蝶飛ぶ岸の蘆に風見えて音なくよする池のさゞなみ
○　群馬　君代
峯は霧谷は氷にとざゝれて北風さむき野寺の夕暮
○　小石川　佐川良子
われのみの學びおえぬを故里にまつたらちねやいかに老ふらん
○　筑後　黒田なみえ
ふるさとの空を彼方と眺れば雲のちぎれに鴉飛び行く
○　淺草　翠花女
晝の鐘うつくし花の香をこめて春風そよぐ京の寺々
○　常陸　石崎きよ子
朽船に鶺鴒なきて日は落ちぬ暮色ながるゝ湖添ひの村
笛　熊本　本山きくえ
朧月桃の花散る樓上に浮世忘るゝ笛の音ぞする
○　上總　渉羅子

汐干狩る子等は磯に霞みゆきて陽炎もゆる磯のまさご路
○　函館　小野　さゝふれ

ゆめならて訪ふかげもなきまゝにくるゝうれしきはなれ島守り
○　羽後　伊藤　鶴子

行く春の水に鳥籠洗ふかな雛眼児の逝きし雨細き朝
○　下総　石原　さだ子

春雨の音も静かに黄昏て一人居佗し山里の庵
○　下総　山田　政子

去年うゑしねしはいづこにゐますらむあれたる庭に櫻花咲く
○　愛知　阿脇　政子

落梓（選外）本郷　菅原　春子

かせにのみまかせむよりは庭さくらこゝろのまゝに折てかさゝん
○　備後　市岡　まさ子

見送りてかへるさ物淋き露小路ぬれし秋の又絞らるゝ
○　宮城　上田　春子

曇りなき心の月を先きにして浮世の暗を照してぞ行く
讃岐　こきん

北山の雲をたづれて夕ぐれにふる巣こひしとかへるかりがね
○　埼玉　岡埜　みつ子

母君の病癒とて日々にまさきのかつらかけて祈らむ
魂まつり　　都筑　村田　たけ子

から国のつちとなりたる我せこは今日のみまつり如何に聞くらむ
○　伊豫　ゑき女

春雨ののどかにそゝぐ窓によりて歌詠しますか美しの人
○　松山　よし坊

野すゝきのまねくほとりに花蝶がいとし子見えて日はなゝめなり
○　富山　久世　幾子



鳥が鳴くあづまの旅のうきことをわすれてぞきく鶯の聲
○　豊後　汀月子

草の葉におく白露を友としてすかる螢の影ぞ凉しき
○　さくら子

嫁きます君が黒髪島田髪かなりゆかしき嬉なる日かな
○　麹町　淺井　露子

糸柳の小雨にけぶる夕暮を蛇の目小傘の人なつかしき
○　兵庫　佐藤　惠子

吹く風にたゞ一言を頼むなり花ぞ散らしな大和櫻の
○　德島　阪野　白露

蟬なきて汗に苦しむ夏の夜も笛の一音に忘れやはする
○　群馬　横田　君代子

鐵こえて松原越えて今日もまた櫻たつれて暮しけるか那
○　金澤　山田　政子

なつかしき妹が家の日じるしの喬櫻咲き初めにけり
春暉　千葉　珠洲　喜哲子

ありあけの月はかすみて咲く花のおくよりしらむ春のあけぼの
○　米澤　釜屋　まさ子

山の上の古き伽藍のみ佛に凉なまゐらす若楓風
○　茨城　秋山　きみ子

戀しさに君がみ名をばいく千たび入なき窓によびてみにけむ
○　信濃　本山　千代子

七重八重あるべき花をよそにして一重櫻のひとへうれしき
○　星野　仙子

語らはん君しあられば大森に浮世果敢なみ海女の子あはれ
○　四宮　中西　ゑみ子

むらさきの色香ゆかしく咲き匂ふ菫を摘みて家つとにせん　下野　たけ子

○

香をとめて花より花にうつり行く蝶のの心やのどけかるらん　南多摩　幸湖子

旅雨

幾度が顧る夜の明方に古里戀しく春雨の降る　埼玉　季園

○

老いませる故郷の母に仕ふべく今神の子は霞わけゆく　麹町　井水保子

春風

若菜摘む少女が袖を吹きにけり千草なでゆく野邊の春風　淺草　大沼さゆり

○

拒はれぬ思みだるゝ春の宵ねぐら雀のまどゐれたしや　茨城　大和田清子

○

鐘の音に夜はほのぼのと明けそめてあたり靜かに雞のなく　神戸　倉重千代子

○

はな咲かぬ所なしとや都邊は春こそことにたのしかるらむ　越後　春野すみれ子

○

小夜ふけて思ひにしづむ破れ窓に友のたよりか雁なき渡る　南湖院　なでしこ

○

若草の春しり顔にもえ出し野邊のあたりにすみれ花さく　熊本　上羽たなり

寡婦

契りおきし人はかへらず春くれてかきの山吹早や散りそめぬ　常陸　とし女

○

花の戸に雨しづかなるこの夕べ君がかたみの文くりかへす　伊勢　石垣はな子

○

なき君の手植ゑてゆきし庭の面の白ふぢの花風にさゆらぐ　越後　上野志摩子

○

來世の行き先しれぬ花園に今日も迷へむあほれもろ人　兵庫　中西ゑみ子

○

戀しき菜の花つゞく春の野にふし面白く百千鳥なく　新潟　岩瀬政子

○

十三絃朱絃は叔母の京土産紅梅咲きて今朝も彈くかな　埼玉　月一庫子

○

たらちねの老のこころにまつならんわざなしおへてかへるわがみを　八王子　中村かれ子

○

山深みさくらはあれど母君の我が世にあらでさびしきよ春　野島　和田與志子

○

雨はれて榛名の嶺ににじたちぬ夏の女神やいま降るらん　北豊島　小川しげ子

春朝

牧の歌に小草若芽の露ちりて霞にむせぶ小羊のこゑ　大和五條　花橘

○

春雨櫻ちり散る花小路若き尼僧の傘さしてゆく　岩代　芳江子

○

そのむかしますら夫醉にし小松原辿らばいかに梅雨のふる　津輕　加藤美枝子

○

風にのみまかせてはなをやらじとやうかぶる池のこころなるらん　上毛　眞砂かつ子

○

あけぼのゝ逝く春風に送くられて東五十里京にゆくかな　群馬　關口はつ子

○

ふるさとのたらちね戀し妹こいし鐘の音きく春の夕ぐれ　羽前　泉子

暮春

もの思ふ夕さびしき春雨に思への糸もいろましにけり　美濃　白百合

○

さくらもち賣し掛茶屋戸ざゝれて青葉にくらく春はくれ行く　上毛　磯雅井露江

○

姉は畫に妹は歌にとほゝゑみぬ山吹小窓雨はれし朝　新潟　中林ひで子

○

何となう戀しさ覺ゆる夕まぐれ小窓によれば花みだれちる　下總　齋藤たか子

春野

しづしづと流るゝ河に竿たれてわれ願はくば渡守とならむ　埼玉　石田夢子

○

里の野路きよう流るゝさゝ川に優しすみれの姿うつせる　常州　川並はくゑ子

○

歸きてかへれまたんと父君の御言葉あれどその父逝きぬ

岩代　松山蕾薇

暮春蛙

山吹の花もながれてゆく春のとまらぬ水に蛙なくなり

西宮　中西ゑみ子

○

姉君のいたつきいえてきのふけふ南の窓に鶯の鳴く

羽前　釜屋まさ子

○

草臥ひてかへるあぜ道たそがれて水田に凉し小蛙の歌

越後　春野すみれ子

雁

なか〳〵に思出多き夕まぐれ今日もなき行く一つらの雁

越後　白菊子

○

いくさごとあるはすまふとひれもすなたはるゝこらの夢やいづこを

尾張　井口と代子

○

淋しさにしいて冷たき心もたばいよゝ淋しくならむとすらむ

紀伊　村垣靜子

○

戀しさの友まちわぶる此の夜半を月高うして雁なき渡る

澁谷　いく子

新樹

吹く風もそまるばかりに見ゆるかなにはの木立の若葉しげりて

新潟　岩瀬波子

○

櫻川戀のお牛が死してより夜な〳〵な春は人魂とぶも

上毛　和田末子

○

花園の夕べを霞とざしけりやさしき人の戀もらさじと

山田　小林敏江

○

人知らぬ木のはがくれに身をもやす少女の戀ににたる螢よ

大分　後藤たか子

○

朝日さす葉櫻蔭の墓の辺に豐後なまりの夫戀ふ唄

播磨　富原愛子

○

道のべにかず〳〵咲ける夏草のいづれかざゝんなでしこの草

西播　土井一子

○

山ふもと蛟龍おどる淵ちかき翁の家に桃の花さく

北信　井原久子

○

すみれ摘む子等は歸りて夕まぐれ里川つゝみ春の雨ふる

長野　藤井鶴子

○

妹の逝けるゆふべの丸窓にみ空の星をこひ渡る哉

周防　石田八重子

○

寧しらにわがたつ園の夕暮や君來まさぬに桃の花散る

陸中　若生すみれ

○

なつかしき土筆たんぽゝ薫ぐき人待ち顏に咲きにほひけり

うた子

○

あふち咲く門に栗毛の駒とめて烏帽子かたぐる若き公達

三河　細田つる子

○

一聲にふと夢さめて窓押せば雲間に淡き有明の月

下總　佐久間よし子

○

うたげして歸る夕べの道すがら思はず迷ふ花の下道

小倉　白石光枝

○

筆とりて戀の歌をかゝんとす其の歌ならず筆折りすてん

濱田　三明志ゑ子

○

形見にと聖書かはして人分ける濱田の浦のなづかしきかな

鳥取　米原かほる

思ひ出

人すれて琴の緒絶ちし春の宵櫻亂れて小雨となりぬ

攝津　入江とし子

○

弟が世をふり切りて瀧の面を眺めて咲つるすさまじきかげ

弘前　佐野みどり子

○

捨てし子の泣く音にそゞろ見返れば三ヶ月低し野川大橋

京都　木村あさ子

○

黄昏に窓を打ち開け眺むればさしも向ふに夕燒けぞある

福岡　星菫女史

○

樵夫等の恐るゝ谷のかけ橋を月にうかれて渡る夜半かな

上毛　新井すみれ女

○

我が窓におく春月の影さびて今宵靜に櫻花散る

筑前　菅落花

○

旅に病むで漫ろ煩悶る春のくれ若葉の雨に語る人なき



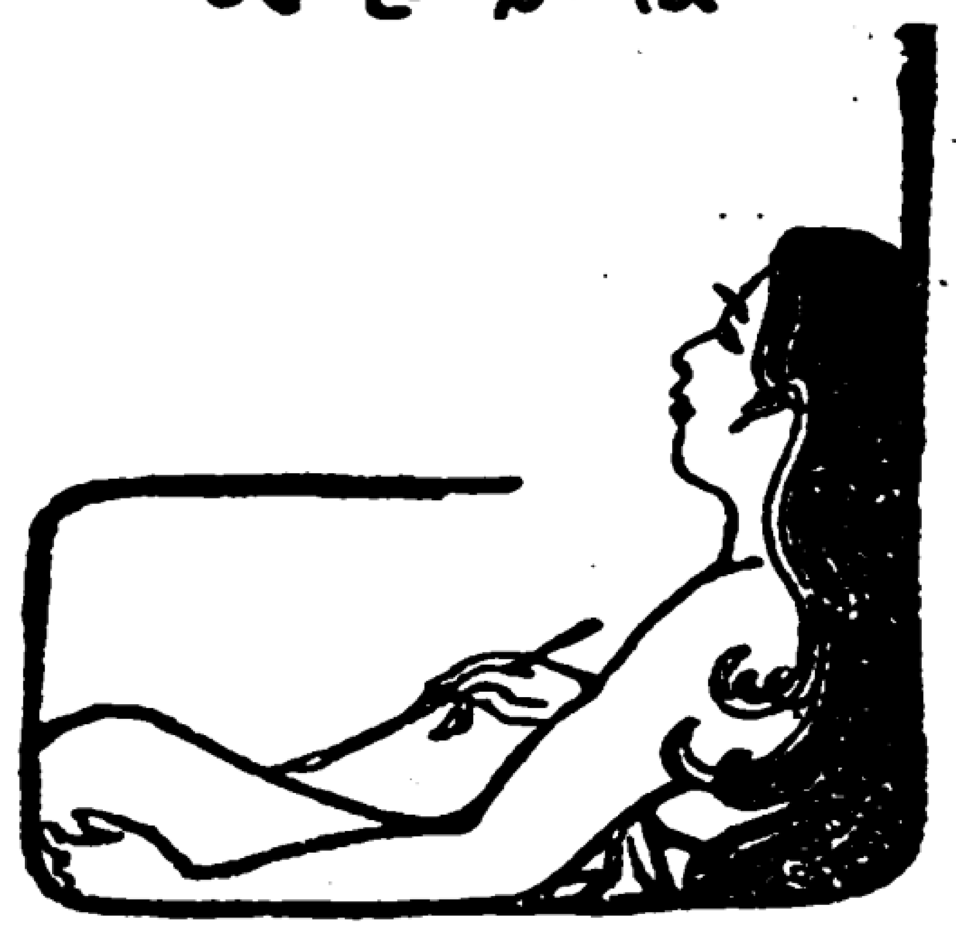
巖谷小波先生選

俳句

行く春を窓にまどろむ歌机　伊勢　四山しげの子
林檎切つてナイフを皿にならしけり　大阪　季子
迷ひ子の行くよ戻るよ朧の夜　伊勢　村山つね子
春の水柳のいろに流れけり　下總　野々宮せい子
桃の里墨繪のやうに暮れにけり　愛媛　重松壺子
春の水城をめぐりて流れけり　陸中　及川なつ子
床の間に達摩默して白椿　堺市　かすみ
山蟻の木の葉にのりて流れけり　横濱　落花一片
まゝごとや杉菜切る子の姉じや顔　岡山　横山きよ子
紫陽花に忍びの車まいりけり　奈良　西湖女史
機を織る緋桃の窓の暖き　伊賀　八尾德子
神鏡に櫻咲きけり多武の峯　伊賀　山崎露子
紅梅や忘れし戀を再す　下總　美智子女史
春雨に二人ぬれたる日傘哉　新潟　岩瀬政子
松の花柚の寢顔にこぼれけり　弘前　佐野てる子
月二ッ見ゆる座しきや川岸の家　讃岐　ふみ子
春雨に櫻の散るや仁王門　豐後　森てつ子
世の塵に染まぬ噂や初ざくら　信濃　山浦楓月子
夕陽や牡丹くづるゝ奥書院　長野　飯塚ぎを子
十里來て日はまだ高し春の山　横濱　琴子
十八の齢かさねし雛かな　美濃　內藤みち子
鞦韆や揺られて尻打つ庭の隅　弘前　工藤作子
花の野に孝女のはかを見出けり　靜岡　高木せい子
菜の花や一ッ家ある後ろ前　常陸　花舟女史
春雨や鸚鵡に詩を敎へけり　秋田　伊藤幻子
柳盡きて涼しき丘の寫生かな　備後　池田華月子
風流に松植へ直す二月哉　豐後　後藤波子
鶯に針の手緩るむ四疊半　安藝　きよめ子
川で　洗ふ宿りや行々子　下總　長谷川しん子
雉子鳴くやひとり崩るゝ山の土　廣島　野澤八重子



はがき文



編輯局選

天

○私の理想

本郷區弓町一ノ二十五　朝井松子

家屋はさまで廣からずとも庖厨丈は大隈伯爵の四分の一位、邸内は凡て五百坪程で結搆、そこで私は養鷄を盛に行ひ傍ら、林檎、無花果、苺、等ジャムに成り相な果實を澤山培養仕てお菓子を製し度いのです。

温室には花を養ふ。

地

○萎れし花

京都西三本木丸太町上ル　堤とく子

折角夜露を、取らうと思ふて、屋根へ出して置た、美しい活花、今朝入れるのを忘れて仕舞て、夕暮に、氣が付いて、早速見たら、あらまあ、大變、花も葉も縮み上がつて、新の樣に。

人工呼吸法も甲斐なく。

人

○眞紅の苺

下野國足利郡大前村三八石橋米造方　櫻女史

五六間高い崖の上から下の稻田へ通すかけひの水は崖の青草にせかれてしぶきとなつて僅かに落ちて居る其側に茂げれるつるに熟した眞紅の苺しかも朝日の光に映じたお、其色わたしの食指は自づと動きました。

惜しゝ、食べたし。

秀逸

○驚いたこと

本郷砂子田芳子

妾田舍から出京來まして一番驚いたのは電車、それから皆さんの御顔の御化粧が綺麗なのと、御身裝のハイカラな事、それから男學生さんのいきに髮をわけていらしやる事でありました。

なほ驚くべきことあり。

○語學の臭氣

本所澁谷康子

英語は商人臭い、獨逸語は醫者臭い、佛語は交際家臭

い、清語は臭豚い、韓語は怠弱臭い、露語は内亂臭い、ヘブル語は聖書臭い、ボン語はお寺臭い、外國人は日本語を面倒臭いて。

エスペラントは。

○植物溫室　大阪　島田ひろ子

昨日博覽會の植物溫室を觀た、名も知らぬ色々の草花が清き香を放つて今を盛りと咲き競つて居る美しさつたら。噫麗はしい此花の世界三百里隔てし異郷の空懐しき德子の君に一と目見せ參らする事を得ましかば。

花は三千里外より來れり。

○哀れな蝶　秋田　添田かなへ

庭へ降りて牡丹の咲いてゐる花壇の傍へきたつて見ると。垣と松の枝とへ大きく張つた蜘蛛の網へ一羽の白い蝶が引掛つてゐるので。網を拂つてそつと牡丹の花へ乘せて見たが。吁々可哀想に、息はもう絕えてしまつてゐる。

牡丹あつて斬新。

○親しき友へ　麻布　くれがし女

あのお二階の丸窓から「青梅や男ではなひ竿のふり」など、笑つて下さいますな、晴間を幸ひ今梅拾ひを始める所です、どうか小な皆様と大な袋とを至急に。

洒落。

○妾の希望　長崎　郁子

妾の空想は決して身に華美な裝飾品をまとひたいとは思ひませんから上京して文部省直轄になる音樂學校へ入學しようと考へます、之が妾が第壹の希望であります。

未來のピアニスト。

○樂しみ　麻布　梅子

私が一番樂しく思つて居ることは、平常に勉强し試驗によく出來、そうして良成績を持つて、家に歸ることを一番樂しく思つて居ります。

平凡、而して眞理。

○調和　大分　松木露子

汁の調和は、醬油と、魚と、野菜とて、美人の調和は顏と、姿と、色と、着物とて、一番大切なるは、智と仁と勇と、身體壯健との、調和である。

女の愛情と男の理性と。

○妾の理想　新潟　岩瀨まさ子

たとひ四疊でも新しい疊を敷いて大切の母樣を臥させ申し。尊い職の敎師となつて神の命に身を犧牲にしても坊ちゃん方の敎育に從事し淑女賢婦と云はれ女子文壇を姉樣として一生獨身で暮したい。

弱身は不贊成。

○日記の一片 常陸 川並はな子

七月十六日、晴、御母様とお茶摘みに行きました、晝近いときざるへ溢るゝまで出來たので家へ歸つて御父様にはかりて目方を計つて戴いたら一貫目、御父様は手間錢と云つて十五錢下すつた、それでなつかしい女子文壇を買ひました。

斯くて女子文壇一册の價も、人間勞働の價に同じく天下に最も貴きものなり。

○農家の樂しみ 靜岡 深谷岩子

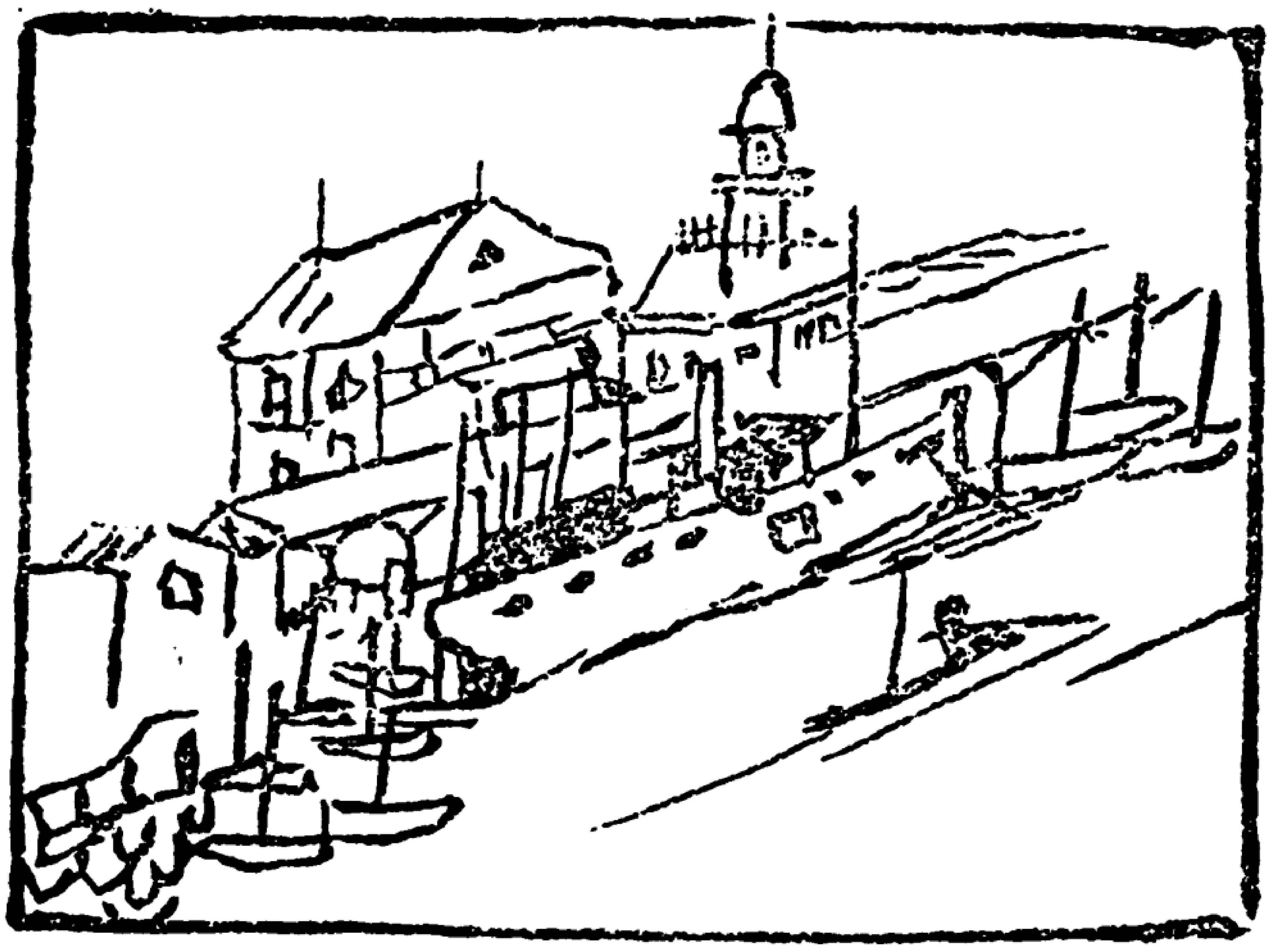
降りつゞく雨もなし風もなし蠶は見事の發育で取れたる繭は大した物、大麥價は(一貫目)五圓の坂を越し、小麥上てきて、四五割多い收高だ、早苗の育ち美しく、力例の螢も道理て今年は大きいよ。

始めて聞く、螢の大なるは豐年の兆。

○裏長家 金澤 越野芳子

破障子、軒傾いた裏長屋今歸つた計りの主は鰯を燒きながら薄暗い中に財布を調べて居る、共同井戸の人聲も段々減て女房も炊いだ米片手に歸つて來た、其内にじり〳〵と魚の燒ける音、「嬶ア鰯や燒けたぞう」

寫生の妙



大阪港　（選外）　大阪　花野きよ子

○臺所 兵庫 柳田白百合

臺所を非常にお自慢なさる方を訪問した處ひつそりとして人の氣はゐも仕無ので失禮とは思ひつゝお臺所へ廻るとまあ驚いた下女が大の字なりにひるねの眞最中そして其のお臺所のふけつな事つたらお話にならない。

うなづき合ふや瓜茄子。

○朝の務め 小石川 奈美木翠子

朝露の旭に光る庭の草花の、今日開かうとする蕾を數へ金魚鉢の水を替へ終つて金糸雀に庭隅にばら蒔きにした菜を撰び與へてから、學校に行く妹の髮を結つてやるです。

植物の愛、動物の愛、人の愛、朝は淸らかなり。

○氣の毒な事 金澤 大地波子

郵便局で氣の毒なと思つた事は、親の病氣を打電するのに御錢が足りないので其儘戻られた人と、差出人の名前が違ふので爲替金を受取られ得なかつた兵士と、

切手を貼ずに手紙を入れて困つて居る下女とてした。

ありさうな事

◎御飯の時　　豊前　花渓女史

御飯の時はいつも四角な食卓で上側はお祖父様とお父様左側はお祖母様がお一人下側はお母様とお姉様右側が可愛秀ちやんと妾の二人です。而して秀ちやんが食べる毎に御菜の小言に皆様が必然お笑ひなさるのです。

生活の半面。

◎わが畑　　岡山　三村純子

私は母さんに無理に頼んで裏の畑の片隅を一坪ばかり貰つて、朝顔を六色程と小さな紅葉を四五本うゑてゐます、いつも朝は一時間宛早く起きて水を遣つたり草を取つたりして、それから歸へつてお手水をつかひます。

花を愛する心は神聖なり。

◎雀の會議　　安藝　貴薫

軒下に巣をして居ましたが、子を蛇に取られ猫に取られおしまひには近所の子供に取られ困つたのてしよう昨日の朝から數羽の雀が庭木て大そう話したあげく今日から家の中に塵を以てきますから巣を屋内と決定したのてしよう。

蛤にはならず。

◎夏の七快　　芝　紅萩

朝まだき草葉の露をふむ、夕暮に河原をさまよふ、繪簾の陰に琴を奏づる、雨晴れて虹のかゝれる、月の光に草紙を繙く、まどゐして花をめづる、青葉の陰にひぐらしを聞く。

快意、最も夏に多し。

◎運命の星　　千葉　葉蘭女

ある土曜日の夕がた、友と林の隧道をぬけて、遙か彼方を見た時に、そゞろ悲しくなつた、みれば露の滴るかと思はれる星は煌々として、右にあつた、あはれに力なく光るは右にあつた、時に友は、右にゐました。

神秘。

◎父の異名　　熊本　狂女

舊士族の孃「儂は（デ、サマ）つて申しますよ、紳士の孃「私しは（阿父さん）ていひますわ、他種の娘「妾しア（父サン）と呼びます、土百姓の倅「巳ン處は（トッツァン）と云ふべい、按摩の倅「巳ア（チヤン）と云ふのよ。

ダツア、ガヤア。

◎キリギリス　　埼玉　名なし草

涼しい木蔭て、女子文壇を繙てゐますと、妾の大好な

キリ〳〵スが本の上にとまつたのよ、妾情かつたけれどもそつと放つてやりました、小さき我が友よ健全にあれと、心に祈りながら。

行け、秋の葉裏に。

◎早く見たきもの　北海道　光　子

女子文壇の記者や先生方の御顔、始めて雜誌に投書した時、新調の衣服で寫眞を撮した時、學期試驗を受けた時の成績、兄樣が佛蘭西から連れて御歸りになる筈の愛犬、いかに早く見まくほしきよ。

寫眞は鮮明、試驗は優等、投書は特別、記者の顏は……

◎廢兵　下野　入江靜子

或る朝私は例の如く、學校に出勤すべく急いだ、すると橋の上に、身にはきたない衣を纏ひ、破れた笠を頂き骨相逞しき二十七八の男が釣を垂て居たので何氣なしに見ると、畚の傍に新しい義足が置てあつた。

恩給の餘澤。

◎雨の日　飛驒　武瀬柳枝

姉樣〳〵と妹のよぶ聲に振向けば、小さき百足の蠢ひくるを恐しそうに指さしぬ、妾もいやらしく、ふと尺にて押へしに足幾つともなく切れてピク〳〵動くに心地惡しく、思はずアレッと云ひければ、母も惶て飛て來ませり。

夢に來ますよ。

◎田舍より　駿河　若水靜美

都ならば風の傳ふるものは、電車の響か、ホワイトローズの香でせう。裏の納所に機織る音の繁き時、靜に窓に凭つて耳を傾けると、若草の萠えた野を辷つてきれぎれな茶摘唄……

今は東京の風もいや。

◎待つ夕　福岡　東野歌子

さよりの吸物と、鮎白鹽燒にたて酢、すゞきの刺身とチッケンチャックにジャガ芋、漸やく料理も出來上つたので、手早くお化粧して着物を替へて、扨て待長い夫の歸宅。二人で丹精した夕顏が二つ開いた。

新婚。

◎窓の眺め　美濃　木村淺子

眞前の揖斐川が流れて居る、遙か向ふを望めば金華山、近く河岸には崩れかゝつた藁屋、西を眺めると伊吹山、養老山、少し河上に新築された川並學校、千舟百舟の白帆或は上り或は下る。

四行地理。

◎夏の七快　山口　村田節子

朝早く起きて冷水摩擦。木の間の吊床に詩集繙く。打水したる。眞晝の暑さに玉簾の傍で水瓜をむく。夕

丘の趾に若葉に日の映る。月竹椽に差入りて琴を彈ず。夕餐を終へて玄海の水打際に六連島の燈明臺の火影を望む。嗚呼七快。

第二位。

○雲　長野　山田くに子

或は天使の羽衣となり、或は爛燦火の花となる。朝に富士の白雪を掠め、夕はラインの靜流と語る。消えしと思へば西より湧き出、湧きしと思へば東に消え行く、ア、自由、自在。

詩の如き文。

○雨祈り　千葉　石渡久女

雨のないこと二ケ月餘、苗黄み畑作物枯れ、此旱魃にて愁に沈む農民が、社寺へ熱心に雨祈をし初めて、六日目より天かき曇り大雨一晝夜、百町の水田は白く青く漲る、其より四五日經て赤襷の早乙女が樂しそうな田植歌が聞えた。

其角の得意。

○心地よさ　羽後　ひさ子

數回の競技に疲れを催し、額の汗を、拭ひつゝ、翠滴る青葉蔭、例のベンチへと身を投ぐれば、ピヤノの音をもたらした涼風が、鬢のほつれをなぶる心地よさ。

○試驗　京橋下　枝

試驗とて教場に入り胸どき〳〵と問題みれば己がよくさらいしあたりの出し時は嬉しけれど折あしくいかにしても解し得ず試驗もすまば質問せんよもこゝはと思ひしが出てし時のくやしさ悲しさげに〳〵。

○淀河　京都　多貝春月

明け易き夏の夜は明けて、朝日子は未だ出てず、濃き靄の中に白く閃き流れの、淀川に立てば、誰がのり捨てし小舟ぞ、むら〳〵と繁れる蘆の中に、田鴫一羽。

○理想の夫　播磨　にしき

花岡さんは二口めには理想の夫理想の夫といつて居られたが私の理想はかうでもなかつたにと今では泣いてばかり居られる、山村さんはつひぞそんなこと口にせられなんだがあんなに立派なお方の許へ。

○歸省の前　芝　蓮扇子

眺めの好い二階の椽側に安樂椅子を持ち出して湯上りの身を横たへ雨後の東京を見て夢路を辿る如く現々と虹ても渡る樣な思ひ。「明日は歸省いたしますのよ。」

○曙　越前　井田ふみ子

山の額はくつきりと今夢から覺めた樣な、森には紫の靄が漂う、冷たい青嵐は遠くから田の面を走つて來る、峠路へ通ふ馬の聲は勇ましく、赤い襷の乙女が野へ出るのも見へる、夏の野の曙。

○無邪氣　小田原　奥津代麗子

姉ちやん今日御休み日曜よ御人形ちやんの御召縫て頂戴なと妹の操子に勸められ思もよらず御庭の暖い春の芝生に下り切を下さいな妹は包より一寸巾の縮珍を取りこれ丸帶に縫取縮緬て御召物赤縮緬しごきいゝ事

○妾のお願ひ　東京　額川とき子

蚊もゐない蚤もゐない風通しのいゝ築山の松の樹の下へあづま家を造り其の廻りへお池を掘り板橋を架け花菖蒲を植ゑ、丸窓の所へは竹の影サラ〳〵と寫てさも畫にかいた樣な、其處へ机をすえお復習をしたなら!!

○面白いもの　千葉　小山すゑ子

姪とたにしとの喧嘩、つんぼあひての物語し、女子文壇、幻燈會、裁縫遊戯、修學旅行て其外は擧げて數へきれない。

○見たいは　山梨　高野緋子

一番見いたは父母の結婚式、逢ッて見たいは小野小町行ッて見たいは地獄の金庫、植へて見たいは金のなる樹、やッて見たいは貴族生活、なッて見たいは世界第一の美人、持ッて見たいは理想の夫。

○金の力　紀伊　中西花子

人を活し又は殺ろし、諂ひし驕ひし、大にし小にし、尊とがらしめ卑しからしむる、恐ろしい魔力を持つて居るのは、御錢てありませんか。

○嬉しきもの　四谷　しらぎく

ひと雨ほしと思ひける折しも、おどろ〳〵と鳴る神の音をきゝたるはいと嬉し、夕立の名殘の露の草の葉に置たるは又嬉し、ましてそが上を渡りくるすゞ風に單衣の袂かろうなぶらせて、窓戸の蔭に歌集などひもとくは言はん方なく嬉し。

○月の夕べ　京都　竹葉女史

垣外の桐の木と垣内の柳の木とにハンモックを吊して、コロリと横になると丁度露を帶びた卯の花の一枝が夏痩した細面を輕う意味ありげに撫てる、下の泉水ては月がみだれて。

○涼氣　上總　大谷ふく子

松影に船をつなぎて大井川月待つほどは夏としもなし、今宵はいと靜かなる夜に候、流れてのぼる月の影、今しも水草を照らす螢火三つ二つ。

○あはれの少女　しげ子

毎日私の家の前に砂を運ぶ仲士の内六つばかりの少女がいつも後へ廻つて父親が引く車を心のかぎり押して行くのてありました、聞けば母親は亡くなりましたとやら、私はもう胸が一ぱいになりました。

○朝景色　芝　白雉子

樺の地に、赤、紫、明綠の霞が、錦の旗の様に、たなびいて居る。と、パッと、光を前に、出たは、お日様紅葉が寫つて眞紅な池に、光がさして、錦の鏡の様、見惚れて居るとゝ、あゝ憎い鯉が頭を出したので破れて仕舞つた。



飴細工（選外）　讃岐　國越茂子

○貯金　備後　白ばら

五厘、壹錢の少しのお錢でも恥ずに預けて居ました處「塵も積もれば山となる」古の諺の通り五圓債券が一枚と食道樂とが買はれましたそうして債券の籤引は此の月てす。

○流行ことば　埼玉　江森紫花

ポコペン（いけないこと）ホーデ（よろしいこと）私の方てはこの語が非常に流行て誰一人申さぬ者はありません家の鷄などは叱ると、いつもポコペンコッコと鳴いて逃げます。

○ほとゝぎす　能登　池野いさみ

曉又しても聞ゆるにぞ今度こそと打仰ぎぬ彼方の森の邊をこゆらし其聲の次第に近くなるにぞ、狙さし出せし刹那、銃聲一發！弟戀ひしの聲は聞へずなりぬ、あはれほとゝぎすの黑燒は病に効ありとか……

○ぶらんこ　岩代　華子

吾おくれずと、急ぎ乘りたるブランコ、脇なる友に負けじと男みし心、力を入れてもむ身體高く低く、今や水平にならんとする刹那、あはれ地上に身はうちぬ折りしも馳せ來る小犬のポチは、紬に纏りて喜色滿面。

○氣が取られて　下總　武田たき子

阿父樣や阿母樣が、姿に瓜苗に鷄を入れてはやくにたちませんから留守居しながら氣を付けて居なと山に出掛に申ましたが、女子文壇の面白いのに氣が取れて居る中に瓜苗は皆んな折られてしまいました。

○私の學校　鹿兒島　秀子

私の校は東鄕樣の誕生地、コンノート殿下來甑の時立よられ、手づから愛のこもれる顏に笑をたゝへられ竹裍をうへられた時思はず萬歲を三唱

しました。

○鎌倉の夕　上野正木梅野

夕日はいと力なう淡き〳〵光を里に山に浴せかけぬ、ここは誰が邸の跡なりけんかし、雲、愁の色深うしてその昔の榮華を語るに似たり、暮れゆく春の鎌倉山、こめし恨やいかに深からむ。

○豐年　豐後平山貞子

今年は爹の收入が思つたよりも多くて、それに一番兄樣は無事にお凱旋なされ、次の兄樣は檢査の結果、騎兵甲種で入營しまして、阿父樣のお喜びと云つたら、それに妾しも來月は……、ホヽ〳〵、何と豐かなお年だこと。

○下女の哀　岩代小川きよし子

夏の中は樂とも云ふ事もないが冬になると實に哀である、ひゞのきれてる手に朝夕米とぎするのが實に哀である。

○朝起の樂　陸前ふみ子

朝起の御褒美にと、買つて戴いた此の鷄、妾は、毎朝早く起きて餌をやると、三羽の雛子が親鳥の後について、嬉しさうに走つて來ますの、妾、ほんとに可愛ので、いつでも餌を澤山やります。

○義ちやん　千住雪洲

千住の姉ちやんと秋をおさへたのは、義ちやん、その涼しい目が少しはれて居るので、どうかしてと聞くと何か考へてから、私昨夜夢をたんと見たからよと、私は餘りの無邪氣さに思はず抱き上げました。

○妾の書齋　尾張水野華子

妾の書齋は四疊半、西向に机がありまして右手に本箱が三ツ、中央の本箱に飾つてある紫檀の衝立……少し廣がありますよ、机上に女子文壇、鉛筆一本、雜記帳一冊、東隣に姉樣の寫眞、見る度に涙が出るのよ。

○兄の戰死　岡山永原多計子

私の町内では、過ぎにし日曜日に凱旋祝賀會が催されました、私は餘興に彈琴、凱旋の曲を奏しましたが、戰死なされた兄さんは、泉下で如何な夢を見ていらるゝでしやうかと思つて、何んだか氣が進まなかつた。

○愛の聲　小倉理子

昨日今日巣立した五六羽の鴫が騷がしく鳴つれて今し梢先をすぎた。私は「ほんとに喧ましくて仕樣がないよ」とつぶやいた。母は「私は鴫の鳴くのが一番好きよ、恰ど小兒が甘へるやうに聞えてほんとに可愛い者だよ」と。

○糸柳　七飯町錦子

そよ〳〵と、春の美しき、清い、風が、昨日今日、よー〳〵青葉をだした、糸柳に、なびいてゐる、私が、其下蔭で女子文壇を、繙いて居たら此度は、糸柳が、私のほゝをなでた。

○夜半　秋田大越幹子

ふと目をさますと軒端の風鈴がチリンと鳴つた。隣座敷には鼾が高い。夕涼に捕つて來た螢は未だ蚊帳の中にピカ〳〵と光つて居る。突然お池の鯉が跳れて書齋の丸窓に水がかゝつたので、月が描いた竹の影繪はパツと散つた。

○此頃の新聞　宮城まつへ

此頃の新聞を見ると、そちでもこちでも人殺しがあるの大火があるの、それから米國では大地震で山の樣に人が死んだのつて、それは〳〵ぞつとする事ばかり記載てある。

○失望　澁谷一小白衣生

試驗がすんだら一日も早く歸鄕せよと幾度かの御文何にも御存じない母樣は嘸成績よく及第した事と御思てしようが昨日發表された成績發表見ても妾の名がない此儘歸て母樣に何と申譯が出來ようあゝどうしたらいゝでしよう。

○汽車の音　能登千田星子

兄さんの出征せらるゝ時は悲しく感じ凱旋らるゝ時は愉快に勇ましく聞え妾の遊學するときは嬉しくも又興奮せらるゝが如く發車してからは只何となう懷かしゆう聞える。

○鉛筆　越中春波女史

人は宜しく鉛筆たるべし、常にその才能を堅く木に包みて徒費せず機に

嚙みては尖らしたる英氣鋭く能く至大の功績を掲く、加之過つては改むるに吝ならずして尻に消ゴムを備ふ。

○露になりたい　　茨城　青柳愛子

今朝起きて、今盛りの庚申ばらの花の上に、きら〳〵と露の玉が光つているのを、呆然と眺めて居た私は、あゝまゝになるなれば露となつて、此の美くしい花の中に宿つて見たい。たとへ命は一夜に消ゆるとも。

○夏のたのしみ　　川越　六木歌子

私は毎日夕方になると掃除をしてしまつた後中庭の礎鋪松や泉水のそばの垣根又は置石などに水をうつて眺るのが一ばんの樂み其時は苦も暑さも何もかも忘れてしまうのである。

○小さき詩人　　松山　孤蝶

姉さんあれごらん、紫の雲が出てよ、明日はお天氣ですよと、今年から尋常科へ入つた妹綾子は妾の袂を引くのです、この頃は朝早くから起きて、朝顔の鉢の前に佇むで、うごきませんのよ。

○自轉車　　埼玉　岡田百合子

紺青に見えた遠き山々も、今し全く黒くなりて、ちぎれ雲は紅く靑く彩られて居る。さては塒へ急ぐ鳥の群など某君の夕照の詩を想ひ出て恍として見とるゝ折しも。チリン〳〵。あゝ危かつた事よ。

○果敢ない夢　　神戸　泥谷志づ子

雨の夕、窓によつて庭を眺めて居ますと、ふと、お前なぜ母様のお手傳いしないのとお父樣のお聲、思はず我に歸れば机上にうたゝねの夢、あゝ、今のが誠であつたら嬉しいけれど、今は父上のお聲も聞かれぬ身。

○若竹　　愛知　夏子

まだ雪知らぬ今年竹の、盛は垣根に風少し欲しげなる、夜は窓近く雨にしほれて涙をやどせる、皆心ゆく風情なりしが、裏若竹に三日の月明くれば窓の此の君いかにとゆり起しつゝ露を拂ふこそこよなう可笑しけれ。

○ぐみとり　　常陸　一少女

妾は妹と二人て手籠さげて、裏の山にぐみとりにゆきました、赤いいちごを澤山とつて家に歸り皆さんとたのしく食べました。

○收穫　　徳島　齋藤菊子

今年十になる弟と隣の武さんとが、庭の片角に二尺四方程の麥苗を植ゑて、毎日學校から歸ると、熱心に世話して居ました、夫れが此頃房々と見事に熟しました兩人は小さな收穫を、小いさな裏の地藏樣に供へた。

○希望　　曉子

よくお手傳ひをしたならば女子大學へ入學させやうとば父上の御言葉、自分はこれを實行した、朝早く起きたならばと、これは其後の父上の御言葉、翌朝急に早く起きて花の露を眺めて居ると母上は水を汲みながらニツコリ。

○先生　　埼玉　山口邦子

お別れ申した裁縫の先生、幾度手紙を上げても御返事がないので妾毎日心配してました處今朝郵便と一聲、嬉しや、忘れもしないお筆の跡、アラマア、先生は伊豆地方に新婚旅行中ですと、……

○澤庵漬　　宮城　古河松江

自慢ぢやないけど宅の澤庵漬は美しくつてそして大變に味がよいのよ、私れ一つは好きだからでもありませうがれ、この澤庵漬さへあるとお汁がなくてもお魚がなくつても三度の御飯は甘く〳〵食べられ升のよ。

○夢にまで見る　　兵府　愁菫

私のそばで何だかガヤ〳〵とお友達が大勢よつて、あなたの文が出て居てよと仰有るから、一寸見せて頂戴といつても、見せて下さらない、無理に取ろうとして眼が開いた、アラ又夢だわ。

○月　　麹町　田中道子

下女のたけてさへ、お機嫌、いゝ月でございますことゝ言はれて、私は、今歴史の本を讀むで居たが、一寸、しをりをはさむで、庭に下りた、あゝいゝ月だ、今母樣もこの月を見て居らしやるかしらむ。

○友の許へ　　鹿兒島　久永澄子

懷しき故郷に歸り候處、久し振りの事故何も彼も變り居候中に、いたく變れるは戀しき母にて頭の雪は降り積り額の波は寄せ増さりて昔の面影

なく嚢へ居候。

○撫子　四谷　しらぎく

懷しき兄様が、都よりのお便り、いそいで封押切ッて拜見すると、マア、うれしいこと、いつぞや私が差あげた、なでしこの押花。

○小包　上毛　關口綠子

暑中休暇に妾はお供達と静岡地方へ遊びに參るから歸りませんと手紙を出して五日目の朝、小包が届いたので開けて見るとそれは美麗な浴衣一枚、傍に母様の御玉章と袂の中に清心丹。

○薔薇　紀伊　田中文子

去年私と弟と二人で、背戸の籬に薔薇の花枝を、一本づゝ貰つて、鉢に植ゑたのが今年花が咲きました、私のはうす紅、弟のは白。

○蝶々お出で　安藝　池之子千鳥

今しがた學校から歸つた妹はゝら〳〵と櫻花散る下で菫を摘んで居たがふと立つて菫を振り乍ら「蝶々お出てあなたのお好きな菫花……」と歌ひ出した、まあ彼の落花の中に立つてる姿の可愛い事、私もあんなにあつたろうか。

○白　安藝　箕岡萩村

妾は白色が一番好き、妾のりぼんは白色である、神官の袴の白色は貴ひもの、櫻を包む霞の白色、月をおふ雲の白色、磯に碎くる月夜の波の白色、それは清潔である、梅の白花、百合の白色、それは涼しきもの。

○撫子　茨城　清子

毎日丹精した甲斐があつて、此程ようやく咲き出した撫子の花、あまりに可愛くてならないので、其二三輪を手折つて、押花に致しました。

○朝の務め　八王子　乙幡秀江

臥床を出て先づ顔を洗ひ母の勝手仕事のお手傳、おばあさんにお茶を差上、御飯の出來るまでお座敷やお庭の掃除を終へ、今日の學科の下見をし、是れより通學するのが毎朝の例。

○涼しき夜　南多摩　山村とき子

「ほゝたるこい〳〵よしこい〳〵螢どんの嫁入りは、おちよちんもいらず油もいらず、おしりの光でとんでこい」すきとふる様な可愛い、聲も次第にやみに遠ざかりあとは色紙細工の可愛いちようちんが、ちらりほらり。

○あけぼの　神奈川　鈴木りの子

有明の月が淡く木の間に傾くと、東の空はほの〴〵と白むで來た、淡もやに包まれた向ふの山は丁度水彩畫のやうである、私は暫時此景色に見惚れて居る中に、夜は全く明けて涼しい風が心地能く面を吹いた。

○嬉しきは　天鹽　なみ子

試驗場で心配して見て居ると、出る問題が皆自分の知つてたものだつた時の心と。何氣なく出た校友會で、理事に選まれた時の心と。故郷の父母から送金の多かつた時の心。

○すみれ　大阪　平尾時子

友よりのなつかしき玉章そと惜しき封開けばひらりと落ちし菫紫の色しほらし「何事も花にきいてよ」と、すみれ口に當て「何と告げられしや」と、尋ぬれどしほれて、あはれこたへなし、友は何事を告げ給ひしか。

○花　鹿兒島　田上ちか子

梅の白きは清くけだかきもの、海棠の雨にぬれたるはしほらしきもの、菫の紫は愛らしく、黄なる野菊は押花にして友の手紙に、簪の薔薇は妾の好な桃色で牡丹の紅は理想の色。

○夏の七快　德島　小川なみ子

谿の清水を掬ぶ、露草に逐ふ螢狩、綠陰の午睡、磯の海水浴、湖畔の夕涼み、緋鯉に麩をやる、妹と心太をつく。

○化粧と花　靜岡　石神喜惠子

お化粧が濟むと、未だ蕾がかたくて何色とも分らぬ二鉢の雛芥子を取上げて、一はそと頰摺し、一はそと接吻する、漸々蕾が脹らんで咲いた所を見ると、頰ずりした方は白で、接吻した方は緋であつた、きつと紅と白粉が泌み込んで色が出來たのよ。

○見あきぬ物　新潟　水野末子

父母兄弟の、お寫眞に、女子文壇に、諏訪公園の櫻の花に、去年の、花

盛りに、生れた、坊ちやんの笑顏。

○お寺詣り　周防　岡部佐保

兄さんがお戰死をなさつてから、叔母さまや、お母さまとご一所に、度度お寺に參つたので、今ではそれが何よりのお樂み、お陰で毎夜兄さんに會ひます、何時も同伴する「ぶち」は、何んな夢を見るてせう。

○ゆふ闇　水戸　芳江

森羅萬象露滴らん許りの初夏の新綠、次第に暗うなりゆく夕、輕風颯と身に泌み渡る刹那、云い知られぬ悲哀の念胸に迫りつ、それよ大能の救濟主が橄欖の園に聖い祈禱を捧げられたのも、斯かる夕かと思はれて。

○ぞつとするもの　下谷　伊庭いそ子

第一猫の死んだのとなりんぼと寒中に海邊の浪を見た時といつてしたか白木屋の館で紙入をすられた時と毛虫が足元へはつて來た時と十二階へ上つて下を見た時と小刀で指を切た時等を思ひ出すとぞつとしますわ。

○女今川　千葉　すみ子

靴は誇れるが如く、雪駄は姦しく、麻裏草履は卑しく、塗下駄は俠に、駒下駄の柔和し氣なる。斯くして遂に淑德を兼備せる木履は過古の遺物として賊はる。

○すき〳〵　京橋　無才女史

學生は床しい樂隊かピアノの音が好きいきな人達はいきなれじめのはうたか淸元がすき田舍の女達は馬鹿囃がすき詩人は虫の音や水の音がすき

○白百合と菫　高知　和田順子

昨日迄痩せに痩せた奇巖の中腹に、女神の聖手に育てられた白百合と、廣い〳〵草野の中に、蝴蝶の臥房と定められた菫とは、今妾の文机の片隅に飾られて、詩歌の材料に供せられて居る。

○谷川　能登　池野白百合

新綠の頃、一鳥もなかぬ深山の谷川をさかのぼつたら丁度山吹がかぜなきにほろ〳〵と散ッて居る。もし此谷に霧がほの〳〵と這ふ朧月の宵、只一人來たら此邊の苔むした石がみんな泣くてあろう……。

○へんな心　備中　稻本千惠子

何んだか、後の方に、人の聲がするので、チョイとふりむくと、去年の春まで敎へていたゞいた、先生方の影が見えた、アヽ、丸髷姿のはづかしいとは思はぬけれど、妹よ、早くお歩きよ。



坊の!?（選外）　武藏　浦野秀子

○待つもの　紀州　太田佐代子

月に一回來てくださる女子文壇と、東京の鐵道學校にお出てある兄様の夏季休暇にお歸りなさるのと月曜日の唱歌と、それから裏の畑の桃の熟するのと。

○夏の月夜　愛知　紫雲女

雨が晴れて十六夜の月が黑い雲の間から現れ波に輝いている靜かな海の向から颯と吹き來る風漣を起してキッ〳〵、土堤に靑々と茂つて居る芒の美しい露に月の宿れるのがザーと靡き伏して涼しい夏の夜である。

○八疊の間　神戸　淸水露水

床には兄さんの御友だちの竹里さんの水彩畫が懸て居ます棚には寫眞帖やあるばむが積んてありますす今朝さしかへたびんくはにこ〳〵として居ます袋入の尺八と琵琶は今は長ゑに悲哀な曲を語て居ますてすあゝ

○夏の一日　京都　高田愛子

磯の松原は、ハンモックつりて、小説を讀みながら夏の影色を瞻むれば、濃綠滴たる山蔭より、眞帆片帆を揚げて、二つ三つ、磯邊近き所には、ボート漕ぐ學生の掛聲、靑々と澄み渡りたる大空にひゞきぬ。

○好きなお友達　榛原　岡村えがほ

私お友達中て一番好きな方は百合様だわ、百合子樣は私の從妹てお氣質

やお姿が百合花の様にやさしく美しいお子、其次にお隣の春子様、各方も私を姉様姉様と云ふて下さるので。

○心づけるまゝ　　南総　闘芳蘭子

蠶は青き桑の葉を食つてすら白い絹の糸を吐くではありませんか。それになぜ、東京の女學生は白い御飯を食べ、身に美しい衣を着て居りながら、隨落なんてあんな汚い事をするんでしよ?。

○聞きたかつた　　新潟　淡紅花

「古池や蛙……」と或人は詠んだが、其古池に蛙がとび込んだ時のダホーンと云つた音。それに蟬丸の琵琶。八幡宮の廣前で「靜や靜」とうたつた靜御前の其時の歌。どんなであつたらう聴きゝたかつた。

○夕べの團欒　　おぼろ

夕べの美しい空を眺めつゝ弟妹を對手にお伽噺。妹は頭を傾けて弟の話に聞き取れて居るが後には其目を幾度も瞬いて遂にすや／＼と我膝に。弟は餘程話上手御星様は勞痛として此少さい團欒を御照しなさる。

○綸端書　　大阪　三原瑞久子

今しも學校より歸り來りし弟と妹とは。只今も忘れて。いきなり。右の袖と左の袖に。とりついて姉ちやん試驗が知れてよ。此間の綸端書頂戴よ。何に僕に下さいよ。あゝ此美きはがきは。右か左か。妾はいとゞ困りぬ。

○孝行娘　　岩代　佐藤文子

毎朝毎夕市中に豆腐を賣りあるく十二三の少女子があります、此子は實に孝行娘で父は三年前死にまして、今母は病氣で長く床に就てをります、それ豆腐を賣た少しの利益で藥や食物を買ふので有ますと。

○白百合　　信濃　白菊

花の衣を脱換て亂母の手になる凉しき初單衣に妹と野邊をあくがれぬ、彼處の小川の邊に色香ゆかしきやさしの白百合は朝の露を花片に載せて流を見送れり妹は突然花に手を觸んとするとたんあら姉さん蛇がいます

○可愛らしいもの　　磐城　翠子

今朝咲き揃つた撫子と、昨日生れたばかりの斑猫三疋、内の二疋になる弟の福々した顔は信賞に可愛らしい、お隣の千代ちやんの雛人形と、其れから五作老爺の少さなチヨン髷。

○薔薇　　香川　松永あやめ子

消き白ばらも、燃ゆるが如き深紅のばらも、いづれも捨てがたき姿なるよ、靜かに降る春雨に濡ひて、惱みに堪へぬ樣俯けるさま、湯上りにも譬すべきなり、誠に眺め飽かぬはばらの花にこそ。

○玉　　石見　佐々木英子

ふと妾は咲き庭先に出ますと、其處には麗しき華な牡丹の下に、三毛なる玉のすや／＼とうまいせる耳のあたり、追つ追れつ小き小蝶の樂しげに飛んで居ます、あゝ、妾は其時眞に玉になりたかつた。

○待ち遠いもの　　宮城　安部俊子

私の親友信子の君は一昨年お嫁さんに行きましたのよ、そうしてたのしいホームを造りて居りましたが今日の御玉草に本年の本月御子さん御持ちなさると云ふ事で私ほんとうにうれしいあゝ早く見たいわ。

○喜んで　　下野　瀧田たき子

暫らく出征せし父が凱旋して歸つて來たので無邪氣な子供は喜んでお父樣萬歳と楓の樣な手を上げて唱へた其の時父の心中に如何程嬉しかつたろう。

○不思議な爺　　陸前　佐々木白扇子

妾が隣に今年六十歳になる爺がある、憐哀れなる哉、父も母も妻も子もなくて、毎朝早くから起て鍬を肩にして、畑や田に出て行く時の顔は何やら思案して居るらしい、未來は誰に相續させるであらう。

○大さわぎ　　陸前　島山碌石子

もう五月は農夫のいそがはしい事節である隣の田吾作も與作も鳥の鳴く頃眠むさうな顔付して出て行く此頃中に四五日の大雨降り續きて田に大水で大さわぎ。

○春のかたみ　　備前　松本もと子

春雨のさびしき夕、瓶にさした櫻の花が、讀んで居た本の上に散りましたので、私はそれを封筒に入れて、春のかたみと、書いておきました。



天 ○ 宵は七夕鎭守でおどろ　歌は妹背の伊勢音頭　古意

新潟市早川町二丁目　立花花枝

地 ○ 愛宕山から新橋見れば　故郷戀ひしや汽車が出る　新意

則本二葉女

人 ○ 歸省したとて只遊ばない　親に手傳ふ針仕事　新意

埼玉縣熊谷　和久井きん子

秀逸 ○ 右は松原左は百合野前は海原九十九里　風意

上總　小川くに子

○田舍女とをしやんすけれど針も持ちます飯も焚く　埼玉　大野こと子

○雨は晴れたよお庭の隅て百合と薔薇の花語り　陸奥　雪の花子

○桃山手拭元祿浴衣お米よい姿よう踊る　丹波　なみ子

○散り葉模樣のお對の浴衣どちが姉やら妹やら　備中　ふて子

○池の白蓮花咲く音のさても嬉しき朝ごゝろ　信濃　乳瀨優子

○今の時潮は女よ戀よ女人許した高野山　熊本　逝く春

○わたしや田舍の草刈り娘山と川とを見るばかり　伊賀　山村りやう子

○山と積んだる團子を前に家内して食ふ柏葉餅　丹波　赤城柳子

○螢可愛や妹の指に束ね込まれた蚊遣草　俊子女史

○星やすみれと云ふのやめて修めますぞへ家政學　靜岡　紅百合子

○父にな死なれて母には別れまたも戀人戰死する　大阪　刀禰春子

○女波男波のよせくる磯に一人ひろうか子安貝　喜美子

○花と唄はれ雄蘂と雌蘂つくろうてなの新世帶　駿河　石神喜惠子

○富士を淺間の御嫁に遣つて燃ゆる情を滿せたい　上毛　頭根意滿

○やさし少女が草刈る道に姿くらべの百合の花　安房　安西せつ子

○乙女可愛や小徑の影で螢明りに足洗ふ　茨城　小泉勝子

○春の花野に薹を摘んで遊んだ昔に返り度い　下總　藤崎美奈子

新笑話

編輯局選



天 ○敎へてあげた　佐渡畑野村　谷川桂月史

母「武坊や學校へ行て何習つたの」
子「何も習へやしないが……」
母「どうして」
子「先生が紅くて美くしい魚は何だと尋ねたから金魚だと敎へて上げたのさ」

地 ○インク　千葉縣君津郡根形村　高橋幸子

甲の女學生「妾は仕樣がないわ、インクを藥と間違へて飲むでしまつて」乙の女學生「あらじやあ早く吸取紙をお飲なさいな」

人 ○夕の相圖　茨城縣新治郡高濱町東大橋　小泉はま子

甲「妾の村では夕を告ぐる時は鐘を打ちます、貴孃の里では大皷を打つのですね」
甲「そして野に居る農夫に仕事をチャン〳〵しまいと云ふわけですわ」
乙「妾の方のはドン〳〵家へ歸れと云ふわけなのです」

秀逸

○麴　若狹　塚本ふさ子

少女「御母上さん此の麴は腐敗てますよ」、母「なぜ」少女「だつて黴が生へてますよ」。

○夏が來た　宮城　齋藤きくの

隣りのおばあさんが「秀ちやん夏が來たので大變暑くなつたねー」と云ふと秀ちやんは「おばあさん夏が來たつてどこまで來たの」と云つて二階へ上つた。

○赤道　佐世保　すみれ子

或船乘客赤道の線が見えると云はれて望遠鏡で覗いて見ると成程見える　此れは珍らしいと望遠鏡を逆さにして能く見れば鏡面に線が引いてあつた。

○旱魃　千葉　山田靜香

甲「毎日お天氣でよいれ」乙「アラ貴孃苗が枯れていけないつて皆云ふよ」甲「だつて私のお父さんは旱てよろこんで居るのよ」乙「では貴孃のお父さんはへんれ、そして田には水が澤山あるの」甲「イーエ田はないが井戸堀よ」

○ハンモック　尾張　渡邊曉花子

お孃さんがハンモックを櫻の木陰につるを見て作爺「ソンナ大きな目の網では櫻の實が洩れてしまひますべい」

○頑固な人　伊勢　川原綾子

甲曰く、「あなたは病氣の話をなさる時デンシン病デンシン病と仰いますが、あれはデンセン病と云ふのが本當で御座いまやしう、乙曰く「なにそうでない電信の樣に早くうつるから、デンシン病と云ふのだ」

○凱旋　磐城　佐久間ちよ子

少女『日本の人は物を考へるに首を下げてゐるが西洋人は高ふ上げて考へるだつてれえ』父『そーよ』少女『あの今年の稲は西洋人のまれするのかい』父『いや、あれは凱旋を祝して居るもんぢや』

○記者　愛知　石原田鶴

甲「君、新聞記者つて者は並の人が一枚書く間に十枚も書くつて眞實だろーか」乙「ナリヤ君早く書かなきや間に合ない、それに世間でも早いものは瀛車だつて云ふかられ。

○杓子　下關　杉山愛子

田舍者らしいおばあ樣が二人で歩いて居る所に女學生がラケットを持て通ると一人のおばあ樣「あれは何だろう網杓子みた樣な物を」と申されました一人の老婆樣は「あれは何でも營所か何所か人數の多い所の網杓子だろう小さいのでは

ちちがあかぬから。

○健儘　山陰　しのぶ女史
あなた一寸健儘に火がありますか、ハイ

○跡繼　堺市　竹雙文子
太郎「お母さん僕大きくなつたら矢ッ張り高利貸せなくてはなりませんか、母「なぜ、お前の好きな偉い人になれば好いんだよ　太郎「だつて先生が貴君はお父さんの跡繼ですから勉強しないといけませんて。

○居眠　上毛　澁澤良子
勉強評判の與平は、常に二階の怒て一心不亂に默讀すると聞いて、妾其の眞否を探らうと、或る日勉强して居る所を驚かさうと、强く肩を打つたのに平然默讀、成程熱心だと感心して顔を覗いたら、笑止の至り一心不亂の居眠り。

○親の年　宮城　内海てう子
○「ちよいと貴嬢、貴嬢のおとう樣のお年はお幾つなの。
△「あたし知りませんのよ。
○「だつて大底いくら程だかわかるんぢやなくつて。
△「さうね兎に角なんだわおぢいさんよりは若いのよ。

○近眼　矢名
或人近眼に向ひ、君は近眼なれば、餘り遠くは見へないだらうと云へば「否能く見へる「否々見へぬに相違ない「でも太陽が能く見へる。

○簡單なる說明　越後　渡部宮子
兒「阿父さん月の中に人が住んで居ると云ひますが眞實ですか、父「そうだ‥‥兒「けれども月の欠けた時は何處に人が居るでせう、父「其時は人は月と一處に欠けて無くなつてしまうのよ。

○分らぬ字　越後　鈴木たま子
娘の學校から持つて來た淸書を見て（母）花ちやん此字は一體何と云ふ字だれ入學以來日尙ほ淺き花子（花）先生でさい解らないと云ふもの如何して私が解りませう。

○音樂　大阪　猿口すみれ子
男「貴孃は學問はよく御出來成さるが音樂の方はどうですか　女「音樂?‥‥妾し‥‥音樂は大變好きで御座いますの　男「それでは琴も定めてお上手でいらつしやることですようれー　女「そうです精神さへ一到すれば鳴らないことは御座いませんお母あさんが常々精神一到何?琴が鳴らざらんと云ふて居らつしやいますから。

○丸燒　上總　關芳蘭子
○「まゝ昨夜は大火事でしたれ、火元は何所」△「あの本町の燒芋屋ですつて」○「あすこではこれで三度火元をしましたれ」△「そのはずですよ、障子に丸燒つて大きく書いてありますもの」

○大井川　山口　河津いと子
「なぜ是大井川といふんだい「夫れは昔し旅人を負ふて渡つたからそこですゝヒ川。

○返事　靜岡　あき子
母「坊やほんとに見苦しいよウンなどゝ云ふ返事してはなりません!　小供「ウン

○水まき　芝　鵜飼かつ子
菜學生徐座の菜洋物店の前を通ると其所の小僧水をざぶりと其學生のづぼんに掛けましたから學生は大に怒り其不心得を責めました所小僧すかさず水撒き（見づ撒き）ですもの致し方ありません。

○繪葉書　伊賀　山村りやう子
孫「祖母さん此繪葉書は一組十錢です、祖母「もつたいない今度から買はんと置きなさい彼處に太物のレッテルが澤山有るから。

○卷煙草　越前　流水
書生「シガレットを一つ下さい」と洋語をつかふと煙草屋の老婆怪訝な顔にて「シガレットと云ふのは御座いませんヒンペットでは如何です。

○病氣のしらべ　羽後　龍田久子
生徒「先生病氣の數は幾つございませう」先生「昔から四百四病といふてあります」生徒「先生それでも私の父さんが痫氣でお母さんが痫癖でお伯母さんが眼病を煩つて居ますからさうすると私の家ばかりでも兆萬二千ありますよ」

○陸蒸汽　仙臺　二樂
或る山奧の汽車を見た事も無ければ乘つた事も無い老人始めて仙臺に來てあはたゞしく郵便局に入りこみモシ〳〵何時陸じよう汽でますべいネー。

○高い一かぶ　仙臺　すみ子
父が私に向つて「あそこの銀行では一株五十圓だつてナー」と話し掛けるのを七つになる弟が聞いて、「馬鹿に高イナ角の八百屋では大きい蕪で一かぶ一錢だよ。



誌友倶樂部

○繪葉書交換

○四五枚つゞきの上等の繪ハガキを下さい私も七枚つゞき上等の花の繪ハガキをお返し申します（神戸諏訪山大島ちさ子　○繪葉書、玉章、寫眞等お送りの方に三景の一なる嚴島の寫眞、又は繪ハガキを送ります（廣島縣呉市庄山田村中川通四六番戸四田方安藤茂枝）私も愛讀者になりましたから皆樣繪葉書交換ねがい升（大阪北區片町驛前岡根方やす子）○阿波鳴門、但馬玄武洞、北海道の神威古潭、妙義の石門其他奇畸な風景繪葉書を御惠み下さる人に御禮たつぷりよ（東京牛込細工町廿五番地田邊方松本靜江）○親愛なる、誌友諸君よ、何卒、エハガキの御交換を、願ます、（磐城國田村郡瀬川村田村山方佐藤美子）○諸孃樣に繪ハガキや御寫眞の御交際を願います（福島縣田村郡瀬川村西川正子）○妾は文壇愛讀者となりました繪葉書や御寫眞の御交換を願ひますよ、きつと御返禮は致しますから（筑前國中津屋村遠山はま子）○何とぞ以後寫眞繪葉書の交換を願ひます（福岡縣福岡市萱堂町二三小戸野幸子）○愛讀者諸君にお願ひ申しますが臺灣總督交迭紀念葉書一組御送り下さい滿洲軍凱旋スタンプ付又は自筆のものと御望の方は御返しします、（安藝忠海町四三二〇番地高柳梅鶯）○諸孃樣片田舍にすむ妾を哀れと思召さばどうぞ繪はがきを御惠み下さい（淡州磐田郡大藤村又三郎方比良子）○本誌愛讀の皆樣妾とも繪葉會や寫眞の交換をして下さい相當なお禮を致します（上野桐生町下新田十一番地下山蘇美子）○諸姉上樣。どうぞ、エハガキ、寫眞の交換を願ひます御送の御方には必御禮申上ます（近江國滋賀郡坂本大宮川畔眞木清子）○諸孃樣方私は今年裁縫女學校を卒業しましたから一寸女子文壇に顏出しました以後宜しく玉章繪はがきの交換をねがいます（大和國高市郡四條村豐田伊平方豐田晴登）○皆樣寫眞や繪葉書の交換を御願申ます送て被下し御方には妾の寫眞十二枚と詩歌の寫十五枚て御返し申ます（和歌山縣有田郡保田村下中島小池浪子）○皆樣相變らず御交際を！繪はがきの交換も願ひます先着者十名を限り當地の繪はがき六枚づゝ差上げ申ます（和歌山市赤十字社病院內大野花節子）○皆樣自筆繪葉書の交換を致して下され妾もかならず、返信致しますよ（加賀國鶴來町上東町波佐谷方にて波佐谷碧子）○御交際願ます又繪葉書交換はいくらでもいたしますからどうか皆さんどうつさりとおよこし下さいまつてゝよ（大坂市北區中島六丁目五十八番地淺井方にて淺田多滿子）○諸孃樣方より餘り多く申込まれましたのでつい失禮した方も澤山ございました。今度は繪葉書寫眞栞の御交換をしますからドーゾ御惠み下さい先着者廿五名迄には當地の名勝繪葉書一組に妾の寫眞を添へて送ります（山形縣飽海郡酒田町濱畑町七八渡部宮子）○妾は上方屋製造の繪葉書拾五枚持つて居りますから御入用のお方は、何卒自筆の繪葉書で申込むで下さひすぐ送ります、芝區新錢座町八番地岩佐方小宮きみ子　○妾は京都で書を學んでいる不束者ですが皆さん繪葉書の交換をして下さいな下手ですが肉筆の繪葉書を送ります（京都上京區東洞院押小路上ル山中吉太郎方東田操子　○繪葉書の交換を願ひ升但し氣に合わない者は御返事致しません（北海道小樽區稻穗町十四番地梶水仙）○妾上等繪葉書數百枚備へてあり升から皆樣御安心の上どし〳〵繪葉書交換願升一枚四錢以上のてネ（福島市中町二番地花野芳江子）○紀念スタンプ色々送りて下さい又寫眞も送り下さい倍にして返禮致し升此七月の末から下の所へ歸りますから其處に送つて頂戴（島根縣岩見國那賀郡都治村字後地、東良三郎方東柳子）○、磐城國相馬郡上眞野村横手原田淸子）天下に散在する愛讀者諸姉什麼か繪葉書に和歌川柳の類を書いて送つて下さい妾も拙いのを直ぐ送る事よ　○皆樣妾に自製の繪葉書、凡そ五十以上も出來上つて居ますよ、何卒繪葉書にて申越遊せ、（京都府乙訓郡乙訓村井ノ內重松敏子）○誌友皆樣綺麗な繪葉書に美しき筆跡で認めたのをどし〳〵と送つて頂戴は、筆跡順に天地人と三名選んで此方には私の藏書の內一部宛進呈致し升（岐阜縣安八郡牧村字馬瀨木村花香　○繪端書の交換妾大好きなのよ、夫から寫眞や編物も、キット御返禮致し升から御惠送を願い升（埼玉縣熊谷町和久井きん子）○妾は本誌繪端書交換欄を見て希望の繪端書送つたに返事ないお方を記さんには

陸奥三宅活子樣近江金子方里樣、兵庫三山きし子樣、其浦たけ子樣、愛知縣平野俊子樣、大阪和田桃里樣、橫濱鈴木操子樣、山口彌富秀子樣、千葉石川まさ子樣外當縣人二名あります實に情ないお方ではありませぬか其內甚しきに至つては千葉縣の石川まさ子樣は繪端書交換を廣めながら妾の送つたはがきに「宛名人は當家に關係なきのみならず假名に付返却仕候也蔡田昇平印」有附箋して立派な印迄捺印して返つて來ました記者樣皆樣何んと思ひ升こんな事を申し上げぬとも宜い都合ですが念の爲め申上升（秋田縣角間川町黑丸登美子）○皆樣私も繪はがきを愛しますから以後宜敷御交換を願ます御返事は必らず美しいので差上ます（筑後國三池郡三川村字四ッ山田尻樣方鶴田孝）○御親はしき諸姉樣方繪葉書交換を願ひます（山口縣都濃郡戶田村八八九番屋敷河津才子）○皆樣繪はがき交換や文通をして下さい私も及ばずながら御返事はきつとよ。なほ地方の名所繪はがき一組つゝ御送り下さる御方には私の所の名所繪はがき一組づつ先着三名へかな遊踪與、遠足之友、殘花集一册つゝ差上ますそれから英文の出來なさる御方は英文て（茨城縣新治郡土浦眞鍋町中西喜則方中西君代）○妾しども姉妹共に今回璽友となりましたから繪葉書の交換を願ひます就ては妾どもの愚名御披露の爲め先着拾人に不如歸の歌。女夫波。眞人の選定二冊。小品時文。薩摩琵琶歌。紫式部。家の寶。小夜時雨。理想の家庭。縣賞文集。等を差上ます此外二拾人には面白き木と美しき葉書一枚づゝ上げます其外の人々には術功優美の葉書二枚づゝ上げますから俳句若くは歌一首を認め送り下さい（群馬縣高崎市鶴見町峯岸彌幸方姉鈴木ゆき子妹鈴木春江）○友には去られ今又妾は病ひの床に呻吟するの身とはなりぬ此時に當りて唯々妾の心を慰藉する者は皆樣方の御手紙や繪葉書の給はられん事のみ御禮には食道樂一部づゝ八名樣まで差上ますわ（千葉縣長生郡茂原町高郎鶴岡かつ子）○（島根縣松江市北田町四八寺本芳野）諸嬢樣方よなる丈內地の繪はがきに和歌か新詩體かを書て送つて下さい私は松江名所繪葉書にて御返事申します○諸姉の內にて觀艦式紀念繪端書二枚一組紀念スタンプ附姓名記入なきもの御持參なれば書留にて送つて下さい御禮には戰役紀念繪端書第一回より第三回迄二十四枚並に韓國風俗繪端書に釜山日韓博覽會紀念スタンプ押捺の繪端書澤山送ります（韓國釜山大廳町第一銀行社宅第三號生形維代）○親愛なる璽友諸嬢よ妾は誠意なる諸嬢と繪はがき交換を希望いたします（大阪市日本橋筋一丁目二七磯部方にて北川みつ子）○內地繪葉書の交換を致したいと思ひますが御贊成の方々は御送りなすつて下さい左すれば直に當方からも下手ですが自筆のものを送りますから（橫濱市南太田町一六九入長谷川か南子）○誌友諸嬢よ妾韓國名所繪はがき二十組（但し一組五枚）持て居ますお望みの方は舶來繪はがきに和歌か俳句を書て送り下さい先着廿名に差上ます（韓國京城本町三丁目林しま子）○敬愛する諸姉よ私も繪端書交換大すきてずから御交換下さる方は和製なドシ〳〵御贈り下さい次に自筆繪端書も交換して下さい（渡島國龜田郡七飯村入間川樣方クロバー子不忘草子）○諸嬢樣未使用上等繪葉書五枚以上御送附の方には中板景色寫眞一枚宛差上げ外上等繪葉書の御交換致しましよう（神戶市北長狹通六丁目一〇五鴨田秀學）○皆樣繪葉書の交換して下さいな又お寫眞の交換も（長野縣下高井郡日野村牧野芳枝子）○何卒繪葉書の交際を願ひます先着御三名には私の寫眞其他の相當の繪葉書を御送ります（北海道札幌區南三條西七丁目二番地本田繁治樣方吉川すみれ子）○皆樣美くしい繪はがき送り下さい私も極上美しいので御答へ致します（青森縣三戶郡八戶町三日町米田方春野つゆ子）○愛讀者皆々樣妾に美麗な繪葉書を御送りくださいそしたら妾は猶美くしきのを直御送り致しまするから（大坂市東區船越町二丁目七十八番地邸中島孝次郎樣方春本千代子）○皆樣繪葉書寫眞などの交換を願上ます先着の御方にはフランスに遊學しておる兄より送て來ましたきれいな繪葉書六十二枚を限り御返しいたします、はづかしながら私の寫眞もありますから入用なら差上げます（大分縣直入郡竹田町字山手淸牧內大塚あき子）○繪葉書の交換を願ひます妾も、臺灣風俗の繪葉書とか珍らしい生蕃人の寫眞などをお送り致します（台北府中街九町目三十六番石原愚子）○此後も何卒繪葉書の交換御願よ（奈良縣生駒郡郡山町大字北郡山大阪號脇田登美子）○私は今度書翰文研究及金色夜叉の歌不用になりましたから御望みの方は繪葉書で御申込下さい又先着の方貳拾名に限り東宮殿下御結婚式紀念切手差上げます（北海道札幌區北五條西拾丁目ノ一、米田百合子）○繪葉書及信書新聞紙の交換を致しますから皆さん何卒澤山送つて下さい、（越後中頸

城郡開川町大石孟子）○私は日本三公園の一なる金澤兼六公園の寫眞又は繪はがきを五拾枚許り持て居りますから何とぞ御交換を願います（金澤市石浦町二十三澤村美代子）○（神戸市切戸町東内小枝子）　繪端書交換を願ひます返禮は速刻先着十名の方へ栞。女學世界を差上ます又永久親しく交際して下さる方には寫眞を送ります○美はしい繪葉會の交換を願います（東京日本橋區長谷川町二〇中村方山本香山）○妾は妾の寫眞つき舶來繪葉書を十枚持て居ますから先着十人迄へは必ず進上します猶ほ自製のが二十枚計りありますから御交換を願ひます（山口縣山口田町野原十郎氏方桃中はる子）○皆さん、どうぞ御交際お願ます、そして繪葉書や栞の取換を望みます、（山梨縣西八代郡楠甫村笠井じつ子）○（鹿兒島市御着屋、谷村方、下園えい子）日本製及び舶來の無邪氣な子供繪はがきを交換御願ひます必ず返禮は申し上げます○妾は大の繪端書狂てす御親しき諸姉樣よ何卒品の善惡に依らず御送り下され（滋賀縣大津市京町通り有馬方にて松宮浪子）○皆樣繪葉書や玉章の御交換して下さいな又栞や編物を送くつて下さつた御方には美しい繪葉書を御送り申します（紀伊那賀郡北野上村窪家きぬ子）○皆樣の內で栞御持ちの方は送つて下さい御返禮いたし升ふ御繪端書交換いたしましよう（大阪東區谷町八丁目法妙寺內中島笹丸）○京都名所やら滑稽繪葉書やら澤山有りますからエハガキにて御交換を願ます（京都市小川二條上ル安田初子）○私は陸前國佐沼町近江屋內阿部國子と申します私は明治卅五年五月廿日　萬國郵便聯合加盟廿五年紀念としてスタンプ付繪葉書五葉丈ありますが陸軍凱旋スタンプ付の繪葉書と御こうかん願ひます○愛讀の諸令姉に繪葉書の交換を願ひます、あまり粗末な品には失禮ながら御返しいたしません、（備中小田郡神島外浦河田彌九郎方筒井みどり）○皆さんの中で銀婚式紀念切手（紫と赤）有栖川宮と北白川宮兩殿下の切手及び東宮御慶事紀念切手右の中何なりとも御所藏の御方は此度の觀兵式紀念切手と御換へ下さいませぬか（大阪市北區此花町二丁目二二九大道ゆり子）○以後末長く御交際を御願申します、尙之れからは繪葉書の御交換をお願ひ申します、御返禮には東郷大將の御誕生地の紀念繪葉書等御送り申します（鹿兒島市西千石町二五二番戸勝目のぶ子）○繪端書の交換を是非御願ひ致します。最後に私はまだ此の春小學を卒業したばかりなのですから末ながく。（神奈川縣鎌倉町小町法戒寺內松波子）○おなつかしき姉君たちどうぞ繪葉がきを御送り下さいまし又御玉章なりとも（東京市淺草區千束町二ノ四一廣瀨ひさ子）○田舍の事とて遺憾ながら戰役、觀艦式、凱旋觀兵式、赤十字總會、等のスタンプ附の紀念繪ハガキ、萬國古切手、英、獨、佛製の繪ハガキを持たんのですから皆さんの中で以上のどれかを惠んで下さる方には御禮として左の品々を先着廿名を限り御分ち申ます　銀婚式、日清戰役、東宮妃與等の紀念切手米國切手各種同製繪ハガキ　松島寫眞繪ハガキ石器時代の水晶質矢の根石、メノウ性の天狗のメシサジ留岸其他玉石類、鑿り錢各種、外國錢口繪風景寫眞其他上等の繪ハガキ　御寫眞送りて永しへに交際して下さる方にははづかし乍らツヤケシの寫眞にハート形の栞を添へて呈します（陸前栗原郡眞坂二二四菅原茂子）○先輩諸姉の御交際を仰ぎ繪葉書の御交換を望む（姬路市柿山伏八三池田かほる子）○私は繪ハガキを四拾枚計り持つて居ます皆樣何卒交かんして下さい願ひます（三重縣津市大字元築造十二番屋敷德田榮子）○何卒繪はがき編物の交換を致して下さいな肉筆は最歡迎致します（大坂市西區土佐堀裏町二山內米子）○皆樣繪はがき下されありがとう、御座ます、相變らす、女學校の、繪はがきや、その他の繪はがき御交換を願ひます（岩手縣西磐井郡涌津町佐藤やそよ）○諸姉樣どうぞ繪はがきの御交換を願ひます（大坂市東區木野町四八番ノ廿號工藤貞子方小西鈴子）○誌友の御姉上樣どうぞ玉章なり繪端書の交換を願ひます（大阪市東區森ノ宮西ノ町五九〇番　桑田孝周方岡田嶺美子）○皆樣私は大の繪葉書狂なんですが何卒美しいのを御交換願ます。淋しい片田舍にをる悲しさは諸種の紀念葉書を得ようと思ふても得る事出來ません皆樣哀れと思召すなら何卒御惠み下さいませ　紀念消印ばかりでもようございます。相當な御禮は必ず致します今は高價で賣買されておる事は存じておりますからきつと相當な御禮にいたします（越後北蒲原郡紫雲寺村山中こお子）○本多芳子樣肉筆繪葉書ありがたうし存じ升消印の爲め御住所不明至急知らして頂戴（廣島縣雙三郡三次町菅原醫院內茂子）

○圖書換讀

○みな樣の中で明治才媛美譚（三十三年六月東京博文館發行）御持ちの御方は御ゆづり下さい

ますか又暫時御貸し下さいませんでせうか御禮はきつと、(大阪道頓堀日本橋南詰東入北側梅村方愛子) ○皆樣、白玉姫、塔影、花守、藤村全集をお持ち合せでしたら、あまり汚れない、のをお送り下さいな、御返禮には女學生訓、詩集五彩雲、昨年二月よりの女學世界本年六月迄增刊とも十八册、菊花壇、わか艸、秀才文壇、女子文壇一卷十一册より二卷五號迄の內お望のを送ります (福井市館町四十二番地淺見喜惠子) ○妾の許に夏子前編後編共にありますから誰方か天うつ浪の一、二、兩方と交換遊ばして頂戴な(久留米市庄島東立丁五十番地加納方夕づゝ子) ○小說「女夫波」後編「母の心」「戀慕流」「伯爵夫人」「忘れがたみ」「一葉全集」詩集「夏草」「藤村全集」「風雲集」「金帆」御送り下さる御方には小說「病戀愛」「はつ姿」「戀と戀」「金色夜叉」前、中二册「多情多恨」「血の淚」「不思議」「二年越」「想思怨」等にて御返禮致します (茨城縣新治郡土浦眞鍋町中西方中西きみよ子) ○皆樣の中に新刊の小說御貸し下さる方は有ませんか (越後關山村北村やよひ子) ○女子文壇二卷一號より八號まで不用舞姫と交換下さいませんか猶ハイネの詩心琴不用花守と交換を乞ふ (信濃北安曇郡大町八日町櫻井みさを) ○神奈川縣相摸の諸孃樣方御交際を願ひます、又皆樣の內で小說、不如歸、乳姉妹、己が罪、まだ見ぬ親、御持合いの方は御めぐみ下さい御禮は致ます、(神奈川縣高座郡藤澤村當麻遠藤吟子)○ 皆樣新小說及諸雜誌送つてよ必ず返禮し升 (安藝國高田郡甲立村深瀨兵岡あき) ○皆樣雜誌不用の御方は御送り下さいませんか其御禮として相當のりボンをお送り致します (福岡縣鞍手郡勝野村小竹飯野繁子) ○皆樣に、青春(秋冬)。畵師の戀後編。御不用ならば手許にある二人孤兒。青春の怨。秋の夕暮。段々染。醒世叢求。六ヶ月英語卒業書抔と交換して與れませむか、是非御禮は致し升からお望みの方は下名迄お知らせを願升 (秋田縣角間川町黑丸登美子) ○私し詩集『花守』『テニソンの詩』『塔影』『不如歸の歌』『金色夜叉の歌』『はつしほ』其他拾七册持つていますが詩集か編物か詩趣の有る繪葉書と交換して下さい (名古屋市浦燒町三ノ三河合粲子) ○書翰文大成第七才媛詞藻、新題詠歌捷徑以上 泣菫白屋氏 らの 著書新體詩集と御交換下さるお方はありませんか (名古屋市泥江町二の七小山かく子) ○諸孃樣「乳姉妹」「不如歸の歌」「紅葉全集」など御不用なのがあれば「沙翁物語集」「日本文學全書」一編より十六編まで」あり升から御交換を願います (讃岐大川郡三本松町東原蘭) ○諸姉樣私の手許に左の書籍が有升お望みの方は御水迄に御自分のお寫眞を添てお申込下さい差上升「東京の國盆新聞」切りぬき小說仇夢前後同まだら石全中に詩歌澤山有升(伊豫國溫泉郡道後得能清風女)○誰方樣でも坂正臣先生の習字手本を御所持の方は私に御送り下さいませんか 私方には 今年の 一月二月三月(四月分無し)五月分の女學世界と和洋男女禮式及び婦人畵報增刊の貴婦人と家庭衞生叢書第一編と葉書文學昨年の七八九月分御座いますから何れとても御氣に召しなのを (下谷上根岸太田樂子) ○寫眞、古本、繪葉書など交換願ます御贊成の人は下名へ (埼玉縣入間郡川越町五百九十八番地佐久間白嶺生) ○諸孃の中に思出之記乳兄弟金色夜 又青海御持ちの方は私の敎學辭典(新調後一ヶ月)中等國文軌範と交換して下さい 又大和田建樹者の詩人の旅新空中旅行徒然草が有りますから美しい繪はがき寫眞にて申込の方に上げます (三河碧海郡矢作町富永山田久枝) ○私は茨城縣地圖 (十萬分の一以上二十萬分一以下) 一枚欲しいが御持ちの御方は御座いませんか若し有りましたら御送り下さいまし其代り北海道の名勝寫眞 繪端書及びアイヌ人の寫眞其他代價相當の品を御禮致します、(北海道上川郡近文一線一號大瀧關) ○諸姉樣私の所に左の書物がありますから 和歌集詩集何んでも宜しいですから 交換して下さいな明治文學大家美文資料、東海道韻文集臥遊山水、通俗英語案內第十編、涼草、小文學、青年界第一卷六號、明治俳句風流陣などあります 御望の方は下名へ (茨城縣土浦本町中西歌子) ○妾は紅葉全集五六母の心琵琶歌血薔薇新夫人己が罪 夏子全編河內屋鶉風戀風全やどり木天うつ 波外に新派の歌集と女夫波乳兄弟の歌月刊雜誌數十册を 觀兵式消印の外の何時のでも宜しうござりますが 紀念消印のついた未使用葉書を送りくださる 孃樣のお氣に召したのを送ります。(新潟市寄居町拾番戶岩瀨波子) ○女子文壇一卷六八十の三册不用なのが有ます 御入用のお方は繪葉書にて十五日迄に申こみ下さいくじびきにて一册づゝ 差上ます(美濃土岐郡釜戶公文溝口喜子) ○詩集心琴ハイ子の詩不用に付き花守か 塔影と交換を乞ふなほ中等國文典上中二册十六夜日記あり 寫眞を添へて申込あれば何れにてもすぐ送る (信濃北安曇郡大町八日町櫻井操子) ○昨年の女學世界及

女子文藝三十部之有る 故美しき繪端書に申こみの御方に各一部づゝ上ます （熊登輪島町新保安太郎方同雪子） ○皆樣私手許に我が文章女學生關婦女家庭訓乞食旅行 新女禮式赤毛布新赤毛布女學世界貴婦人中學文林 秀才文壇女子文藝其外色々數十冊不用の書御座いますが 詩集歌集其他文學書何れにても御交換下さる 方は有りませんかお望のを數册差上げます （名古屋市常盤町七二原田琴） ○皆樣私方に濁子、己が罪、多情多恨、西洋料理、露子婦人、伯爵夫人、 女學生訓、不言不語、女夫波、が不用になつて居りますから、金色夜叉の歌、不如歸の歌、言海、 ハイネの詩集、夏子、涼子、不如歸と、 御交換下さいませ、又、繪葉書交換も希ふ（伊豆小室村石井富子） ○博文舘發行の京都と奈良、と申本不用の方は御惠み被下度相當御禮は仕べく 尚近刊の小說類も 借覽申上度何卒御讀み古しも候らへば御送附被下度受取は繪葉書にて 差出し書籍は一週間内に必ず御返送申上候 （奈良押上二三隣田せい子） ○皆樣、どうか御交際下さい、 繪葉書の交換は勿論の事、 リボンの交換も御願ひ致します、猶、皆樣の御內で 大海原を御持合せの方がありましたら私のはなれ 小島と御交換を願ひます（三重縣津市古河芸原方榊原操子）○妾の手許に雜誌 四十部書籍二十部を持て居ますから皆樣と末長く交際を求むる爲め秀才文壇 （新古を問はず） 及び繪葉書にて御申込み下さいませ必ず／＼御送り致します （尾張國中島郡起町中丁芥小川たき方夏子） ○下記の御入用の御方は美くしき繪葉書 又は不如歸の新躰詩伯爵夫人乳姉妹美くしき 葉等以て御申込あれ、 美文の資料、和歌布留の山婚奨、淺瀨の波、女鑑、女學世界、世界各國の家庭、百人一首の講義、女禮式、世路日記、中學文壇、中學世界、警醒雜誌、俳句集四部其外種々、小說壞一代小猫、新聞實子、人かなにか （福岡縣嘉穗郡足白村馬見繩田靜子） ○康熙字典が不用ですから半價でお讓りしますがどなたか御入用な方はありませんか、代りは代金でもよろしく 面白い小說でもよろしうムいます、（鳥取縣岩美郡河崎村八石みどり） ○女子文壇二卷五六七號とがありませんから 諸姉さんの中で 不用の方があつたら送て下さりませんか代價は郵劵で差上ます （茨城縣那珂郡戸多村大字戸四九ノ二綿引早子） ○私の手元に潮氷遺稿、夏子、忘れがたみ、英文不如歸、 寄塵集、新細君、四鍋妙文集、花さくろ、百字文粋、新小說、文藝界等あり お望の方三十名に差す美麗な繪葉書で至急申込の事、又魔風戀風、 乳姉妹、伯爵夫人、青春等と交換を願ひます （福井縣遊數郡三尾村三郞太夫内橋屋類子） ○御嬢様方より御惠み被下さいました 誌數は百十九冊の多きに至りました 御約束の品を先着二十名の御方に送りました 他の御方には一々御禮を致しました。（美濃關蝶子） ○妾、手許に、 中村鈴子著の「家庭の模範」が不用になつて居りますが皆樣の御中に、 伯爵夫人全部と御交換下さる御方が御有りてしたら何卒下名へ、（京都市寺の內通大宮四入、永尾久子） ○私は初等英語雜誌六冊ありますが皆さまの中で 他の本と交換して下さる方はありますまいか （岐阜縣大垣町高屋鐵道官舍一號治郞丸篤江） ○さて乳姉妹、伯爵夫人不如歸、金色夜叉、想思怨、青春、宿り木、うき艇病戀愛、白玉姫、湖月夜心の花、初潮、忘れがたみ琵琶歌等の內の不要になつてゐますならどれてもよくありますから私の手許に持つて居ます女子文壇五冊女學世界 又日本家庭其他いろ／＼持つてゐますから 交換したひのですからどうか八月のに御とうしよ下さいませ、（熊本市迎町二百二十一字川尻口松島多代） ○皆樣各地方の新聞を下さいませんか 御返しは東京の新聞にて致し升（東京府下荏原郡蒲田村四一六、 石川久子） ○地方の新聞を空吹く風とお聞き遊ばさずどしどし送て頂戴れー 又妾もお送り致しますは…・（滋賀縣八日市町中野小島邸內武村琴音女史）○諸姉さまの御中でにせ 紫御持ちの方がありましたなれば何卒私の女夫波のうた、 金色夜叉の歌、金鵄、藤村詩集と交換して下さいませんか 又私女子文壇第一卷第八、九、十、十一、十二號新古文林不用になつて居りますから 繪はがきて御申込なされませ 順々に送りますから （神戸市兵庫門口町杉山とし子） ○私の許にある女夫波二冊覺風戀風三冊病戀愛一册明治の令孃 一冊乳姉妹二冊金色夜叉四册女學世界三十六年より 本年迄の物婦人畫報四冊とのうち 谷間の姫百合伯爵夫人夏子黒潮など又外の 小說と御交換下さいませんか御願いたします（茨城縣北條町宮本喜代子） ○皆樣よろしく御交際を願ます 私文藝倶樂部新古文林其他不用の雜誌二十册程持ちて 居ります御望みの方は繪はがきを以て お申込み遊せ直ちにお送りいたします （廣島縣尾道市長江町福田きみ子）

附録



文藝雜感（秋の卷）

記者編述

女郎花。

女郎花は花の中でも最も婦人化された花で、花の色、花の形、草の姿のなまめかしく、女らしい處を聯想したのは流石に歌人の手柄であるが、是を天下に披露したのは僧正遍照であらう。曰く『名に愛でゝ折れるばかりぞ女郎花われ落にきと人に語るな』輕快な法師であつたと見える、此の落にきは墮落の意味で、吾は決して墮落して女に心を寄せたのではないが、女郎花と云ふ優しい名を愛して折つたばかりだぞと、言譯した處が却つて面白い。此歌は誰しも知る通り『古今集』にある、同集には此一首の外に猶澤山あるが殊に兼覧王の『女郎花うしろめたくも見ゆるかな荒たる宿にひとり立てれば』と云ふのも傳へられて居る、うしろめたくと云ふ辭を巧みに使ひ、又女郎花と云ふ花を能く表はして居る、荒た家に美くしい女の立て居るのは如何にも目に立たう。序に言ふが男郎花とは、女郎花に似て、花の色の白いのを稱ふ

秋草。

單り女郎花に止まらず、秋咲く草花は皆愛すべきもので、夏の盛りの熱烈な時から一變して、露けく、淋しく、哀に、弱々しく、殊に女性的の花は秋に多い、爪紅の色に咲くと云ふ秋海棠や、名にし負ふ白粉草、鷄頭花、鳳仙花も爪に染る習慣があり、芙蓉は美人の面に例へられ、朝顏もしほらしさは女のものであらう日本の歌人は自然の景物、就中植物を對象として歌を詠むにも極く偏狹で、僅の花をしか歌に入れなかつ

たやうだか、其狭い歌題の中でも、草の花としては秋草が最も多い、萩や薄などは随分多くの歌人に詠まれたてあらう。春と夏には木の花は詠まれたが、草の花を歌に詠まれた數は甚だ少い、草花と謂へば殆んど秋に限られたやうな觀があつたから、其反動としても云ふべきか、現今の新派の人には存外秋の草花を時題に採らない、既に古人に言ひ盡くされたやうな氣がするからでもあらう、それだから秋草を題として歌を作る時には、うかと出來ない、似た趣向が八代集にはいくらもあるから。能く古來からの歌を調べて其れには似なく新しい趣向を考へねばならぬ、寧ろ短歌には秋草などの題は避けた方が好い位で、新體詩の方で秋草を別の材料として活かして來れば面白いものも出來るてあらう。

秋の七草。

お正月にも七草と云ふ事はあるが、秋の七草は秋草の中でも最も歌人にも持てはやされ、歌題謡題として古昔から幾多の藝術家を動かしたものである。七草は始め山上憶良が『秋の野に咲きたる花をおよび折りかき數ふれば七草の花』『萩の花尾花葛花なてしこの花女郎花また藤袴朝顔の花』と詠じたから、是が秋の七草と云ふ事に定まつた。萩は誰も知る通り秋草の中でも最も野趣あり、且何處の野にも生へてある。尾花とは薄の穂に出たのを指して謂ふ、冬になると枯尾花と謂ふ、葛、憶良は葛の花を七草の中に數へたが、後世花よりも葉を云ふ事になつた、葛の葉のうらみとは能く歌の語にもあり、實際葛の葉は少しの風にも飜り易く裏を見せるから、うらみと掛けたものである。撫子の花は一體夏の季として題詠などに數へられてあるが、勿論夏は多くの撫子も咲く、併し秋にかけても撫子は咲いて居るので、憶良は之を秋の七草の一つとして加へたものであらう。女郎花は初めに言つた通り藤袴は見た處何の風情も無い花で、花は緑色、筒の形をなして小さくかたまつて咲く。朝顔は言ふ迄もなく昨今盛んに培養されて居る、朝顔も大輪だの、色變りだの、早咲だのと稱して、人工的に無理に咲かせたのは如何に美くしても、賞翫する氣が薄くなる、矢張自然に荒た垣根などに這い纒はりて咲いて居るのがしほらしい。

星の美。

星月夜とは秋の天の澄み切つた夜に、星斗爛然たるのを稱して言ふのださうだが、秋は水蒸氣の蒸發が少くからりとして居るから、星も多く見える、星の美を賛へるなら秋であらう。星ほど美しく、又神聖の意味ある天體は無からうと思ふに、何うして舊歌人は忘れて居たのであらう。星の戀として七夕は萬葉詩人にも歌はれたけれど、單に星の美を賛嘆した歌人は極めて稀である、天體として雲も確かに忘られたる一の詩材であるが、星ほどではない『天の海に雲の波立ち月の船、星の林に漕ぎかくる見ゆ』と言つた人麿は、未だしも星の事に氣の附いた一人であらう、願はくは後世の人に、我等の忘れた詩材を發見されないやうにしたいものだ。



西洋の女。

藤井文學士の著『俗諺論』を讀むと東西の諺が集つてあつて、なか〳〵面白いが、殊に女に關する諺は何處の國にも多い、西洋にも多い、女の諺を見ると歐洲の女の一斑が知れる、今、其中から五六を拔いて見やう。

佛蘭西の女は思ふより餘計に饒舌り、英吉利の女は饒舌るより餘計に思ふ(英)

此諺は能く英佛二個國の思想を言ひ表はしてゐる佛蘭西人の派手好きと、英國人の質實な氣風と。

女と瓜は選るのがむつかしい(佛)

日本なら俳句になる處で、女と瓜を譬へたのは面白

い見立て、何處の果でも女を選む爲には困るものと見える。

いつも窓に立つ女は路傍の葡萄の實(英)

人につまれ易いと云ふ謎であらう、窓に立つ女とは詩趣のある事を言つたものだ。

燈火が無ければ皆同じ女(獨)

少し皮肉である、勿論形の上から美醜は見えなくなつたと言ふのではなく、形の美醜を消して了うと女と云ふものに特色はないと云ふ意味であらう。

死んだ女にも心許すな(英)

執念深い事を云つたものであらうが、隨分深刻な形容である。

女の美くしいと森の反響と虹は直ぐ消える(獨)

獨逸だけに森を持つて來た處も甚だ味ひが深く、虹や山彥を女の美に譬へたのも日本では聞かない、詩の辭のやうで、一唱三嘆の妙がある。

煙と雨漏と、やかましい女房は男を外に走らす(丁抹)

全く其通りて、所謂やかましい女房には頂門の一針雨漏と一しよにされない心掛が必要。

娘の子と果物園と豆畠の番はむつかしい(葡萄牙)

小娘に油斷はならぬとは日本でも能く言ふ比喩て、何處の國でもむつかしいものと見える。

娘と死んだ魚は貯へて置けぬ(英)

死んだ魚に喩へるのは聊か失敬であるが、成程貯へては置けまい、魚は腐る、娘も盛りを過ぎると娘でなくなる。

嫁である間は善き姑なく、姑である間は善き嫁なし(英)

内容は少しも珍しくない、東西何千里を隔てゝも嫁と姑の仲の惡いと云ふ事は、是を見ても知れる、只、文法が英國風に出來てあるだけ、此一言も、我等の興味を惹くのであらう。

子規の八月十五日。

此『をみなへし月』の世に出る頃、乃ち八月十四五日頃の日記を誰かの書いたものゝ内から見出さうとして、端なく正岡子規君の『病床六尺』を閲讀した。病床六尺は君が最後の隨筆として永眠の前二日、乃ち明治三十五年九月十七日迄、稿を續けたもので、其八月十四日の頃には左の一節がある。

上總にて山林を持つ人の話

一、此頃の杉の繁殖法は實生によらずして多くさし穂を用ゐる事
一、杉の枝は十年三十年六十年の三度位に伐り落す事
一、一丈廻りの杉の木は二百年以上を經たる者と知るべき事
一、杉の上等なるものは電信電話の柱として東京へ輸出し、其外多く上總戸と稱する粗末なる雨戸となして東京へ出す事
一、雨戸は建具屋職人一人にて一日八九枚より十四五枚を造る、東京へ持ち出しての相場は今一圓に三枚か三枚半との事
一、雨戸を東京へ出す迄に左の七人の手を經る事
一、山主　二、根ぎり（木を伐り倒す人）　三、木びき　四、建具屋　五、荷馬車　六、停車場運送店　七、東京材木問屋
一、松は二寸に一寸五分角の垂木のやうな棒にして出す、之を松わりと呼ぶ事
一、くぬ木は炭となして佐倉へ出す、東京にてサクラ炭といふは此くぬ木炭なるべき事
一、松の節くれ多く木材にならぬものは之を炭となす下等の炭なり。併し東京の鍛冶屋は一般に之を用ゐる事



一、山林養成に最も害をなすものは第一、野火、第二、馬車の材木を積んで林の間を通る者、第三、小兒の惡戯等なる事（十四日）
子規の文は健にして雅、病床に苦悶する人が、杉の

木の十年三十年六十年を語り、山林の養成を說く、其事必ずしも多大の趣味なくも、病床六尺中の一文として是等は最も推重すべきものであらう。十五日の分には『審美綱領』に就いて、想ふ處を述べて居る。更に一ケ月、九月十四日の條に曰く

▲足あり、仁王の足の如し、足あり、他人の足の如し。足あり、大盤石の如し。僅に指頭を以てこの脚頭に觸るれば天地震動、草木號叫、女媧氏未だこの足を斷じ去つて、五色の石を作らず(十四日)

苦痛の狀、卒讀するに堪へず、日もなく溘焉として此病詩人は逝つた。

女郎花の俳句。

兎角して一把になりぬ女郎花　蕪村

君に捧げる花束であらう、餘の花は交へないでも花の意味は讀めよと

わが物に手折れば淋し女郎花　蓼太

理に落ちて斯う云ふ女郎花は手折りたくもない。

井戸の名も野の名も知らず女郎花　蒼虬

勿論知つた處で女郎花の風情も增すまい、併し多くの俳人は知りたかつた。

何事のかぶり／＼ぞ女郎花　一茶

一茶だけに何處までも洒落て居るかぶりふり／＼子が出來たと云ふ俗謠がある、それは確か芋の葉の事だと思ふ、芋の葉が吹く風にかぶりをふり／＼子が出來たと云ふので、子は芋の子である、此一茶の女郎花もかぶりをふり／＼何事をすねて居るのであらうと云ふ、何事とは何事であらう。

ひよろ／＼と猶露けしや女郎花　芭蕉

『猶』の一字に秋闌けて、女郎花のいつ迄もひよろ長く伸び居る樣も見える。

身の上を只しほれけり女郎花　凉菟

此身の上は家庭小說の主人公のやうなハイカラな新夫人ではない舊式の家に育つた町娘であらう、或は酌婦、賣笑婦の亞流でもあらうか。

身を耻ぢよくねるとあれば女郎花　秋色

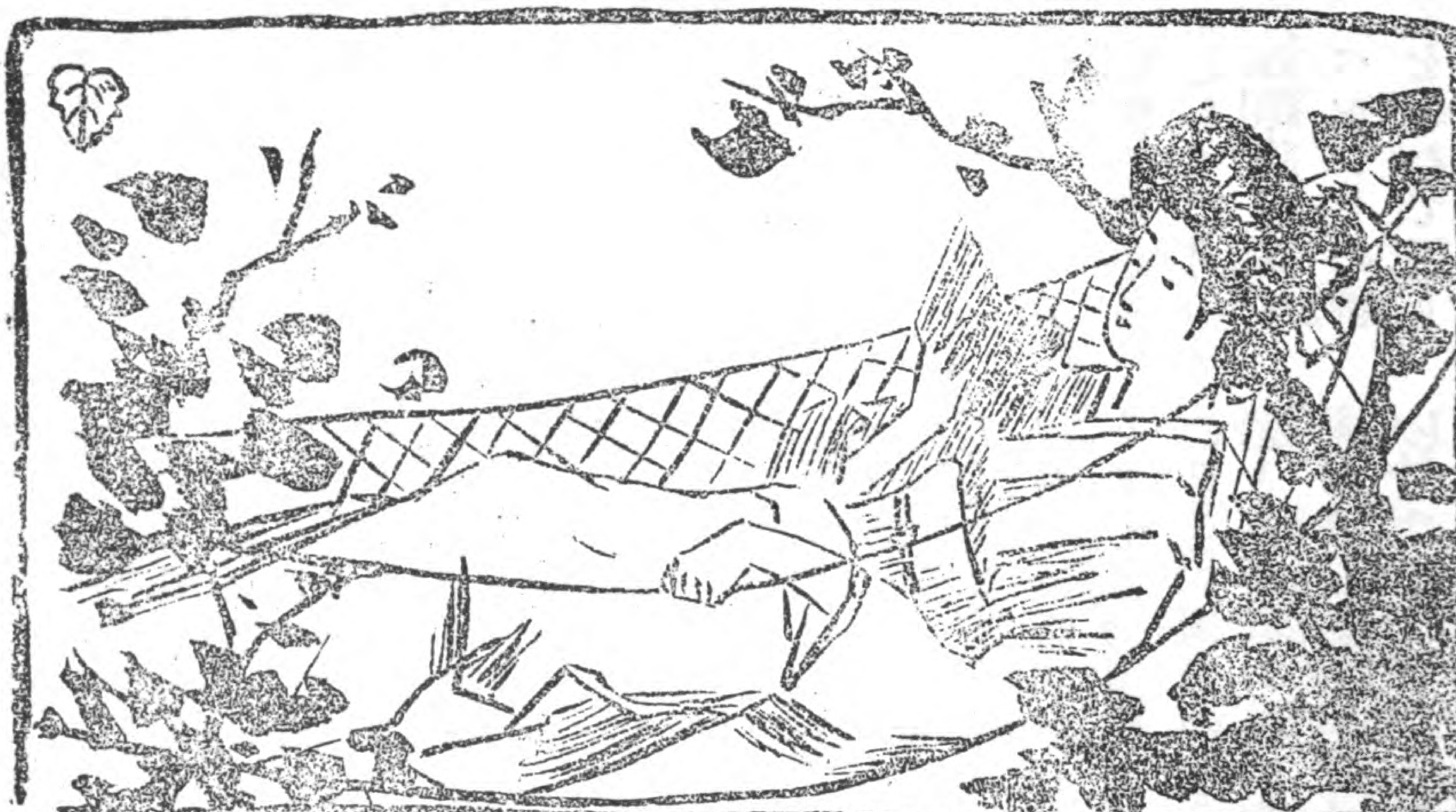
作者が女だけに、敎訓的の態度と、自らすねた處がある、くねるとさへ云へば女郎花の事と言はれるから女は自ら身を耻ねばならぬと警めて居るので、其實、句法は矢張くねつて居るから面白い。

女手。

昔は男子、女子と云ふ事があつた眞名で書く文章には文字を男手と稱し、假名で書く文章又は文字を女子と稱した。女で眞名を書く事は異數であつたらしい、眞名とは漢字、假名とは今の平假名なる事は勿論である、紀貫之が『土佐日記』を和文で書くに、をのこもすなる日記と云ふもの女もしてみんとてするなりと言ひわけをしたのも、平假名の和文躰で書くからであつた、假名の文章が女に多く發達して來たのも系統のある事である。

女の富士山記。

女學生の富士登山と云ふ事が行はれるやうになつた時勢だから、今に本誌上にも誌友の富士登山記も見えるであらう、玆に紹介しやうと思ふのは女流の見たる富士山とも言ふべきもので、『たびの命毛』と云ふ紀行



文の一節である。著者は堺の奉行土屋紀伊守の妻女、土屋斐子と云つた才女で、江戸から堺へ赴いた時の旅行紀が此『たびの命毛』で、其一節に曰く

裾野より、いたゞきに至り、隈なく見ゆ。右の方に愛鷹山をかけたり、其かげより宝永山つらなり見ゆ卯月のけしき、しるくなからばかりより、雪は消えて白き絲を引くだしたらんやうに見ゆ、眞白なるいたゞきも、只白きにあらで、白きが中に濃淡あり、高きと低きと、くだりに筋を削り成せる、譬へば白芙蓉の瓣の白き筋を引きたる如くなり。高卑濃淡の自らなる白妙のさまを、などて世の繪たくみは書き分きざりけんと、口惜しう云へど、げに少納言の書き劣りするものと、言ふにやなずら

へまし、暫しありて、風止みぬれば、瞬くうちに見えずなりぬ。あらぬ心地に、只おほぞらをのみ仰ぐ、から深き心を、赫耶姫の、あはれみ給ひて、しばし珍かなる姿を見え給ひつるやと、いとかたじけなし、この方にのみ、心をいるれば、田子の浦人あびきするも見ず

富士を寫すに是れ位精しく又新しく見たものは少からう、日記、道中記の類、富士山の條に到ると大抵千篇一律、却つて誇張して形容や、むつかしげな文字を弄して眞の富士を寫さうとしない。此作者、女性てあるが、なか〳〵文章も達者に、又観察も鋭い、畫家に注意を與へた處など、藝術家として優に一個の識見を具へて居る。

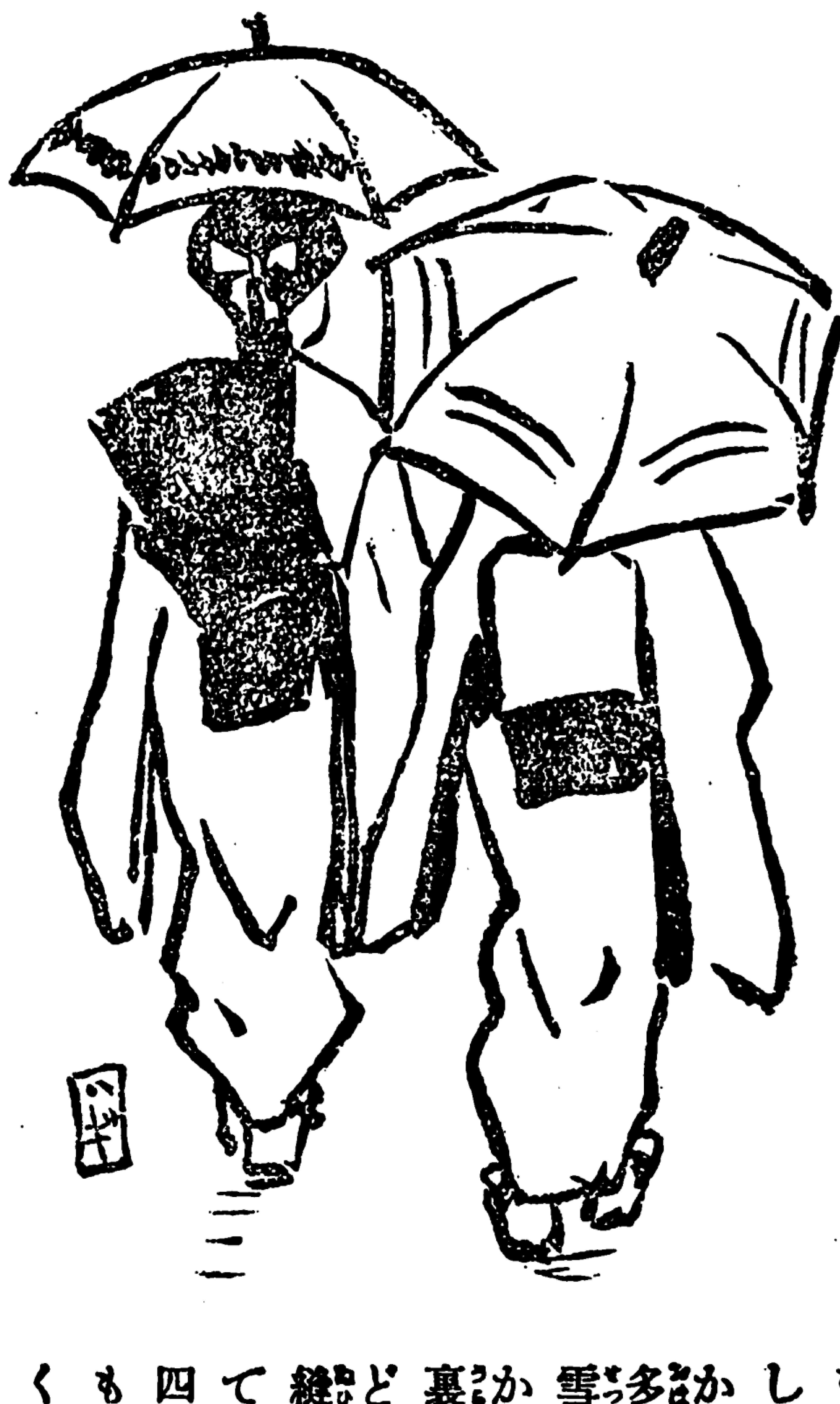
月の神話。

我國でも月の歌や句は澤山あり、月に關する故事も多い、月讀男など云ふ異名もあり、神話としての月の物語も探せば有るてあらう。西洋ては月の神話が甚だ多い、其中にも東西一致して居るのは、ペルシャの神話に月が地上の美人を戀ひ慕ひ、遂に之を率ゐて歸り今も猶ほ月中に美人が居ると云ふ話がある、佛説の寳樓閣經に其れと同じやうな物語があつて、日本の『竹取物語』は其れから來たのだらうと云ふ、支那の書物には月中に桂樹があると書かれてある。エスキモー人の神話には、兄の月が妹の月を懸想したので、妹は怒つて兄の面に煤を塗つた、それて月の面は黒くなつて居ると云ふ、希臘の神話の中に、ラトモスと云ふ山の頂上に眠つて居る一美少年を、月中の美人が慕ひて、毎夜來り遂に率て歸つたと云ふのがある。サモア島の神話には人は死んでから月に行くから、今もなほ月中に老女の乳を飲んで居る人が見ゑると云ひ、獨逸ては月の中に二人の童子があつて、水を酌んで居ると云ふ神話がある、それから英語で月をムーン(moon)と云ふのは誰も知つて居るが、此語原は尺度(measure)乃ち日本で今謂ふメートルに關係がある、古代の人間は月をば時間年月を測量する唯一の方法として居た、そこて月を測量者と命名して、拉典語の mencis が英語の month 獨語の monat 佛語の mois と云ふ語に變化した、マクスミラー氏は、其語原を『マ』とし、梵語マトラム、希臘語メントロン、英語佛語のメートルと比較した、以て太古の人は月を測量者とした事も知れ、又東洋の太陰暦など云ふ事も月に關係ある事が一致して

居る。

京女。

東男に京女と對して言ふ事は古い諺のやうて、京都は女の美しい、處として居る、美くしいと云ふ標準にもいろいろあつて、一概に京都の女は美くしいと斷定は出來ないやうであるが、京都式の美と云ふものは確かに女の姿にも存在して居る。『見た京物語』と云へる京の風俗を書いた隨筆の中にも女の事が多くある。『思ふに京は石地、小砂利のみ多く土氣少し、故に人きれいなり、女などに古へより美人多きは、國に油氣なく、きれいなる故なるべし、魚など旨からず、生る草なども細かにして、唐繪の如くきれい



なり、どくだみ、藪柑子など云へるもの、けがにも生へず』と云つてあるが今ならば大いに自然と人間の關係を論じて地理學上、趣味ある問題ともならう、草木迄も京都式に見た處、流石に面白い斷定である、多きもの寺、女、雪踏直し』とある、寺は確かに多からう、女も多いと見えたらう、雪踏直し今は何うか。『女の小袖多くは裏に摸樣あり、縫など入れたるもあり』縫は最も京都が本場てあらう『六分女、四分男たるべし、夜も若き女ひとり歩く、男女連立て歩くを少しも惡口云ふものなし、實際の統計を調べた譯でもあるまいが、男四分に女六分とは、其頃の京都として事實であつたらう、夜も若き女云々は昨今の東京と思ひ合せてをかし

『相對死多くあり、心中なり、わけて聖護院の森と云ふ所にて度々あり、心中は上方の名物、天才近松をして名を成さしめた『髱の事をつとと云ふ『現在も然り、八瀬大原は總じて男を下等といふ、みな總髪なり、名を何千代、彼千代と付く、都て無筆のよし、脊役と云ふものを定めて用を足す。同所、女は馬を牽き京へ出て柴を賣る、やはり黒木賣の姿と同じ、幾つ重ねても着るものみな袷なり、白き脚絆を前にて結び、着たる袷の褄はしよる、八瀬や大原は右の柴にて鞍馬も同じ、之の繪に見る大原女の風俗を說明したもの、京女の美に對して更に配合の妙を極む、大原女は今もあるが風俗の自然に變つて來て居る。『一年の女の小袖摸樣は東山御忌詣の節、我も〳〵と着飾り出るを吳服屋ども是を見て、其年の流行染を染出す、春より夏は女多く紅晒の下帷子を着る』以前より衣服に華美を競うた土地であつた、紅晒は紅色の麻布で下襦絆に用ゐたものと見える、鞍馬は然にあらねども、大原は山道せばく、大原女の馬を牽き京へ商ひに出かゝりたる所へ、行きかゝりたりなどすると、一騎立の道ゆゑ困る、是は九折の山道なればなり、馬、百も連るゝ故暫くよけむ』とは面白い情景で、一人より通られぬやうな山道て、馬百匹も牽き連れた大原女とすれ合ふなどは、繪に書いてもなか〳〵興味があらう。

紅葉の句。

故尾崎紅葉は小說家として一代に鳴つたが、餘技として弄んだ俳句にも見るべきものが多い、紅葉の句は人事趣味に富んで居る、句集も世に行はれて居るやうである。左に抄出するのは『俳諧年恰好』と題し、女を材として年齡て其風趣を傳へたもの、句は必ずしも上乘でないが、才氣の溢れたる、紅葉の面目の躍如たるものもある、且餘り奇巧を弄して居ないから俳句初心者にも分るであらう、

龍腦をおくる雛のわかれ哉（十四才）
杓杞飯歟垣に女の唄もなく（十五才）
繪團扇の憎き人打つ力かな（十六才）
雨の庭萩をこしゆく女かな（十七才）
胼の手の其の洗ふ俎板と孰れ（十八才）
花嫁の手をあはれむや莖の桶（十九才）
吾妹子の栗むきながら怨じけり（二十才）
秋胡子の妻とも見えず豆を引く（二十一才）
留守の女火鉢に文を燒き盡す（二十三才）

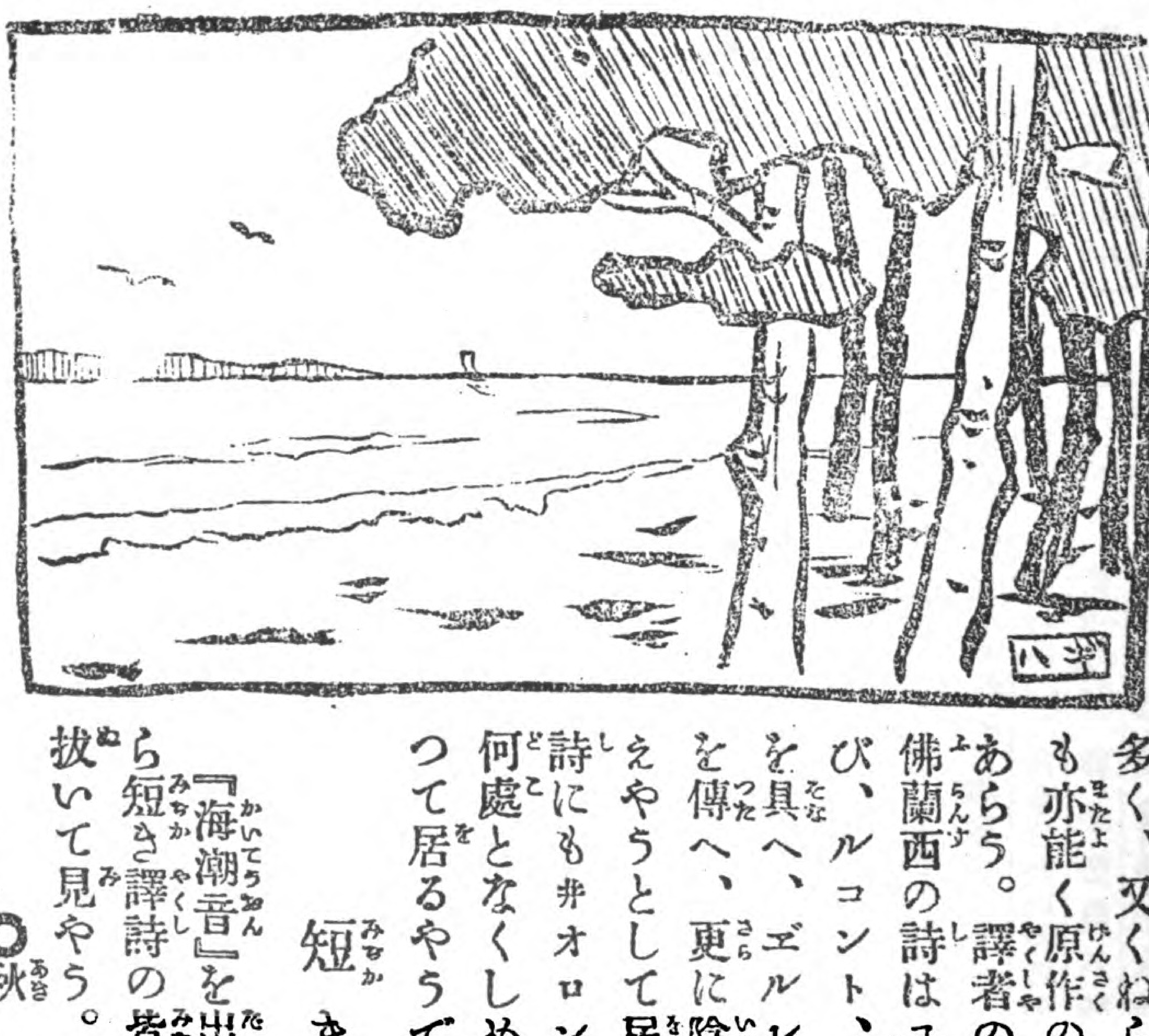
春寒や日長けて美女の嗽ぐ（二十五才）
小鰺買うて夫の晩歸を怨みけり（二十七才）
人訪へば梅干して居る内儀かな（三十才）
姥捨の闇に足袋買る灯影かな（六十才）

『落葉の詩』。

佛蘭西の詩人ヱルレエヌの詩集より抜いて、上田敏の『海潮音』に収めたる『落葉』の詩

秋の日の、ヰオロンの
ためいきの、身にしみて
したぶるに、うら悲し
鐘の音に、胸ふたぎ
色かへて、涙ぐむ
過ぎし日の、おもいでや
げにわれは、うらぶれて
こゝかしこ、さだめなく
飛び散らふ、落葉かな

一何となく淋しさの迫つて來るやうな詩である、秋の日の悲しさをヴァヰオリンの響き――ためいきに譬へて鐘の音に過ぎし日の追懷を追ひ、一結實に吾は落葉の地を飛び舞ふに似たりと歌へる、短詩として情趣多く、又くねらずに體を得たる、譯詩も亦能く原作のにほひを傳へたものであらう。譯者の附記する處に據ると、佛蘭西の詩はユウゴオに繪畫の色を帶び、ルコント、ドウ、リイルに彫塑の形を具へ、ヱルレエヌに至りて音樂の聲を傳へ、更に陰影の匂なつかしさを捉えやうとして居るのだそうだ、成程此詩にもヰオロンと云ひ、鐘の音と云ひ、何處となくしめやかな音樂の響が傳はつて居るやうである。



短き譯詩。

『海潮音』を出した序に、なほ同書から短き譯詩の皆さんに分りさうなのを抜いて見やう。

○秋

けふつく〴〵と眺むれば
悲の色口にあり

たれもつらくはあたらぬを
　なぜに心の悲める
秋風わたる青木立
　葉なみふるひて地にしきぬ
君が心の若き夢
　秋の葉となり落ちにけむ

（オイゲン、クロアサン）

誰もつらくはあたらねどは恰も我法師西行か「心なき身にも哀はしられけり」と感じたのと同じ想ひて、若き夢の秋葉となりて落つるを悼める、哀音深く籠つてゐる。

　山のあなた
山のあなたの空遠く
『幸』住むと人のいふ、
噫、われ人と尋めゆきて
　涙さしぐみかへりきぬ、
山のあなたになほ遠く
『幸』住むと人のいふ

（カアルブッセ）

何と簡單な辭の中にも、深く且遠き人世を歌ひ得るものではないか、此詩は説明するまでもない、人世の或る運命を歌つたもので「幸福」は山のあなたにあると思つて人と共に尋ねて行つたが遂に「幸福」に遇はずして歸つて來た、けれども猶山のあなたに「幸福」はあると人はいふ、是だけの事であるが限りなき人世の姿が髣髴として此詩の中に現はれて來る

　わすれなぐさ
ながれのきしのひともとは
みそらのいろのみづあさぎ
なみてとごとくくちづけし
はたことごとくわすれゆく

（キルヘルム、アレン）

空色したる勿忘草に千波萬波は接吻して行く、而かも亦千波萬波は皆忘れて行く、わすれな草でも忘られて行くと云ふのが技工の面白みで、意味は更に深い、悉く接吻して悉く忘れて行くと云ふ處に世態のある情景が歌はれてある。

廣告料は發行部數に比較せば最廉無比（有効確實）

募集課目

選評大家（文學士沼波瓊音先生、廣津柳浪先生、河井醉茗先生、佐々木信綱先生、巖谷小波先生、山中古洞先生）

○論文　○抒情文　○叙事文（各半紙廿四字詰三十行以内）
○消息文（半紙廿四字詰二十行以内）　○はがき文（半紙かな付廿四字四行）
○短篇小說（半紙總かな付廿四字六十行内）　○新體詩（半紙十句以内）
○和歌（半紙一首）　○新歌謠（上全）　○圖畫（一寸の二寸判風俗景色）
○新派俳句（端書又は半紙一句）
○新笑話
△各欄「題」隨意一人佳作一章宛の事　但着色無用日本紙の薄きもの

賞與品

話（賞與金、一等五拾錢二等參拾錢三等貳拾錢正金にて呈す）
○論文○抒情文○叙事文○消息文○小說○圖畫の當選者へは左記の相當價格品選定の上贈與すべし
△天賞　金壹圓五拾錢　△地賞　金壹圓　△人賞　金五拾錢
一等金三圓、二等金貳圓、三等金壹圓五拾錢
△特別賞▽（正金を呈す）
○新體詩○はがき文○和歌○俳句○新歌謠の當選者へ贈與品左の如し
△天賞本誌三ヶ月分　△地賞同二ヶ月分　△人賞同一ヶ月分
△特別賞▽（正金を呈す）一等金壹圓、二等金七拾錢、三等金五拾錢

右當選者は贈品に差支へざる樣前以て住所氏名を通知あれ○賞品は發表二ヶ月の後に故障なき者へ美麗なる名譽賞狀を添へ贈呈すべし

【投稿〆切＝毎月十五日】

△嚴守すべき投書規定必一讀を要す

○投書は各欄とも決して政治的時事論に渉るべからず、○用紙は規定の紙に限る○投書は一行廿四字詰に認むべし、但し句點も一字に數ふべし○投書には題の下には必らず本誌に做ひ住所姓名を明記し、書體は楷書にて假名は平假名を用ひ明瞭なるを要す○各種の投書は必ず別に認むべし○封筒には『原稿在中』の文字を記すべし○投書の中には他の用事も文句を記すべからず○投書には各自句點を施すべし、圏點は一切施すを禁ず○投書は他人の作物を剽竊するを禁ず之を犯したる當選文は無効たるべし○投書は一切返附せず○此規定に背く原稿は一切沒收す○投書は不足、未納税は一切受取らざるべし○各種の原稿（同封）取纏郵送するときは開封にして差出せば卅匁迄二錢にて事足れり

【最寄書店になくば直接發行所へ總て郵送無料なり】

定價

女子文壇（毎號水彩畵繪端書寫眞口繪數葉挿入）毎月一日發行

一册（大判百廿頁）	前金拾錢
八册（半年分增刊共）	前金七拾六錢
十二册（一年分增刊除く）	前金壹圓八錢
十六册（一年分增刊共）	前金壹圓四拾四錢

郵税無料

定期增刊　二月十五日　五月十五日　八月十五日　十一月十五日　發行

輕便の送金法

女子文壇社の郵便振替貯金口座は壹七貳九番です
○爲換料、通信料、書留料其他一文も入らず安全の送金法是は半ヶ年分以上の前金拂込に限る「拂込用紙」は何處の郵便局でも申出あれば無代で呉れます

廣告料金　改正

	一頁	半頁	一行
特等	一頁三十圓	半頁………	一行………
一等	一頁廿五圓	半頁十三圓	一行………
普通	一頁廿三圓	半頁十二圓	一行四拾錢

〆切毎月十五日也

【備考】特等場所は表紙四の面なり○壹等場所は色紙刷各區別の始終の頁、本文第一頁の對面、石版と寫眞口繪の對面なり○普通場所は本社が適宜に刷込む紙面なり△廣告面一行は五號活字廿四字詰、半頁は（一段）卅二行分、一頁は（二段）六十四行分也

明治三十九年八月十二日印刷
明治三十九年八月十五日發行

編輯兼發行者　東京市京橋區大鋸町十一番地　野口竹次郎
印刷者　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　石川金太郎
印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　株式會社秀英舍

不許轉載

（をみなへし月）

無比廉價　金拾錢

發行所　東京市京橋區大鋸町十、十一番地　電話【本局六〇七番】　女子文壇社

特約發賣元
東京市神田區表神保町三番地　東京堂書店
東京市京橋區尾張町二丁目廿　東海堂
東京市日本橋區吳服町六番地　北隆館合資會社
東京市神田區裏神保町一番地　上田屋書店
東京市京橋區鍋屋町九番地　東明堂

（笠原 愚本）



婦人ぐすり
中将湯
藥王
中将湯
子宮病 血の道
さん前産後
のぼせ頭痛
腰足冷込
下腹痛み
月經不順
白血赤血
其他婦人病
一切の特効藥
定價 三日分二十戔 一廻分四十五戔 二廻分八十五戔 三廻分一円廿五戔
本舗 東京日本橋區通四丁目 津村順天堂
支店 大阪堺筋大宝寺町南入